

Li-tweet

2015/spring/no.11

特集

百合／薔薇

あなたにとつて、大切なひとは誰ですか。

百合／薔薇

特集に寄せて

GOING UNDER GROUND の歌に「何気ない毎日を小説のヒーローに重ね合わせて安心してる」という言葉があります。私にとっての百合はこれだったのかもしれませんが。甘酸っぱくもうつくしくもない、友人に向ける私のところを、物語になぞらえて美しいそれに重ね合わせていただけなのかもしれません。

私のところをいくらさらっても、きれいな欠片は見つかりませんでした。きれいになりたかったところの欠片ばかりが碎けて散らばりざりざりと音を立てながら、硬くなった足の裏に痛みもなく刺さるだけでした。それを拾い集めることが、私にとっての百合特集になりました。

これは、百合を欲して百合を求める、私のなかの原風景です。

加津也

特集

百合／薔薇

- 4 七夜月尚 「[追憶の晩鐘](#)」
- 46 常磐誠 「[シコウの物語](#)」
- 107 光枝初郎 「[マイノリティと美的問題](#)」
- 116 尾崎枕 「[どこへいくの、みかちゃん](#)」
- 134 加津也 「[水鏡の澱](#)」
- 210 特集座談会
「[百合／薔薇を扱う作品について](#)」

作品

- 314 七夜月尚 歌集「[三十一字の少女幻想](#)」
- 317 光枝初郎 「[消費される愛、俗的な愛、
神聖な愛—In rhythm II](#)」
- 337 小野寺那仁 「[前夜祭](#)」

連載

- 229 常磐誠 [「瞳子」第三回](#)
- 330 光枝初郎
[評論「暴力論」第三回](#)
- 359 日居月諸
[「書かれなかった寓話」第五回](#)

特集 エッセイ「食」

- 390 あんな [「ピザまん」](#)
- 393 新嶋樹 [「好き嫌い」](#)
- 412 みおみね [「それがオムレツである理由」](#)
- 420 アキ [「薔薇と兎と西部劇と」](#)
- 424 光枝初郎 [「京都にて」](#)
- 426 七夜月尚 [「お砂糖はいくつ？」](#)

書評

- 386 光枝初郎
[「ヘルタ・ミュラー『心獣』レビュー」](#)

追憶の晩鐘

—敬愛する吉屋信子先生に捧ぐ—

七夜月 尚

「露ちゃん。わたくし、もうすぐね、神様の御国へ旅立つのよ」
灰白き小さいお顔を真っ直ぐに私のほうへ向けて、震える声でお姉様は仰るの
です。

季節は、あれほど待ち侘びた春でした。

病室の窓から見える、咲き綻んだ染井吉野の花弁が、繊細なレース編みの小物の
ように儚げに重なり合って、省線電車の線路沿いを飾り、たった今まで私たちの
目を楽しませていた筈でした。

「どうしてそんなことを簡単に仰るの！そんなことをおっしゃっては嫌！」
一番お辛いのはお姉様なのだ、と頭では分かかっていても、もう何もかもを悟っていらっしやるようなお姉様の眼差しが悲し過ぎて、堪らず私は大きな声で責めてしまったのです。

お姉様の病の床は、省線を臨む丘の上の慈善病院——とは名ばかり、結核患者を隔離しておくための施設の四階、東の角にありました。

あゝ、私のたった一人のお姉様！二つ歳上のこの美しい姉を想う気持ちにつける名を、私は知りませんでした。また、知りたいとも思いませんでした。

お姉様が今日も私と共に在る。それが、十五歳の私の幼い人生の全てだったのでございます。

私の物心がついた頃には、董の香水馨る白いうなじを淡い面影に遺して、お母様はこの世を去っておられました。お父様は、私たちの知らない何処か遠い外国で、商いをしておられるようでした。そして、日本へは、お母様を亡くしてから
は特に、減多にお帰りにはなりませんでした。お姉様と私とは、お姉様が五歳、私が三歳のときに母方の伯父様の家に預けられました。伯父様は、帝国大学をお

出になった後、お嫁さんもお貰いにならず、英吉利やら亜米利加の本を翻訳することを生業にしておられました。一日中書齋に籠りきりで、偶に廊下などで顔を合わせても、「おお」とか「ああ」とか、口の中で、もごもご仰るだけの伯父様でしたが、それでも、私たちを見る目には、憐憫と愛情らしきものが混ざっていました。この家には伯父様のほかに、おばあ様の代から仕えている、およねという無口で背中の曲がった女中さんがいました。およねさんは料理や掃除や、こまごまとした家の中のことを一手に引き受けていましたが、なかでも料理の腕前は確かなもので、三食のお膳には、彼女の、哀れな親なき子らへの思い遣りを感じずにはおられませんでした。

淋しく侘しい気持ちは、川底の小石のように常に在ったものの、周りの静かな愛情を受けながら私たちは育っていったのです。幸いなことに、お父様は、養育費だけはたっぷりと、本当に、たっぷり過ぎるくらいに送金してくださいました。着るものや持ち物で、なにか周囲に引け目を感じたことはありませんでした。県下では名の知れた中高一貫のK女学院に揃って通うことができたのも、お父様の藩主にあたる、とある伯爵家から奨学資金のようなものを受けたからですし、

「女に学問など不必要だ」などと五月蠅いことを、お父様はおっしゃいませんでした。実際には、娘たちに適当な嫁ぎ先を探すことさえも煩わしいくらいに、ご自分のことに忙殺されていただけだったのかもしれないが。

お姉様は病に伏すまでは、古い陰鬱な邸の隅にあてがわれた一室を、姉妹のささやかで可愛らしいお城に整え、母の遺せし紫檀の姿見の前に私を座らせて、毎朝、色素の薄い、癖のある髪をくしけずり、細い紺色の天鵝絨のリボンを、こめかみの位置に蝶々結びがくるようにして丁寧に結んでくださったものです。お姉様の、長く、ものさしで引いたように真っ直ぐな髪は、英吉利の女王が葬儀で身に着ける希少な黒い金剛石よりもなお黒く輝き、楊貴妃を飾ったという錦よりもなお艶めいて、華奢なその肩に更々と揺れるのでした。

「お姉様の御髪おぐし、なんてきれいなんでしょう」

と私がつめ息交じりに感嘆の声を上げると、

「有難う。でもね、露姫の髪、わたくしとつても好きよ。お日様の光みたいにならなくてラファエツコの天使様のようにじゃないの」

とお姉様はこの上なく優しく、私の癖毛を梳いて下さるのでした。そうして、海

老茶色の袴に菖蒲の柄も鮮やかな銘仙を合わせ、私のすぐ横に並んで女学校までの道程を歩いてくださったお姉様は、観音様の化身に見えたものです。師走の声をきくまでは、そんな平穏で幸福に満ちた日々が続いておりました。

十一月の最終金曜日。

その日、授業がすべて終わり、教科書やら帳面やらを鞆に片付けていたときに、私は自分の机の中に小さく畳まれた水色の紙片を見つけました。校章が小さく印刷されたその紙を広げてみると、ブルーブラックのインクでただ一言

『汝ヲ神ノ人ガブリエルニ任命スル』

とだけ書かれていました。

私はすぐに、その意味するところを理解致しました。私たちの学校では、毎朝の通常礼拝の他に師走の十八日から一週間、基督様の御生誕を祝う礼拝が行われるのですが、丁度、御生誕日の前日にあたるイヴの日に本格的な生誕劇を礼拝堂で行うのが歴史ある伝統行事だったので。劇の配役を決める上では幾つかの不文律のようなものが存在しておりました。

それ即ち、

一つ、羊飼役とヨセフ役は最上級生の中から最も健康で背が高く下級生の尊敬を集める仁徳者を選ぶべし。

一つ、東方の三賢人役は高等部の中から成績優秀で品行方正な者を選ぶべし。

一つ、受胎の告知天使ガブリエルは中等部の中から最も目方が軽く愛らしい見た目の者を選ぶべし。

一つ、聖母マリアは高等部のなかから最も見目麗しく色白の者を選ぶべし。というものでした。

生徒たちの意見を取り入れつつ、学校側が配役を決定し、年若いシスターがこっそりと気付かれないように該当の生徒の机に紙片を忍ばせておくのが慣例でした。実を申せば、私がガブリエルに選ばれてしまうのでは、という危惧は前々から抱いておりました。なにしろ私ときたら中等部の三学年に上がっても背丈は新入生とさして変わらず、目方も十貫あるかないかといった具合で、料理上手なおよねさんが拵えてくれるお膳も、少ししか食べられませんでした。心配したお姉様がこっそりと百貨店で買って来てくださる、舶来のボンボンやチョコレイトは嬉しかったけれども、そんな心尽くしのお菓子も、私の身をちっとも太らせ

てはくれませんでした。そんな訳で目方の軽いことに関しては何と諦めるしかなかったのです。しかしながら、愛らしい見た目という点については、私はいくら級友たちが褒めてくれても、自分の貌が全く好きではありませんでした。

目はどう見ても大きすぎ、団栗がひっくり返ったみたいだと常々思っていましたし、鼻と口は逆に小さすぎて玩具のようでした。髪の毛にいたっては色素が薄いうえに始末に負えない癖毛でしたから……。この見た目のせいでお姉様のお下がりの可愛らしい銘仙も袴もちつとも似合わないんですもの。けれども、購買部で安く買うことのできる御絵（これはシスターたちがおつとめの一環として描いておられるものでした）に描かれる告知天使の御姿が、級友たちの指摘通り私に似ているらしいことは、どうやら認めないわけにはいかないようでした。その迷惑な御絵が出回ったおかげで、下級生たちの一部からは「ガビィ様」などという甚だ不敬な綽名を付けられてしまい、生誕礼拝でガブリエル様を演じるのはほぼ確定、と周囲にもそれとなく囁かれておりました。そんな訳で、落胆はしましたがそれほど驚くことはなく、ため息とともに紙片を仕舞い、役を頂いたこと

を報告しに、お姉様の教室に赴いたのでした。いつも通り、教室の一番後ろの、銀杏の木が美しく見える窓辺で待っていてくださる筈のお姉様はしかし、教室の真ん中で沢山の級友に囲まれて困惑した様子で立ち尽くしておられました。

「うれしいわ、佐伯さんが選ばれるなんて！」

「我がクラスの誇りよ」

「あら、最初から佐伯さんが選ばれることはわかっていてよ」

口々に興奮した様子で騒ぎ立てている人たちに、曖昧な笑みを浮かべていらしたお姉様は、ふとお顔をお上げになり、所在無げにしていた私に気付いてくださいました。

「露ちゃん。待たせてごめんなさいね。では、皆様……。妹が参りましたのでわたくしはこれで。ごきげんよう」

小走りに駆けていらしたお姉様は、私の手をお取りになり、そして教室の方に軽く会釈をなさったあと足早に学舎の外にお出になりました。校庭の銀杏の木々は、黄金の舞扇のような豪華な葉をたっぷりと揺らしておりました。冬の到来を告げる、しんと澄んだ冷たい風が時折、私たちの頬を撫でてゆきました。お姉様

は、つとその細い指先に一枚の落ち葉をくるくると踊らせながら、無言のまま歩いておられました。焦れた私が

「お姉様、先ほどはクラスの方々、何を騒いでおられましたの？」
と訊ねますと、

「露ちゃん、困ったわ。わたくし、御生誕礼拝のマリア様に選ばれてしまったわ」と頬を少し染めながら小声で仰いました。

まあ、では私が救い主のご懐妊を告知する聖母様は、お姉様なのだ！
私は先程まで、自分が任命されて困っていたこともすっかり忘れ、

「お姉様がマリア様なんて素敵。お姉様には永遠の処女おとめがびったりですもの」とはしやぎました。

「お姉様、露ね、露はガブリエル様を演じますのよ。お姉様に神さまのお声をお伝えしますのよ。さっきまでそんなに目立つことをするのは嫌で仕方ありませんでしたけど、お姉様も一緒なら露は喜んで、このお役をつとめてよ」

お姉様はそのシリウスの如き瞳を一瞬見開かれ、そして、わずかに三日月のかたちの眉を顰められました。

「露姫が天使様に選ばれることは、ねえさまにもわかっていたわ。露路はほんとうに愛らしい自慢の妹ですもの。その栗色の巻き毛も、さくらんぼのような唇も。笑うとクリームを塗ませたようなえくぼが出来るところも。だけど、ねえさまは体も弱いし、こんなに日本人的な顔をしているのにマリア様だなんて滑稽だわ。困ったわ」

お姉様がご自分のことをねえさまと言ひ、私の名前を呼び捨てになさるときには、本当に怒っていらつしやるときか、困っていらつしやるときなのです。ですが、お姉様は本当に、ご自分の美しさを分かっていらつしやらないのだわ。K女学院の佐伯薔子そうこといえ、峰の桜か谷の百合か、と謳われるほどの麗しき眉目であるものを！お姉様は、私と違ってすらりと背が高く、居間に飾ってあるジュモアのアンティークドールよりも白き、陶器の肌をしておられました。月光注ぐ庭の鬱金桜を背に、露台バルコニーの欄干に凭れ、テニスやブラウニングの詩集を繙きながら涙さしぐんでおられる御姿は、アルテミスと見紛うほど、凜々しく神々しく、

お姉様のそのような、心ここに在らずといったご様子、学校では絶対にどなたにもお見せにならないご様子を目にする度に、胸がきゅうつと締め付けられるような幸福に、目眩がしそうな気がしたものです。学校には、お姉様の強烈な親衛隊も幾つか存在してありましたし、お姉様の御机には頻繁に、小さな花束やらお手紙やら刺繍の入った手布ハンカチやらが入れられておりました。私は、妹であるという一点のみにてお姉様の愛情を独り占め出来ていることを、重々承知しております。でなければ、お勉強も余り出来ず、かといって運動のほうもそんなに得意ではなく、お姉様に面倒を沢山みていただいて、やっと日々の課題をこなす味噌つかすの私など、お姉様の腰元として相応しくないのは、誰の目にも明らかでしたから。

さあ、そうして、聖劇に向けての練習がはじまりました。

ガブリエル様の出番は三回あります。

一度目は、マリア様に救い主の懐妊を伝える場面。

二度目は、羊飼いたちに救い主の誕生を知らせる場面。

三度目は、無事に厩でお生まれになった御子を祝福するクライマックス。マリア様に受胎告知をする場面の練習が、とても大変なものでした。

裏方の生徒が天幕の裏で、背の高い梯子を支え、私はその上で腹這いになって上半身だけを、さもたつた今、天空を飛んできたような涼しい顔で出して、マリア様にお声を掛けるのです。緋色の緞帳をうまい具合にして、梯子と下半身が見えないように上手に上半身を神々しく出さねばなりません。目方は軽いものの非常にとんくさい私は、梯子のてっぺんから落ちそうになるわ、着物の裾を梯子の金具に引っ掛けて倒しそうになるわで、裏方の先輩方をはらはらさせっぱなしでした。

「佐伯さん、あなた、少しはバランスをとる努力をして頂かないと！ 私たちもあなたも怪我をするわけにはいかないですよ。大事な聖劇の前に！」

道具係のまとめ役をなさっている、うるさがたの先輩、高等部の二年生、水内さんにお小言を戴く度に、私は舞台上で、淑やかにマリア様の動きをおさらいされているお姉様の方を、ちらちらと盗み見ずにはいられませんでした。お姉様がそ

んなことを思うはずはないと思っただけでも、いい加減、私にすっかりなさるのではないかと、気が気ではなかったのです。ですが、お姉様は真っ直ぐに前を向いて、熱心にヨセフ様役の最上級生―佐々野珠湖さん、最上級生のなかでも特に背が高く、涼しげな眼差しと物静かな雰囲気をお持ちの佐々野さんと、ベツレヘムへと向かう旅路の困難さを歌う聖歌に合わせてお動きになる練習をなさっていて、私の情けない様子には、ちっとも気付いておられないようでした。ほっとする反面、私は、いかにも仲睦まじい様子を演じておられる、マリア様とヨセフ様になんとも言えない淋しい気持ちを感じました。それは一つには、お姉様が私以外の人間にあんなに長く寄り添っておられるのを、初めて見たからでもありませんし、お相手がなんとと言っても、あの佐々野さんなのですもの！

佐々野珠湖さんは、お父様は大学の教授で、お母様はピアノの先生をなさっているという噂でした。浅黒い肌、頸のあたりで揃えた黒髪、理知的な瞳の輝くお顔は、彫が深く、その秀でた額に星をいただいた様なご様子は、例え、御本人がいかにか控えめに、静かに振る舞っておられても却って際立ち、まるで異国の王子のようだと感嘆せずにはおられませんでした。佐々野さんを慕っている下級生

は沢山いるけれど、私のお姉様にするように、お手紙を熱心に書いたり、小さい贈り物を届けたりする者はいないようでした。温厚で、どなたにも親切な方でしたが、どこか侵し難い空気を、佐々野さんは纏っておられましたから。
ササノシツク

佐々野病に罹った生徒は、静かに溜息を吐くしかないようなのでした。お姉様と佐々野さんの舞台上での様子はたちまち評判になりました。何しろ、K女学院の至宝二人が揃ったのですから無理もないのです。

「素敵だわあ。宝塚もあれじゃあ人気落ちるワ」

「誰かこっそりプロマイドを撮って頂戴よ！」

などと教室内では絶えず級友たちが騒いでいますし、

「聖書の裏に署名サインいただきたいワア」

などと不届き千万なことを言う輩もいたりして、私は少々うんざりしております。

御生誕礼拝が終わるまでは、この馬鹿げた騒ぎは収まりそうもありませんでした。

練習がはじまってから、しばしば、私は一人で帰宅せねばならないことが増えました。

お姉様は、佐々野さんと練習を通じて親しくなつたようなのです。学年もひとつしか違いませんし、御本の趣味が合ったとかで、良く貸し借りをされています。私には、お姉様や佐々野さんのお好みになるような難しい御本は読めませんし、お姉様がお友達と楽しそうにされているところなど、余り見たことがなく、日常的にお姉様にお世話を掛けていることも引け目で、

「いっしょに帰って」

とわがままを言うのも気が引けました。

お姉様が、いつも律儀に私の教室まできて、

「露ちゃん。ごめんなさいね。今日は佐々野さんのお宅で、御本を見せていただくの」

と断りに来て下さるのも却って淋しくて、

「お姉様、私も忙しいですし、劇が終わるまで、別々に帰りましょうよ」と言ってしまうました。

ある日の夕方、お姉様の帰りを待ちながら居間でお茶を飲んでいると、伯父様が、「なんだ。露は、ひとりでいじけているのかね」

と優しくおっしゃいながら、美しい挿絵がたくさん載っている、ウマル・ハイヤームのルバイヤートを下さいました。私は、伯父様の下さる、静かなお気遣いが嬉しくて、それなのに、お姉様のことばかり考えてしまう自分が惨めで涙ぐみました。

「蕃子も、少しくらいは息抜きが必要なんだよ」

と伯父様は私の頭に手を置いて、おっしゃいました。

「伯父様、御生誕礼拝には来て下さる？」

と私は、涙をふいて、明るく尋ねました。

「きっと、行こう。およねも連れて、ね」

伯父様は約束してく下さいました。

ばたばたと慌ただしく熱に浮かされたような日々が過ぎ去り、とうとう御生誕礼拝の朝になりました。私は、お腹にいくつか小さい痣を作りながらも、なんとかそれらしく、告知天使を演じられるようになっておりましたし、お姉様はもち

ろん、完璧にお出来になるのですから、心愉しく安らかな十二月の朝でありました。

お姉様はいつもより熱心に私の髪にブラシをあててくださいました。

「露ちゃんの髪は本当に天使様のようになったこと」

とおっしゃりながら。

「お姉様、今日の礼拝には伯父様も来てくださるんですって。およねさんも！うまくできたらご褒美をあげましょうって伯父様いつてくださったわ！お姉様、欲しがっていらした仏蘭西製の聖書をおねだりなさったら？」

と私は、お姉様に提案しました。

街の本屋のウィンドウに飾ってあった、小さな聖書に、お姉様が眼を奪われていらっしやるのを知っていましたから。それは、通常の聖書より一回り小型のもので、何ともいえず優しい、クリイム色の布で装丁が施されていました。莖や鈴蘭や十字架が、上品に型押しされた表紙を、そつとめくると、石版印刷の見事な挿絵と、飾り文字で記された主の教えが仏蘭西語で印刷されているのです。清潔でありながら、コケットトリーでうつくしいその品は、お姉様がお持ちになるに相

応しいものでした。

「まあ、そんな。伯父様にあんな高価なものおねだり出来なくってよ。でも、そうねえ、あの聖書がわたくしのものになったら、どんなにか素敵でしょうねえ。そうしたら、露ちゃんにも時々貸してあげましょうね」

お姉様も、珍しく、とてもはしゃいでいらっしやいました。お姉様のひんやりとした細い指を、私は握りました。お姉様も、きゅっと、私の手を握り返してくださいました。冬の朝の陽が、銀を刷いた淡い藤色のシフォンのように、私たち姉妹を包んでいました。

学校に着くと、簡単な朝の礼拝の後、聖劇に出演する生徒は講堂の裏手にある小部屋に集められました。劇のための着替えを行ったり、本番前最後の確認をするためです。

羊飼いたちは、腰の部分を麻紐で結わえる形の、粗末な織りの木綿の服を着て、オリーブグリーンのバンドで留めた粗末な頭巾を被り、羊を追うための棒を持ちました。三人の東方の博士たちは、光沢のある色鮮やかな生地で作ったガウンを羽織り、頭には孔雀の羽飾りのついたターバンを巻き、乳香、没薬、香油を

携え、王たる幼子キリストに捧げる練習を部屋の隅でおさらいしています。私は、袖と裾にドレープをたっぷりとった、丸く首の空いた人絹の衣装を着て、頭には光輪の代わりに、金に塗った造花の冠を被りました。そして、道具係の水内さんの苦心の結晶である、純白の羽、曲げた針金に薄い木綿を貼り、人造の羽毛を縫い付けた翼を背負いました。この大作は、根元が背負子のようになっていて、細めの皮紐がついており、背負ってから袖のドレープの中に隠すようになっていました。私の、出来上がった天使姿を見て、道具係の方々は、歓声をあげ、水内さんは満足気に鼻を鳴らしました。

「佐伯さん。とってもお似合いよ。少し神々しさには欠けますけどね。でも、^{エロース}愛の神には見えてよ。」

水内さんは言いながら、小部屋の窓辺を指差しました。そこでは、お姉様と佐々野さんが、お互いに衣装の着付けを手伝い合っておられました。佐々野さんは、深い翡翠色の貫頭衣を纏い、上にゆったりとした丈の長い灰褐色のベストを着ておられました。濃い眉の下で、思慮深くきらめく瞳が、木の椅子にお座りにな

ったお姉様の頭の上に注がれていました。まるで、教会のプレスコ画のような佇まい。纏う空気さえ違うようなその様子を見ていますと、ふいに、私の心を御しがたい恐怖が襲いました。そして、

「まるでヘルメスとアフロディテね。」

という水内さんの呟きを聞いた途端、思わず、

「お姉様！見て！」

と部屋に響くような大きな声でお姉様に呼びかけてしまいました。

しまったと思うより先に、お姉様のベールをピンで留めようとされていた佐々野さんが、手をおとめになって、こちらを向き、

「蕎子さん。貴女の天使がおいでよ」

と微笑みながらおっしゃいました。

お姉様は、緩やかな淡い紅のローブをお召しになり、紺に近い青金石色のケーブを古代金の丸いブローチで留めて羽織っておられました。楕円形のベールは乳白色で肩に流れる柔らかかなその布は、いつもは切り揃え、垂らしていらつしやる前髪をあげておいでになるからでしょうか、お姉様の花のかんばせを、更に端正

で、更に侵し難く、美しいものにしていたのでした。

「露ちゃん。まあ、なんてかわいらしい天使様なの！わたくしにもっとよく見せて頂戴」

お姉様は、私に優しく手を差し伸べられました。

そして、今、気付いたというように、ふと顔をお上げになり、

「露路。妹ですよ」

と、佐々野さんに私を紹介なさいました。

私は、佐々野さんに直接口を利くのは、勿論、初めてでしたから、緊張して、自分でも可笑しいほど赤くなってしまうました。

「…初めまして。佐伯露路です。中等部、二年生です。姉が…いつもお世話になっております。今日はよろしくお願いいたします」

やっとそれだけのことをつかえつかえ、蚊のなくような声で言ってしまうと、下を向いてしまいました。佐々野さんは、そんな私の様子などちっとも気になさらない風で、私の目の高さまで腰を落とされ、

「初めまして。高等部三年の、佐々野珠湖です。大切なお姉様を、ちよつとの間、

お嫁さんにするけれど、許してね。とても素敵ながブリエル様ね。今日の聖劇に祝福を与えてくださいね」

と低い甘い声で、私に仰るのでした。

私はもう、ただびびくりするのと、緊張とで、佐々野さんの言葉にコクコクと頷くことしか出来ませんでした。

「あら、露ちゃんたら、珠湖さんに緊張しなくってもいいのよ。とっってもお優しい方よ」

お姉様に小声でそっと囁かれ、おそろおそろ顔を上げると、佐々野さんの静かな、湖面のような目につかりました。その目は、何かを語っているようでもあり、感情がないようにも見えました。その目で真っ直ぐに見詰められると、嘘が吐けないような、すべてを見透かされているような気持ちで落ち着かなくなり、私は佐々野さんから目を逸らしてしまいました。ただ、私に向けて下さった思いやりの言葉には、何の偽りもないことは分かりましたので、私もようやっと、少しほほ笑みを返すことができました。お姉様は、私の天使の扮装をとっても喜んで下さり、早速、私の髪を直したり、羽を真っ直ぐに整えたりして下さり、

「がんばりましたよね、わたくしたち。終わったら、富屋で温かいおせんぎいを御馳走してよ」

と私の手を握って下さいました。

お姉様の手首からは、お母様の董の香水の匂いが微かに立ち上っていました。説明の出来ない、黒雲のような思いが、胸の中を虚しく去来しておりました。

準備が全て整いました。

既に、たくさんの保護者が入堂されているのが、舞台袖から見えます。講堂の、全ての分厚い遮光カーテンが引かれ、電気も全て落とされました。この世の混沌と夜を示す暗闇の中、聖劇が静かに幕をあけました。

聖歌隊が、微かな炎を灯した蠟燭を掲げながら、厳かな足取りで入場し、舞台の横に設営された専用の場所へと歩を進めます。聖劇は無言劇ですので、聖歌隊の方の聖書朗読とパイプオルガン演奏に合わせて、演者は舞台を動きます。私は、梯子の傍らで出番を待ちながら、緞帳の隙間から、乙女マリアの登場をこっそり見ておりました。

バッハの『W a c h e t a u f , r u f t u n s d i e s t i m m e B

MV六四五』がパイプオルガンで演奏されます。

お姉様が登場され、その白いお顔にスポットライトが当たります。聖歌隊が、聖書を読み上げ始めます。私は、高鳴る胸を押さえつつ、ゆっくりと梯子を登り始めました。

【天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。グビデ家のヨセフという人のいいなづけである、おとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった】

今です。お腹を梯子の上に固定し、胸を張って、顔をあげて、緞帳の隙間から私は登場しました。

【「おめでどう、恵まれた方。主があなたと共におられる」
出した右腕を、ゆっくりとお姉様のほうに差し伸べます。

【「恐れるな、マリアよ。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもつて男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その人は偉大な人になり、いと高き子と言われる。神である主は、彼に父グビデの王座をくださる。神は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない】

お姉様は、驚愕した表情をおつくりになり、膝を地面につけられました。そして両手を胸の高さで組み合わせ、私のほうをじっと見つめて、ほんの微かに頷かれました。

【「どうしてそのようなことがありえましようか。わたくしは男の方を知らませんのに」】

【天使は答えた】

【「聖霊があなたにくんだり、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。神にできないことは何一つない」】

【天使は去って行った】

私は、素早く、緞帳の内側に身を消しました。梯子を降り、額の汗をぬぐいました。

次は、羊飼いにイエスの誕生を知らせる時に、別の場所から登場するので、梯子を道具係の方が移動させました。水内さんが、

「これぞ天使の梯子ね」

と下らない冗談を言いながらも楽しそうに私の横を通りぬけていきました。緞

帳の裏では、お姉様と佐々野さんがベツレヘムへの旅路を寄り添って歩まれていることでしょう。ほんとうの夫婦のように。羊飼いに告知をして、去ったあと、水内さんは、道具係にクライマックスのために、梯子を中央に設置するよう指示を出します。旅路の途中でイエスがお生まれになり、東方の三博士が贈り物を捧げにやってきました。羊飼いたちも厩に着き、天の大軍勢が加わり、神を賛美しました。祝福を表すハンドベルが一斉に、高らかに鳴り響きます。私は、綴帳の裏から両手を広げて再び登場しました。舞台中央には幼子イエスを抱いたマリア様、その傍らにはヨセフ様。聖家族を取り囲むように羊飼いや三博士が立っています。いよいよ、礼拝のクライマックス、讚美歌二六四番きよしこの夜の斉唱です。最後は、客席の生徒や保護者も全員が参加しての大合唱で、聖劇は終了です。熱気とアーメン、が講堂に満ちました。講堂に集う皆の顔は、たった今救い主の誕生に立ち会い、それが今宵だけの幻だとしても、清らかに輝いていました。校門から講堂までの道に並んで、帰宅されるお客様を聖歌を歌いながらお見送りして、私たちはやっと解放されました。教室で帰り支度をして、外に出ると、校門の外で、伯父様がおよねさんを伴って待っていてくださいました。

「いやあ、すごかった。あんなに本格的だとは思わなかった。蕎子、露路、とてもよく頑張ったね。おじさんは誇らしかった。私は、もっとよくお前たちの学校のことにも目を向けなくてはならないのだなあ」

伯父様は、大きな手を私たちの頭にのせて、これ以上ないほど褒めて下さいました。

そして、なんでもご褒美に買ってあげよう、とおっしゃいました。

「ほんとに……ご立派になられて……おきれいになられて……およねはうれしゅうございますよ」

およねさんは羽織の背を丸めて、手布で涙をぬぐいながら喜んでくれました。

私たちは、並んで、仲良く、心穏やかに家路につきました。

それは、私たち家族の、一番しあわせな夜でありました。

聖劇のあくる日は、学校はお休みでした。

お姉様は約束通りに、私を富屋に連れて行って下さいました。

お餅の入ったあたたかいおせんごいは、私の好物で、ほの甘い小豆の味が、疲れたいにしみいるようでした。お姉様は、お抹茶と干菓子をお取りになったもの、

時々、軽く咳き込まれ、私の顔の辺りをぼんやりと見つめておいででした。

「お姉様、おぜんざい、少し召し上がらない？」

お抹茶も落雁も少ししか手を付けておられないお姉様が心配になり、私はおぜんざいの器を、お姉様の方にくっつと押しやりました。

「ありがとうございます。美味しそうですね」

お姉様は笑顔を見せてくださいましたが、そのお顔はいつもよりも更に蒼白く、おぜんざいを一匙すくって口にお入れになっただけでした。ぼんやりとしたお顔のお姉様を見ると、私の心は不安にかられるのでした。お姉様は佐々野さんのことを考えていらっしやるに違いない。私などと、おやつを召し上がるより、佐々野さんと御本について語らう方がいいに違いない。と思えば、このとき既に、おそろしい病魔はお姉様の体を虎視眈々と狙っていたのです。自分の気持ちばかりにしか、注意がいつていなかった私が、お姉様を病気にさせてしまったのです。

冬休みに入る前の日、終業式の朝のことでした。

お姉様は咳が出るし頭が痛むの、とおっしゃって、学校を休まれました。私は、

聖劇以来、元気のなかったお姉様が心配でしたので、

「露も休んで看病する」

と言いました。

しかしお姉様は、

「だめよ、露ちゃん。わたくしの風邪がうつったら困るでしょ。先生にお休みを伝えて頂戴な」

小さなお顔を、縮緬の搔卷から少し覗かせて、仰るのです。

「今日は、お髪といてあげられなくて、ごめんなさいね」

お姉様のか細い声を背に、私は澁々、学校へと向かいました。お姉様の担任の先生に、

「姉は、体調が思わしくないので、今日は休ませていただきます」

と伝えると

「佐伯さん、いろいろと劇の準備でお疲れになったのね。貴女も、お姉様に心配をおかけしないようにしっかりおうちのことをしてくださいね。佐伯さんには冬休みの間、しっかり体を休めるようにお伝えくださいね」

と氣遣つて下さいました。終業式も終わり、急いで家に帰りますと、およねさんが、小さな盥に水を張つて、お姉様の枕元に置いていけるところでした。

「蕎子お嬢様は、熱がずいぶんとおありになるのでございますよ。今、お医者様を呼びますから、露路お嬢様はお部屋に入らないようになさってください」

と言うではありませんか。ほどなくして、お姉様の診察に訪れたお医者様は、伯父様をお呼びになり、眉間に皺を寄せて何事か話されていました。居間にいるように言われた私には、途切れ途切れにしか聞こえなかつたものの、

「……はあ……そうですね……私の妹も……はい、似た症状で……はい。熱が……はい」

と伯父様の心配そうな声を聞いていますと、しんから冷えるようでした。

お医者様が帰られたあと、

「三日、熱が引かなければ、入院だそうだよ。露路は、今日は客間で寝なさい」と伯父様が仰るのを聞き、胸の中が恐怖と悲しみでいっぱいになるのを私は感じていました。それからのことを、私はよく覚えていないのです。お姉様の咳が、日に日に苦しそうになってゆき、早く治ってください、と祈ることしかできな

ったのはぼんやり記憶にあります。きっと、覚えておくことを頭が拒否したのでありましょう。三日後も、お姉様の熱は下がらず、入院になりました。結核でした。

入院先は、省線電車で病院前の駅で降りて半時間ほど歩くか、車を呼んで二時間ほどかかる、丘の上のサナトリウムでした。街の中よりは空気がいいし、薬で熱を下げて栄養をつけたら治りますからね、とお姉様と同年くらいなの、若い看護婦さんが元気づけてくれました。およねさんはいい顔をしませんでしたが、私はお姉様と離れるのはいやだ、うつらないように気を付けるから、冬休みの課題もきちんとこなしますから、と無理を言って、空いてる時間は、冬休み中、お姉様に付き添うことにしました。薬を点滴すると、ほどなくして、高熱は下がりましたが、すっかり痩せられて、弱ってしまわれたお姉様は、年越しも病室で迎えることになりました。私は、

「私の分のご褒美は要りませんから、お姉様に差し上げて欲しいものがあるの」と、伯父様にお姉様の憧れていらっしやった、聖書をおねだりしました。

伯父様は、早速、本屋に出掛けられ、売り物ではないのですが……と渋る店主を説

き伏せて、あの芸術品のような聖書を買ってきて下さいました。眠っていらつしやるお姉様の枕元に、聖書を置いて、私は天のお母様にお姉様の恢復を祈りました。翌年の一月も半ばになると、お姉様は、微熱は続くものの、体を、枕を背に起こせるようになっておられました。お姉様の担当になった、あの若い看護婦さんが、病院の庭に自生している待雪草を小さなコップに挿して、窓辺に飾ってくれました。病み臥していらつしゃつても、お姉様の清らかな美しさは、誰をも魅了せずにはいられないのでした。お姉様は、聖書をとでもお喜びになって、私が行くと、表紙の細工の素晴らしさや、飾り文字の優美さについて本当に嬉しそうに語っておられました。そして、気分のいい日などは、ベッドの脇に私を座らせて、髪を丁寧に編んでくださるのでした。このまま、きちんと治療さえすれば、また必ず一緒に登校できる。私は、そう信じました。

二月に入った、ある土曜日のことでした。

お姉様を見舞って、夕方に家に戻った私は、居間で、学校の課題をしていました。木枯らしがつよく吹き、ガラス窓を鳴らしておりました。去年の暮れから、あまりきちんとおさらいが出来ていなかったもので、お姉様が帰っていらしたら叱ら

れてしまふ、と思ひながら、筆を動かしていると、

「ごめんください」

聞き覚えのある声が、玄関のほうでしました。出てゆくと果たしてそこには、佐々野さんが立っておられました。寒い日だというのに、すっきりとした深緑の袴に矢絰のお着物をお召しになり、薄いシヨールを羽織られただけの御姿は、凜々しい若木のようなのでした。

「こんにちは、露路さん。学校でお借りしていた本をお返しに参りましたら、蕃子さんが御病気とうかがって。お見舞いをしたかったです、病院に出向くのは失礼かと思ひましたので、こちらに伺ひました」

佐々野さんは、真っ直ぐ私を見て、そう仰いました。

「…あの、わざわざ、ありがとうございます。お入りになりませんか。狭い家ですが…。」

と、私がぎこちなく、儀礼的に言うのと、佐々野さんは、少し微笑まれました。

「いえ。今日はお暇します。ただ、これを蕃子さんにお渡し願えますか？お借りしていた本と、ちょっとしたお見舞いの品ですの」

佐々野さんが差し出された風呂敷包を、私が受け取るのを見届けると、

「では。蕎子さんによろしくお伝えください」

と佐々野さんは一礼して帰っていかれました。

翌日、お姉様に佐々野さんがいらしたことで、お見舞いの品を言付かかってきたことをお伝えしました。風呂敷包のなかには、千代紙できれいにカバーがかけられたお姉様の御本と、青い天鵝絨のサックに入った小さな品物が出てきました。

「まあ、こんな良いものだけないわ、どうしましょう」

お姉様はサックを開けるなり、小声で驚きの声を上げられました。

それは、洋墨と万年筆を一緒に立てておける、銀製の洋墨スタンドでした。きっと、百貨店の文具売り場で一番いいのを求めになったのでしょう。お姉様のお机に置いて、飾りにもなるような品物でした。

「すてきねえ」

と思わず、私も感嘆の声をあげました。

御本の間挟んであった便箋に

『我らが学舎の窓辺に白薔薇の帰還を祈りて Ⅰ』

と書かれています。

お姉様のお顔にさっと朱がさしました。

「佐々野さん、お姉様のためにお小遣いはたいちやったのねえ」

と、わざと乱暴に私が言うとお姉様はそんな私には気付かない様子で、

「そうね、そうね」

と仰って涙さしぐみながら、何度も頷かれました。

お姉様は、なかなか、退院できるほど良くはおなりになりませんでした。熱が少し下がっては、また上がり、咳もひかず、ますますお痩せになられたようでした。

「熱が高いときには、世界が、ふわふわと淡く見えるわ。なにも確かなものがないような……。露ちゃんの髪を編んだり、あの聖書を読んだり：そういう時間がわたくしの時間なのに」

と仰りながら、枕に頭を沈めていらっしやるお姉様。

（佐々野さんとの語らいがお姉様のほんとうの時間なのでしょ！）

そんなことを強く思ってしまう度に、つぐないのように花瓶の水を替えたり、お姉様のお布団を直したりする私に、

「ほんとうに露ちゃんは天使様ね」

とお姉様も看護婦さんもここにこしてくださるのです。違うのに。なにもかも違うのに。

「春になったら、桜がそりゃあ、きれいに咲くんですよ」

と看護婦さんがお姉様に教えると、

「見られるかしら」

と傍げにお姉様は笑われました。

「見れますとも。ぐんぐん良くおなりになって、退院されたら無理ですけどね」と元氣な看護婦さんは、お姉様を励ますのでした。

「がんばって、妹と一緒に見ますわ」

とお姉様は私たちに約束してくださいました。

桜は見事に咲いたのでした。

約束通りに、私と、お姉様と窓辺から見ている景色は確かなものなのに、お姉様の御心は、もうこの地上にはないというのでしょうか。

「きれいなね、ほんとうに。聞いて。露ちゃん。わたくしね、神様の御国に行った

ら、露ちゃんをずっと護ってあげる。あゝ、そんなお顔をしないで頂戴。…わたくし、とつても幸せだったの。わたくしほど幸せな人間は、きつといなかったわ。伯父様も、およねさんも、露ちゃんも、遠くのお父様も、おともだちも、みんな、わたくしの幸いだった。お母様に会って、どんなにか露ちゃんがいい子なのか、よくご報告するわ。きつとよ……」

お姉様の目は澄みきっていました。怖いほど透明な、深淵でした。

「そんなことご自分で仰る方は、絶対に神様の御国になんて行けやしないわよ！お姉様の馬鹿！」

と私は悲しく言い返しました。

「ほんとね。天使様に怒られてしまったわ」

お姉様は、微笑んで、私の手にそっと触れました。

桜を見た二日後のお昼に、およねさんが苦勞して手に入れてきたのであろう鯛の塩焼きを、一口でも召し上がってほしいからと、お姉様に持ってきました。

お姉様は、

「美味しい、美味しい」

とおっしゃって、一切れペロリと召し上がりました。随分、久しぶりに、お姉様が、ものを召し上がるのを見た気がいたします。そして、喜んだおよねさんと、私とお話をされているうちに、

「少し眠いわ」

と仰って。そして、そのまま息を引き取られたのでした。

お姉様が一番大事にされていた、薔薇のお着物を着せておくりました。

これは、お母様の形見だから、きつとすぐに、お母様が見つ付けてくださるでしょう。

お父様が日本にお帰りになって、伯父様と話し合われました。私は、お父様について、外国に行くことになりました。お父様が、お姉様の死をどう思われていたかなど、私はどうでも良かった。ただ、ここを離れなければならないことは、分かりました。遺品を整理していたときに、あの聖書が目に入りました。そつと、表紙を開くと、お姉様の字で

『Tへ捧ぐ』

とありました。

私は、学校の住所録で調べて、佐々野さんを訪ねました。佐々野さんは、私を自室に通してくださり、お悔やみを述べられました。

「これを。姉は、あなたにこの聖書を遺しました」

と差し出すと、佐々野さんは一度、受け取られ、そして、しばらく沈黙されて後、

「いいえ。これは、あなたに遺したのよ。露路のTよ、きつとそうよ……」
と仰いました。

そして、何度言っても聖書をお受け取りにはなりませんでした。

私は、退学すること、外国へ行くことを簡単に伝え、懇懇に今までのお礼を述べて佐々野さんのお宅を辞しました。

お姉様、見えますか。春なのに、雪が降っています。

私、船で遠くの国へ行きます。お姉様の御住まいよりは、交通の便がいいところだと思えますけれど。ここは、すでに洋上ですの。手には、あの聖書を持っていますよ。

お姉様は、『無原罪の聖母』でした。ひたすらに清く、汚れや咎を知らず、石榴

と星に飾られ、月を従えた乙女でありました。あらゆる罪から免れ、白い薔薇のまま召されたのです。

でも、私は違います。私は、愛の神エロースなどではないのです。ましてや、告知天使などではないのです、お姉様。

私の羽は、純白の恵みではなく、漆黒の呪い。お姉様に祝福をもたらす者ではない。醜い嫉妬にまみれ、毒薬で満たされた心を持った、ハルピユイア。

欲する物全てを喰い散らかさずにはいられない、この上なく惨めで下品で不潔な怪物なのです。

それでも、欲さずにはいられなかった。

貴女の眼差しを。貴女の声を、髪を、匂いを。

愛情が欲しかったのかと問われれば、少し違う気も致します。

恋慕かと問われても、なにかいまひとつ、ピンときません。

あゝ、正直に言いましょ。

あんなに美化していた貴女が、本当は私よりも偏食がはげしいことも、人に強く

言われると、すぐになんでも引き受けてしまう、八方美人なところがあつたことも知っています。

きつと佐々野さんに親しくしていただき、内心では得意で仕方なかつたのだらうなということも。

ずつと一緒にいたから。貴女を見ていたから。見たくないときにも、見ていたから。

ただ、私には貴女しかいなかった。

私が、此処にいられたのは、貴女が名前を呼んでいたから。

私が、此処と繋がっていられたのは、貴女の名前を知っていたから。

海の風が、聖書の頁を躍らせて、私は、磔刑の場面の挿絵に薄い紙が挟まれているのを見つけました。それは、佐々野さんがお姉様の御本に挟まれた、

『我らが学舎の窓辺に白薔薇の帰還を祈りて T』

と書かれた便箋でした。

便箋からは、お姉様の董の香水の香りが微かにしました。私は、そつと、その一葉を頁に戻しました。そして、聖書を、甲板から海に向かって静かに投げ落とし

ました。強い海風が聖書をひらかせ、白鳥のように海面を、ほんの一瞬滑り、あつという間に見えなくなりました。

あわれ、永久に別れるとも、追憶の晩鐘を我が胸に鳴らし続けることを誓って―。

了

シコウの物語

常磐
誠

とある国へと続く平坦な道を、一台の車が走っています。運転席には二十代中頃の若々しい背格好をした短髪の男は端正な顔立ちをして座っています。

「見えてきましたね」

隣に座る、黄色の髪をした女性が口にしました。運転席の男は無言で首を縦に振ります。穏やかな表情からは、自身を含め六人が乗り込む車を無事に次の国へ

と運ぶことができたことへの安堵が感じられました。そんな男の顔を見て、助手席の、いましがた男に話しかけた女性も、穏やかな顔のまま前方の景色へと目を向けます。その時、

「次の国はどんな国なんだろうーねー？」

という若干間延びした、呑気な少年の声が車内に響きました。その声を受けて女性は左の耳に手を当て答えます。

「隣国曰く、自由に身分を選べる国、だそうですよ。マウロ」

「そっかー。よくわかんないけど自由ってサイコー」

テンションを少しばかり高ぶらせた様子でマウロと呼ばれた少年が答えて少し後、

ぴーっ！　　ぴーぴーぴー！　　という笛の音と、

「マウロ！　てめえふざけんな俺らが背中に乗ってるの定期的に忘れんじやねーよ！」

という、マウロと比べるとやや生意気さを感じさせる少年の正当な怒鳴り声が聞こえました。

「アクロバティック？ たまにはそんなスリリングさも必要……」

『びっ！』

「ねえよ！」

何だかんだで息のあったやり取りを六人は車内でスピーカー越しに聞いていました。聞き飽きたやり取りなので最早何も口を開くこともなく、車は国の城門のそばへとたどり着きました。車の接近を関知してか、城門はゆっくりと大きな音をたてながら開いてゆきます。

「ユタカさん、運転お疲れさまでした。マウロ、飛行お疲れさまでした」

車外へと降り立った黄色い髪の女性がユタカとマウロにそれぞれ声をかける。ユタカは軽く手を振り、それほどでも、というメッセージを送り、マウロの方は、

「まあこれくらいの飛行はぜんっぜん疲れないからへーきへきー」

と言いました。

「お前が度々揺れたり回ったりするせいで酔いそうだったけどな！」

『びっぴっぴっ！』

マウロの背中に張り付いていた少年と笛で相槌を打つ少女が抗議をしました。

この二人は揃って栗色の髪をしていて、瞳は琥珀色。お揃いの黒いローブを着ており、背丈も同じくらいなら顔も瓜二つときています。つまり双子です。

双子から揃って抗議を受けたマウロでしたが、ぶくすくす、とわざとらしいジェスチャーをして彼は、

「あらやだギースったらな、ん、じゃ、く！」

右の耳からヘッドセットを外しながらマウロはギースにだけ、悪口で返ししました。

ギースはそんな反省知らずのマウロの態度にカチンときた顔をしましたが、

「ほい。これお前とキーサの荷物な。さつさと行くぞおら。歩け」

そんな風に後部座席に座っていた男から制されてしまい、舌打ちだけしかできませんでした。

「行こう。キーサ」

色んな感情を胸にしまったのが丸わかりな表情で、ギースは荷物を手に持ち、妹の手を取り歩き出しました。

「入国の際には？」

その後ろでは黄色の髪的女性が確認の声を発し、

「おとなしくしてますまあーす」

飽き飽きとした声を返すマウロが続けます。そして、

「っていうかさー、マユナ。もうそれ耳タコなんだけどー」

と抗議しました。しかしマユナは、

「そういつて大人しくなんかできた試しがないのがマウロです。……ですよね？」

顔は笑顔で、ただどしつかりと右手でマウロの鼻を摘みながら言います。

「はにやをちゅみやみやにやいで。……いやいや！　今回は大人しくしてるし！」

そう胸を張って言っていたマウロでしたが、

「ナ、ナンダッテー！」

入国審査開始五分でマウロは大絶叫してしまおうのです。その辺りのやり取りなのですが、

「……………」

入国説明資料とにらめっこをしながらマユナが難しそうな顔をしていました。入国審査官が説明します。

「入国審査の手数料として十八歳以上の男性、女性、十八歳未満のお子さま、そしてペット、という区分で料金が異なります。手数料は大人の男性が最も高く、ペットが最も安くなっております」

マユナがそれを受けて発言します。

「一つお尋ねしますが、この子がいるから貴方はペットのお話を？」

入国審査官——あまりマユナと年齢の変わらなさそうな男性でした——が答えます。

「いいえ。入国する全ての方に説明している内容です。人間全てが人間として扱われるわけではないのですから」

その言葉に、マユナを始め入国手続きをしている九人は一斉に疑問符を顔に浮かべます。

「詳しく説明いたしますね。我が国の国民は基本的に年齢に関係なく人としての自由、要は権利ですね。これを有します」

「なるほど」

マユナが相槌を打ちます。

「そしてそれと同時にそれぞれに果たさなければならぬ責任があるわけです」
「要は義務、ですね」

マユナの返答に審査官が続けます。

「その通りです。しかし国民の中には義務を果たすのがどうしても辛い、そんな者もいます。病気や障害で学校に行けない、働けない、集団に溶け込めず、弾き出されてしまう、特定の人間にしか心を開けない。そういう人たちです」

「そういった人たちのために権利をある程度制限する代わりに義務を免除する、というシステムがある訳ですね。だから身分の選択が自由な国である、と」

「ええ。その通りです。マユナさんはお話が早くて助かります」

「いいえ」

マユナはひとしきり謙遜をしておきます。

「我が国の制度が周囲に広まるにつれ、様々な方がいらつしやいました。人によつては、人間をペット扱いするなんてとんでもない！ と憤慨される方もいらつしやいましたが、そういう方は立派に人間として生活していただければ良いだけのお話ですので、まあ問題はないのですが」

入国審査官は別段自国の制度を誇らしげに話す様子ではなく淡々と語ってました。

「逆に、この制度は素晴らしい！ と他国からの移民が増えてしまったことは少しばかり問題です。ですので現在はマユナ様をはじめとする皆様を移民として受け入れることはできません。その点はご了承をお願いします」

「資料にもありましたね。私たちはこちらに居住する意思はありませんのでその点については問題ありません」

マユナがそう口にする、

「でもさでもさ。あんまりにもこの国の居心地が良すぎたらさ。心変わりもあるかもーダダダダダダダダダダダ！」

横から口を挟むマウロのほっぺたを、マユナが延ばします。伸びます伸びます。びろーん。

「ひどい……」

自業自得のマウロを差し置き、マユナが審査官に質問します。

「ご説明ありがとうございます。ところでペットが有する権利と義務について

は資料に記載がなかったようですが、ご説明願えますか？」

「はい。簡単に説明しますと、入国の際の手数料が安いこと、税金の免除または減免ですね。施設などの入場料の割引、場所によつては無料の場所も多々ございます。一方でペットの入場に制限がある箇所もございますのでご注意ください。更に買いい物も税金が軽減されますが、ペット単体での買いい物はできません。常に責任者の方の許可が必要です」

「責任者ってつまり飼い主ってこと？」

マユナではなく、マウロが質問しました。

「そう仰っていただけでも構いません。ほとんど同じ意味です。一匹のペットにつき一名の責任者が必要になりまして、その情報は国が嚴重に管理しております。ですので旅人の中のお一人が仮にペットとして入国されます場合、責任者とペット、という関係性は我が国の中で滞在されている限りは共有されます。そして出国の際、旅人さんの誰がペットで誰が責任者だったか、という記録は国内から完全に消去される、という仕組みとなっております」

「なるほど。よくわかりました」

そう言うとマユナはマウロを見つめます。毛むくじやらで、触ると非常に柔らかく、抱き心地が最高な翡翠色の冬毛をしたマウロは、ずんぐりむっくりした体を傾けて、マユナの様子を怪訝に見つめ返しています。

「では、大人男性三名、女性三名、子供が二名と、ペット一匹で」
そして先ほどの大絶叫につながります。ナンダッテー。

「いやいやいや。マユナそれはないよ！ ボクはペットじゃないよ！」
「……………」

マユナがマウロを見つめます。

「いやいやいや！ 何をそんな毛むくじやらだし、言うて全然人間の姿形してないし違和感ない、オツケー！ みたいな顔してるのさ！」

「マウロ」

「何さ！」

「大正解です」

「ナ、ナンダッテー！」

入国審査官が口を挟みます。

「ペットの入国に際しては条件がございまして、こちらにあります二つセットの腕輪の内、鍵のついていない一つを責任者の方に装着していただき、残りもう一つ、鍵がついている方をペットに装着していただきます。こちらは両方とも出国の際に返却していただきます。また、外されますとブザーが鳴り響き、即座に警察に通報されます。また、装着者同士が百メートル以上離れてしまわれた場合も同様です。八十メートルで一度通知のために大きめの振動が起こり、装着者に伝わります」

「なるほど。では責任者は私で」

マユナが即断即決し、用紙に名前を記入します。

「まってまってまって！ ボクペットじゃないよ！ トイレ行けないじゃんボク男の子！」

マウロが強引に頭をマユナと机の間にねじ込みながら叫びます。まったく大人しくしていません。全身全霊の抗議です。

「……………」

マユナがマウロを見つめます。

「いやいやいや！ あなた気づくとふらっといなくなつては機械の部品とか勝手に仕入れては資金難とか言ってくるしメカニクだから欲しいもの何でも買われたつて困るんですよねーむしろめっちゃこの腕輪便利ー、みたいな顔しないでよ！」

「マウロ！」

「何さ！」

「大正解です」

「ナ、ナンダッ

以下略です。そんなこんなで男三人女三人子供二人、そして、

「なつとくいかかなあーいいいいー……」

ペットが一匹、無事入国したのでした。

「ピッキングして外してやる……」

とかなんとか、機械の扱いには腕に覚えのあるマウロはぼやきましたが、

「それでブザーが鳴り響き警察に通報されマユナ様始めお連れの方に迷惑をかけることをご覚悟の上でしたらどうぞ」

と冷淡に審査官に囁かれ、

「……ぐぬぬ」

大人しくなりました。

襖を一枚開けると、蠟燭で仄かに揺らぐ灯りが感じられるの。畳の古めかしいのを足袋越しに感じては、そろそろ張り替え時かしら、じじさまに言わなくちゃ、
って思う。燭台の足下に寝ころんでいる御姉様に私は声をかけます。

御姉様、こんな場所で寝てしまつては風邪をひいてしまいますわ。

優しく、ヤサシイク、声をかける。ここは隙間風が吹いてきて、少しだけ肌寒い。こんな場所でも、風が吹き込んでくるんだわ。

ピユウ、ピユウウ。風に乗る私の鼻孔をくすぐる御姉様の髪の毛の香り。私の大好きな、橘の芳香。何と瑞々しいものなのかしら。

私は御姉様の髪を手で、指で梳きながら、御姉様の顔を見つめているの。すると、

「……………」

御姉様の大きな瞳が私の顔を見つめ、微笑んでくれる。ええ。私も御姉様が、大好きよ。——そのまま、私は横たわったままの御姉様の柔らかな母丁子の花へとめがけ、顔を近づけるの——

甘い芳香と、酸っぱさを感じては癖になってしまっそう。ああ。ダメよ。御姉様。御姉様の重みに堪えきれず、ついに私は御姉様に覆い被さるやうに倒れ込んでしまう。そしてそのまま私は召し物の崩れるのも厭わず、御姉様と肌を触れ合わせるの。

袖の擦れ合う音が一つする度に、私と御姉様は一步づつ近づいていく。襦袢の幅広い首回りに指を差し入れうなじに触れると、御姉様はびく！と体をうねらせ私を見下ろす。悪戯っ子の私をたしなめるやうにして見下ろしては、また微笑み私の体に向けて紅く咲く母丁子の様にその舌根をしたらせていく。そしてそれを受け入れる私。その様子はさながら運命の相手を心から待ち、受け入れる雌蕊のやう。嗚呼、どうしてこんなにも美しいのでしょうか。御姉様。こんなにも、こんなにも御姉様のお体は美しく、あまりにも気持ちよいのです。

その舌根が私を一頻り嘗め回すとその次は私の番。でも、私は最後まで行き着

くこともできず御姉様の体に押しつけられて動けなくなる。……でも良いの。今の今まで隠し続けられてきたその花は開かれたのですから。

私もそれを受け入れるの。隠し遂げられたその花冠がお互いに輝き出す様に、私は喜びを禁じ得ません。

もつと。もつとお側にお寄りくださいいな。御姉様。もつと。もつと御姉様が欲しいのです。私は悪い子。さあ。もつとお叱りになつて。なつてくださいいな。

国の中に入ったマユナ達一行なのですが、

「……………」

マウロは入国してから常にむっすー、とした顔を崩しません。

「あーあ。ボクは今とつてもとおーつてもおかんむりなんだからね！ マユナがまさかボクのことそんな風に思ってるなんてさ！ ボクのことバカにしてるよまつたく！ もう！」

口を開けば自分の扱われ方への不平不満ばかりをぶちまけます。

「……………」

腰に二振りの刀を携えた長身の男がマユナに何か耳打ちしました。マユナはその耳打ちに応じるような素振りを見せずに言いました。

「あらあら。マウロはこれくらいで拗ねちゃうなんて。まゝだまだお子ちゃまですねえ。私は困っちゃいます」

「困れば良いんだもん。マユナなんて。ばゝか！」

口を引き延ばして舌を出し憎まれ口を叩くマウロに対してついに、
「……………」

鋭い眼光と舌打ちの音が聞こえ、マウロはその瞬間にビクン、と体を震わせてマユナにしがみついてしまいました。

その音と眼光は先ほどの長身の男から放たれたものであることは明らかで、マユナは怯えた様子のマウロを優しく撫でてあげながら、

「ほおら。あんまり静かにできないからマユウが怒っちゃいましたよ」
となだめました。

「お前がさっさと黙らせんからだ。こんなクソガキ風情に何を甘やかした態度を取るか。全く、俺には理解ができません」

マユウにしては珍しい長台詞と一緒に改めて舌打ちをすると彼は明らかに気分を害した様子でその場を離れていきます。その歩みは非常に早く、あつという間に人並みの中に紛れて消えてしまう程でした。その背中をマユナと二人して見送りながら、

「マユウなんて怖くないんだからな！ バカ！ ベッドだ！」

見苦しい負け惜しみの挑発をするマウロでした。マユウが完全に姿を消すまで、マユナにしがみついたままでした。

他のメンバーは全員で今日の宿探しの為散策をしていました。

この散策は宿を探すという本来の目的の他、安く買えるもの、反対に高く売れるものを見出したり、特産品や名物を知ったり、また治安であったり人の様子等をわかることのできる貴重な時間です。

「意外と獣人族が多いな」

腰に一振りの刀を指した女性が呟くと、

「結構マユナンマウロンの腕輪してる奴居るしねえ。普通なんだねえ」

小柄で引き締まった体にマントを羽織った女性が合わせます。

「けど色が違えな。ありや意味あんのか？」

非常に体のがつしりとした、屈強な男が腕輪の色に興味を示しました。が、
「受付ん時にマユナがあのでブに聞いて色決めてたじゃんか。どこ見てたんだよこの唐変木」

ギース、栗色の髪に琥珀色の瞳をした少年がやや毒を帯びた声で切り捨てました。

「ああ？ お前誰に対して口利いてんだコラ」

屈強な男がその栗色の髪を鷲掴みにして凄みましたが、

『びいっ！ びっ！ びっ！』

という笛の音をもう一人の栗色の髪、琥珀色の瞳に咎められて、

「ちっ。キーサ様に言われちやしようがねえやな。へいへい。お兄ちゃんをいじめて悪かったな」

かなり強引にギースの髪をわしゃわしゃして解放してやるのですが、

「うわ髪の毛ぐっちやぐちやじゃん。マジ最悪。ホント勘弁してよこれだから暴力しか自慢がない脳筋って嫌いなんだよ……」

ギースはマウロとひと味違つた憎まれ口が減りません。

「アマネ、我慢が肝要」

マントを羽織つた方の女性が屈強な男に伝えます。

「わーってんよ。相手はガキだし、腹減つて苛々してただけさ」

頭をバリバリ搔きながらアマネは自分と女性陣の荷物を担ぎなおしました。

「そうそう。大人なんだから子供は大切に扱つてよね。その頭で理解できるかどうかかわかんないけどさ」

思い切りバカにした様子のギースを背後にしているアマネは、

「つつても俺もまだ年齢的にや子供なんだけどな。この国じゃ大人扱いだけだよ」

そうぼやきます。そのぼやきと同時に、

「お、ありやユーたんじゃん。おーいユーたん」

マントの女性が手を振りました。ユーたんことユタカは彼女たちとは逆方向から探索を始めて合流したのです。

「で、結果はどうだった」

刀を持った女性が久し振りに口を開くと、

「うん。折角だから予定を変えて隣のブロックから走って探索開始したんだけど……」

「隣のブロックからやったのかよ……」

マントの女性が驚き半分呆れ半分で口にしましたが周囲はわかりきったこと、とスルーします。

「そっち側のブロックから一つ、それとこっち側からも一つ。良い感じの宿を見つけたよ。どちらも今は部屋数に余裕がある。これが通信番号」

そう言うってからメモを刀の女性に手渡します。

「ていうかさ、うちらまだこのブロックの半分も行っていないよな」

ギースの言葉に、

「大体三分の一つでとこだろ。つてことはユタカ兄さんは……」

アマネが合わせ二人でユタカを見ると、アマネよりはずっと小柄で華奢な雰囲気を持つ彼はにっこりと微笑み、

「隣のブロック一周とこっちのブロック三分の二、かな。距離にして大体三十七、

八キロ。これくらい朝飯前だよ」

息切れなど一切なく淀みなく話し笑うユタカに、

「……………」

「うわキーサが放心してるよ」

「言い切る感じがまたヤベエよなユタカ兄は……………」

男二人と女の子は息も切らさず微笑みを絶やさないユタカを見てはもう呆れて言葉も出ない様子なのでした。

その後また宿について話し合い、隣のブロックが貧民街となっていて治安があまり良くないことを踏まえて多少値は張るがゆっくり休めるであろうこちら側のブロックにある宿を予約しました。偶々ですがペットが一匹いたお陰で宿代は思うよりも高くならず、

「これならマユナの姉さんも眉間に皺を寄せずに済みそうだな」

「ぶっちゃけマユナって守銭奴だしね」

「ちげーねえや。カカカツ！」

アマネとギースがひそひそと話をしていると、

「あ、マユナン？ 今の男どもの会話聞こえたー？」

一行の中でメカニックを勤めるペット謹製の通信機を口元に当ててマントの女性が口にする、

『もうしわけありませんでしたー！』

ユタカを除く男どもはその場でひざまずかんばかりの勢いで詫びを入れるのでした。

さて、このような調子で報告を受けたマユナとマウロでしたが、この通信を切った瞬間に、

「やあ。こんにちは旅人さん」

そう言いながらにこやかに声をかけてくる男性がいました。

あれからどれくらいの間が経ったのかわからない。その時間は永遠、は言い過ぎかも知れないけれど、本当にとんでもない時間が過ぎ去ってしまったようにも感じられたし、ほんの数分くらいしか経っていないようにも感じられる。ああ。

ほんつとうに御姉様と過ごす時間は本当に享樂の極みと呼ぶにふさわしい。いいえ。そんな言葉にして一言で言い表してしまふことがあまりに惜しい一時。私達はいつの間にか二つの体という障壁すらも乗り越え解け合つていく。御姉様と私の上気した息づかいは互いの呼吸に相まり、私の吐息が御姉様を形作り、御姉様の吸気に私は形成されていくの。

はあ。ああ！ 何て、何ていう心地よさ！ 私はこの一時を越える一瞬も、言葉も知らない！

汗とお互いの体を、入れ物を作る液体にまみれたその身と吐息を笑顔で整える間もないまま、私と御姉様は埋もれていき、そして夜を越えるのでした。

その夢のような一時が本当に夢になってしまふような時間が経った頃、私に声をかけてくる存在がありました。その声はあまりに無粋で小汚い。御姉様とは小汚さと対極にある存在。その声が一枚の紙をひらひらさせながら私に言葉を落とします。

「次のご一行様はこちらだ。どうだ？ お前のお眼鏡に果たして適うかな？」
私はその紙を見て、仕舞いには笑っていました。今までずうっと黒い髪の毛を

した御姉様ばかりを愛でていたけれど、そこにいるのは、栗色の髪と琥珀色の綺麗な綺麗な瞳。ああ。何て美しいのかしら。その近くにいて、黄色の髪と碧色の瞳も捨て難い。決めたわ。

「じじさま。私、この子とこの子、あと、この子もいいわ。そうね。いつもみたく切っちゃえば、同じことじゃない……ね？ おじさま？」

私はその紙を突き返して言うわ。そうよね。だってこんな紙を百も二百も集めたって、その当人一人になつたりはしないんですもの。私はまた御姉様を見つけるの。とても優しく、私のことを愛してくれる御姉様を。

「やあ。こんにちは旅人さん」

にこにこした顔でマユナに話しかけてきた男性は、この国に入ってから初めて声をかけてきた相手でした。マユナはマウロに一旦離れるよう手で指示を出して挨拶を返し、一言二言会話を交わしました。会話の中で医者をしていると判明したこの男性は非常に紳士的で非の打ち所のない態度でマユナ達に接します。見た目が人間でないマウロに対して、その態度は崩れることがなく、ついにマ

ユナはストレートに、

「この国の方は、失礼かもしれませんが私達にあまり話しかけてくることもなかったのです、もしかしたらあまり外国からの客人に興味を示さない方が多いと思っております」

そう言いました。男は、

「ええ。入国審査の際に公務員の担当者から言われたかも知れませんが、一時期移民が大量発生したことで問題になったくらいですし、外国から人が来ることが実際珍しくないのですよ。だから、というのもあるのでしょうかね」

笑顔は崩さず、世間話のようにして言いました。

「ところでマユナさん。私はこの国で医者をしていますから、獣人族の子供を含め沢山の患者さんを診てきました。どうです、健康診断という形で皆さん我が病院を訪れてみてはいかがでしょう？ 見たところお二人はペットと責任者の関係の様ですし、お値段もかなり安くありません……」

マユナが微笑む様子を見たマウロがまたビクン、と反応するのと、

「おー。マユナンがナンパされてるー」

そんな呑気な発言をするマント女性をはじめとする一行が合流するのが同時でした。そこにはいつの間にか合流していたマユウもいました。

「おや。皆さんお揃いになりましたか、今丁度私が経営している病院で皆さんの健康診断についてお話をしていたところでした。どうですか？ 皆さん是非！」

医者の方が病院の住所や通信番号の載ったチラシをマユナに渡し、受け取ったマユナが微笑み折り畳んで懐に納めたのを見て言いました。

最後まで医者の男性は微笑みを崩すことがありませんでした。立ち去り姿が見えなくなるまで。

「ねえ、マユナは気付いたと思うけど」

マウロがマユナにしがみついたまま言いました。

「ええ。あの人は人間の見た目ですが獣人族ですね」

マユナが返事をする、

「あと、マユナ名乗ってないのにあいつマユナの名前当てたし、全員揃った時に皆さんお揃いになりましたか、って言ったよね。あれオルエゴかも」

マウロが続けて怪しむように言葉を続けました。オルエゴ、というのはマユナ

の出身国の言葉で、普通の人間ができないような特殊なこと、例えば地下の水脈を言い当てるだけ、というような地味なものから、触れたものを軒並み刃物に変えてしまうような戦闘に適したもので、魔力、精神力に関係なく発揮される能力を言います。

このオルエゴは、基本的には人間ではなく獣人族に備わっているもので、獣人族にも名前通り獣の姿をしている者から、人間と全く違う見えない目をしてる者まで様々です。しかし、能力が能力だったりするので、オルエゴが判明してしまうと弾圧の対象となってしまうような国もたくさんあります。

「ていうかさ、ボクは獣人族じゃないのに！」

マウロがふてくされたようにしつぽを地面に打ち付けて言いました。

「つまりあの人の言動はオルエゴではない、ということでしょう。私達が情報を喋った相手は入国審査官だけ。あなたが獣人族でないことは伏せましたから普通の人から見ればあなたは獣人族にしか見えない訳です」

「じゃあ何であのおっさんは俺たちのことあんなに知ってたのさ」

ギースが尋ねると、

「国の医者等の特別な立場にある人は私達の情報を知ることができる、と考えるのが普通でしょう。目的までは知りませんが、でも良い情報が私にも入ったということは間違いないですね」

マユナは答えました。マウロはマユナから離れました。ズザザ、という音がするほど素早い動きは見た目の鈍重そうなイメージを覆す感じがいたします。

「……………」

「……………」

マユナとマウロが見つめ合います。ロマンティックなキラキラが舞い散り踊り出すエフェクトもかかりそうでしたがマユナは手を顔の前で振って言いました。

「いやいや。大丈夫ですよ。今日は行きません」

「今日、『は』？」

「はい。今日、『は』」

その瞬間マウロの瞳から光が消えました。が、誰もフオローはしませんでした。「ま、頑張れよ。どうせお前のことだからデブって言われて痩せろって言われる

に決まってるけどな！」

嫌みつたらしくギースが言うと、言い返したのはマユナでした。

「いやいや。何を言っているのやら。ギース、あなたも明日受けますよ。健康診断」

瞬間、ギースの瞳からも光が失せました。抵抗はしませんでした。デブ、と呼べるようなずんぐりむっくりマウロを片腕で押さえ込むような、見た目の華奢さとは途方もなくかけ離れたマユナの怪力を知っているギースは、

「この世に、光なんてないんだ……」

とまるで壊れた機械のようにつぶやき続け、例の宿について受付をしている最中にもぶつぶつと言いつづけるほどでした。

「……………」

宿の受付担当が顔にクエスチョンマークを浮かべている中、マウロとギースはひたすらにつぶやき続けていました。

この世に希望なんてナインダーッ！

もはや、つぶやいてなどいませんでした。叫んでました。

翌日、マユナの傍にはマウロが、いません。

「……………」

離れすぎを伝える警告の振動が起こるまでマウロはマユナと距離をとって近づこうとしません。

「起きてからずつとこうなの？」

ユタカがマユナに訪ねると、

「はい。ちなみにギースもです」

マユナが視線を向けると、

「うわなんかこつち見てきた気持ち悪っ！」

目を背けて憎まれ口を叩きつつ、マウロと一緒に宿の朝食を食べています。普段は二人で口げんかを頻繁に起こすのですが、こういう時に限って仲良しですよ。

「困ったものです」

マユナは口ではそう言いましたが、

「顔が笑ってるよ」

ユタカが指摘しました。マユナは不思議と嬉しそうな笑顔のままでした。

朝食を摂り終り移動を始めるとマウロはマユナと一定の距離内にいなければなりません。ちよつとじつとしていればヴヴヴ。少しかだけ歩いてじつとしてまたヴヴヴ。そしてまた歩いてじつとしてヴヴヴ。四回くらい繰り返して、

「いい加減にしろ！」

アマネにゲンコツを食らってしぶしぶ歩き出しました。腕輪がないギースはマウロとは関係なく歩かなくなっていました。

『……びっ！』

耳元で短くうるさく笛を鳴らされた挙げ句、

「何だよお前注射怖くねえのかよ意味わかんねえよ……」

妹に腕を引っ張られてしぶしぶ歩く有様なのでした。

「女の子は……」

マユナがそう一言発すると、

『びびびっ！』

キーサが合ませます。

「度胸より愛嬌だよ。カワイゲのない女の子はモテないぞ〜っだ」

マウロが拗ねたように言うと、

「あら。まるで私やキーサに愛嬌がない、みたいな言い方ですね？」

即座にマユナが反応しました。

「……あると思ってるの？」

「……あるとでも？」

二人の発言が一致しました。その後は一瞬でした。キーサが空気を読んで瞬時に掴んでいたギースの腕を離します。腕輪の振動機能がギリギリ起動しない距離を保っていたにも関わらずその間合いを一瞬で詰めたマユナは、

「はいはい何を注射が嫌だなんて無駄なこと仰ってるんですかほら行きますよ！」

顔はにつこにつこにこ笑いながら、目は一切笑わずに二人をずるずると引き摺ります。

「うわっ！ ちよっ！ マユナ怪力すぎいつ！」

マウロとギースはその力に反抗できずにズリズリズリズリ引き摺られてしま

うのでした。

そうしてたどり着いた病院内は本当に立派で、とても昨日の男が一人で経営しているようには感じられない程でした。そこでは大人も子供も、獣人族までもがほのぼのとした雰囲気を漂わせて順番を待っているのです。瞳の輝きを失っていた一人と一匹もそれを怪訝に思っている様子です。その理由を手続きを終えて戻ってきたマユナが一人の獣人族の大人に訪ねると、

「ここのお医者さんはやっぱりプロだね。注射も痛くないし、何より俺たちを差別しない。だからちよつとばかり長い時間待たされても俺達はここを選ぶのさ」という風に答えてくれました。ちなみにここには昨日の男、院長以外にも医者はいるようですが、獣人族と旅人に關しては院長以外が見ることはできないらしく、必然的にマウロ達は長蛇の列に並ばされることになってしまったのでした。

明らかに気分を害した様子で睨みつけるマユウに対してもマユナは、
「日々の健康のためですよ」

という風に笑顔で言つてのけるだけでした。

結局その順番は病院が閉まる時間を過ぎてしまう程の時間となってしまう、マユナ達は順番待ちの一人を置いてローテーションで観光をしていたのですが、「もうこの近辺で見たいところは見終わったかな……」

「さすがに長すぎ……」

という不満の声が大人達からも漏れ出てしまいました。それに乗じた瞳の光がない少年とペットが帰ろう帰ろうの大合唱をするので、マユナは抑えるのに苦労した様子を呈していました。そんな時、でした。

「いやあ。大変長い時間お待たせしてしまって申し訳ありませんでした。マユナさん達がしびれを切らして帰ってしまったのではないかとビクビクしておりました。アハハ」

院長は軽く笑うと、一行を招き入れました。診察室を通り越して、階段を下った地下室へと。

それに違和感を覚えたマユナが訪ねると、

「いやあ。さすがに診察時間を過ぎてしましまして医者や看護師達を帰してしまいました。申し訳ありません。その代わりと言っては何ですが、私の娘が診察

のお手伝いを致します。いや、腕は確かなのですが、どうしても人前には出たがらないものでして。今回はそちらのペットさんがいることで娘が興味を示しましてね。それではどうぞ」

そうして通された先には、

「お待ちしておりました。皆様方」

朱の艶やかな着物に身を包んだ、

「女の子？」

『ふび？』

娘が三つ指をついて出迎えるように座っていました。マウロの声とキーサの間の抜けた笛の音が示すように、その姿はまだ幼く、ギースやキーサと変わらないくらいの背格好でした。

ああ。ついにこの時が来た。来たわ。私の目の前には琥珀色の瞳。栗色の髪の毛。嗚呼。何と可愛らしいことなの！ 愛らしくて、今すぐにも……食べてしまいたいくらい！

片一方は無粋なモノがぶら下がってはいるけれど……。大した障壁ではない。このくらいの年齢ですもの。切り取ってしまった方がいいの！ そう！ ざっくりと！ いつも通りに！ ああ。それにしたって何て可愛いのかしら。

二人を庇い立てするするように立っている黄金色の髪の毛も、やっぱり二人ほどではないのだけれど、碧の瞳が眩しいわ。こういう人って、やっぱり私の御姉様にふさわしい！

傍にいる毛玉は御姉様とするには話にならないけれど、良い毛皮。あの肉厚の肥満体はクツションにするには丁度良い。

その他はゴミよゴミ。美しくない。適当にバラして、後はじじさまに任せるのが良いわ。いつもの様に。そう。いつもの様に。

ではまずマウロ君、君から始めよう。院長の発言と共に、異様な雰囲気と娘の異常な殺気を感じて診察即ち注射を免れると信じていたマウロが、

「ヤダー！ 殺されるー！」

と叫び速攻でマユナにバシンと頭を叩かれました。

「謝りなさい」

即座に謝罪を求めるマユナに、

「待つてよマユナ何も感じないの？ これ絶対おかしいって！」

と異議を申し立てるマウロでしたが、

「はっはっは。大丈夫大丈夫。ちよっとだけ血を抜くだけだから」

「そうですねよ。じじさまは国一番の名医です。心配なさらずにいらしてくださいな」

院長と娘がマウロを宥めるようにして言います。

「ああマユナさんとギースさんキーサさんはそちらでお待ちください。まずはマウロ君を終わらせてから、大人の方々を順番に診察して参りますので。あと、この部屋の対角線の先端は百メートル以上離れています。今マウロ君が居る場所からはどれだけ離れていただけでも大丈夫です」

そう院長は言うのと、診察室と書かれた部屋の襖を閉めました。待合いのスペースには、マユナとギースキーサ兄妹、そして。

「……では、私とアソビマシヨ？」

細かな針を指と指の隙間に複数はさみ、無邪気に笑う院長の娘だけが残されました。

ちい。予想はしてたけどそれ以上に素早い。薄暗い部屋の中、三人揃って見え辛いはずの私の針を見切ってくる。

「馬脚が思ったよりも豪快に現れましたね」

『ぴいぴい』

黄金の髪と栗の髪が会話しながら軽快に跳ねている横で、

「ねえ待ってよ。どうしていきなりこんな命狙われるような展開になってる訳？俺こんなの聞いてな、危ねっ！」

せめてそのフグリさえ無ければ、というおしい雰囲気が時々漂うもう一人の栗色の髪。こつちからまずは手に入れてしまおうかしら。

「あの針は毒が塗ってありますから注意してください。あの子も素手で触っている以上恐らく麻痺するくらいで済みますけど、当たらないに越したことはないですよ」

暢気に解説をしながらゆっくりこちらに近づいてくる黄金色の女。ああ。うざったいわ。これだから意志を持って動く存在は嫌いなもの。

「ていうかこれ向こうにも、危ね！ 聞こえてる！ ダっ！ はずだろっ！ うわっ！ つか！ 俺ばかり狙うなくそ女が！」

最後に私に向けて杖に見せかけた洋剣を投げつけてくるもう一人の方の栗色。その抵抗も、やつぱり可愛らしい。まるで屍臭花に捕らわれた羽虫の純粹無垢な生への執着。固執を思わせる。

まるで見当はずれ。あさつての方向へ飛んでいった洋剣を私は見やりもせず、薬瓶に漬かった細針を投げ込み続けるの。さあ。もつと。もつとよ。もつともつともおつと。美しい光景へ私を連れて行って！

マウロの体はシートベルトの豪華版みたいな太いベルトで椅子にぐるぐる巻きに締め上げられていました。そして右腕がゴムチューブできつく締め上げられていて、

「では、まずは採血から……」

院長の冷たい声が降りてきます。

「にやーッ！ 逃げられないっ！ 逃げられないいいーッ！」

マウロが全力で叫びましたが、それも虚しく、針が刺さり、ませんでした。

「さて、ちよいと話があんだけだよオ……」

アマネの持つ特殊な形状の槍が、院長の喉元に突きつけられていました。

「おやおや。穏やかではないですねエ……」

院長は院長で、非常に穏やかで、落ち着いた声を返します。

「お前、何者だよ」

そのままアマネが尋ねると、

「何者か、と問われましたも、私は医者でしかありませんよ？」

笑顔のまま院長は顔をマウロからアマネへと移し、答えました。

その時、微かに、ではありましたがこんな声が聞こえてきました。

——ねえ……よ……なり……なてん……に……俺……危ねっ！——

それを受けてアマネは詰問の口調を強めます。

「向こうも向こうで穏やかじゃねエ様だが……もう一回聞くだ……！ てめえ

「は一体何なんだ！」

院長は一度、何かに観念するかのような穏やかな表情で目を閉じ微笑むと、カッ！と目を見開き、

「私は……蛇だよ！ 医を扱うにはふさわしい獣人だッ！」

は虫類を思わせる、縦長の瞳孔と蒼色の瞳を見せつけて叫びました。それを見てアマネは一瞬だけ驚き、マユウの方をチラリ、と見ました。

「……………」

マユウの応答は首を振るだけで、その意味はアマネ以外には理解しかねる様子でしたが、

「次の質問なんだけどよ。蛇野郎」

「蛇野郎、とは心外だ。一体何を思っただけのような発言を？」

気を害した様子ではありながら、それでも紳士的な態度を崩さず院長はアマネに言葉を返しました。

「バカな俺でも採血は空の注射器でやるのは知ってるぜ？ お前その中に何を入れてやがる」

アマネがそう尋ねた直後、

「……あ！ ホントだ！ 何その微妙な液体！ 意味わかんないんだけど！」
マウロがばたばた暴れようとしながら指摘していますが、体が動きません。

「おい！ 離せこのヤロー！」

院長はマウロの喧しい叫びを聞いても我関せず、という感じで、

「やめたまえ。強引に打ってしまうことも簡単なんだよ？ そもそもそのベルトは私がつけている鍵がなければ開かないんだ。観念したまえ」
そう冷酷に吐き捨てます。

「……できる、もんなら！」

マウロはそう言うのと体を固めます。硬体術と呼ばれるマウロの能力で、普段もつふもふの柔らかい体毛を完全に異質な状態に固めてしまい防御に使ったり、逆にその尖った状態を駆使して攻撃したりできます。

「ほお。そんな能力があつたとはね。しかし強引にベルトを切るのもダメだ。それと同時にこの部屋が同時に爆発してしまうよう仕掛けがしてあるんだよ……ふふふ」

院長が気持ちの悪い笑みを浮かべると同時のことでした。ブオン、という風切り音がして、

「……ッ！」

アマネが間一髪。背後からの攻撃を避けます。

「危ねえなあ。オイ！」

いきなり槍で突いたりはずせず、足蹴にしてその少女を吹っ飛ばします。屈強な肉体を持つアマネです。武器を使わなくても相当な勢いをつけて少女は転がり壁に叩きつけられます。相当なダメージを負っているはずだ、と誰もが思いました。しかし、

「……………」

少女は何も感じていないような呆けた顔のまま立ち上がり、そのまま一瞬の内に間合いを詰めます。

「クソッ！ 気持ち悪い。どうなってんだよ？」

アマネが吐き捨てました。

金属針を避け続ける三人も、ついに気付く時が来た。

「ねえ。見間違いかと思ったんだけど、さ」

『びーっ』

「見間違いな訳がないじゃないですか。その通り、ですよ」

「何で向こうまで三人いるんだろうなあ！」

手始めに動けなくすると決めたもう一人の方の栗色が叫び出す。もつと叫べばいい。その可愛らしい声が枯れてしまった後に、苦しみの嬌声を荒々しく上げるその瞬間を私は望んでいるの！

「どうしてあなた達は大人しく刺さってくれないの？ もう私も遊びには飽きちゃうの……。もつと、先に進んで私とイイコトをしましょうよ」

思いの全てを、要約しきれないあんなことやこんなことをじじさまに教わった風にして伝えていく。この針と、声で。

「遠慮致します」

『びいびいびいっ！』

それでも疲れを見せずに避け続ける二人と、

「あーくそっ！ いい加減疲れるっての！」

という言葉が漏れ始めた一人。ああ、あともう少しなのね？ 私が期待に溢れた目でこの子を見つめるのと、

「……………！」

醜く無粋な音をたててお人形の上半身が吹き飛んでくるのが同時。そして、

「こいつら……臓器が綿ばっかり……？」

という、この一行の中でも一番醜い、不細工な男が呟くのが聞こえてくる。ああその声だけでも耳が腐るわ。

「けど外側は完全に人間だな……」

刀を構え残心の構えをとる女の声が聞こえる。さっきのブサ男よりは幾分マシだけど、やっぱり無理！ 気持ちの悪い。落ち着き払ったその声が虫唾を走らせる！ 黙れ。黙れ黙れ！

「……………。さぞや、お高く売れたことでしょう、ね」

黄金色の髪の少女が呟くと、

「ああ。まあ有効利用と言った所だろう。無駄がなくて実に良い。素晴らしいと

は思わんかね。どの道放置すれば腐れてしまうのだからね」

「……クソが」

「……キツシヨイ、なく。私その思考は理解できないわ」

一番の糞虫が吐き捨て、またさつきとは別の、マントから柳葉刀を多数取り出して、いる女が呟くと、

「これはまた心外だ。私達は診察をして、その札をありがたく受け取っているだけさ。ものついでにな」

じじさまが答えた。じじさまの声も、私には気持ち悪く聞こえていて、苦痛だった。

「狙うのは基本、いいえ。絶対にペットを連れただけの一行のみ。それが実際に獣であるかどうかは問わない。何故なら、この国はペットが行方不明となっても熱心に捜査が行われませんものね。責任者と百メートル以上離れると通報が行われてしまいますが、そんなのは責任者と同時に始末して行方不明にしてしまえば良いだけの話です」

マユナが言うのを、診察室に一人取り残されたマウロが聞いていました。

アマネに襲いかかる元人間を、マユウが真つ二つに切り捨て、その上半分をアマネが蹴り飛ばして出て行ってしまった為にひとりぼっちになってしまったのです。

「私達がここに来る直前訪れた国にも、一人名医がいらつしやつたそうですよ」
二つに分かれた元人間の体を追って診察室を出た院長に向かって、マユナは言いました。

「ほう。それはそれは」

院長は事も無げにそう答えましたが、

「ですが、そのお医者様は国外に逃亡してしまつたそうなんです」

「なるほどなるほど。ところで今破壊された襖や傷だらけのこの待合室については弁償してもらわなければなりませんね……残念ですが」

院長が話題を切り替えていくと、

「そんなつもりもないのにずいぶんわざとらしいことを仰いますね。件のお医者様はその国の女の子や男の子を親ごと丁寧な診察するような素晴らしい方だ

ったそうですが、しばしば、主に女の子が行方不明になっていたそうですけど……。おや、どこかで見えたようなお話ですね」

マユナはすっぱりと話を切つて落とし話を続けます。そして院長は観念した様子で、

「しかし最後はヤキが回つてこのザマ……と。男は娘を連れて国外逃亡。そしてこの国に医者として移住しようとした。まあ最初は国も頑として受け入れなかったが、この腕前を見せれば、あつという間に手のひらくるり、さ」

答えました。

「後はこの国のペットの制度を巧く利用して犯行を繰り返していった。遺体は娘の玩具、中身は売買。まったく、笑いが止まらない」

普段口をきかないはずのマユウが呟くと先ほど切り捨てた上半分を掴み上げました。その瞬間、その右腕に握られていた鉞がマユウを襲います。

「ふっ——」

軽い息を吐く音がマウロの耳にも届きます。——マユウの動きはマウロの背中側で繰り広げられているため彼にはその動きの子細が見えませんが——

(別にこれくらいで死ぬ訳ないしー……)

そう思つて何もしてませんでした。

「ていうーかさあー。誰かボクのこと助けてくれませんかねー？」

呟いてみましたし、多分誰の耳にも聞こえたと思いますが、

「今日のボクの活躍はゼロでしたー。めでたしめでたしいー」

総スカンを食らつた形でマウロはいじけたように呟くのでした。

実際にマユウは、軽い息を吐く音と同時に右腕を別離させ、地べたに落ちたその顔を踏みつぶし、中の綿が潰れる気色の悪い音を響かせました。

「しかしどうしてこんなことをされるのか、不思議ですね」

マユナがそう呟くと、

「簡単なことさ」

院長は未だ不敵な笑みを浮かべたまま、何でもないようには言いました。

「どんなに変わった嗜好を持っていようが、それがどれほど度し難い存在であろうが、娘は愛しい。我が子は可愛い。それだけのことなんだよ。……君達には理解できんだらうがね！」

その叫びと共に、襖という襖が開き、そして床下、天井からもたくさんの人間や獣——だったはずのモノ——がマユナ達を襲います。

「死体を操るのが貴方のオルエゴ。あなたの国ではさぞ扱いづらかったでしょうね」

マユナが言うと、

「ああ。まあそもそも人を生かすのが仕事の私が人前で多用するような能力でもなかったがね。でも、娘は喜ぶのだよ。御姉様。御姉様ってね」

院長の言葉に、マユナはなるほど、とひとりごちた後、襲い来る死体を次々に投げては極めていきます。しかし、

「無駄だよ無駄！」

痛みを感じず、関節を痛めようにもそもそも関節自体を摘出された存在である死体達は、平気で起きあがってきます。

「チイツ！ やり辛え！」

師と仰ぐマユウはあっさり死体を切り捨てましたが、アマネはその方向へ踏み込むことができないまま攻撃を凌ぐだけで精一杯になっていました。

「それで構わない！ アマネはそれで良い！」

マントの女性がそうやってアマネの姿勢を支持すると、

「どうせ微塵に斬ろうがああ、医者を殺さん限り無駄なのだからな。むやみやたらに数を増やす必要もあるまい」

アマネも院長が持つオルエゴのその特徴を掴んだか、基本的には攻撃を凌ぐだけになりました。

「どうする？ このままではじり貧というものだ。くく。貴様等の旅もここで終わりだなあ？」

院長が今まで見せたこともないような下卑た笑みを浮かべながら言うと、

「いいえ。残念ながらそうでもないですね。私達はまたすぐに出国致しますよ」
マユナが弓をつがえて言いました。

「……はっ！ そんな弓で何ができようか」

院長は身近にある死体達を使って自らにバリケードを作り上げました。

「別段戦い慣れている訳でも、ないんでしようしね。そう思っていましたよ」
マユナはそのままつがえた弓の狙いを――

——がっ！

娘の方に変えて、そのまま手を離しました。

「がっ！」

何が起こったのか、全くわからないまま、私の足を見ると、

「なん……？ 刺さって、る……？」

弓矢が一つ、私の左足を貫いていて、それはそのまま床を打ち付けている。

「う、うご……？」

動けない。だけではない。口が上手く動かせなかった。

「やはり麻痺の薬でしたね。そこでしばらくしびれていてください」

黄金色の髪が喋り、私は反対に喋れなくなる。ああ！ こんなはずでは、なかった！ のに！

「ああ！ ああああああ！」

じじさまが思わず今までの御姉様でできた壁から出てこようとすると、としゅん、と音がして、弓が放たれてしまう。

「そこから出てくると撃たれますよ？ 大人しくしててくださいいな」

黄金色の髪が生意気にもじじさまに指図をした。

「何が、何が望みなんだ……」

じじさまが喉を詰まらせながら発すると、

「私達は先ほど申し上げた国から仕事を引き受けました。その内容は貴方。……要は国から不法に出国してしまった名医の、出国時国に返却しなければならぬ医師証明のシンボルを回収することです」

「ふ……くく」

じじさまは鼻で笑い、そして声にも出して笑います。

「あんな見た目だけが豪華な飾りに一体何の価値があるというのか。そんなものにはただか旅人まで駆り出すとはな」

バカにしたように言うじじさまに、

「待ってよ。それはつまりその目標達成のためだけに……」

黄金ではなく、もう一人の方の栗色髪が喋ってから、

「ええ。つまりはそういうことですね。うまく行けば健康診断を受けられたかも

しれないのに……。思っていた以上に簡単に出てきてくれたものだからありがたかった反面、残念ですよ」

黄金色が返した。

ああ……。もう体は動かないのかしら……。？ 余りにも、おしい。あの体はもう二度と私のモノになることはない？ あの美しい栗色の髪と琥珀色の瞳……。私の意識がはつきりした状態で、是非とも私のモノにしたかった……。のに。かくなる上は！ そう思い私は足下に転がる鈍を手に取り……

「いけない！」

それが私の耳にした最後の言葉！ さようなら！ 私の美しい日々よ！

鮮血が吹きだし、部屋の襖、畳、机。ありとあらゆる物を朱く染め上げて、娘が事切れました。マユナが、

「……………」

無言でうつむき、思い直して顔を上げて、数々の死体でうずたかく積み上がった壁の向こう、院長の方を向きましました。

「そ、んな……あの子が、あの子が、逝ってしまったあああああ！ あの子が、あの子があ！」

我を失い喧しく絶叫する院長を、

「終わり、ですわね」

マユナが一瞬の内に組み付き、静かにさせてしまいました。

院長のポケットの中にはベルト解放の鍵があり、診察室の壁には、

「こんな物の何にしがみついていたんだか」

蛇に象られた金ぴかのレリーフがありました。

「別に私達は貴方達を捕まえるのが目的だったのではなく、あの国の人間が関わっていた証拠となるこのレリーフだけ回収できれば、後はどうでも良かったのですが……。まあ良いでしょう。警察を呼んだらもうここには用もないですね」

一頻り周囲を見渡したマユナが完全に気を失った男を解放して言うので、

「……あ、私警察の通信番号を知らないんですけど、誰かご存じですか？」

思い出したように言いました。そして誰も存じ上げないことを知ると、
「仕方がないですね。この対角線は百メートル以上あるはずですから……」
自らの腕にはまっている物を見つめながら不本意そうに呟きました。

そして医者 of 男は駆けつけた警察に連行され、地下の遺体達も娘と一緒に国の死体処理班にあらかた布を被せられた後担架に乗せられ運び出されてゆきました。

「これで皆穏やかに眠れると良いね」

とようやく解放されたマウロが尻尾を振りながら呟くのを、マユナとキーサがただ黙ってなでていました。

その様子をあまり面白くなさそうに見つめるギースが言いました。

「ねえ。あいつのオルエゴって結局何だったの。マユナ言ってたじゃんさつき。いけない！ って」

ああ、そういえばそうでしたねえ。マユナはマウロから手を離すと、そんな風に気のない返事をしていました。

「ま、いいですもう。付き合ってもらえませんし」

そう続けるとマユナは手を振り現場から立ち去ってしまいました。その場に取り残される形で立ち尽くしていたギースキーサ兄妹やマウロには国の人間は話を聞くことができず、追い立てられる形で病院から出て行く羽目になってしまいました。

警察の取り調べは成人男性組が担当して受け答えし、事のあらましを説明しました。マユナ達が腕輪の警報を鳴らしたことであったり、証言の信憑性など様々問題点はありましたが、国内も警察達も男の臓器売買やペット誘拐及び殺害にばかり気を取られている様子でしたので、うやむやになってしまいました。女性陣と子供、そしてペットはというと、

「よーやくボクはペットから解放される！ この腕輪ともオサラバさっ！」
嬉しそうに腕輪の付いた右腕を振り回していたり、

「どーでもいいけどさ、さっさと荷物まとめてくれない？ お前にお似合いの腕輪との別れを惜しんでる暇とかないんだし」

憎まれ口を叩く声に反応してがぶり。マウロがギースに噛みつく様子を見たりしながら順調に出国の準備を整えていきます。

「ただいま。みんな」

そうこうしている内にユタカをはじめ、男性陣三人が帰ってきました。手には何か色々な物が上品とはお世辞にも言えない感じに詰め込まれた紙袋をぶら下げていました。

「なになにこれこれー？」

マウロが荷物の整理をぶん投げて紙袋をひつたくるようにして取ると、マユナと目が合いその微笑みの余りの神々しさに、

「……………こほん。おかえりなさい。ユタカ。この荷物お一つ私にくださいな」
咳払い一つ、マウロなりに丁寧丁寧に重ねた一言を發して、その返事をユタカがする前に袋を開けてしまいました。おしい。ユタカは笑顔の裏で思いました。マユナは粗品、と書かれた包み紙を横目に入れて、どうせ文字通りの品なのだろうと思ひ、

「うわっ。何これ。宿で出てた不味いクッキーじゃん。ボクこれいーらなーついで」

袋にごそごそ戻すマウロを見て、やっぱり。と思ったのでした。

「姐さん。俺が持つてるのは一応現金ですわ。こいつはいただいたときましよう」
アマネが報告するとマユナは静かに頷き、その紙袋を丁寧に自らの荷物の中
に移し替えます。

「あいつらはオルエゴ自体を信じられないようだな」

マユウが既にまとめ終わっている自分の荷物を確認しながら吐き捨てる、
「目の前で見たというのに、ですね。……しかし、初めて見る物を信じられずに
疑ってしまうことなんてよくあることですよ」

最後に自分の荷物をまとめて担ぎ上げると、マユナは部屋を出ていきます。そ
の後を一人、また一人続いてゆきます。

「だからってさあー。折角のアドバイスをスルーしちゃうってのは頭悪過ぎで
しょー？」

マウロが不服そうに言いますが、皆黙ったままでした。マユウだけが、マウロ
を睨みつけてまたマウロを黙らせました。

宿の料金を支払った後、外に出てマユナが発した第一声は、

「望んでいた訳ではないですが、最終的に入国前との比較で黒字ですよ。とりあ

えずはそれで良いんですよ。マウロ」

そんな声でした。

「さつすがしゅせんどだね。マユナ」

そう言うのと、アマネとギースの顔が引きつります。バカ！ お前！ 二人が頑張って小声で言いますが、それもしつかりマユナには聞こえています。その上で、「その言葉、誰に教わりましたか？」

神々しい笑顔で訪ねました。

マユナ達が出国してから数日後。国内の新聞がセンセーショナルに報じたニュースがあります。

『連続猟奇殺人か！？ 凄惨な現場に悲鳴轟く』

そんな見出しの報道が伝えるには、夜一家が寝静まった後に何者かが侵入し、その家の子供が惨殺されている、というもので、その遺体は内蔵が露出するまで切り刻まれる痛々しい状態だったそうです。

もう一つ、新聞等は詳細に伝えていないようですが、現場となった部屋の壁には、必ずこんな言葉が、犠牲者の血と、数日前に死亡が確認されたのにその後行方不明になってしまったとある女の子の体液が混じった液体で書き残されているそうです。

『次ノ御姉様ヲ、サガサナキヤ』と……。

了

マイノリティと美的問題

光枝初郎

——私たちは、何についてははじめよう。何が開始されるだろう。有益な議論か、そもそも行き来はするけれども各々に正しく到達しているかは分からない曖昧な対話か、そのどちらだろう？

——確実に後者の方だろう。それでは私たちは、人間の生存様式をあるとき「美しい」と感じることにについて言を繰り広げよう……。

——人間の生存様式……。 「美」とは人間の生存様式のカテゴリであるとき、こと、それでいいだろう……。 酒とタバコの美学、栄光と退廃、人間らしさ、そういったものはカント的な「崇高」からはたちまち区別される……。 そこでこう問いを立てよう。私たちはある場面において、心の苦痛を感じつつ「美」

だと感じる（判断する）ことがある。美に到達するにはこの苦痛は避けられないのだろうか？

——ある場面というのは例えばどういうことであるか。

——題材は何でもいいが……ジャン・ジュネの『花のノートルダム』¹は、この小説全体が甘美で苦々しい体温のような密なあたたかさに包まれているようだ。ヴィジーヌとミニョンの二人の生活は愛で囲まれている。「眠るミニョンの体は温かく、デイヴィーヌの体に密着している。デイヴィーヌが目を閉じると、二つの脛が合わさり、暁から生まれる世界から彼女を切り離す。雨が降りはじめ、彼女のなかに突然の幸福を作りだす。その幸福があまりにも完璧なので、彼女は深いため息をつきながら、大きな声で、「幸せだわ」と口に出してし

¹ジャン・ジュネ『花のノートルダム』中条省平訳、2010、光文社。

まった」²……。

——しかし、私たちはそのとき、同時に彼らが追いやられている社会的な立ち位置というものを、小説内で発見し確認するわけだ。彼らがお気楽な青春恋愛——という言葉、ジャンルも眉唾物ではあるが——をやっていたらこの物語はほとんど意味をなさないだろうから。

——そこで、しかしジュネが描く文の果てに垣間見られるような「美しさ」が在るわけである……。これはいったい何であろうか？ というのは、もはや作品内を超えて、私たち鑑賞者の問題ともなっている気がするのだ。

——そう、それは確かに。そもそも、彼らの生き方について「美しい」などと形容するのはあまりにも馬鹿げたことかもしれないのだ。いや、それは実に危

² ジャン・ジュネ『花のノートルダム』87pp。

険な行為なのだ。もし私たちがジュネの『花のノートルダム』を読んで、ただ単にヴィジーヌとミニョンの関係は美しいとだけ言ったら、それは遣る瀬無いオリエンタリズム的態度以外の何ものでもない（敢えてオリエンタリズムという言葉をこのように使うなら）。

——ヴィジーヌとミニョンは彼ら固有のものを抱えている。これは、覚悟の問題だ。鑑賞者の覚悟だ。真摯さだ。鑑賞者は一度彼らの身体に「生成」^ななければならぬ。内在を生きるのだ。

——事実、鑑賞者の立場から見たヴィジーヌとミニョンは、美なのである。それは動かしがたい。しかし今度は私たちが彼らに「生成」^なるのだ。そのとき、私たちは美と形容されるものの中にいて、鑑賞者の立場の判断を下せないのだ。あろう。しかし、それで良いのだ。

——大切なのは鑑賞者の立場を絶対化しないこと……。

——まさにそれ、それだ。超越的な立場は善きものをうみはしないということ。
と。

——他の作品についても何かいえるだろうか？

——江国香織の『きらきらひかる』³では、三人の男女が中心に描かれる……。情緒不安定をもつ笑子と睦月は婚姻関係にあり、しかし睦月と紺くんは性的な関係にある。この三角関係をぐるぐる廻るのだ……。

——例えばこういうシーンはどうだろう……（最もラストのシーンであるが）。

³（文庫）新潮社、1994。

『SHE. S GOT A WAY だね、これ』。僕の気持ちをみすかしたように紺が言った。あしたもあさってもその次も、僕たちはこうやって暮らしていくのだ。僕はもう一杯シャンパンをついで飲む。『記念日のプレゼントは、来年二回分くれればいいわ』笑子が言い、目の前でゼザンヌが、いかにも楽しそうに微笑んでいた。⁴ 笑子だつて睦月だつて、ひょうきん者の紺くんでさえ、問題と苦しみを抱えている。だからだろうか、彼らの生活は、廻りは、彼らがなす円環は、きらめいている。タイトルが示す様に。

——しかし、苦しみとその美しさは、直接結びつくものではないのだろうか：∴。やはりそこに直接的なつながりはない。そこに直接的なつながりを求める姿勢こそ私たちのオリエンタリズム的效果の故であり、私たちはそれを強く批判し自らを戒めるという意味において初めてそのような問いが許されるのである。

ろう。

⁴ 前掲脚注 3 201pp。

——しかし、誰が許すのだろうか。

——いや、誰も。

——最後にマイノリティについて話をしよう。ジル・ドゥルーズはこう言っている。「マイノリティとマジョリティは数の大小で区別されるものではありません。マイノリティのほうがマジョリティより数が大きいこともあるからです。マジョリティを規定するのは、遵守せざるをえないひとつのモデルです。たとえば平均的ヨーロッパ人の成人男性で都市の住民……。これにたいして、マイノリティにはモデルがない。マイノリティは生成変化であり、プロセスであるわけですからね。」⁵「こういうことは、私たちの話にも通じるだろうか？

⁵ ジル・ドゥルーズ『記号と事件』（宮林寛訳、河合書房新社、2007）、pp.347-8。

——マイノリティとマジョリティは数の大小の問題ではない、それから「マイノリティとはプロセスである」。誰でもないしかし、人々の性愛（セクシュアリティ）については（男—女）の対がなす異性愛がモデルとされ、（それは誰でもないのにもかかわらず）反射的に他の性愛の形が周縁に位置付けられる。しかしそのような運動は本質的なことがらではなく、ドゥルーズは反対にマイノリティの潜在的な力を見ようとしている。私たちが見てきた人間関係の美しさは、そのような力を持つのだ……。

——あるいは、モデルをもたないプロセスとしての性愛は、文学という特異な機能によってその筆致の痕跡を大小にとどめるのかもしれない。激しい闘いが行われているのだ。性愛とはすなわち生存である。生存を賭けた闘いである……。

——私たちは、そのことを思考する。性愛＝生存を、ようやく思考する。そのような性愛関係が美しいとか悪いとかの判断するのではなく、私たちは絶えず

思考を繰り広げる者にならなければならない。

——判断はいつも性急なものだから。それに対して思考や郵便的な対話は終わることのないバトルである。

——この冗長なおしゃべりもそろそろ閉じよう。

(了)

「どこへいくの、みかちゃん」

尾崎 枕

「大丈夫よ。どこへだっていける」

高らかに叫んだその瞬間、彼女は銃に撃たれて死んだ。彼女の初舞台はそれで終わるはずだった。

しかし孤児Bは事切れるまでに三十秒を要した。長々とした彼女のうめき声に観客はうんざりしていた。

客席でみかちゃんが死んでいくのを私はじっと見つめていた。他の孤児は打たれるたび舞台袖へ消えていった。しかし彼女は何故か舞台からはけずにうつ伏せのままずっとそこに留まっていた。

幼いころにミュージカルに出演してから、みかちゃんは舞台の虜だった。私の住む地域では小中学生を対象にした大がかりな演劇祭を毎年開催していて、家なき子やアニーなんかを大々的に上演している。彼女も小さいころに出演した口だ。孤児Bとかいう大して目立たない役だったけど、彼女はその舞台がスターへの第一歩だったのだと信じこんでいる。

東京にいったら舞台やテレビに出れる。少なくともチャンスは与えられる。彼女の漠然とした夢は私にとって居心地が良かった。

みかちゃんの口ぶりは明日にも東京へ駆け出しそうな勢いがあった。でも実行に移すわけがない。どこにもいけない彼女のことを私は内心馬鹿にしていた。彼女の家は代々続く漁師の家系だ。彼女は弟達に比べて冷遇されている。みかちゃんの両親はお金持ちだけど、そのお金を彼女に注ごうとは思っていない。

彼女の口から、「近所のおじさんと結婚しろと言われた。高校を出てはたらけ。短大なら出してやる」こういった愚痴が溢れるたびに私の心は満たされていく。彼女はお金があるけど、夢が見れない。私はお金がなくて夢を見れない。みかちゃんが気づいているかは分からないが、私と彼女は同じように不幸せだった。

数年に一回夢を見た子供が黙って上京したり、まれに失踪したりするらしい。大体の子供が戻ってくるらしいけど、まれに帰ってこない子もいるらしいよ。みかちゃんの言葉に私は黙って頷いた。

家庭や周囲の環境が満たされていない子は、みんな都会に憧れる。本当は何もかもが大っ嫌いだけど、自分の親や兄弟を嫌いになるのは難しい。学校の友人や先生にしてもそうだ。人を憎むのが難しいから、代わりにこの町が嫌いになる。みかちゃんも私もこの町が大嫌い。

みかちゃんは割と勉強はできるのに、俳優の学校にいけますなんて言っしてよっちゅう親に殴られてる。彼女は今日も父親と口論になったらしく、ぶすつとした面持ちで窓の外を見ている。砂で黄色く汚れた窓には灰色の空が広がっていた。

「気分悪いから踊ろう」と、彼女が立ち上がる。ラジカセを押すと、聞きなれないアイドルグループの音楽が流れる。「一緒に踊る？」彼女の問いかけに私は曖昧に首を振った。

「踊らない」

「踊れない？」

「そう」

私は外を見るのをやめてみかちゃんを見つめた。みかちゃんは私の目線に恥じることなく楽しげに歌に合わせて踊っている。私にはそれがうまいとか、下手とかは全く分からなかった。私も彼女に誘われて舞台のセリフを読んだり、踊ってみようとしたことがあったけれども、全くうまくいかなかった。その時分かったのは、私は人の前に立つのが大っ嫌いで彼女は人に見られるのがとっても好きだということ。

制服姿でアイドルソングを踊っているのは分かりやすく可愛らしいけど、自分と同じ制服を着ている。確かに歌もうまいけど、もう何の感慨もない。毎日同じものばかり見ているのだ、飽きがきても仕方ないだろう。

私は再度窓の外に目をやった。彼女も私も十七歳。灰色の町に閉じ込められている。

私たちが住んでいる場所は日本海に面した小さな町だ。黄砂で空気は淀んで

いて、空はどんよりと雲がかかっていた。青空は灰色がかった小汚い青空で、田舎のくせに自然の美しさとかさういったものとは無縁だった。

物心ついた時にはパブルの面影などなく、大人はいつもお金の話をしていた。テレビや新聞も税金やリストラの話ばかりしていた。繁華街といわれる場所は閑散としていて、道路には郊外型の店舗が立ち並んでいた。憩いの場所はショッピングモール。チェーン店が進出するたび、私たちは諸手を上げて歓迎し、個人店はどんどんつぶれていった。地元で稼いだお金を、こうやって都会の企業へ送金しているのだ。

どうにもならないことに直面するたび、私はすべてをこの町のせいにした。お金、お金、お金、お金が欲しい。

私の父は長いこと定職についていない。以前は小さなラーメン屋を営んでいたがすぐに潰れてしまった。今は祖母の年金と、小さな駐車場の経営で生計を立てている。まずいラーメンを作ることしかできない父親、要介護の祖母、疲れきった母親。

高校に進学した私は学生生活を送るのに意外とお金がかかることを知った。

必要なのは教科書だけじゃなかった。副教材が買えず教師に事情を話し授業に合わせてコピーをもらい始めたあたりでようやく私は我が家の経済状況について真剣に考え始めた。

ないものはないのだ、と授業料が滞り始めた時私は職員室へ呼び出され一枚の書類を渡された。そこには高校生用の奨学金について記されていた。奨学金で滞納している授業料を払い、おつりがくる。借金だからもちろん数年は返し続けなければいけないが、この心労に比べたらそんなことは問題じゃなかった。購買で飲み物を買ったり、化粧品を買ったり、人並みの学生生活が送れるだろうと私の心は浮足立った。

みかちゃんと仲良くなったのもそのあたりの時期だった。クラスで一人浮いた彼女は、時々担任に呼び出されていたようだ。「部活動では楽しそうに話しているのに、どうしてクラスには打ち解けない」と問い詰められている彼女を見て、私は同情心から声をかけた。「私、彼女とは友人ですけど」勿論そんな事実はなかった。その時のみかちゃんの表情は覚えていない。怒っていただろうなと思う時もあるし、単純に担任から解放されてほっとしていたような気もする。その一

軒以来、私と彼女は会話を交わすようになった。

「おはようございます」

先輩の声にみかちゃんは踊るのを止めた。次々に部員が教室へ入ってくる。

「先輩も、おはようございます」窓の外を眺めていた私にユイがはなしかける。

「先輩、このところ毎日来てますね」「なんで演劇部はおつかれさまじゃなくて

おはようなの？ 業界挨拶？」「知らないです」

女の子たちが丸くなってストレッチをしているのを、やっぱり私はぼんやりと見つめていた。部員は九人、男は一人もいなかった。一年生で一人だけ入部希望者がいたそうだがそのうち来なくなると、ユイが言っていたのを覚えている。

「トキヤ様やってください！」

発声が終わると、あとはみかちゃんのオンステージだ。トキヤ様は最近はやりのアニメ番組のキャラクターで、彼女は声優の物まねがやけにうまかった。先ほどまでアイドルの歌を歌っていたのに、今は少年の真似をして歓声を浴びよう

とじている。

新入生歓迎会の時、みかちゃんはウィッグをつけて青年の役を演じた。部員のほとんどがみかちゃんの演じる青年のファンで、皆ヒロインの座を狙っている。唯一の男性部員は、そんな空気に嫌気がさして辞めてしまったのだろう。

別に私はみかちゃんが演じる青年が好きでここにいたいというわけじゃない。私は、彼女がアニメの物まねや青年の役を演じていても何も思わない。確かに彼女のアスキーな声は少年のように聞こえる。でも、私には彼女は制服をきた女の子にしか見えない。

「エチュード入る？」

みかちゃんの言葉に私は首を振る。課題に合わせて即興で役を演じきる。一度だけ参加したが、棒立ちのまま一言も言葉を発せなかった。電信柱の役以外、演じきる自信が私にはない。

エチュードは各々がやりたいよう役を演じていくので、一向に結末が見えなかった。起承転結ではなく、起起起起起。十分のアラームをワンセットに、次々役が入れ替わっていく。唯一面白かったのはユイが男性を演じる時で、女性らし

さが抜けず絵にかいたおかまのような語り口になっていたことだった。

特に何をするでもなく、ぼんやりと演劇部の部室にいる。みかちゃんが私を拒まない限り、私はここで邪険されることはないだろう。「大会とか出ないの?」と、尋ねる私に、今年は出ないかもねとみかちゃんは笑った。

数か月前まで私は時間なんて持て余したことがなかった。幼いころから町のスポーツクラブに通っていた。県の強化選手にも選ばれていた。

私がおかをははじめると、三つ下の妹も同じようにそれをしたがった。私は妹のことが好きだったから、同じことを同じようにすることに何の抵抗もなかった。休日のたびに家族ぐるみで大会に出かけるのも、なんだか旅行みたいでとても楽しかった。

ある日、妹が私のリザルドを更新した。何度も何度も挑戦したが、私はその日以来妹に勝てなくなつた。割とあっさり私は事実を受け入れた。スプリントを完全に諦め、長距離へと種目を変更した。花型の競技で歓声を浴びたい。そういった未練はあつたけれど、妹に勝てるとは思えなかつた。

妹の調子が良くなっていくのと比例して、何もかもがうまくいかなくなっていく。目標にしていた全国大会への予選で、私はあっさりとは敗退し、妹は優勝し日本代表の座を手に入れた。誰にも惜しまれることなく、私は引退を決めた。練習以外に時間の潰し方を知らない私はここに居るしかなかった。大して面白く無い素人の劇をぼんやりと眺める。時々誰かが思い出したように私に話しかける。

トロイメライが流れ、帰宅を促される。運動部は閉門まで粘るように練習を続けるが、演劇部はあっさりと解散してしまう。帰ろうとしていた矢先、私はみかちゃんに呼び止められファミレスへと向かった。

いちごのパフェを頬張る彼女は女の子にしか見えない。それなのに、彼女は部活の時だけ男の子になりたがる。私にはそれも分からなかった。

「あのさ、私アイドルになろうと思って」

「え？」

どういふこと、と尋ねる私に彼女は携帯の写真を見せた。そこには赤のチェツ

クの衣装をきたみかちゃんの姿があった。みかちゃんの隣には、なんとなくみかちゃんみたいな雰囲気の子が並んでいた。端にはでっぷりと太った中年の男が写っている。

「なんかね、ご当地アイドルにならないかって誘われちゃって」

みかちゃんのはなしを要約すると、一番端太った男は自称プロデューサーらしい。音大出身で、地方テレビ局にコネがあり、この町でご当地アイドルを立ち上げようとしている。

ミュージカルに出てたの覚えててくれたんだって、と弾んだ声を上げる彼女に私はどう返せばいいのか分からなかった。

「なんかね、コネとかいっぱいあるから、もし頑張ったら劇団とか映画監督とか紹介してくれるんだって」

「え？アイドルなのに、劇団なの？」

「要は東京とかのテレビとかに出れるかもしれないってことだよ」
机の上に置かれた携帯電話を私は再度覗き込んだ。

「もうコスチュームもあるの」

お揃いのミニスカートはどうみても、ドン・キホーテに売ってるそれだった。この町にドン・キホーテはないから隣の県に買いにいったのかもしれない。とても、芸能人やアイドルが着るようなきらびやかなものには見えなかった。

「危ない人とかじゃないの？」

純粹な親切心からでた言葉だった。彼女は一瞬不愉快そうな顔をしたが、すみ声ではなしを続けた。

「大丈夫だよ。音楽の非常勤してるらしいし、危ない人じゃないよ。」

自宅に防音室があつてレッスンしてくれるんだって」

「自宅？怖くないの？」

「お父さんもそう言って反対してるけど、危なくないし」

「でも」

テーブルがごとんと鳴った。みかちゃんがテーブルの足を蹴飛ばした音だった。

彼女の態度に、私は萎縮してしまふ。

「夢とかないから分かんないかもしれないけど、これすごいことなんだからね」

みかちゃんは苛つきながら、溶けたパフェをかき混ぜている。私は慌てて、「いいじゃんがんばってね」と、その場を取り繕った。

帰宅しても、家には誰も居なかった。郵便受けから郵便物を取り出し、ソファーに身体を投げ出す。家族が帰ってくる前に自分の部屋に引っ込んでしまいたいが、億劫でなかなか身体が動かない。みかちゃんの捨て台詞が相当堪えていた。小さいころの夢はスポーツで活躍することだったけど、その夢は妹に踏んづけられてしまった。退屈を持って余している私にはなんにもない。空っぽ。

親戚も、友達も、学校の先生も私が躓いたのを知っている。ここにいるのは恥ずかしくて辛い。でも、どこにもいけない。

ダイレクトメールに目を通していくと、ふと学校からの郵便物に気がついた。父親宛になっているが、構わず封を開ける。封書には授業料の督促の旨が記されていた。

「私の奨学金で払うんじゃないの？ どういうこと」

帰ってきた父親に手紙を見せると、人の郵便物を開けるとやんわりとたし

なめられた。

「そうじゃなくて、なんで払ってないの」

「仕方がないだろ、あいつが海外いったんだから。遠征費も必要だったし」

「使ったの？」

嫌がる両親から、ひったくるように通帳を取り上げた。二百円ほどの残高が残っているだけで、数カ月分の授業料は全く残っていなかった。

「どういうこと？」

「だってほら、あいつは日本の代表に選ばれたんだ。しゃあないだろ」

「見てよコレ、退学の可能性もあるって書いてある」

「仕方ないだろ。なんとかかなる。それにお前は学校行ってるだけだろ。妹は頑張ってるのに、協力できないのか」

父親の言葉に頭に血が上った。自分が蔑ろにされているのは気がついていて。でも、そうだとは思いたくなかった。思いたくなかったから、両親は気を使って干渉してこないのだと信じ込もうとしていた。

でも、それは嘘だ。もしかしたら、私は高校も出れないかもしれない。そうし

たら、どこにもいけずずっとここで働かなくちゃいけない。働いたお金はどうなる。自分の生活を守るだろうか。それともずっと妹に踏み台にされるのだろうか。

私はリビングを飛び出した。自分の部屋を通り過ぎ、妹の元へと向かう。「あんたのせいで！」私の剣幕に妹が飛び起きる。彼女が困惑しているのも構わず、私は妹に詰め寄った。「あんたが外国行ったお金、私が借りたお金だったんだって。授業料。どうしてくれるの？私、学校のお金なくなっちゃったんだけど。退学かもだって。ねえ！返してよ」

妹は子供みたくに鳴き声をあげた。思わず妹の頬を張る。一発、二発。後ろから髪を引っ張られ後ろへのけぞった。

「なにしてるんだ！」

顔を真っ赤にした父は謝るところか、私の髪を掴み部屋から引きずりだした。「しかたがないだろ、ないもんはないんだから」

私はようやくやくこの家での立ち位置を自覚することができた。このままだと私は家族のせいで駄目になる、呆然としたままふらふらと部屋にこもる。

ポストンバッグにありつただけの衣類を詰め込み、少し気分が落ち着いた。でも、どこにもいけなかった。時折母親や妹が部屋の外から私の名前を呼んだ。決してドアをあける気にはならなかった。

スポーツで負けたのは私が悪いし、海外遠征だっていけばいい。妹は何も知らなかった、私の借りたお金で海外にいったなんて知るなかった。彼女も被害者なのだ割り切ってしまうことが私にはできなかった。

このまま妹のことを嫌いになるのは嫌だった。家族のことも憎みたくなかった。こんな町にいるから、私の家にはお金がない。こんな場所にいるから、私は窮屈で空っぽ、新しい夢も見れない。

どうにもならないことに直面するたび、私はこの町のせいにする。この町にはなんにもない。洋服屋も、雑貨屋もなければ、明るい話題も仕事もない。お金がないのもみんなこの町のせい。この町で夢を見たり、何かを目指すことはたくさんのものを犠牲にする。きつとこの町にそんな贅沢なものは与えられていないのだ。私は早々に諦めたのに、なんで馬鹿にされたり割り食わなきゃいけないのだろう。

「夢ばっか見やがって」

部屋を出ていくこともできず、いつの間にか私は眠ってしまっていた。部屋の戸を叩く音に、私は顔を上げる。

「ねえ、みかちゃんのお母さんから電話があったの！」

ドアの外から母親の声がした。

「みかちゃん、あんたと遊んでくるって言って家を出て帰ってこないらしいけど……あんた、知らない？」

どきん、と私の心が傷んだ。部屋の時計は三時を回っていた。

あの男の家に行ったんだ。私は分かっていたけど、母親にそれをつたえようとは思わなかった。

「知らない！」

「そう……心配ねえ」

私の心がほんの少しほころんだ気がした。「犯されてればいい……！」小さな声でつぶやく。写真の男はあの町の化身だ。今度こそ彼女は舞台から引きずり降

ろされるだろう。夢なんか見れないくらい傷ついてしまえ。

「なんか言った?」「何も言っていない。連絡来たら教えてよ」

諦めと安心の中で、私は徐々にゆっくり眠ることができるよう。

その晩、みかちゃんのお母さんから連絡は来なかった。彼女は一週間学校を休み、何事もなかったかのように登校してきた。悲しい事件の噂が静かに漂っていた。

数カ月後、私はあの町を捨て一人逃げ出した。それっきり家族とは会っていない。

みかちゃんはまだあの町にいるだろう。時々、彼女がぐるりぐるりと踊っていたのを思い出す。

了

みずかがみ おり

水鏡の澱

加津也

少しずつ大きくなっていた救急車の音は、宮前通りの入り口で止まり、そこからは音を立てずに入ってきてデニーズの前で止まった。柚木に付き添って岸さんが乗った。岸さんが乗るのが順当だろうという雰囲気があった。柚木と岸さんが参加しない同窓会は居心地が悪いだろうと思ったが、柚木としてはその方が良いのかもしれないと思った。集まるのは柚木の父親の葬儀以来だからもう二年ぶりになる。一人一人とは何度も会っていたような気がするが、それがいつだったか何を話したのかははっきりとは覚えていなくて、昔のことを最近のように

思ってしまったているのかもしれない。いきものがかりのポスターの貼られたC D屋から出てきた客が目の中の救急車に目を瞬くのが見える。電車の発車のベルがいきものがかりの曲になったのを、耳の悪い父が音が高くて耳に響いてつらい、と話すのを聞いて家を出たのが二時過ぎ、バーベキューではゆっくり話せないだろうからと、女子ばかり八人が同窓会の前に集まっていた。トイレから戻ってきた柚木が隣に座って荒い息をして弱々しい声で、吐いちゃった、と言った。顔が白くなっていた。膝枕をして寝かせた。太ももに乗った頭の重さと体温を意識しながら、柚木の顔をのぞき込んだ。震える体から汗が吹き出していた。熱中症？という言葉が飛び交い、岸さんが店員に話して救急車を呼んだ。

千晴の七歳になる娘が目を見開いて、担架を持って入ってきた救急隊員を見つめていた。道行く人が、立ち止まりはせず、けれど目でごとかと見ているのがわかった。救急車、数年前に乗ったときは図書館の下で夜だった、最終のバスはもう出ていたはずだけれどバスターミナルはまだ人がいて、担架に乗ってエレベーターを下りながら、周囲の人間の気配と視線を意識していたことを思い出していた。

救急車はなかなか出発しなかった。

空いた柚木の席に千晴が娘を連れて移った。外は炎天下だったが、千晴の体からあのおいはいはしない。中学生の千晴の周りにあったにおいについて口にしたことも誰かが話すのを聞いたこともなかった。図書館の地下に漂う浮浪者のにおいとも違うその正体に、家を出てはじめての冬、まだ着られるだろうと置いておいたニットのセーターをかぶった時に気がついた。制服のブレザー下に見えていた、しわの寄ったブラウスを思い出した。隣に座った千晴は髪を栗色に染めていて、淡い色のワンピースの上に、薄いカーディガンを羽織っていた。

いつまでも出発しない救急車を見つめることに飽きた葉奈ちゃんが折り紙を折るのを、みんなで褒めた。できた赤いハートを差し出されて受け取るとサイレンが鳴り始めた。一瞬みんなでそちらを見送って、熱中症じゃないよね、意識しっかりしてたから大丈夫だと思っけど、貧血じゃないかな、と口々に心配を口にして、熱中症だったら命を落とすこともなくはないのかと今更のように気がついた。

「ねえ、ちゃんと見てて」と葉奈ちゃんが言うのでその手元で出来上がっていく

花のような形を褒める。一ノ瀬さんがわざとらしきのない明るい声ですごいねえ何の花？と聞くのに機嫌をよくしているので相手を一ノ瀬さんに任せて、もう一つのテーブルに近づく。

鈴木さんが幹事の連絡先を知っているというので、二人減る、一人戻るかもしれないと送ってもらった。席に戻ろうと立ち上ると、どこか悪かったの？と鈴木さんがこちらを見上げる。貧血だと思う、と答えながら、柚木と岸さんが参加しないのは痛い、それでも千晴がいるし、新田も来るから大丈夫だろうという算段をしていた。

柚木の頼んだミニパルフェは半分ほど残っていた。

デニーズに入るなり、また痩せた？と聞かれて増えたと答えた。顔を合わせるタイプの話になるのはそれしか話せることがないからだと思った。柚木は痩せたように見えたが、心配で口にする言葉で喜ばれるのも癪だと思い、食べてると尋ねた。

「カロリーはとってる」と答える柚木にもっと食べと苦笑する。やだ、と柚木は笑う。電話で何度も聞いたように、もっと痩せたい、と口にする。「胸も、お腹

も、ぺたんこになって、板みたいになりたい」

料理はしないと書いていた。四人家族の家事のすべてを、仕事をしている母親がやっていると話した。今なにやってるの、と聞かなかつたのは、柚木に対する気遣いではなく、その答えに自分が苛立ってしまうと思ったからだ。昼夜、自室でパソコンに向き合い、風呂場での体重計の目盛り一つが自分自身の評価だというように母の作る食べ物のカロリーを計算する柚木の姿が見えるようだった。

柚木の父親の葬儀から、二年が経っていた。あの頃はまだ働いていたはずだった。

千晴と岸さんは通夜で会ったときと何も変わっていないように見えた。変わっていたのは千晴の娘が大きくなっていったことで、もちろん通夜に連れてきてはいなかったから、葉奈ちゃんと会うのは六年ぶりになる。通夜の席で来年は小学生だと話していた葉奈ちゃんは今もう二年生になっていた。

新田は通夜には来なかった。子供が熱を出したとかそんな理由だったように思う。

死んだ柚木の父親は、まだ五十前で、癌だった。実家に寄って喪服を着て岸さんの母親の運転する車で向かった。柚木の家は、中学の頃一度だけ遊びに行った小学校裏の一軒家ではなく、隣の市の団地に移っていて、団地の中の集会場が葬儀場になっていた。柚木の二人の弟を見るのはこれが初めてだった。高校の制服を着た長男と、まだ小学生の次男。長男は、写真の中の父親によく似ていた。

こんな席であれだけど、と言いながら、お清めの席で千晴の結婚を祝った。「お前ほんと幸せになれよ」と、柚木と千晴と同じ高校に通っていた二宮が言った。「男教えるぶん殴ってやるって言ったんだけどね」と二宮は笑う。葉奈ちゃんのお父さんが誰なのか、誰も聞かされていなかった。心当たりぐらいはあるのか本当に知らないのか、二宮も柚木もわからないと言った。

大学の入試が終わった頃、駅前のベローチエにいつもの面子が集まった。千晴の膝に抱かれた女の子を見て、あ、と思ったが、浮かんと言葉を飲み込んで、妹？と聞いた。中退した頃に弟が生まれたという話を聞いていた。

「娘です」千晴が笑う。

「妹連れてくるわけじゃないじゃん」と柚木が笑った。

そりゃそうだけど、と言いながら、千晴と娘を見比べる。「いきなり聞けないじゃん」子供は、静かに緊張している様子で千晴の膝に座っていた。「まあ、こんだけ似てればねえ」と岸さんが千晴を見る。隣に座る新田が同意するように頷くのを見て、自分だけが知らなかったのだと、そのとき気づいた。

席に着き、コーヒーにミルクを入れながらおそろのおそろ尋ねた「父親は？」という問いに千晴は笑って「内緒」と言い、「私も二宮も知らないんだよ」と柚木が言った。じゃあシングル、と言うと千晴は子供の頃から変わらない笑顔のような地顔で頷いた。

はじめまして、と声をかけた。栞奈ちゃんは、上目遣いにこちらを見るとすぐに視線を外して、母親の胸に顔を埋めようと身体をくねらせた。「かんな、挨拶は？」千晴が、小さな背中に手を回して言う。子供はいやいやをするように首をふり、あうア、と声を上げる。嫌われたねえ、と柚木が笑った。

その頃から面影はあったが、六年ぶりに見た栞奈ちゃんはますます千晴に似ていた。二手に分かれて席につくなり「母親似でよかったよね」と、頭に浮かんで口にするのをやめた言葉を岸さんの口から聞かされた。

二宮は来ていなかった。メールは送ったが返信がなかったと千晴が言った。

同窓会の知らせを送ってきたのは新田だった。携帯に表示された新田の名前を見ると小田急線を思い出した。新宿駅のホームで、折り返しの電車が来るのを待ちながら、結婚したことを知らせる新田のメールを見ていた。そのメールと、伯母の死を伝えるメールのどちらが先に来たものだったか、どうしても思い出せなかった。結婚して浅野になりましたというメールを読んで、おめでどう、と送ろうとした。おめでどう、の後に、新田がこんなに早く結婚するとは思っていなかったなんて大学辞めたの、というような文を続けて打ち込み、全文消して携帯を閉じた。折り返し電車が入ってくるのを見ていた。目の前にある車止めと電車との間隔が少しずつ狭くなっていき、僅かな隙間を残して電車が止まったところで、もうその隙間には入れない、という考えが浮かんで、それと意識せずに飛び込むことを想像していたことに気づいた。列の先頭に立っていた。降車ホームの扉に続いて、目の前の扉が開いたので、決まった作業を行うように足を持ち上げて電車に乗り込み、一番近くの座席に腰を下ろして、鞆にしまった携帯をまた取り出し、メールの受信箱を開いた。新田の名前がある。メールを開こうとし

た。開けなかった。開けないというイメージを行動でなぞっているだけのよう
 と思った。ショックを受けているように振る舞っているだけではないのかと考
 える自分がいた。吐きそうだと思っただが本当に吐き気があるわけではなかつた。

その芝居じみた感情は、叔母のときとはあまりにも対照的だった。メールを送
 ってきたのは母だった。おばさんが死にました、という簡潔なショートメールで、
 それを開いた新宿駅のホームで、こみ上げてきた笑いをこらえるために思わず
 口元を押しえたのは、芝居じみた感情の入り込む余地のない、全く自発的な動き
 だった。腹から立ち上ってくる笑いを必死で飲み下して、改めてメールを見直し
 てから、母が祖父母の兄妹もおじさんおばさんと呼ぶ人だったことを思い出し、
 「どのおばさん？」と送った。他の「おばさん」であれば必ずその言葉を添える
 だろうからおそらく父の妹にあたる叔母だろうと思っただが、おばさん、と言
 葉だけで真っ先に叔母だと考えた自分を、薄情だと思っただ。返事はななか来な
 かった。駅から駐輪場まで歩いている途中に、携帯が震えた。「紀子おばさん、
 自殺です」という文を見て、ああやっぱり、と思っただ。最初のメールに死因
 は書いていなかったのに、やっぱり、と思っただのは、叔母がそういう人だったか

らではなくて、その半年前に自分が死に損なっていたからだだった。

その出来事とほぼ同時期の新田のメールにショックを受けていたというのが、薄情を通り越して滑稽に思えた。母に「どのおばさん？」と送るのは造作なかったのに、新田におめでとうを送ることは結局その週末になるまでできなかった。電車が発券するまで、ミクシイを開いていた。柚木と岸さんがマイミクにいるから、反応がないだろうかと二人のページに飛んだ。何もなかった。なんかすごいメール来た、と書き込んで、携帯を閉じた。誰かと話したかった。新田ではなく、柚木か岸さん。メールにあったのは入籍の日にとちと苗字だけで、相手の名前も書いていなかった。何か詳しいことを知っているなら教えて欲しかった。

新田からのメールはその後も何度かあった。中学の仲間が集まろうという連絡、同窓会の連絡はだいたい新田からだだった。それらを見るたび、小田急線のホームで車止めと電車の隙間を見つめていた瞬間と、こみ上げてくる笑いをこらえるために口を押さえたことの両方を思い出した。小田急線を利用しなくなつてからもそれは変わらなかった。

新田から最後に連絡があったのは、メールではなく年賀状だった。出産や引つ

越しなどの報告がある年にだけ送られてくる新田の年賀状には、今年は苗字が変わったことと二人目が生まれたことが書いてあった。苗字が変わった、ということの意味がわからなかった。書いてあることをそのまま受け取るのなら、離婚して再婚したと考えるのが自然なのに、そんなはずはない、という意識がはつきりであった。メールには、幹事の名前と同窓会の日時が書いてあるだけで、再婚や二人目の子供のことは書かれていなかった。

柚木から、二人が行くなら行く、という連絡があつて、こちらも柚木と岸さんが行くなら行く、と答えた。年賀状のことを尋ねると、別れて再婚したんでしょ、と当然のように返された。

会って話を聞きたいと思ひながら、会っても何も聞けないだろうという予感があつた。

一ノ瀬さんとドリンクバーから戻ってきた栞奈ちゃんが、コーラにしては色の薄いグラスを、オリジナルと言つて千晴の前に差し出すのを、なに混ぜたの、と苦笑しながら千晴が受け取る。「当ててみて」と栞奈ちゃんが笑う。変なのは

入れてなかったから、と一ノ瀬さんが笑いながら言うのを加勢と受け取ったのか、「ほら、飲んで！」と声を強める。

「葉奈、ちゃんと全部飲みなさいよ」と言いながら、一口飲んでやる千晴を見て、思わず母親だねえ、と呟いた。あ、意外と美味しい、と言う千晴の言葉に、葉奈ちゃんが「でしょお？」と得意そうに言うのがおかしくて、一ノ瀬さんと笑った。

中学の卒業式以来の再会だった一ノ瀬さんは、帝国ホテルで働いていた。こちらがバイトで教材を作っていると話すと、一ノ瀬さんは「勉強できたもんねえ」と懐かしそうな顔をして言う。とっさに中学まではね、という言葉が出た。「大行っていないしフリーターだし」と言うのに、「それでもすごいよ相州だし」と嫌味のない口調で返されて、そっちは大変なお客さんとかいないの？と尋ねた。一ノ瀬さんは、そんなにいないけど言葉通じないとつらい、と笑う。

「英語通じないアジアのお客さん多いから、何語覚えればいいのかもわかんない」

花を折り終えた葉奈ちゃんが、「アジア語は？」と言うのに、大人たちは笑い出した。葉奈ちゃんも笑った。

相州、という言葉をもう何年も聞いていなかった。三流大学を中退した身には落ちこぼれた証拠にしかならないその高校名は、東京に出てしまえば何の意味も持たなかった。一ノ瀬さんの言葉には、もちろんお世辞があっただろうが、地元に残るなら大学名よりも高校名、相模野出の早稲田と相州出の明治なら、明治の方が評価されるという程度には、ここは田舎で僻地だった。高校に入るなりついていけなくなる程度の自分が勉強ができたと言うなら、柚木だってそうだった。この辺りの高校のレベルは相州、相模野と続いて、東、西、南、北の順だから、柚木が南を受けるのに、担任も不可解そうな顔をした。

「坂上るのが嫌だから」と柚木は言った。相州は丘の頂上、東はそこからさらに先、西は丹沢山麓の麓、相模野は相模川の向こうの海老名市にあった。

高校に入ったばかりの頃、薬剤師になりたいと口にしていた柚木は短大に進んで、それから地元の小企業事務職に就いた。父親の癌がわかったのは就活が始まる前で、それがなければどこかに編入していたのかもしれない。

就職活動中の柚木と、よく会った。大学を辞めてバイトを辞めて、家でひたすら腐っていた自分は、高校の同級生との連絡を断って、柚木とばかりつるんでい

た。

「働きたくないよお」と柚木は言った。大学行きたいけど奨学金はプレッシャーだからやだと言うのを、煙草を啜えて聞きながら、ふと気になって「なんで相州来なかったの」と聞いた。

「坂が嫌だとか言ってたけど、親になんか言われなかった？」

柚木は、少し考え込むような顔をして、言われたけど、と言う。柚木の成績がよいことは、母親なら知っていただろうし、三者面談でも何か言われたはずだった。相州だと受験勉強しなきゃじゃん、と笑って言いながら、それにさ、と少し声のトーンを落とした。「落ちないでねって言われたし」

柚木の顔を見た。落ちないでね。柚木は、塾には行かなかった。相州は安全圏だったと思うが、余裕というほどの順位でもなかった。

柚木と親しくしていた同級生の顔を思い浮かべる。仲の良い同級生のうち、成績のいいものは相州か私立、東に行ったのは新田一人で、あとは南か商業だった。友達と一緒にないと部活にも入らない柚木が、親しい友人のいないほどほどの高校よりも、友人のいる南を受けることは十分にあり得た。親の言葉に対するあ

てつけもあつたのかもしれない。

「実際、落ちてでも私立行くお金ないし」と言つて、柚木は自嘲するように笑つた。柚木が併願校を一つも受けなかつたことは覚えてゐる。公立の合格発表の日も、柚木は全然喜んでなかつたと、一人泣き出しそうな勢いで喜んでいたという千晴が話していた。

併願校を受けるとき、受験料を父親に無心するとき、嫌な顔をされたのを思い出す。柚木の父親は嫌な顔こそしなかつただろうが、歴然とある貧しさに、柚木が不満を感じていたことに気づいたのは、高校を出た後だった。

集合時間が近づいてきて、車で海老名に渡る度に父が「昔はこっちが中心街だった」と話す通りを、相模川まで歩いた。葉奈ちゃんのはしゃいで駆け出すのを千晴が追いかけて、危ないからと叱る様子を見て、十七で葉奈ちゃんを生んだ千晴が娘にひどく当たるようなことはないのだろうと思う。顔のつくりは母親似だが、体つきは、小柄で細身の千晴とは対照的に大きく、幼い頃から大柄だった、千晴の年子の妹を思わせた。Tシャツとショートパンツから伸びる手足は日焼

けしていて、そこに傷も痣もないことを確認している自分の目線の気持ち悪さを感じていた。千晴の旦那に会ったことはなかった。障害者みたいな男だったと言ったのは、去年、千晴家族と鮎まつりに行った柚木で、栞奈ちゃんが挨拶もお礼も言わなかったことに「ああいうの、教えてないのかな」とこぼした。一年前、盆に帰省したときに柚木と岸さんと相模川で酒を飲んだ。三人で集まりながら、それぞれの立場が、家を出る前と変わってしまったことを感じていた。岸さんが大学を出て就職した。自分は家を出て自活している。柚木は父親が死んでからしばらくして、仕事に行けなくなっていた。

夏の日差しが頭上から照りつけて、人通りの少ないシャッター街を歩く集団の足元に色の濃い背の低い影を作っていた。先々週にあった鮎まつりのポスターが、台風でやられたのか、シャッターに貼り付いたまま水に濡れて溶けたように破れている。

「鮎まつり行った？」横を歩く千晴を見ると、「お父さんにプリキュアの買ってもらった！」と栞奈ちゃんが言う。「綿菓子。まだ袋を飾ってるの」と千晴が笑

う。「花火よりも袋の絵ばっかり見て」「花火も見てたよオ」と栞奈ちゃんが口を尖らす。その跳ねる影を見ながら、自分にも千晴にも、両親と祭りに行くという記憶などなかったと気づく。栞奈ちゃんの汗ばんだ身体からは、夏の埃っぽさの子供の汗の甘酸いにおいしかしなかったから、千晴は自分が育てられた環境とは違う形で娘を育てているのだろうと思った。弟妹の多い家だった。中学二年のときに引越しをして、家族全員で公営住宅に移っていた。小学校の目の前であった一軒家は空き家になり、中学の帰りに回り道をしてその暗い家をときどき眺めていたが、今、あの家がどうなっているのかは知らない。当時はただ、中学校に近くなるのかとしか思わなかったが、今ならそれが、柚木の家族が家を手放したのと同じような理由だったのだろうと想像がつく。どうして引越すことになったのか、いまさら十年も前のことを聞けるわけもない。

今はもう、すぐ下の妹も、その下の弟も働いているはずだから、あの公営住宅に住んでいる人数は、それほど多くはないのかもしれない。栞奈ちゃんの下に子供はいないから、千晴たちは三人で暮らしているはずだった。柚木の父親の通夜で「二人目産みたいんだけどね、なかなかね」と口にしていた千晴が、新田の年

賀状で何を思ったのかと想像してみるが、もし自分ならという感情を当てはめるには、千晴と自分は違いすぎるのかもしれないと感じていた。

「去年は柚木と二宮も一緒だったんだっけ？」と、探りを入れるような聞き方だと思いつながら尋ねた。「去年、盆に帰ったときに柚木に聞いて」

岸さんも一緒だった、とは言わなかった。帰省したとき、千晴は呼びたくないと言ったのは柚木だった。「最初はさあ、四人で集まろうって言ってたんだよ。

なのに、仕事終わったからって旦那も来て」靴の裏にあたる川砂利のごろごろした感触を意識しながら、岸さんが、旦那と柚木じゃ接点ないもんねと言うのを聞いていた。

ペローチェもサイズでもマックも並んでいて、高いところは嫌だと柚木が言ったので、じゃあ外でいいじゃんと言ってスーパアの地下で酒を買った。相模川に行きたいと言うと、二人とも面倒くさそうな顔をしたが、喋りながら歩いているうちに着いた。砂利に足を取られて転びそうになりながら川に近づいた。落ちないでよ、と言う岸さんの声が、本気で心配しているように聞こえて、「暗くて怖い」と笑って足を止めた。そこで酒を開けた。川岸の風は涼しかったのに、酒で

火照った身体に汗が滲んだ。柚木は白い顔のまま、饒舌になった。

「二人が来てくれればよかったのに」川面に指先を浸していた柚木が顔を上げて言った。

「ごめんて」バイトが忙しくて、と言いかけてやめた。柚木が仕事を辞めて一年が経っていた。さすがに八月に二回こっち来るのはきついと苦笑すると、「戻ってくれば？」と言う。できるわけないじゃん、とは答えずに、指に挟んでいたたばこを啜え直して笑った。吸い込むと酒が回り、視界が揺れた。

「岸さん夏休みなのに」と口を尖らせる柚木に、音大を卒業して幼稚園で働いていた岸さんは「夏は夏で忙しいの」と素っ気なく答えた。

「柚木こそ東京出てくれれば？」

ふらつく足をごまかすためにしゃがみ込み、同じ目線で柚木を見つめる。柚木は水に濡れた手を振りながら立ち上がり、「お金ない」と言う。働けば、とは言わなかった。柚木から見えるかわからない苦笑いを浮かべながら、ほとんど燃え尽きていた煙草を石の間でもみ消した。

三人で缶チューハイを五本開けて、電車で伊勢原に向かう柚木と別れ、岸さん

とバスターミナルに向かった。あのとき担架で運ばれながら乗り込んで、思っていた以上に広いことに驚いたエレベーターの、目の前にある停留所が、岸さんの家を経由して、実家の最寄りを通る路線だった。夏休みも忙しいのかと尋ねると、軽く肩をすくめるような動作をして、ほんとはデートだった、と言う。なんだよ、と苦笑したが、意外ともひどいとも感じてはいなかった。

「向こうは土日しか休みないしき」と悪びれる様子もなく言う岸さんに、昔なら反発を感じたかもしれないが、今は、男を優先するのもわかるし、嘘をつく方が優しいのもわかる。

合コンで知り合った、四つ上の男性だと聞いていた。結婚はしたいがその男との結婚はない、という岸さんの言葉を不思議な気持ちで聞いていたのは数年前のことだから、相手は変わっているのかもしれないなかった。別れるのを前提で付き合えるのかという質問を、もう何年もできずにいる。

ベンチに腰を下ろして、それにき、と岸さんが口を開く。

「デートなくても二宮さんいたし」

その言葉に思わず笑って、気持ちはわかると言った。

「それホント意外だったんだけど」と岸さんがこちらを見上げる。

「嫌いな子とかいらないと思ってた」と言われて、柚木や千晴にも同じことを言われたのを思い出す。どんだけ八方美人だったんだ、と中学時代の自分を思い出して笑った。

中学を出てから、集まるメンバーがこの五人で固定になったのは、岸さんの「二宮さん呼ぶなら行かない」という言葉がきっかけだったが、それに賛同するようなことを言って、柚木たちに驚かれたのを覚えている。だがそれは、八方美人というのではなく、そういう感情の鈍麻した、へらへら笑っているだけの白痴だと思われる。嫌なことはあつたはずだし、嫌いな人間もいたはずだが、中学時代を思い出すと、家のことばかりが記憶に残っている。学校でへらへら笑っていたのは、不快を不快と感じられないほどに何かが欠落していたせいかもしれないと思う。会いたくない、という感情が、嫌いといコールなのかもわからない程度に、感情は、混濁していた。

「中学の卒アルの寄せ書き、誰にも書かせなかったんだよ」唐突に思い出して言った。岸さんが、え、という顔をして、書かなかつたじゃなくて？と聞き返すの

に、「書いてもらわなかった」と念を押すように答えた。卒業式の後で集まった、北棟一階のカウンセリングルーム、カウンセリングとは名ばかりの、帰宅部や活動のゆるい文化部のたまり場になっていた空き教室で、赤や青や緑のペンをテーブルの上に出してアルバムを回した。その中で、「白紙のままに残したいから」と言って、ケースからアルバムを出さなかった。「なんでよ書かせてよ」と二宮がアルバムを奪い取ろうとするのを、尻の下に敷いて拒んだ。二宮は諦めて、他の人のアルバムに寄せ書きをしてみた。見開きページを横切って線を引き、絵を描くのを、柚木が苦笑しながら「二宮、ちよつとそれやめて」と言うのを、多分本気で嫌がっていると思いついて見ている。

ターミナルに入ってくるバスの表示が七沢でないのを確かめて、岸さんの隣に座り「あれ、二宮に書かれるのが嫌で全部拒否ってたからね」と言った。こっわ、と岸さんが笑った。

「二宮だけ拒否るわけにいかないし」

「徹底してるなあ」という言葉に、バカなだけだと笑って返した。

だから卒業は嬉しかった。嬉しさしかなかった。二宮だけではなく、他の色々

な繋がりが切れることに期待しか感じていなかった。自分の通った小学校からは全員が持ち上がりで、別の小学校の半分が同じ中学に流れた。中学で知り合った友達はいたが、このカウンセリングルームに集まっていたのはほとんどが同じ小学校の人間だった。それが、今日で終わる。

あの頃は、終わることすべてが嬉しかったと、やって来るバスの行き先表示を見つめながら思う。学校生活が終わることも、これまでの繋がりが終わることも。降りる人もいないのに、唐突にエレベーターが開いて、思わずそちらを見た。「ほら、乗らないんだから」と言っただけで子供の手を引く母親を見て、子供が勝手に押したのか、と気づく。心臓が、妙な音を立てているのが自分でもおかしかった。終わればいいと思っていた十代の自分が、そこに立っているような気がした。

もう一年前かあと、タオルで汗を拭いながら千晴が言った。

「そう、二宮さんも一緒だった。旦那呼んだら、二人がすごい機嫌悪くなっちゃって」

そうなんだ？と初めて聞いたような声で答えた。不機嫌になった二宮の相手

を自分がずっとしていた、と柚木は言った。千晴が旦那とずっと喋ってるから自分が相手しなきゃいけないくて、とこぼしていた柚木はおそらく、千晴にその不機嫌を見抜かれていたことに気づいていない。

「二人とも難しいところあるからなあ」と笑う自分の言葉に、鳥と動物の間を行ったり来たりするコウモリの童話を思い出す。千晴は、悪かったとは思うけどと苦笑して、「二宮さん、何してるんだろ」と首をかしげた。「去年の鮎まつり以来会ってないんだよ。秋ぐらいに、遊ぼうってメールしてたけどそれっきり」

柚木も鮎まつり以来会っていないと言っていた。何をしているのか興味はあったが、それが悪趣味な好奇心から来ているものだという自覚があった。

鞆の中で携帯が震えた。千晴が同時に携帯を取り出した。岸さんからだった。メールには、西湘病院に搬送されたこと、柚木の親に連絡をしたこと、同窓会には行けたら行くということが書かれていた。

「西湘って、吾妻川のとこのだっけ」携帯を見ながら尋ねると、千晴は「そう、新しくできたところ」と頷いた。

家を出た頃、まだそこは工事が始まったばかりだった。深夜過ぎ、広い更地の

端に避けられていた瓦礫の山に、両手を使ってよじ登り、ここがファミレス、あつちがクルマ屋と、暗闇を指さしてかつての景色を頭でなぞっていた。向こうがホテル、と指を差しながら、そこで二宮を見たと思い出していたことを、妙にはつきりと覚えていた。

通夜で会った二宮は、文化祭以来と言って抱きついてきたが、高校二年の文化祭の後にも一度、一方的に二宮を見ていた。

駅から離れた国道沿いの歩道を、制服姿の二宮が歩いていた。ファミレスとホテルの並ぶ通りを、スーツを着たサラリーマン風の男と歩く二宮を見て、真つ先にホテルと結びつけたのは、駅から離れたその道が、ただ歩くには不自然な場所だったからだ。

それを、自転車の速度を落としながら向かいの歩道から見ていた。

同年代とは言いがたい男の横で不機嫌さを隠そうともしないその表情は、同じ学校に通っていた頃の二宮を思い出させた。その話を、通夜で会った二宮にはしなかった。

通夜の後、片付けの始まった集会場を出て、団地の中の小さな公園でそれぞれ

の迎えが来るのを待った。身長ほどの高さしかない滑り台の柱に寄りかかって煙草に火をつける二宮に、親が迎えに来るのかと聞くと、親ではなく男だと言う。「今ほとんど家帰ってなくて、喪服取りにすごい久しぶりに帰った」と二宮は笑った。その笑い方が、中学の頃と何も変わっていないなかった。親反対しなものと尋ねる岸さんの言葉に、二宮は過保護すぎるといふように笑い、「言われても聞く必要なくない？」と言って、わざと悪ぶって見せているような大きな仕草で、煙草の煙を吐き出す。

「結婚とかは考えてないの」と聞いた千晴は、男のことを知っていたのかまったく驚いていなかった。

「ないない、付き合うとか絶対ムリだし」と二宮が言う。

あの国道沿いの光景を思い出しながら、彼氏じゃないのかと尋ねた。二宮は肩をすくめて、「相手四十よ？」と、嘲るような笑いをつくる。バカにされているのが男なのか自分なのか、その両方かもしれないと思いつつ、自分も煙草を取り出した。

「泊まっていいって言うから試しについてったんだけど、金あるし、気イ弱いか

ら殴んないし」

へえ、と言いなながら火をつけた。笑って聞き流すしかなかった。真剣に聞き返すのも、引いた顔をするのも二宮の期待を汲むようで嫌だったがそれは自分自身の底の浅さを二宮に投影しているせいかもしれないとも感じていた。こちらがそう思いながら必死に聞き流していることも気づかれていたような気がする。バスターミナルでの一件も伯母の死も、二宮には言っていなかった。言いたくなかった。二宮に同情されるのも二宮の中で納得するような形で収められるのも耐えられないだろうと思う。二宮と向き合っているだけであの出来事がより醜いものになる。いや、もともと醜かったものが言い訳のできない醜さになる。二宮に映る自分の姿は、底の浅い、キチガイぶって同情を買う、白痴面の下に隠れていた醜い無様な本性だった。

「どこで知り合うのそういう人」岸さんが、携帯から顔を上げて尋ねる。ネットに決まってんじゃないん、と見下したような口調で二宮が言う。

「出会い系ですつと彼女募集してんのに、全然なんだから」

でも今だってやることはやってんじゃないのと思いなながら、月を見上げて煙

を吐き出す。

「四十でデブで彼女探しで出会い系やってるってもうねえ」

そこに転がり込む二宮も大概じゃん、と笑いながら返そうかと考えてやめた。不愉快な顔をされるかもしれないと思ったのと、千晴と旦那が知り合ったのも、出会い系だったのを思い出したからだ。ぎりぎり三十代だったはずだが、二宮はそれをわかって言っているのだろうか。

高校の頃、二宮が売りをしているらしい、という話をしたのは柚木だった。知り合いがそういうことをしているという話に驚きはしたが、それが二宮以外の女子であればもつと驚いただろうという程度には違和感を覚えずに聞いていた。同級生の父親の通夜の後でこんな話をしている自分たちを、不謹慎だとも感じないまま、電柱の灯りに照らし出される同級生を見回して、この中でただ一人自分だけが男を知らないのだと思った。集まれば、柚木と自分にだけ昔の男の話がなかった。二宮と千晴と一緒にいるのに何も無いというのを不思議に感じていたが、自分が柚木の立場でも何も起こらないだろうと想像できる。家から出なければ死ぬと思ったが男の家に転がり込むということは自分のできる範囲のこ

とを越えているという感覚があった。それを軽蔑していたというのではなく、そうまでして生きるということに執着していかないだけだったかもしれない。けれど別に、生きるために転がり込むというわけでもないのだろうと、煙の向こうの二宮を見ながら思う。

「いい部屋住んでるし、お金有り余ってるみたいだし、むしろ有効活用っていか」と、二宮が自分の言い草がひどすぎておかしい、というように笑う。岸さんが呆れた様子を隠しもせずには笑っているのに、二宮が気づいていないわけではないだろうと思う。千晴は困ったような顔で笑っていたが、笑っているような地顔のせいでもう見えたただけかもしれない。そういう言い方やめなよ、とは誰も言わなかった。機嫌を損ねるか増長するかのどちらかになるのが目に見える。そういう言い方やめなよ、かつてそう言った岸さんは、二宮の話に付き合いきれないと思ったのか遠慮する素振りもなく携帯電話をいじっている。窘められたということは心配されていたということだろうと思いつつ、自分と二宮のどこも違っていないのに、という気がしてくる。

病院にいた一週間のうち三日だけいた部屋では夜中に運び込まれてきた人がベッドから立ち上がるのを看護師が押さえる様子がカーテン越しに見えた。ほんと色んなもの見えて勉強になったわ、と笑って話すのを岸さんが窘めた。そういうの、楽しそうに言うのやめなよ。

言わずにいられなかったのか、言うことで構ってもらおうとしていたのかはわからなかったが、見聞きしたものを持て余していたのは確かだった。

病室を移る日に入ってきたのは身体の大きい老齢の女性で、ムチ打ちの人がつける首用のギブスをはめて、起こしたベッドによりかかり、こちらに顔を向けていた。どちらからともなく挨拶をした。入院の理由を聞かれて熱中症みたいでと答えてから、それが礼儀のように感じて聞き返した。事故ですか。ええ、東名で。娘一家と事故にあったんですが、別々の病院に運ばれたみたいで。あ、と口を開きかけて、閉じた。

夜半、ラジオで聞いていた、東名高速の玉突き事故、けが人が十数人と報じられたニュースの中で、一家四人の乗ったワゴン車が巻き込まれていたと聞いた覚えがあった。

娘夫婦は無事だったんですがね、と女性は言った。続く言葉とラジオがかぶる。

「孫がね」

死者一人。

「生まれたばかりの孫がね」

乳児、ひとり。

次の言葉が見つけられず、黙っていると、女性が言葉を続けた。二月に生まれ
たんですよ、半年も、生きられなかった。

二月生まれ。自分と同じ月に生まれていた、死んでしまった赤ん坊、頭に浮かぶ
お悔やみの言葉はどれも形式じみていて滑稽に思えて、ただ、黙って女性を見
つめていた。傷が痛むのか大きな身体のせいなのか、女性はふう、ふう、と身体
で息をして、静かに、痛みを湛えた無表情で、動かしやうのない首から見えるも
のを目に映している。泣き叫びも嘆きもせず、孫への贖罪を延々口にするわけ
もなく、ただ、首を固定する器具によって向けられた方向を見つめながら、孫が
死んだということを、繰り返して、思い出し続けている。その向かいで、生かすた
めの機器に繋がれている自分の身体は、とても、醜い。

その話を、自分の身体の醜悪さを、持て余した挙句に笑い飛ばすしかなかったと言いつてもできる。だが持て余すということが底の浅きなのかもしれない。二宮の姿はそのときの自分と同じように見えた。きつと、もともと似ていた、だから拒絶しきれなかった、自分の底の浅さを二宮を通して何度も見せられていた。それを拒絶しないことで、自分の醜さも受け入れられるかもしれないという期待を抱いていたのかもしれない、でもそんな話ではなくただ単に白痴じみた子供だったから拒絶できなかっただけかもしれない。二宮はそういう人間を見つけて取り入るのが上手かった。そんな二宮だから、きつと男は切れないだろうと、まだどちらか男を知らないうちから感じていたような気がする。二宮は女になった。高校、もしかしたら知らなかっただけで中学の間にもあったのかもしれないがいずれにしても、小学校の頃じゃあっていた細い手足の男を知らない娘の身体はもうないのだと思う。自分ひとり変わっていないような気がした。自分の触り方だけを覚えた身体が、あの頃と同じ体軀のまま、グズグズと腐り続けているような気がする。四十八キロの体重は、ちょうど中学二年の頃と同じ重さだった。

親来た、と岸さんが携帯から顔を上げて言った。

日差しが川面に当たって跳ね返っていた。並べられたバーベキューのセットの近くに新田を見つけて、千晴と一緒に駆け寄った。新田はこちらに気づくと手を振って、それから川辺に向かって「慎治」と声をかけた。

川べりにしゃがみこんで、石を拾っていたらしい幼子が、振り返って立ち上がった。「おいで、あんまり遠く行かないで」と言って手招きする新田に「上の子？」と聞く。新田の子供を見るのは初めてだった。

「今は高幡だっけ」と年賀状に書いてあった苗字を尋ねる。浅野から高幡になりました、と書いてあった。浅野から新田、新田から高幡。最初の結婚を入れて三度変わっていた。

下の子供は今の旦那の子供なのかという質問は、慎治くんが来たのでやめた。三歳になる息子に新田の面影はなかった。

あの日、カーテンの向こうで、「かえる、いえかえるう」と言って立ち上がる

女性を看護師が止める様子が影となって天井に映るのを見ながら、新田に謝らなければと考えていた。紹介してもらったバイトをバックレた。その日はバイトが入っていた。体調不良のため休みます、申し訳ありません、というメールだけは打っていたけれどその翌日もシフトが入っていたはずだから、無断欠勤になつてしまう、もう行けないだろうと思った。バイト先よりも新田に申し訳ないと、合わせる顔がないと、そのことが、後遺症が残るかもしれないという医者言葉よりも気になっていった。バイト先には親が菓子折りを持って謝りに行っていたとあとから聞いた。辞めてしまったバイトの尻拭いを親にさせた自分のみつもなさに笑いが出た。

そのバイトを紹介してくれたのは新田だった。土日だけの、飲食店のバイトがある、というメールが来たのは大学に入ってすぐのことで、ちょうどバイトの面接に落ちたばかりだったから、やる、と返信した。絵文字付きで「やらせてください」と送り返す自分が、尻尾を振る犬のようだと感じた。

真面目でおとなしい、そこそこ勉強のできる女の子、という印象しかなかった新田の印象が壊れたのは、中学の合唱部で彼女の歌を聞いてからだ。多少は

うまいと思っていた自分のプライドが折れるのがわかった。愛着と嫉妬と羨望の入り混じった執着は、中学の三年間、ずっとつきまどっていたが、二人きりで親しくすることはほとんどなかった。こちらばかりが新田を意識している、という自覚があった。

退院してからしばらくして、集まろうという連絡が柚木からあった。電話口で大学を辞めたと話したら、なんでみんな辞めてるの、と驚かれた。みんな？と聞き返した。

「新田も辞めてる。六月ごろだったかな。ほら一度岸さんから、集まろうって連絡きたじゃん、そのとき新田にも送ったんだよ、そしたらバイト忙しいって。バイトばっかで勉強大丈夫なのって岸さんが送ったら、辞めたって。聞いてない？」
自分と入れ替わるようにして、新田はバイトを辞めていた。大学のサークルが忙しくなりそうだからと言っていたのが五月のことだった。聞いてない、と答えた。ショックを受けている自分自身を、気持ち悪いと思った。

千晴の子供を見たところとは別の、北口のペローチェの店先で、新田にバイトを辞めたことを謝った。

「ほんとごめん。せっかく紹介してもらったのに」と言うと、新田は驚いたような調子で「いやいやこっちこそごめん、ひどいとこだったでしょ」と言った。

一瞬、自分の聞き間違いかと思った。あるいは、何か解釈を間違っているのかと思った。言葉を探して呆けていると、新田が言葉を続けた。

「辞めるって言ったら代わり探して来いって言われるからね。バックレるのが正解だよ」笑うでも悪びれるでもなく、早口でそう言った。

コーヒーを飲みながら、新田が大学を辞めた理由を聞いた。バイトで忙しかつたからと答えた。バイトを辞めるときに自分に向けて言ったことと、辻褃を合わせようともしていかないのだと思った。

「母親倒れてたから、家事も忙しくてさ」

高校三年のとき、新田の母親が入院した。命に関わるものではなかったが、それでもかなり長く入院を繰り返して、推薦で大学が決まっていた新田が家事全般をこなしていたという話は以前すでに聞いていた。

今はもう元気なんだけどねと言ってコーヒーに口をつける新田に、「なんでバイトじゃなくて大学辞めたの」と尋ねた。

「だってバイトしないと生活費ないし」と、当然のような口調で新田は言った。は？と首をかしげた。自分だけではなく、岸さんも不可解そうな顔をしていた。「お父さん働いてるよね？」

「働いてるけど、生活時間違いすぎて家で会わないから生活費貰えないのよ。だから自分で稼いでて」

そんなもの、どうとでもやりようがあるだろうと言いたかったが、それを聞いても多分無駄だということが、なんとなくわかった。新田が、そういう細部まで矛盾なく話を組み立てて説明するのを放棄していることだけはわかった。それが、ひたすらもどかしく、腹立たしい。お母さんの体調大丈夫なの、と柚木が尋ねる。しばらく自宅療養だったけれどももうほとんど以前と同じ、と説明して、

「でもまあ、母親倒れると、やっぱり親すごいなって思うよ」としみじみと言う。

「私は母親あんま好きじゃないなあ」と柚木が言った。

「好き嫌いっていうか、敵わないって気がする」と新田が言うのと、岸さんが頷いた。「うちも、専業主婦だけどすごいなーって思うよ、私一人暮らしとかできる気しないし」

「親に感謝とか、できる気がしないなあ」と笑いながら言った。

「だって、親まだ元気でしょ？」新田がこちらを見て言う。

「親が弱ってくると、また変わると思うよ」

それが多分、十八か十九の頃だった。

幹事の高野が軽く挨拶をして、同窓会は始まった。新田と千晴、一ノ瀬さんと鈴木さんとで一つのセットを囲んだ。子供がいるのをいいことに、食べ食べ、と子供たちの皿に肉を盛った。子供たちは肉よりも周りの大人が面白いのか、男たちに飛びついていく。子供扱いのうまい人間を嗅ぎとるのか、葉奈ちゃんに絡まれていた五十嵐と落合は葉奈ちゃんが肉を食べている間には慎治くんの攻撃を受けていた。ケリを入れた落合に追いかけられている葉奈ちゃんを見ながら千晴が「男の趣味って母親に似るのかなあ」と言うのを、「おいこら既婚者」と笑いながら、葉奈ちゃんの父親は、千晴の好きな男だったんだらうかと考える。

河原には、新田と千晴の子供のほかにも、川遊びをしている子供たちの姿があった。

小学五年の夏休み明け、始業式の最後に臨時の全校集会が続いて、夏休み中に生徒が一人死んだことを校長が告げた。小学一年生、バーベキューの事故だった。夜の相模川に連れ去られた身体は、見つかったときにはもう呼吸が止まっていたという。葉奈ちゃんが二年生で、慎治くんが三歳だった。生きていたら高校を卒業する頃かと考えて、同級生の何人が死んでいるのかと考える。把握しているのは二人、どちらも事故だった。一人は大学生で登山中の事故、もう一人は仕事中に車でガードレールに突っ込んで死んだ。交通事故で死んだ飯塚には妻子がいたと、同じ高校に通っていた柚木が言った。奥さんは、二人目を身ごもっていた。

千晴の子供が大きいことにも驚いたけれど、新田が結婚していたことにも驚いた、と一ノ瀬さんと鈴木さんが言った。そんなに意外？と首を傾げる新田の皿に、「バリバリ働いてそうないメージあった」と言いながら肉を乗せた。

「働いてはいるけどね」

「パチ屋だっけ？」

「そう。店舗は変わってるけど」そう言って、箸をグーで握る息子の手を、違う、

と言つて直させる。注意する新田の低い声は千晴のそれとは対照的で一瞬怖いと感じたが、生来の気質なのか慎治くんはバーベキューが楽しくて仕方ないという顔を変えずに「こう？」と箸を持ち直す。新田の印象は、変わった。変わったのではなく、自分が勝手に誤った印象を持っていたのだらうと思う。自分が執着するような形で、新田がこちらを意識することはこれまでもなかっただろうし、この先もないだらう。それを未だに未練がましく思っている自分を、惨めで気持ち悪いと思えるくらいには頭は冷えていた。

数年前に、親すごいなつて思う、と言つていた新田がバツイチで再婚して二児の母になつてゐること、その一つひとつを何年経つても消化できないままの自分を、ひどく幼稚に感じた。感謝、という気持ちはどういうものなのか、罪悪感と何が違うのか、それは負い目ではないのか、わからないまま二十四になった。感謝することは負い目を感じることであったし負い目と罪悪感はよく似ていた。自分を責めずにいられる感謝というものが、あるらしいという知識はあるが、それがどういふ手触りなのかを想像するのは難しかった。

午後高円寺のアパートを出ても同窓会には間に合つたのに、朝早くに出発

して実家に寄ったのは祖父父母の墓参りのためだった。山で死んだ北くんの墓は、実家の墓の斜向かいにある。北くんとはクラスが同じになったことも話したこともなかったが、成績のよい子だったから定期テストの順位は互いに意識する程度の距離感だったと思う。高校は相州ではなく私立に進んだ。そこから慶応に入った、という話が、別の同級生の母親経由で伝わってきた。

いつも、墓の前まで行って、刻まれた名前と享年を確認するが、線香を立て手を合わせることは、なんとなくはばかられた。自分は死に損なっているのに死ぬつもりがなかった北くんが死んだ。幼子であれば玩具やお菓子が置かれるのだろうが、大学生で死んだ北くんの墓にそういった玩具が置かれることはなく、代わりにいつ行っても取り替えたばかりのような洋花が挿してある。

北くんは一人っ子だった。

行年二十一才という文字を見る度に、成人式のあの会場にはいたのだろうかとか考える。北君の両親も、この墓に入るのだろうかと思う。

生きている頃にはほとんど接点のなかった自分が、同級生の中でいちばん北くんの墓に来ているかもしれないというのがおかしかった。小中を通して何度

か同じクラスになっていた柚木から「お葬式行く？」と連絡があった。下宿のそばのコインランドリーで電話を受けながら、自分はまだあまり接点がなかったからと断った。北くんの家と菩提寺が同じだったことは、墓ができてから知った。先代の住職が最後に執り行ったのが祖父の葬儀だったから、北くんの葬儀は当代の住職が務めたのだと思い至り、何を話したのだろうかと考え。いい声で経を読む、と親戚一同から評判で、葬儀でも法事でも必ず故人のエピソードを話す人だった。親戚でここを菩提寺にする家は多かったから、住職の話は何度か聞いたが、住職より若い人間の葬儀には参列したことがなかった。

実家の墓には、祖父と祖母しか入っていなかった。叔母が死んで、何年経っただろうと数えようとして、やめた。それは自分が生き延びたのと同じだけの年数だった。父が密葬にしようとするのを、叔父と従姉妹たちが反対した。

旦那と別れて、長女が結婚してから、叔母は実家に戻ってきた。次女がどこで暮らしていたのか、その頃の叔母一家のことはよくわからない。家に来ることを父が強要したのかどうか、わかるのは、おそらく叔母が自分の母親の介護を兄夫婦に任せておけないと考えていたということだった。

叔母の死を伝えるメールは死因も何も書いてなかったが、こみ上げた笑いは何かを予見して期待していたから出たのかもしれない。前の年に、在宅介護の末に死んだ祖母の誕生日が、その日だった。

なにもうちで死ななくても、と母が言った。この家で生まれ育った二人の女のうちの一人が死にそこねて一人が死んだのだと思った。

葬儀は結局、平塚の叔父の実家の近くで行われた。父は叔父の借金のせいだと思ひ、叔父と二人の従姉妹は父が殺したと思っている。だから叔母の葬儀にも、通夜しか参列しなかった。通夜も告別式も参列できないかと思つたが、叔母の死で腑抜けた叔父が喪主として使い物にならなかつたので、結局父が裏方を執り行つた。実の親が死んだときも、雑務一切を事務的にこなす様子を、叔母が「兄貴のそういうところはすごいと思う」と言っていたのを、嫌味だろうかと思ひながら聞いていたのを思い出した。叔父は実の親の葬儀でもやっぱり腑抜けになつていた。だが、こちらの娘はこのざまなのに、叔母夫婦の二人の娘は短大を出て働いて、結婚をして母になつてゐる。

遺骨は、納骨されずに長女の家にあるはずだったが、父に連絡することなく叔

父の実家の墓に納められているのかもしれない。

美人ではないが格好良く美しい人だった。叔母がおかしくなったのではなかった。世話をしていた実の母親が死んで姪が蛍光灯で窓ガラスを割る家でまともでいられない程度に叔母がまともな人だったというだけの話だった。

祖父母の墓の前で手を合わせるとき、ありがどうとも安らかにとも思えない。ごめんなさい。ただそれだけの言葉を言うために、盆と正月、この墓に来て、手を合わせる。頭を下げる。

当代の住職と叔母は、中学校の同級生だった。もし住職なら、叔母の葬儀で何を話してくれただろうか。首を括って冷たくなった同級生の亡骸に、なんと話しかけただろうか。

高野が、一つひとつのテーブルを回っていた。テーブルに来た高野が、こちらを見ておそろおそろというように、「同じ高校だったよね？」と尋ねる。河川敷に集まっている三十人近い同級生の中で、相州を出たのは自分と高野、それから高野と同じテーブルを囲んでいる今田の三人だけだった。今何してるの、と聞かれて「大学辞めてフリーターっす」と笑って答えた。高野が少し驚いた顔をした

ので「東京砂漠で一人暮らし中」と、わざと得意げな顔を作って言った。高野はと聞くと、病院で技師をしていると答えた。横から鈴木さんが、彼女と結婚秒読みなんだよね、と茶々を入れる。「もう二年も同棲してるんだよ」箸で高野を指しながら、鈴木さんがリア充とからかう。

同棲、という言葉聞いて二宮を思い出した。それから新田に目を向けた。姑とうまくいかない、と話す千晴と、家族づきあいは難しいよね、と答える新田のやりとりを、自分の入り込める世界ではないと感じながら見ていた。結婚した、という連絡の後で集まったとき、新田はもう妊娠していた。「結婚して家は出たけど、一人暮らしはしたことないんだよね」と、下宿で暮らし始めたばかりだった自分に、新田が言った。「一人大変でしょ」と言われて、「自分のことだけやればいいんだから楽だよ」と答えた。本心からの言葉だった。人の世話も、人に世話をされるのも苦痛にしか思えない自分にとって、他人を介さない生活はとても心地良かった。家出たいけど母親も一緒に連れて行きたい、と岸さんが言うのに柚木が同調するのを、軽蔑するような気持ちで聞きながら、「金かかるし、必要ないならやらなくていいじゃん」と言って笑った。

新田は、二十歳になると同時に婚姻届を出したと言った。親がよく許したね、と聞くと、「二十歳過ぎてれば許可いらないでしょ」と言って、事後報告だったと話す。母親をすごいと言いい、両親と不仲なわけでもない新田が、親の許可などいらないうと言うのがよくわからない。だが、それを当然のことのように話す新田に、なぜ、と聞くことはできなかった。

「うちも兄妹多いから、家出たかったんだけど、部屋探したり家具そろえるのも大変でしょ。そしたらちようど、旦那がうち来ればって言うから」

一緒に暮らすなら結婚してしまおう、という感覚で籍を入れたと言った。「正直、そんなに好きじゃなかったんだけど、タイミングがよかったんだろね」という新田の言葉を聞きながら、男と女なら、そういうことができるのかと思った。男女なら、好きでなくても一緒に暮らすという関係が成り立つような気がした。友達でもなく恋人でもなく、セフレでもなくてセックスもないそういうよくわからない関係が、女同士では築けない。五時ぐらいには行けそう、という岸さんのメールを見ながら、柚木との距離を考える。家に住ませて援助する、というような関係が、同性で友人の柚木とは築けないと考えて、それはただの言い訳か

もしれないとも思う。

テーブルを囲む人間は、自分以外はみんな市内に暮らしていた。一人暮らしは親が反対する、という鈴木さんの言葉に、新宿まで一時間で行ける土地の、独特の閉塞感を感じていた。家から職場まで二時間半かけて通っていると言う一ノ瀬さんは「一人暮らしも考えてるんだけど、実家の方がお金かからないし楽し」と話す。

「やっぱり親のありがたみとか感じた？」と鈴木さんに聞かれて「開放感しかなかった」と苦笑した。それを間違っているとは思わないが、「親すごいなって思う」と新田のように言えないことが、劣等感としてへばりついていた。

家を出て、倉庫のような下宿に一年暮らした。部屋数八十、家具付きとは言いが箱のようなベッドと棚しかない、東向きの四畳半で、シャワー、トイレ、台所は共同、買ったマットレスには二ヶ月でカビが生えた。それでも柚木は「いいなあ」と言った。親がうるさい、部屋が狭い、そういうことを言いながら、一人暮

らししたいけどお金ない、働けないと言う。柚木を連れ出して住まわせる、そういう選択肢についてぼんやりと想像してみるが、柚木は「さみしい」と言う。家族と離れるのは寂しくて嫌だと言う。家を出れば良い方に進む、という人ばかりではないのだと思いつながら、どこかで家族と離れられない柚木を見下す気持ちがある。家を抜け出した傲りがあるのを意識しながらじゃあ柚木はどうしたいのと聞けば「お父さんに生きていてほしかった」と言う。そのどうしようもない願望を聞きながら、親に生きていてほしいと思えるのは幸せなことじゃないかという最低な言葉を腹の底に沈める。

下宿の部屋の東側の窓は桜並木に面していて、昼はお年寄りの夕方は子供たちの声が聞こえてそれは全く不快ではなかった。桜の季節、窓から見下ろす大通りには、カメラを構える人もいた。その中に、桜ではなく下宿にカメラを向ける人がいた。それが父だと、しばらく見つめてしまった後で気づいた。反射的にカーテンを閉めた。閉めてから、今、あれはどこを見ていただろう、今ので部屋がばれたかもしれない、と思いつ、その場に座り込んだまま、カーテンを握りしめていた。父に住所を教えた記憶はなかった。

大山に近づいた太陽が相模川を赤く染める頃になってやってきた岸さんは、慎治くんを見るなり、誰の子、と大げさに驚いて言う。「慎治です、今三歳」と言つて、新田がビールと缶チューハイを持ってくる。どっち？と言ふのを、岸さんがビール、と言つて受け取り、「同級生の子供がこれとか、年取るわけだよ、ねえ」と溜息をついた。

川遊びをする同級生たちを眺めながら、つまみを片手に、岸さんと酒を飲んだ。日差しの当たる背中がじりじりと熱い。日を遮るものもないので、うちわで影を作りながら酒を飲み続けた。

パートを早退して病院に駆けつけた柚木の母親は、白髪が増えてすっかり老けこんでいたと岸さんは言った。もともと年齢より幼く見られる顔をしていたから、歳相応に見えるようになっただけかもしれないと思ひながら、柚木の母親を思い浮かべる。

かっちゃんがかーテン燃やした、と笑うような口調で言った柚木の声を思い出す。父親が死に、柚木が仕事を辞めた後、定時制に通っていた上の弟が高校を

辞めた。その弟が、家のカーテンに火をつけた。焦げ臭いのには気づいた母親が部屋に入って悲鳴を上げた。火はカーテンの裾をわずかに焦がしただけで消えた。

大丈夫だったの、と言うと、柚木は「私は別に平気なんだけど、むしろお母さんがうるさい」と言った。弟の状態やボヤの被害を気にするでもなく「怒って、かっちゃん叩きながら泣き出しちゃって、それがうるさかった」と言う。わざと言っているのか本心からそれがいちばん辛いと言っているのか、柚木の家が壊れていくことだけが電話の向こうから伝わってくる。下の弟はまだ小学生のはずだった。焦げたカーテンとその理由を、下の弟に隠し通すことはできないだろうと、それが真っ先に心配になるが、柚木はそれよりも母親が嫌だと言ひ慕る。それを、聞く以外に何ができるだろう。

柚木によく似た小柄なおばさんが、声を上げ、息子に手を上げる様子が見えるような気がした。普段子供を殴らないおばさんの振り上げる腕は、大人の身体をした息子に大した打撃を与えることなく、自身の声の代わりだというように振り下ろされる。それを、避けるでもなく面倒くさそうに受け止めている上の弟の姿が浮かぶ。それが去年の年末だった。

柚木は、ただの貧血だったという。ファミレスでの様子を思い出して、どこか悪いんじゃないかと聞くと、岸さんが顔をしかめた。

「ちゃんと食べてないんでしょ」

口調に咎めるような調子があった。

本人がいちばんつらいんだろうけどと、赤い夕陽を跳ね返す相模川に目を向けながら岸さんが言う。

「自分で動けよって思っちゃうんだよね」という言葉に、わかる、と言って頷いた。

辛いのは本人で、動けないのはその人のせいではなくて、その人が弱いわけではないし、もしそれが弱さだとしても弱いことが悪いわけではない、というテンプレートが頭をよぎる。あなたが動けて元気があるのはあなたの努力の賜物ではない、たまたま恵まれていただけで、それを当たり前と思つて人を責めてはいけない、そういう話は知っている。だがそういう理性を振り切つて、罵りたい気持ちには生まれてくる。もうやだ、誰か助けて、と柚木は言う。

「病院も薬もやめたって言つてたじゃん」

自分の口からこぼれる声が、酒のせいかうわずっているのを意識しながら、言葉が続けた。

「合う合わないあるんだろうけど、諦めるの早すぎだろって、思っちゃうよ」
自分で動けよ、という言葉をも、何回飲み込んだらだろうと思う。

バスターミナルの一件から家を出るまでの間、病院に通って薬を飲み続けた。効果よりも副作用が出る体質なのか、吐き気、だるさ、アカシジア、説明書に載っていた副作用はひと通り出た、それでもそれにしがみつくなかないような気がして僅かな効果にすがりついて家を出た。だから、そう、思ってしまう。けれどそんなもの、別に、努力の賜物ではないのだと、頭では、わかっているのに。ね、と岸さんが同意を示すように頷く。

「自分たちが恵まれてるのもわかるけどさ」

「思っちゃうよね」と苦笑しながら言った。

だから、それを口にしないで済むところより先には近づかない。辛いね大変だね、と共感を示す、それ以上踏み込むことを、多分、誰も、望んでいない。

今、ここで口に出さなければこんな感情はなかったことにできたのに、出さな

いとやっていたら、いられないくらいに濁りきった淀みがぼこぼここと溢れてこぼれてい
やなおいを立てている。けれどもそれでも体は心地よかった。言葉を紡ぐ口に、
それを入れる耳に、快かった。

葉は副作用がつかなくてむり、カウンセリングの先生も嫌い、アルバイトをした
ほうがいいのはわかるけれど一人では怖くていやだと、同じような話を何度も
電話で繰り返す柚木に、助かりたいの、と聞いてしまった。

助かりたいよ、と力なく言ってから、助かりたいに決まってるじゃん、と続け
た柚木の声に怒りが混じっていたので、ひどい言い方をしてしまったと気づい
た。

家を出てすぐに柚木に言われた言葉を思い出した。叔母が死んで家を出て、叔
母が死んだおかげで生き延びているような気がする話したときに「おばさん
に感謝したらいいんじゃない」と言った柚木の言葉は間違いなく励ますつもり
で、言葉の意味するところまで思い至らずにこぼれたものだったのだろう。その
無神経さと、助かりたいのという言葉の下に沈んでいた淀みとを比べるなら、罪
深いのは淀みから出た言葉の方かもしれなかった。動けなくなっている柚木の

状態をもどかしく思い、甘えと感じる、その淀みを、助かりたいのという言葉の裏に感じ取ったから柚木の声はきつくなつたのだろうと思つた。

ごめんそうだよねと深刻ぶつた声で言葉を紡ぎながら、淀みに両足を突っ込みながらでも親身なような言葉が吐けるなら優しい言葉たちはどこから生まれてくるのだろうかと考えた。

「だいたい、仕事辞めた理由にしてもさ」と岸さんが言うので、「あれねえ」と苦笑して頷く。

数ヶ月の休職期間の後、柚木は退職届を出した。

「お父さんが死んだのがいちばん大変だけど、会社行けなくなつたのはね」と柚木は言った。忌引休暇が終わって会社に行ったら、上司に慰めるような言葉を言われた。触れないでほしかったと柚木は言う。「これからは大黒柱になってお母さんを支えてあげなさいって言うんだよ、私だって辛いのに。なんで支えなさいやいけないの。私が支えてほしいのに大学も行きたいのに、大黒柱？ みんなもつと遊んでんのに、なんで」

その上司の言葉が決定打だったと柚木は言った。

「パワハラとかならわかるけどさあ、と岸さんがビールを口にしながら言う。「大黒柱として頑張れなんて、柚木が傷つくのはしょうがないとしても、それぐらいで」

「おばさんもパートだし、柚木が稼ぐしかないじゃんね」と苦笑しながら、貧乏をしたことのない自分たちに言えることではないとも思った。もしかしたら千晴や新田なら柚木に言えることがあるかもしれないけれど、すでに働いて子供を育てている二人を相手にこの話をしない程度には柚木も相手を選んでいらずだった。

「そういうの口実にして逃げてるように思っちゃうし」

わかる、と頷きながら、叔母の通夜で歯を食いしばりながら泣いた理由を思い出していた。叔母の死が、どろりとのしかかかってきたのは、家を出て虐待死のニュースを見る度に笑い出さなくなっただけのこと、通夜の晩は、泣き崩れる従姉妹たちを見ても何も感じなかった。いや、悲しい気持ちは感じなかった。ただ、不快だった。なんであの二人はこんなふうに泣けるのだろう？ こちらは笑い

出すくらいおかしな人間になってしまっているのになんで貴女たちはまともでいられたんだろう？

叔父の家の菩提寺の読経を下手だと思つて聞きながら、齒を食いしばり涙をこぼしたのは、直前に大伯母から言われた言葉を思い出していたからだつた。大学を辞めたことを、両親は伏せていた。隠そうとしたわけではないだろうが特に話す機会もなかったのだろう、大叔母はそれを知らなかった。「大学出たら、何になるんだい」と聞かれて、なんでしようねえ、まだ全然考えてないですわねえ、と笑つた。

「上の学校行くんかね？ 優秀だもんねえ」大伯母は笑つてそう言つた。

大伯母の家の孫たちは、みな家庭教師をつけていて、長女はどこかの医学部に入つたと聞かされていた。経済状況は大差なく、ただ、親の考え方が違つただけだった。おばさんちに生まれてたら女でも院に行けましたねそうですねという言葉が、読経の合間に繰り返し沸き起こるのを、叩き潰す度に涙が滲んだ。死者の冥福を祈る余裕などなかった。

柚木を崩した一言は、大伯母のそれに通じるものがあるのかもしれない、柚

木に對してなぜ、と思うように、あのときの涙も、他の人間から見れば、なぜそんなことと言われるようなものだった。

サンダルを脱ぎ、浅瀬に足を浸した五十嵐が、同じく裸足で水辺に立っている葉奈ちゃんに水を掛けられ、お前なあつと追いかけるのを、千晴が笑って見ている。葉奈ちゃんは笑いながら五十嵐の後ろに回り込み、その腰にしがみついた。五十嵐が身体をねじってその頭を抱き込むように押さえつけて、身体を揺さぶる。葉奈ちゃんの悲鳴のような笑い声が、足元の水飛沫と一緒にあがる。親子みたい、と岸さんが言った。

「高校辞めたって聞いたときはホント大丈夫かって思ったけど」

ふと思ひ出して、いつ妊娠を知ったのかと尋ねると、千晴が中退してすぐだと答えた。

「辞めたって聞いて、半分冗談で送ったのよ。妊娠でもした？って」

冗談かよ、とビールを聞けながら笑うと、半分は本気、と苦笑する。

「中退って聞いたたら、まあ、それ考えるよね」と言いながら、聞いてはいけない

ような気がして送らなかつた自分と岸さんの違いはどこにあったのだろうかと思う。踏み込んではいけないと思つたのではなく、本当にそうだったとして、掛ける言葉が思いつかない、そんな理由だった気がする。ペローチエで葉奈ちゃんを見たとき、娘だろうと思ひながら、妹？と尋ねた自分はどんな顔をしていたのだろうか。

「父親隠すとか、どんだけ訳ありだよって思ったけど、すっかり母親やってるしねえ」そう言つて岸さんはうちわで顔をあおぐ。父親、と聞いてふと気になり、岸さんを見た。

「さすがに両親には言ってるのかな、相手」言つてから、一度だけ考えたことのある予感が頭をかすめた。いや、そんなはずはない、とその考えをかき消すよりも早く、神妙な顔をした岸さんが目に入った。それさあ、と岸さんが、少し考え込むように黙つて、こちらに目を向ける。そして、「変だと思わなかつた？」と声を潜める。

「妊娠したのと千晴の弟が生まれたのって同じ頃じゃん」

それは、ずっと前に、一度だけ考えてかき消した、最悪な予感の一つだった。

喉が詰まるのを感じた。「考えたけど」とかすれた声で呟いて、千晴の方に目を向けてから、足元に視線を移した。

考えただけで、自分の発想がおかしいと思っただけで打ち消した。他の人間はそんなことは考えないだろう、と思っていた。だが岸さんも同じことを考えていたのなら、近くにいた柚木や二宮も考えていたのかもしれないし、二宮なら柚木に言ったかもしれない。相手、もしかして家族なんじゃないの。

「まあ、ないと思うけどさあ」と吹き飛ばすように言っただけから、「ていうか、もしそうでも何もできないし」と言葉が続けた。ほんとうにそうだ。何もできない。その最悪が当たったとしても、互いに、手を伸ばすことは、きっとできない。

葉奈ちゃんが、おかあさん、おかあさんと言いながら千晴にも川に入れと促している。

ほんとうに、何も、できない？

風が、汗で湿った身体をなでて、背中と胸がひやりとする。まだ高校生だった自分たちには、何もできなかった、できるわけがなかった。けれど、ほんとうに何もできなかった？

何もしないことを何もしたくない今のところを、千晴と一緒に雨の中を歩いていた中学生の自分が見つめていた。涼しくなってきたね、と岸さんが言った。あの日、千晴と歩いていた帰り道は、冷たい雨が降っていた。覚えていたけれど思い出さずにいた、中学の頃の記憶の一つ。

傘を持っていなかった千晴を自分の傘に入れて中学から徒歩三十分の道のりをのろのろと歩いていた。折り畳み傘は小さく、遠慮がちに傘に収まる千晴の肩は、傘から流れる水で雨の中を歩くよりも濡れていた。もっと近づいて、と言うが、小柄な千晴を収めようとすると脚がもつれそうになる。結局、そのまま歩き続けた。千晴の酸っぱい臭いはいつもしていたわけではなくて、その日は雨の匂いが強かったから、気にならない程度だと意識していたことは覚えているのに、それだけ身を寄せながら何の話をしていたのか思い出せない。共通の趣味、というものは、今となっては何もないが、この頃はマンガを回し読みしていたから、その話をしていたのかもしれない。小学校前の交差点を曲がり、葉の落ちた桜並木に差し掛かったところで、千晴が言った。

「私ね、お兄さんとお姉さんがいるんだって」

「え?」

一瞬、謎かけかと思ひながら千晴を見た。千晴が足を止めたのに気づくのが遅れて、千晴が雨に打たれた。慌てて一步戻って「どういうこと?」と、まだ冗談だと思ひながら首をかしげた。四人だか五人だかいる姉弟の一番上のはずだった。多分困っているのだろう、中途半端な笑みを浮かべながら、「お父さんの、子供なんだって」と言った。それでようやく、謎かけでなかったことに気づいた。こういうとき、何と言えいいのかわからずに、「いくつぐらいなの」と尋ねた。どちらも二十歳過ぎているといふ答えに、また何と言ったらいいかわからず、必死に言葉を探した挙句、「じゃあ結婚前?」とおそろおそろ質問を続けた。「そうみたい」と頷く千晴の顔からは、何を期待されているのか察することはできなくて、黙り込んだ自分の代わりに、傘に当たる大粒の雨がうるさく音を立てていた。「……びっくりだねえ」

やっこのことで呟いた言葉は、ひどく間が抜けていて、それで、千晴が噴き出すように笑った。

「そう、ホントびっくりした」そう言って千晴が笑うのにホツとしていた。子供

がどうやってできるかもまだ自分は知らなかった。笑い声が合図だったように、また二人で歩き始めた。歩き出すとまた千晴の肩が濡れた。会ったの？と聞くと、千晴は首を横にふる。

「なんか、いるって聞かされただけで。でもなんで急に言い出したんだろ」本当に何もわかっていないような口ぶり、千晴は首を傾げていた。家の前まで来て、立ち止まることもなく別れた。また明日、と言って軒先で手を振る千晴に、風邪引くなよ、と言って手を降った。

翌日、千晴は学校を休んだ。あの傘から伝った雨が風邪を引かせたと思って、それだけが心苦しいと思った。千晴の話を思い出すよりも、合唱コンクールのソロに決まった新田への嫉妬を、すごいと言って隠すことに必死だった。欠落だらけだった心は、あのと、千晴が差し出した何かを取りこぼしていたのかもしれない。

千晴の兄や姉の話は、それから一度も聞いたことがない。千晴は他にも打ち明けていたのだろうか。柚木や岸さんは、知っていたのだろうか。

あの頃毎日のように聞いていた、勉強しかできない欠陥品、という言葉は実際

当たっていたのだらうと十年以上経った今思い知る。あのときの欠落を、二十四の今埋めたところでやり直せない。その話と、引越しの時期は、一年も離れていなかったのではないかと、今になって思い出す。けれど今更それを聞くことも、葉奈ちゃんの父親についての推測を言うことも、できるわけがなかった。

千晴に踏み込めないことと、柚木に手を差し伸べられないのは、似ているような気がした。友人という距離を保ちながら、病院に行くように説得したり金を渡したりする代わりに痛みを和らげる言葉だけを続ける。

「旦那とうまくいつてるならいいんだけどさ」と、うちわで夕日を遮りながら岸さんが言う。

「今年も鮎まつり行ったって。葉奈ちゃんが楽しそうに話してた」そう言うとき岸さんは「なら、よかった」と頷く。

「普通の家族やれてんじやん」と言いながら、反射する光を防ぐようにうちわを構えて川に目をやる。

そうねえ、と頷きなら、岸さんの言う普通の家はどんな家だらうと、卑屈な気持ちで考えていた。

働き始めた柚木が家にお金入れてないというのに、岸さんは「信じられない」と言った。そう言う岸さんは、年上の彼氏のためにと二万円もする財布を見ていた。まだ親のすねをかじっているのにどうして家族以外の人間のために万単位のお金を使えるんだらうと思いつながら、自分のその感覚がおかしいのかもしれないとも感じていた。

今、お互いにそれぞれ働きながら、それでも柚木に二万三万のお金を援助することはないだらうと思う。本やネットを見ればそういう関係はあって、だからべつに、女同士だからできないとか、そういうことはないだらうと、もしもつと裕福だったら宝くじが当たったら、と考えてみるけれど、誰も、互いに踏み込まないしこちらに踏み込む人もいない。

あの入院の後で、岸さんと柚木もこうやって言葉を交わしたのかもしれない、だいたいズイけど何もできないしき、おじさんたちだっといういい人なのに、あいつもああいう性格だからね、助かったけどああいうのって繰り返すっていうじゃん、てかなんであいつ大学やめたんだらうね、うちと違ってお金がないわけじゃないのにな？ そんな被害妄想を、こころの底に沈めたまま、タオルで汗をぬぐ

う。太ももの上に感じた柚木の重さと体温と、荒い息と流れる汗を思い出ししていた。

去年の冬、柚木の暮らす団地の公園で、最近煙草を吸い始めたという柚木に、ピアニシモのメンソールを一本やった。柚木は一口吸って「まだおいしくない」と言って煙を吐いた。「じゃあちようだい」と言うと、柚木は「慣れたいから」と言って、また唾えた。息が、煙のように白くなる冷え込みの中で、それで暖まるはずもないのに、暖を取るような気持ちで自分も煙草に火を付けた。空気に晒された左の指先が、冷たさにピリピリと傷んだ。

最近は何べようとしても吐いてしまう、外に出ると気分が悪くなる、という話を、柚木は笑いながら話した。深刻にすることを柚木が望んでいないような気がして、マジかよやばいじゃん、と笑いながら返した。病院に引っ張って行けたら、と思いながら、家族でもない恋人でもない自分にそれができるわけでもない、と思った。ネットで見た、ひきこもりの友人を更生させる話を思い出した。煙草を吸った。吐いた。「誰か養ってくれないかなー」と柚木が笑った。病院行こうよ、という言葉は、柚木を黙らせてしまうような気がして口にできなかつた。

そういえばさ、と柚木が思い出したように言った。

「聞いた？ トシくん東大って」

聞いた、と言つて頷いた。岸さんの弟の進学先は、母親経由で聞かされていた。私立の進学校からの現役合格だったという。

「すごいよね」という柚木の言葉にへばりついた感情の手触りを確かめるように、柚木の手元の煙草から立ちのぼる白い煙を見つめていた。

柚木はきつとそれをこの関係性の中でしか話さないだろう。お金があつたら。女に生まれてなかつたら。それだけで学歴が得られるなんて思つてはいない、けれど絡みついた足かせの重たさを柚木となら共有できた。

慎治くんが、男たちといっしょに川に石を投げていた。川に近づき過ぎないようにと、新田が近くに立っていた。息子に石を渡されて、投げた。母親の投げた石は川面を二回、三回跳ねて、四回目の着水で沈んだ。息子が手を叩いて歓声を上げた。

せっかく河原に来たんだし、と言つて、岸さんと一緒にビールを持ったまま川

に近づく。足元はしつかりとしていたが、ギリギリまで行くのはなんとなく恐ろしく感じて、男たちのずつと後ろの方に立って石を拾って、投げた。石は、きれいな王冠のかたちの飛沫を上げて低い音を立てて沈んだ。もう一つ、今度は一回り大きい石を拾って投げた。同じように投げたつもりだが、石は低い弧を描き、尖った形の飛沫を上げて、水を弾くような音を立てて沈んだ。

「違うよ」いつの間にか近くに来ていた慎治くんが、叱るような顔をして「こうだよ、こう」と投げる仕草を見せる。

缶ビールを砂利の上に置いて、「こう？」と身体をくねらせる。

慎司君に急かされて、川に石を投げつける。石は跳ねずにぼちゃんと沈む。

「とんでないよォ！」と地団駄を踏まれて「ごめんごめんおばちゃん下手だねー」と苦笑する。

子供には、好かれない。動物にも好かれない。こんな生き物を育てられる新田や千晴をただすごいと感じた。二人は、身内の死に笑ったりしないだろうし、それを踏みつけて生き延びたりしない。子供に乳を吸わせ、子供の腹を満たし、十年、二十年、子供を産んだ身体を抱えて生活を続けていく。

慎治くんが、岸さんにも石を渡して投げろと促す。岸さんの投げた石は、一回だけ水の上を跳ねて沈んだ。いっかい！ と慎治くんが声を上げた。

「岸さんは、結婚の予定は」思いついて尋ねた。中学の頃、いちばん早く結婚しそうだと思っていたのは岸さんだった。岸さんは、苦そうな顔をして「したいんだけどさあ」と言葉を濁す。

また石を投げようとする慎治くん「投げる方ちゃんを見て」と言いながら新田が近づく。はあい、と笑顔で返事をして、大げさに周りを見渡してから川に向かって石を投げる慎治くんの陽気さは父親譲りなのだろうかと思いつながら、バイト先で一度だけ見た、前の旦那の顔を思い出していた。

「一回も結婚できないやつもいれば、二回も結婚できるやつもいるんだから世の中不思議だよ」と自虐するように笑う岸さんに、うんざりした、けれど本気で嫌がっているわけではないという口調で「なんだよこんなの一回で十分だよ」と新田が言う。

「なんで別れたのよ」

「いろいろあんのよ」

その会話を聞きながら、横で笑った。聞きたい、けれど自分にはそれを聞くことはできないし新田がそれを話すこともないだろう、それを悔しいと思う自分のみともなさを、いつまで感じ続けるのだろうか。

あの出来事の後、新田が結婚して叔母が死んで家を出た後、呼吸ができるようになった、心臓に血が流れるようになったと思いつつながら感じていた閉塞感の中で、子供が生まれたとメールをしてきた新田に電話をかけた。カビの生えたマツトレスの上で背中を壁にもたせかけて、新田の声の向こうに聞こえる赤ん坊の泣き声を聞いた、それがこの慎治くんだったのだと思いつつ出す。

話したことは、多分、話すべきではなかったことで、新田はそれに冷静に、真摯に答えてくれていたけれど、人はぬかるみに足を浸したままでも優しい言葉を紡げるものだから、紡がずに済むところまでは踏み込んだりしないから、その言葉の裏側を考えてしまう、けれど、それを思うには新田は遠すぎて、自分は盲目だった。

「岸さんこそ、いちばんに結婚しそうなのに」と新田が言う。「彼氏はいるんですよ？」と言われて、岸さんがまた唸る。

「嫌いじゃないんだけど、趣味にお金かかりすぎるし楽観的だし結婚はムリだ
と思うんだよね、親も反対しそうだし」と言う。

通夜の後、車の止まる場所まで歩きながら、「私、平和主義なのかな」と岸さ
んが言った。え？と聞き返すと、だって、とちらりと後ろを伺う素振りをして「親
の反対無視して家出たり、新田みたいに籍入れたり、絶対できないもん。やっぱ
り親にも祝ってほしいし」と言う。軽蔑するでも見下すでもなく、考え方の違い
だというような岸さんの言葉に、「不穩にならずに済むなら、それがいちばんだ
よねえ」と言って頷いた。不穩に、ならず、済むなら。

高校も大学も私立に進んで、親の留守に男を家に呼び込むだけの自由がある
その環境で、反抗する必要など、どこにあるんだろう、という言葉をも、淀みの底
に沈めた。

下宿の外でカメラを構えていた父親の話をすれば、岸さんは、娘を心配する父
親だと言うだろう。だから言わない、父親の死んだ柚木にも言えない。言える
したら、二宮だと思った。親マジうざいんだけど、という言葉をも笑って言える。
親にどんなことをされたか、笑って延々自慢し合える。「それだったら私の方が」

という言葉を重ねながら、お互いに相手を軽蔑しながら、それでも繰り返し言えるだろう。

口にすればするだけ自分の醜さがよくわかっていく、体中から吹き出す泥で足元がぬかるんで歩けなくなる、それをしたくないから二宮には会いたくない、けれど「親ほんとうと死んで欲しい」という言葉すら二宮なら笑い飛ばして言うだろう。悔しきでこぼす涙すら「何泣いてんの」と笑うだろう。そんなやりとりを、心底欲している自分がいる。

中学の頃から変わらないのは岸さんだけだった。いや自分がすべてを取り違えていたのかもしれない、岸さんから見た新田は何も変わっていないのかもしれない。

「三十までに子供は産みたいんだけどね」と岸さんが言った。

「子供はねー、年取ると辛いからねえ」と新田が頷く。

産みたいと思えるのがすごい、という言葉をおうとしてやめた。自分には、子供を産むことよりも、叔母と同じように縊れる方がよほど容易にできる気がした。

葬儀のときに千晴が「大変だけど、産んどいてよかったとは思うよ。早過ぎるのはアレだけど」と言っていたことに安心していたことを思い出す。岸さんの口にした最悪の予感が当たっていたとしても、千晴はこんなふうにはならない。柚木のようになることもない。

突然鳴り始めた救急車の音に顔を上げると、川浴いの消防署で、救急車のエンジンが入ったところだった。救急車が通ります、という音声がして、白い車体がゆっくりと車庫から滑り出て、相模川浴いを北上していく。しょうぼうしゃツ、と慎治くんが言うのを、「救急車だよ」と訂正する。「ちがう、ピーポーはしょうぼうしゃ！」と地団駄を踏むのに、面倒くさいと思いつつ「そっかあ」と笑う。ちよつとそこ訂正してよ、と新田が言う。

自分が乗った救急車も、柚木を運んでいった救急車も、ここから出たのだろうか。

死んだ叔母も、病院に運ばれた。救急隊員が運んでくれたから、助かるんだと思った、と母が言った。物置のタンクに灯油を取りに行った母が見つけた。母は、

仕事から帰ってきたばかりだった。

それが決定打になったように、するりと家から抜け出せたのだと、その死の上に立っているのだと、そう思うから寄らなくてもよい実家に寄って、墓も位牌もない叔母の死んだ場所である物置に、線香を供えて手を合わせに行く。叔母の両親である祖父母の墓に、ごめんなさいと言いに行く。

私も出たいと柚木が言った。今の家は狭いらしくて、柚木の自室は四畳半、母と弟と顔を合わせるのも気が詰まる。けれど一人は寂しいと、柚木はこぼす。家具とか全部ついた綺麗で広いところに引っ越したいという柚木を、ぼんやりと見下しながら、柚木の家にも決定的なことが起これば、上の弟がカーテンにつけた火がボヤで消されず部屋に広がっていけば、何かが大きく変わったのかもしれないと思う。けれど、それがよいことになるのか悪いことになるのかわからない。父親の死という決定打で動けなくなっている柚木なら、さらに落ちるだけかもしれない。

けれど決定打というなら自分が、あのとき救急車に乗らなければ、とときどき思う。致死量だったというのが本当なのか大げさなのかわからなかったが、後遺

症も何もなく、今、こうして生きていた。あのままバスターミナルの上で横になっていれば逃げ出せたのは叔母だったかもしれない、下の娘の子供を抱いて結婚式にいたかもしれない、叔父も従姉妹も泣かずに済んだ、父に向かうはずの怒りもなかった。望まれていた叔母が縊れて死んだ物置の前に、今日、自分が線香を立ててからここに來ることもなかった。

そしてそれは柚木にしたって同じかもしれない。二人の弟にとって、引きこもりの姉を見ながら暮らすよりも、もしかしたら。

川の方に駆けていく慎治くんを、新田が追う。岸さんは高野たちと話していた。川砂利の上に置いてあったビールは、倒れてほとんどこぼれていた。あーあ、と口の中で呟きながら、軽く振った。残りの中身を飲み干した。ビールは未だに美味しくなかった。今日来ていたら、柚木は誰と何を話しただろう。

多分ネットで知り合った男と結婚して家を出て、適当に旦那の愚痴などを言いながら主婦をする、というのが柚木の「助かる」道だと思うが、本当にそんな幸運が起これば「なんであいつが」と思う程度には柚木の幸せを願えなかった。けれどそれは、そのまま自分に向けられる感情だったかもしれない。ボタンを一

つ掛け違えていたら、「羨ましい」と言いながら、〇・一キログラムの評価にしがみついていたのは自分だったかもしれないし、それを見ながら「甘えている」と感じていたのは柚木だったのかもしれない。

もし、生き残っているのが叔母だったとして、その方が誰も傷つかなかったと、夕日に染まる相模川を眺めて思う。

夕日が、大山にかかっていた。山に沈む夕日を見るのは久し振りだった。小学校の窓から、中学の音楽室から、繰り返し返し見ていたこの景色は、今、柚木のいるベッドから見えるのだろうか。おばさんと、どんな話をしているのだろうか。あの頃の自分が感じていたように、柚木も死にたいと思ったりしているのだろうか。もしも死んだと連絡があっても、新田の再婚ほどのショックは感じないだろうし、それは向こうも同じかもしれない、と柚木の顔を思い浮かべる。「交通事故で死んだあなたの同級生の奥さん、もう再婚したって」と面白そうに話した母のように、自分や柚木が消えたとしても、「やっぱりね、ちよっとおかしかったもん」と言われて、消費されていくだけだろう。だけど。

川で死んだ子供は生きていたら二十になっていた。東名で死んだ子供は慎治

くんより大きいはずだった。大伯母の言葉も、新田への思いも、きつと、薄れる、きつと弱まる。けれど、北くんや飯塚の不在は、静かに淀みの底に重なる。でもそれだって、ぬかるんだ感情が、人の記憶を、不在を、泥に変えてしまうだけかもしれない。

見つめる夕日の眩しさに、目がちかちかとして、大山に背を向けて川を見つめた。自分の影が、巨人のように伸びて、首から先が川に沈んだ。大橋を、新宿へ向かうロマンスカーが走り抜けていくのを見て、慎司くんがまた歓声を上げる。その横で「ほんとだね、ロマンスカーだね」と教える新田の母親らしい姿に、思わず目を背けている自分が無様だ。

幸福を、願える人間ならよかった。丁寧に、悲しめる人間ならよかった。

柚木、私達は、こんなぬかるみのこころを抱えて、いつまで歩いていけるんだらうか。

了

特集座談会

「百合／薔薇を

扱う作品について」

司会

七夜月尚（尚）

参加者

光枝初郎（光）

新嶋樹（新）

尾崎枕（枕）

常磐誠（常）

七夜月尚（尚）…座談会ははじめます。

光枝初郎（光）…はい！

新嶋樹（新）…こんばんは

尚…こんばんは。枕さんもおられますか？

光…今日は楽しくわいわいやりたいですね！

尚…そうですね！

尾崎枕（枕）…わー、よろしくお願ひいたします。

光…こんばんは！

尚…よろしくおねがいたします！！

光…僕、真面目な話しかできないですよ。

光…漫画の話とかもしてくれる方がいるとあり

がたい！

新…僕は真面目な話ができないので大丈夫です。

尚…ゆるゆるはじめましょうか。

尚…レディーファーストで枕さん、おすすすめ百

合作品への思いのたけをどうぞ!!!

枕…まくらです。

尚…よ！待ってました！まくらちゃん！

枕…江國香織とか、

光…ギター！というかネタを取られた江國香織

…。

枕…江國香織はそんなかんじですね。

尚…ホリーガーデンとか、そうですね。

枕…ですね！でも、百合とか薔薇って実体験と

咬み合わないんですね。

尚…分かります（笑）。

光…実体験とかみ合わないというのは、例えば

そこで書かれている内容は、少し幻想的とい

うこともあるのでしょうか？

尚…恋愛感情だけを純粹培養して美しいまま抽

出する装置として存在しているんじゃない

でしょうか？

枕…幻想的だとおもいます。

新…実体験って、読み手（ここではなおさんや

尾崎さん）の実体験ってことですか？

光…これは大事な所かもしれませんね。

枕…尾崎個人としては、百合体験は大変でした。

光…にがい後味が強い、みたいな？（苦笑）。

尚…男女だと生殖行為が伴いますが、百合や薔

薇にそれはなくて、ただただ「好き」を大事

にできる、「恋愛」を「恋愛」としてのみ扱え

ることが文学作品の百合の素晴らしさでし

た。実体験の百合は確かにすさまじかった。

リスカ、嫉妬、葉の3本セットでした。

新…なるほどな！。

枕…嫉妬!!!

光…うーむ。

尚…嫉妬…。

光…なおさんの百合の代表作はたとえばどんなのがありますか？

新…光枝さんの言われた幻想的、というのは、どういう意味ですか？

光…新嶋さんちよつと待って下さいね。

尚…とーいさんも巻頭で書かれていた漫画の

Blue か吉屋信子ですね。(※編集部注：『Blue』

…魚喃キリコによる少女漫画／巻頭…[四三](#)

[二頁](#)参照。本誌巻頭とは異なる。)

新…ほい、話したいときに話してください√光

枝さん

光…(わからん…)

尚…吉屋信子は明治・大正の作家ですね。

新…少女小説の元祖みたいな感じですかね

尚…そうですね√新嶋さん

新…読んだことないんだけど、「花物語」っていうのが、けっこう話題になったらしく、常磐さんも読んでおられましたね。

尚…文学的にも評価の高い人で、河出書房や国書刊行会から全集が出ています。花物語は

「乙女のバイブル」と誉れ高い一冊ですね。

新…ふむふむ

尚…とにかく流れるような文章が美しいのです。

光…実体験、と違うというのは、つまりイメージ

ネールな領域で過大になったりもする、文学

上での(のみの)世界、ということですか。こ

れは、批判とかではありません。というより、

割りともっとも大きな話です。幻想というコ

トバについては、ひとまずこんな感じでもいい

ですかね？

尚…吉屋信子に多大な影響を受けた嶽本野ばら

の「ミシン」は百合ですね。

光：たけもとのぼらも百合作品を書くか……

(ようやくついていけた)。

新：単純なリアリズムではないというニユアン

スで合ってますか？v 光枝さん

新：「乙女のバイブル」というのは、作品のどう

いう雰囲気からそう呼ばれるんでしょうか

v なおさん

光：彼は、非常に美的な世界観を文章に持って

ますよね。

枕：のぼらちゃん、うどんのイメージ。鍋焼き

うどんをこっそり、食べに行く女学生。

光：リアリズムをもっと写真主義と言い換える

と、僕の中ではしっくりきます。要はそうい

うことです。(また「幻想」について個別

にお話します(笑)。v 新嶋さん

新：すいません、定義について考えなくなるの

はいつものクセで(笑)。自分も光枝さんの意

見を受けて、大事なところかなーと思ったの

でお聞きしました。

新：鍋焼きうどんをこっそり食べに行くって、

なんかいいな。

尚：乙女というのは、例えば、汗や労働や人生

の苦勞を伴わない、美と理想の詰まったDO

LSですね。つまり、宝塚歌劇を思い浮かべ

てほしいのですが、気高く理想高く、感受性

はあくまで研ぎ澄まされている。光枝さんの

幻想と似ているかもしれませぬ。富美屋でし

たつけ、鍋焼きうどん。梅小路の。

光：(たぶん僕が言おうとした幻想と現実(実体

験)のズレの話については後にも繰り返し話

題になるんじゃないかなーと思います)。乙

女か……。

新…なおさん、分かりやすいです。ありがとうございます。
ございます。

枕…ソワレで、デート。女学生は簡単に汚れて
しまいますね。

新…赤染晶子の「乙女の密告」を思い出しまし
た。v乙女

尚…簡単に汚れるからこそその輝きたるや！
って感じですかね？（笑）。

光…野ばらの描く女性像については、非常にあ
る特定の服屋のモデルっぽいイメージがあ
ります。事実彼はよくどこぞのブランドの服
の名前を記述する。

光…そのへん、非常にイマジナリーだなあと
思うと同時に、そういう女性って現実にもた
くさんいるから（シヨッピングモールや街を歩

いていると）、なんか不思議です。

新…下妻物語って獄本野ばら……ですかね

尚…メゾンの名前と彼の作品を論じだすとき
がないですが、映像的にすると同時にメゾ
ンの持つ矜持や理想を少女に託すという手法
をとっていますからね。

尚…下妻はノバランですね。

枕…エッセイいいですよ、私は野ばらちゃん
好きです。

尚…わたしもです！「それいぬ」。

尚…文章うまいですよ。副題が「正しい乙女
になるために」。

枕…まくらちゃんの根本は椎名誠。おっさん。

光…『ロリイタ』の単行本の「ロリイタ」でない
方の話が好きです（笑）。あれだけは唯一良
かった……。

尚…羽のやつかな？

光…それです！

尚…あれいいですね。美しい。

枕…少女でいうと、大槻ケンヂの少女もすき。

光…まくらさん、それはどんな感じの少女ですか？

枕…

枕…思い込みで生きてる少女？

光…自分の世界が強い、みたいな？

枕…ただ、少女と百合は違うので、そこをわけ

ていかなば。

尚…ですね。少女と百合は違いますね。

光…お、その違いを詳しく教えてください。

枕…少女は処女性、でも、百合は無量大！！！！

光…無限大？あ、そういうことか。

新…もうちょっと詳しく教えて欲しいです。

尚…少女が少女を引き付ける可能性は高いかも

しませんね。処女性を重んじる少女が、同

じく少女を好きになるのは思春期特有の現

象かもしれないですが、百合というのはも

つとぐつと「恋愛」なんですよ。でもピア

ンともちよつと違うような。難しいです。ジ

エンダーの違いもあるのかも。男性にはない

感情なのかもしれないですね。処女を重んじ

る少女と童貞を重んじる少年では意味合い

が違うというか…。うーん、難しい。

光…青春小説、恋愛小説、現実世界で区分け

区分けられた人。私の持論ですが。

枕…区切るのも無粋ですし、でも区切らないと

わからない……。

尚…無粋！それが言いたかった（笑）。そう、区

切らないと論じれない……。

光…そこはね、可視化の問題だと思っただけですよ。

尚…可視化ですか？

新…これが百合だ！っていうのは各々あるけど、言葉によって厳密にしていくと、なんか百合そのもののもってるロマン（興奮）みたいなものが失われていくのかもって思いました。枕…私、わかんないんですが、おばさんとかおばあちゃんも百合？

新…尾崎さんのおっしゃった「無限大」っていうのも、縛られてない感があるからなのかなって。だから幻想的なものへも飛躍していく……。

光…例えば「そっいう人々」（と仮に言っておきます）は今も昔もいたけど、何かのキツカケでその存在が際立つようになった。しかし今のままではなんかもやもやする。それでは名前を与えよう。しかしその名前を持つこと

によって、彼らの存在はあちこちに論じられ、位置づけられ、つまり社会上存在することになるけど、常に誤解されつづけるというリスクも負う。

尚…百合が百合精神的なものならばあさんも百合ではないかと。

光…そして、何が決定的かといえば、

新…フーコーのクイア理論にもかかりますね、

光枝さん

光…僕は、「異性愛主義」「異性愛優位」がもつともだと思う。

尚…「異性愛主義」ってなんですか

光…つまり、男女一対のペアが恋愛だろうが日常だろうが人類史上、普遍的なものなのであるということ。これは誰も言ったわけではなく、人間には生きる権利がある、と同じ

くらいに、「公理」として存在する。

尚…クイア理論？

光…どうしようもなく存在してしまっている。

新…これは議論を呼びそうな話題である……

枕…定義付けをするか、永遠と萌え語りをするか……。

常磐誠（常）…そして「花物語」、読み終えてい

ない常磐が推参してます。こんばんは！

新…フリーコーって人は自分も同性が好きだった

らしいんですけど、男女の性差が文化的・権

力的に決められ、当たり前のもものとされてし

まうってという構造を解き明かしたみたいにな

んですね。そのフリーコーの研究が、後に「ク

イア理論」として発展していく……と乱暴に

いえば、そういうことなんですけど……

尚…フリーコーは読んでみないといけませんね……

ふむ……。

光…ジユデイス・バトラーが理論化して、日本

ではその主な翻訳者でもある竹村和子さん

（最近亡くなられた……）が、異性愛主義の

問題点を大きく追及しました。もちろんバト

ラーはフリーコーをだいぶ読んでます。

新…日本でも江戸時代とかには平気で男色があ

った。別にそれがまったく問題じゃなかった

時代があると。

光…イギリスでもそうだった、とフリーコーは『性

の歴史』で言っている。

尚…ああ、祖母は逆に全然同性愛に偏見があり

ませんね。大正時代でもそうですよ。

新…元をたどればプラトンのような人たちも、

少年愛をはぐくんていた。大人の男性が少年

を仕えさせて、精神の愛をはぐくむんですね

……少年はなにしろきれいだから。

常…ログ追います……。漫画でも江戸時代の腐

女子文化を描いた話があったなあ。衆道衆道。

光…そういえば、マンガ『カムイ外伝』でも。

常…少年はなにしろきれい、良い言葉……。しみ

じみ。

尚…常磐さん！それ！少年はなにしろきれい…。

新…自分の妻もね、ときどき言いますよ。

尚…名文…。

新…少年ってきれいだよね。年頃の女の子より

ずっと」。

枕…ハウルの動く城の温室に住みたい。

光…新嶋さん、あなたはやはりまず『狂気の歴

史』全650pp を読まなければならぬよ…。

枕…少年綺麗。

尚…ここで萩尾。トーマの心臓。

新…はひつ、読みます√狂気の歴史。(フリーコー

初心者なので間違ってるところがあつたら

指摘してくださいね笑)。

光…ちよつと長い話しますので、すすめといて

ください！

新…トーマの心臓は薔薇ですねえ。

尚…少年ってきれいだよね。年頃の女の子より

ずっと」うむ。少年の美しさは少女の処女性

に勝り、まさに、一瞬の宝ですからな。

新…一瞬の宝なのか…。「カ」。

光…『狂気の歴史』の第一部↓第二部の話題の中

で、例えば第一章「阿呆船」では、さまざま

な変わった人間が一つの船の中で運ばれる

という物語が語られる。そのリストは、酒飲

み、痴女、白痴、歯のない老父、魔女、死ん

だ犬を連れた子供、銭のない者、骨折者……。

現代からするとんでもない無秩序ぶりである。そんなバラバラな彼らを当時は同じ「非理性」として扱った。この頃に「精神疾患患者」は存在しなかった……。

新…光枝さんの講義だ

尚…ちよつと百合とずれてきてるような。フーコーについては、また改めて会を持ちましようか。

光…ペストの時代を経て、ある偶然的なキッカケで、「精神病院」と「精神病患者」は誕生する。ゆつくり時間をかけて。そう、現代では鬱、統合失調症、不眠症、様々に噴出して当たり前にもなっている精神病患者は、500年前には存在しなかったのだ。

尚…私も興味のある分野ではありませんが。

光…あ、新嶋さんに送りました。ぜひ参考にし

てください。どうぞ百合で！

新…ありがとうございます、光枝さん

尚…常磐さんは、おすすめの百合作品ありますか？薔薇でも。

常…勉強してくるつもりでしたけど探せなかつたです（涙）。最初は吉屋信子作品がそれだと思っていましたんご！

新…常磐さんは既に、薔薇つぼいのをご自身で書いておられる気がする。

尚…吉屋さんに票が！やった！常磐作品に流れる人間関係のあたたかさ、私も友情以上のもの（いやらしい意味ではなく）を感じて、感じ入りながら読ませていただいています。

新…そうそう、いやらしい意味じゃなくて、男の子たちの関係に、友情以上のつながりみたいなものを感じるんですよ。

尚…激しく同意。薔薇作品で悲しいものが多いのに常磐作品はあったかいんだから。

光…(笑)。

新…ああー、言われてみればそうかももしれない
V 薔薇は悲しいものが多い。

常…今も出先で発言バンバンできないんですけれど感涙で余計に発言できなくなりますわ。

光…あつたかいんだから。

尚…あつたかいんだから

常…ありがとうございます。あつたかいんだから。

光…なおさん、一つ質問を投げかけてもいいです
すか？

尚…はい！

光…僕は、例えばアイドルが好きです。アイドルをめぐる映像にはよく、女子同士でじゃれ

あう、というシーンがあって、それを僕はとても微笑ましく見るわけです。しかし、これは僕が男性として感じている感情のような気がします。このへん、どんなことを思います？

尚…アイドルか…。それは営業でじゃれるのか、自然にじゃれるのかにもよるだろうなあ。とは思いますが。

光…確かに、しかし議論が複雑になる気がする
(笑)。

尚…美少女同士の触れ合いにときめかない男子はあんまりいないんじゃないだろうか…。

光…フムフム。

新…んむ、それは自分はちよつと違いますな…

…

尚…新嶋さんどうぞ！

新…美少女同士の触れ合いには別にときめかないですよ。

常…三次元だからあかんのかあれには常盤もときめかない。

尚…美少女にはときめくけど？つて感じかな？

男性にもよるのか…？

新…「けいおん！」は楽しく見てたけど、「百合を楽しんだぜ」つて感じではなくて、青春を楽しんだ感じなんですよね。たとえばこれは、

男性同士の関係でもいいし、異性でもいい。

光…なるほ。性的な二オイはあまり感じないと。

新…自分はそので後戻りのきかない一瞬の関係ができあがっていく姿自体にときめいていて、性別はまったく気にならんですよね。

光…それはね、新嶋さんすごく分かる。という

のは、

新…美少女にはふつーにときめきます（笑）。

光…僕のときめきは、要するにこうなんじゃないか？？？　　てすごく思う。

尚…自分は女子だから既に「萌え」の感情すら理解不能なのです。

光…つまり、女性風呂の覗き見の感じに、すごく近いものを僕は抱いているのだ、と。

新…おい（笑）。

尚…光枝さんのえっち！！

光…いやん。でも、これは本当に。新嶋さんと僕の違いは、わりと大きい気がするのです。

新…「けいおん！」に多くの男性が萌えたのは、まあそういうところありますよね。

光…そうです。

新…女子だけの部室をのぞき見してる感覚。

光…そう。

尚：（この助平トークをどう薔薇と百合に収束させるつもりなんやらか…。）

新：ちよつと話を収束させるとですね、そういう目線があるかどうかっていうのが、男性向け「百合」と女性向け「百合」に分かれる気がするんですよ。

光：そう。

尚：なるほど。

光：百合は、見る対象によつて見え方が変わってくるんじゃないか、というのが僕の発言の意図です。もしくはそのような危険性があるのではないか、という。

尚：すごい理解したけど、衝撃の覗き見発言でかすみました。

光：あつ（焦）。

新：グスな意見が出たっばいけど、けっこう多

くの男性の目線には、そういうところありますね

光：なおさんにひかれた…。

新：自分は「ゆるゆり」とか、「ごちうさ」とか、あんまりおもしろいと感じないんだけど。

尚：グスとは思いませんよ。すごく理解しました。いやいや、ほんとに。面白いな…とゆるゆり？ごちうさ？

光：いや、でも言つて良かったと思います。新嶋さんと僕ですら「百合」の見方が違う。

新：男性向け百合アニメです。ああいう百合作品が、男性によつて消費されているのは、やっぱりのぞき見的感觉あると思う。

枕：幻想ですけどね（毒）。

光：そう、幻想（笑）。

新：おお、序盤の話とつながる（笑）。さすが尾

崎さん。そうそう、幻想ですわね……。

尚：百合自体を淡い性の対象としてパッケージング、商品化したような作品なんですかね？

▼新嶋さん。

新：欲望の対象としての「女の子」がいて……。

でも、決して触ることはできないし、女性の園に立ち入ることなんてできない。じゃあ「女の子」は女の子の園で何やってんのよ？
っていう妄想を、突きつめて行った感じですかね

尚：キヤラメル箱の中の宇宙みたいな感じですね。よく理解出来ました。ありがとうございます。

新：決して触ることはできないけど、近くに感じられる気がするから、やっぱり、淡い性の対象として、焦がれつつ、消費する……。

枕：そもそも、淡くないんでは（性として）。

光：それは、おそらく、「男性の頭の中での女性（たち）」なのでしょうね（憂い）。

新：かもしれない（笑）。▼淡くない。

尚：そうですね、気を使って（笑）、淡くしてしまいました。

新：距離の取り方が難しいなあ（笑）。逆に、B Lにもだえる女子たちの気持ちを知りたいなあ。

光：そうですね、薔薇の話を知りたい！

枕：目、反らし。

尚：性行為のあるB Lは、私は無理ですね。

新：うちの妹が、テニブリに遅れてハマっています……やばいです。完全に腐っています。（崇敬の念すら抱く）

光：高校生の時に、昼休みに女の子がテニブリ

のやつ読んでたんですけど、まさに〇〇ラしてるシーンでまじでびっくりした思い出が

(爆)。

尚…ガチのやつは、ちよつと…。朝チユンくらいで勘弁願いたい。大丈夫です。女子はみんな一度はテニプリに腐れるのですから。手塚×不二でした、私は！！悪いのか！！みんな敵か！！！！

新…(笑)。

光…敵じゃないよ！(笑)。

新…なぜ腐れるのか、どこに惹かれるのか、もつと詳しく！

光…あれは、最近の子の登竜门的な感じですか？

新…うちの妹は別のモノから始めて、紆余曲折を経てテニプリに辿り着きました。(そして

破壊力がものすごいと電話で興奮しながら言っている)。

尚…テニプリは決してBLとしては描かれた作品ではないのに、能力が高く、美形で、キャラが際立っていて、女子は理想の王子様を(跡部様を)見つけて崇拜し、自分の中でどんどん発展させていってしまう。恐ろしい漫画なのですよ。

光…ふむ。

新…な、なるほど……。中学生……。

枕…やはり、跡部様なのですね……。

新…「俺様の美技に酔いな。」

尚…女子にしても「決して届かない少年の園」にあこがれているんです。ギクつゝ枕さん。

枕…尾崎、この座談会まとまるのか、若干気になつてます

尚：ですね。どこにおとしたらいいのかわからない…。

枕：でかい！！

尚：でかい！

光：あ、でも自分はこの座談会で大きなものを見つけましたよ。本当にありがたいかぎりです。

新：こういう雰囲気（笑）の座談会楽しいです。

尚：本当に申し訳なく思っています。

光：結局「世の中は複雑だ」くらいしか言えませんが（笑）。でも、そういうことだと思うんですよね（笑）。

尚：お叱りはわたくしが受けます。

枕：あ、私もめっちゃたのしいですよ。

新：結論は必要ないですね。

光：あ、じゃあ、自分が今日言おうと思ってい

た作品をいいます。

尚：お願いします

光：江国香織『きらきらひかる』、ジャン・ジュネ『花のノートルダム』、三島由紀夫『仮面の告白』です（笑）。ちょっと文芸部っぽくなりますかね（笑）、ぜんぶ薔薇です…。

新：今 twitter に「仮面の告白」が話題に上ってないと書いたばかりだった（笑）。

光：おお（笑）。

尚：「仮面の告白」は読書会にしてもいいかもしれませんが（笑）。集客あるのかわからないけど、常々写真に収める図書館予約ポチ…。

新：ジュネ…。

光：あ、平野啓一郎が「仮面の告白論」書いてて、それも併せて読みたいところですよほんと。『花のノートルダム』は、ヴィジーヌとミニ

ヨンという二人の男性のだからだらしていて、金のない、時に狂おしい生活が描かれているんですが、とてもきれいだと思いました。よく獄中で書けたなと思います。

新…なんか比喩がすごいんですよね、ジユネ。友人が「イカれてる！」と絶賛してました。

光…新嶋さん僕はね、ジユネを読んでてフランス文学っぽくなるな〜と思いました。なんかね、破壊的なことやってるのにね、雰囲気は伝統的な作品とも通じるんですよ。

新…尾崎さん、それマジある。光枝さん、またジユネのこと教えてください。

光…ぜひ！

新…あ、自分からも一作いいですか？

光…どうぞ！

尚…おねがいます！

新…最近、ダンテの「神曲」読んでまして……。尚…すげえ。

新…地獄を抜けて、煉獄山のとっぺんまでいったところですよ。あと天国だけなんですけど、簡単に話すと、人生の道半ばで正道を踏み外したダンテくん（35歳♂）。暗い森でさまよっている、大詩人ウエルギリウス様（♂）の魂と邂逅する。ウエルギリウスはダンテに、「お前、いつしよに地獄行ってみる？ベアトリーチェもマリアもいいよって言うてるし案内してやるよ」とそそのかす。それでホイホイついていく。地獄には阿鼻叫喚の図が。ダンテはまだ生きてるもんだから、刑罰は受けないけど、めっちゃおびえる。

光…（ちなみに有名な漫画家が地獄篇を書いててそっちもオススメです。だれだっけ。）

新…そのたびに、「先生〜」とウエルギリウスにしがみつくダンテくん。「先生、抱きしめてください!」「うん」「先生、私を抱いて走ってください」抱く。とにかくウエルギリウスに甘えるダンテ。そしてその要求に応えるウエルギリウスがですね、非常におもしろいと思っただけでした……。

尚…それね。

光…薔薇的ですね。ウエルギリウスのイケメンっぷりなく。(白目)

新…男色の罪で、ふつうに地獄に落とされてる人がいるんですよ。

尚…アキさん(※編集部注…ツイ文メンバー)とも話したんですけど、「デミアン」って絶対薔薇ですよね。

新…ダンテのそれはなんなんよと。

尚…古典で結局、至高の精神の愛を描こうとするとしても、女性は排斥されがち。とまれ、ファムファタルになれても死んだり死にかけてたり。古典には薔薇、多いんじゃないですかね？

光…これはとても発見ですね。文学上でも、同性愛が異端的な目線で見られるのは、本当にごくわずかな期間にしか過ぎない。

新…ソドムの例があるので。

尚…同性愛っていう意識すら当人同士になさそうですよね。

光…そうなんです。

新…神曲のキリスト世界では、男色はかなり重い罪として描かれてましたが。

光…長いキリスト教の歴史、じっさいにはどんなだったろう……。たぶん分かりませんね。

新…ソドムの解釈にも、色々あるみたいで、調べてたら止まらなくなりました……

尚…旧約聖書に描かれているような禁忌って、結局「性行為」の有無な気がします。子孫繁栄が前提だから、快樂が目的の性行為自体ダメで、キリストの復活を最初に見たマグダラのマリアも娼婦で民衆に石を投げられる存在でしたよね。なので、「精神的な至高の愛」は同性間のほうがむしろ生じやすかったのかも。精神的に強く惹かれあうことに「同性愛」の意識はなくて……。でもこれってすごくえろいですね。

新…上でちよつとふざけて言ったのは、ダンテの一人称が、非常にユーモラスだったからです。(念のため……)。

光…ああ、なるほど。面白い。

尚…旧約には性行為の禁忌がかなり詳しくかいてあるんですよ。家畜と交わってはいけない、妻の姉妹と交わってはいけない、母と交わってはいけない……と。

枕…枕、ダウンです。悔しいですが離脱です。尚…枕さん、お疲れ様でした。楽しかったです。く！ありがとうございました。

尚…では、座談会しめます！参加いただいた方、お疲れ様でした。ありがとうございました。

【座談会・終】

瞳子

常磐誠

連載第三回「渋柿騒動」

その日。琥太の試合当日の朝。だというのに、あいつはケビンと共に私が夏休みの課外授業の為に家を出るのを見送りに来た。

「ここに泊まらせてもらおうとこうして朝ゆっくりできるのが一番ありがたいよね」

そう言う琥太の表情から、私はいつもと違う雰囲気を感じることができなかった。いつも通りに琥太はケビンと一緒に私を見送る。にこにここと。へらへらと。

私は無言で、まともに琥太やケビンの顔を見たり、そして当然微笑んだりもしないで、無然とした顔をしたまま家を出る。朝早い時間に学校へ向かうその足取

りは、重い。それがそのまま、表情にも透けて出ていた。母も父も、そんな私のことを見ても何も言わない。父に至っては、見えない。行つてきます、のか細く消えそうな声に、行つてらっしゃい。その声もまた小さかった。それがまた私の気持ち重たくさせる。じゃあ大きければ良かったのか、励まされたのか。そんな風に問われても困る。それは傍迷惑というものだから。

結局、それは思いやりのつもりなのだ。母の。そして父の。ありがたくもなるともない、思いやりなんだと思い、そしてそれが全くもって嬉しくなかった。もう一つおまけに、傍迷惑な挨拶をする琥太の存在が、ありがたくない。更に更におまけを追加しよう。筆談器を忘れてしまった。気付けばまたあの青々しい葉の生い茂る道。学校と家の中間地点辺りまで来て気付いてしまった。

取りに戻ろうと思えば戻れた。正直戻つた方が良いとも思った。それは本当だ。でも、それで琥太に出会い、また微笑まれてしまうのが、何故だか無性に嫌だと思つてしまった。私は眩しい青の葉から目を逸らして立ち止まったまま三秒間考えて、良いや、メモ帳あるし。そう思つて学校へと歩みを進めた。もう、青々とした葉っぱのことを気にかけることもない。下を向いたまま歩いていると、自

ずからその眩しさに目を眩まされることもないのだから。

今日の授業は平和授業という名の特別授業だった。特別、とは言ってももう一世紀を余裕で過ぎた今、重要性を叫ぶ声も縁遠いものを感じてしまう訳だ。当然その重要性が理解できないという訳でもない。当事者が生きていない世の中になつてしまったのだから。でも、結局当事者でないという現実が変わることはないのだ。しかも私は、そして校内の生徒は、女ばかりだ。この事実を前に、戦争という重みは私の中でひび割れてゆく。

「あーくっそだりー。あたしらもし今戦争起きても行かねーし」
「そもそも女に戦争とか関係ねーし」

という軽い発言を教師の前でするような連中を、

「そういうこと言わない。今年是新ネタなんだから我慢しろよ」

と教師がなだめる。教師が彼女たちに合わせているのか、それとも本心なのか。それはよくわからない。

若手で、どちらかと言えば見た目の良い部類と評されがちな男性教師。地歴の授業と、私たちの担任。授業がおもしろいとは思わない。わかりやすいかどうか。

否だろう。そんな感じで大体評価は一致している。そんなもの。そんな人。

そんな訳で私はその発言を、本音に近い部類であると思ってしまうていた。何せ、新ネタ、ときたのだから。私の耳についた言葉。E1、ト音記号で唯一五線譜の上に乗るシの音に若さを感じると同時に、耳障りな不快さを感じずにいられなかった。

体育館で眺めるプロジェクターには、坊主頭の男子達が映し出されていた。彼らは今の私達と変わらない年頃で、国を守る、という大儀らしいことのために命を散らした。その犠牲がなければ今の日本はなかった。などというアナウンスは、まるでお涙頂戴を誘うように感じられて聞いているのが正直辛かった。そんな中で、

「—————！」

私は目を疑った。そこに映っている姿が、余りにも琥太に瓜二つ過ぎて、一瞬だけ、私は呼吸に苦しんだ。字幕テロップに映る名字は、木村。全くもって琥太と違う名字を見て、ああ、バカらしい。そう思っ、そして次の瞬間、その木村さんが乗った戦闘機の特攻シーンが流れたのを目にした私は、

「……………」

言葉を失っていた。

戦争というものの重みはクラスメートと担任のせいで瓦解していたはずなのに、気付くと私は顔を伏せ、無事に帰れない私と同年——だった——木村さんのことを思ってしまった。そう。死んだのは、帰ってこれなかったのは、木村さんであって、あいつではない。そんな単純なことが、わからなかった訳じゃない。なのに、私は軽い一言すらも、感想文に書けないで提出してしまっていた。

そしてお呼び出し、という予想通りのコースと相成って、職員室へ、という状況が今私の目の前に展開している。所詮他人事だ。戦争や特攻の話ではなくて、今この景色が、他人事だった。

職員室では担任が私の提出した白紙の感想文をデスクに置き、やや不機嫌そうな顔をして腕組みをしていた。私が眼前に立ったのに気づくと、一瞬だけそのしかめ面の緊張を「意識的に」解き、笑いかけるようにして、

「お。来たね」

なんて言う姿に、また苛ついてしまうのが私だ。筆談器は家に置いてきてしま

った。ポケットに忍ばせてある手帳とペンを取り、

『大事な用事があるのですみませんが感想文は課題にさせてもらえませんか？』と書き付けて担任に見せた。

「そう。それなんだけどね……」

と担任は白紙の紙、私が書くべき所が全く書かれていない不適切な部分を感じと見つめて、

「百合神はそういう風なことをする子じゃないって僕は思っていたから、ちょっと残念だなんて」

そんな言葉を口にした。私は腕時計をちらり、と見る。時間がない、というのはあまり相応しい言葉ではない。実際、今出たしまえば大会が本格的に始まる前に国技館までたどり着けてしまう可能性だってある。だから、時間がない、というのはやっぱり相応しくないな、と思つて、そして、

『そんなこと、ってどんなことですか？』

早く書いて、あまり綺麗でない字を見てまた苛々する。でも、職員室に長居したいとは思わない。ゆっくり丁寧に字を書くことも、正直億劫だった。

「だってあんなに真剣に見てたじゃないか。え？ そんなに見ていたのに感想文が書けないなんてあり得ないと思うんだよ。俺は」

担任の言葉は、私への信用とも感じられないことはないが、それも崩れてしまいう訳で。もう色々なことが馬鹿馬鹿しくなる。

木村さんの映像が親戚に似ていて……などという真実を言える訳もない。私はだんまりを決め込んでいた。手話は通じない相手で、ペンを走らせることもできない。腕を持ち上げる力も湧かない。担任からの言葉は続く。

「何でも言ってくれて良いんだよ。遠慮しないで、書けなかったのにも理由があるんだろう？」

そうやって耳障りの良い言葉を、優しそうなトーンに乗せて語るのが、こいつの嫌らしいところだ、と私は思っている。信用ならない。もう時間の無駄だと思いい、気怠い運動不足の腕をどうにかこうにか走らせる。

『すみません。もう良いですか？ 今日には親や親族と約束があるので。もう時間がないんです。感想文は明日改めて提出しますので』

それだけスラスラ書いて、担任の目の前に提示する。

「いや待ってよ。そんな風に言われてもこつちだつて納得できないし、普通に残つて書いていけばいいじゃないか」

一挙に不機嫌そうな顔と声でまくしたてる担任を見ると、ああ、ついに、というか、またも、の方が適切だろうか。馬脚をさらされてゐる気分になつてこちらが苛々する。こいつ、使えねえつて言われてるクチなんじゃないの、みたいな。そんなトゲのある言葉が喋れないから私からは出てこない。それで良いと言われる身にもなればいい。実にくだらない。実に面倒くさい身の上だ。

「私はもうここに長居するのが面倒すぎて、さっきのメモの、『親や親戚と約束』の部分でペンで乱暴に叩き、ついでに白紙の感想文もかすめ取つてそのまま踵を返す。

「おいコラ待ておい！ 全部お前が悪いんだろが！ おい百合神！ 待てよオイ！」

背中越しに聞こえる怒声か罵声か、その類は全シカトを決め込んで後ろ手にドアを閉める。失礼しましたの声も出ない出せない出来損ないの声を切つて叩きつきたいような、そんな気持ちになる。さぞや役立たずの器官も、この時は

かりは大声で喚いてくれるだろうか。

馬鹿馬鹿しい思いを抱えて、未だに何か言っているっぽい使えない担任から逃げ去る私のことを、生理か、とかそんな風に揶揄してあいつらは笑うだろうか。下らない。ああ、そこまで思つてようやく思い出しました。私つて、ここには居場所ないんです。そうでした。鞆を取りに教室へ戻り、そのままJRの駅へ歩き出す。今日は天気が良い。どんよりとした私の気持ちを、最高に見下してくれている。素晴らしいですね。そう思つて、そのままの気分で、実際の空とはまるで反対の、暗雲立ちこめる心持ちの私がJR総武線に乗り込んだのと同時にメール着信を知らせた携帯には、母から打たれた文章が連なっていた。

今日のこと、先生から電話で聞きましたよ。感想文は課題として、明日の早朝提出だそうです。

その内容に対して特に返信はしなかった。目的の駅まではたった二駅で、返す暇がなかった。……誰に対する嘘なのだろうか、我ながら呆れかえる思いがした。

両国駅が何十年前からこういう姿形をしているのか、私はよく知らない。電車

二つがすれ違えるだけの、最低限のスペースが確保された、一つの島だけが存在する駅舎。階段のどちらを降りるので降りた先の雰囲気がるで違う、ということを私は写真でしか知らなかった。

その西側出口、国技館に近い方から出て行こうとすると歴代の横綱の中でも輝かしい経歴を持つらしい人が大きな、本当に大きくて立派な額縁に飾られ、奉られているのが目に入った。本当にご立派なこと、とだけ私は思った。

それが琥太の祖父の写真であることは、両親や幼い日の琥太達に聞いて知っていたけれど、当時はともかく今の私からすれば、それを含めても、それだけしか感情は起こらなかった。力相撲の石像も、これの何が力相撲なのか、これっぽっちも意味が理解できなかった。

気持ちの晴れないまま歩いても三分でたどり着く国技館の入り口近くでは沢山の高校生が、そこから稽古をしていた。全国まで残っている連中だ。琥太より体が大きいかどうかは置いておいても、やはり体は屈強という言葉がお似合いの、ごつい連中ばかりだった。……あまりにも、私は場違いに思えて、本気で気持ち悪かった。琥太や彼らのことではない。私がいる場所としては、ここはあ

まりにも不似合いだと思ってしまうわずにいられなかった。自分が消し飛びそうな氣にまでなってくる。鬼氣迫った彼らの雰囲氣がそうさせるのか、午前中に見たあの映像が未だに影響を与えているとでもいうのだろうか。どうにも、氣分が悪い。

そのまま帰ってしまおうか。踵を返したく思えたけれど、流石にそれではここまで来た意味がない。今までとは少しだけでも違う行動を取らないといけない、その思いと深呼吸だけで、私は会場へ、琥太達の戦いの場へと足を踏み入れた。すると、どうだろうか。敵かな、静かな空氣には、萎縮するような、恐怖するような感覺を覚える。自分には不釣り合いな、場違いな心地がそうさせるのか。私が看板の指示に従い歩を進めていくと、わっ、と光に目を眩まされるような感覺に襲われる。そして次の瞬間には、わあっ、という歓声が体にぶつかってくるように感じた。それが私が国技館の土俵を目にした時の、感覺だった。

偶然にも、丁度その時土俵の端で蹲踞の姿勢をとり、一礼して勝ち名乗りを受けていたのが琥太だった。土俵を降り、こちらに近づいてくる最中、琥太の通う高校の名がデザインされたジャージを着た、恐らく一年生であろう一人が、

「お疲れさまです！」「お疲れさまです！」

と我先に争うようにして琥太に歩み寄り声を上げタオルを差し出す。

「……………」

琥太は無言のままタオルを受け取ると何かしらの指示を二人に出した。

「はい！」「はい！」

とまたも威勢の良い声を張り上げた二人は琥太に頭を下げて私がいる方向とは逆の方へと駆けて行ってしまった。そして琥太はそのまま私がいる方に歩き、そして、

「わー！ 柚真来てくれたねー！ 本当に来てくれたー！」

とほぼ叫びながら突進してきた。瞬間周囲の人々が私たちの方を向く。私は羞恥と怒りを感じ、そして筆談器を忘れてきたことを後悔しながら、顔面にボールペンが刺さるように持って待ちかまえた。

「危ない！ 刺さる！」

琥太が気付き一歩手前で止まったところで私は更に前蹴りの要領で股間を狙う。

「怖い！ 別の意味で刺さる！」

琥太が股を閉じようとしたところで私は足を止める。

『刺さっておけば良かったのに』

私が手話で話をする、

「いやいや。危ないでしょ？ 下手すると死んじゃうよ？」

びっくりした顔で抗議する琥太。手話を通じるということは、やっぱり色々スピーディで捗るな、と感じながら、でもやっぱりそれを実感する相手がこいつだった、というのが癪だ。そう思って私は、

『死んでも全責任はこいつにありますって説明するわ。私』

そう言って最後に親指を地べたに力強く向けた。

「ヒドい……」

琥太が落ち込んだ顔をして呟いていると、

「オイ灌中！」

というややドスの利いた、強く低い、それでいて女性的な雰囲気の声が聞こえた。それは明らかに琥太の後ろに立っている女性から聞こえた声で、そして私は

その人が明らかに顧問であることを感じ取った。別段服装などからそれだとわかることはなかったが、何となく、感じられた。そしてそれは、

「式森と福田から報告受けた。というか見てたけどな。つか彼女か何かかな？ その子は。いちゃこらやる暇あったら自分で報告に来いよっていう話なんだが」

という説教じみた話からみて、間違いはないんだろう。そして、

『彼女じゃありません』

とだけ手話で返す。伝わらないに決まっているが。

「……まさか耳が？」

と私の手話を見た顧問が呟くと、琥太がくるっ、と私の方を見て、

「いや、耳は聞こえ……って、ごめん。今何言ったの？」

と驚いたような顔をして聞いてきた。私がいきなり手話を使ったことを少しだけ意外に思ったのかもしれない。確かに、手話を通じる相手なんて限られているのに、無遠慮に使うのも中々ない話ではあるだろう。そう思ったが、でもそれを素直に行動に表せるほど私も成熟なんてしてはいないのだ。

『別に。何も』

そう手話で呟いて、

「あ、そう……」

そんな何の掘り下げも起こらない返しを琥太がすると、

「しかしあの琥太が女を連れ込むなんてなあ……」

と顧問がしみじみ呟いた。

「いやいや連れ込むなんてそんな……」

と琥太は少しだけ顔を赤らめるようにして手をぶんぶんと振りながら答える

と、

「今日は赤飯かな」

と笑って言いながら私の方に向き直り、名前何て言うの？ と聞いてきた。ペ

ンは手に持っていたがメモ帳は鞆の中だ。それを取りだそうとしていると、

「彼女は百合神柚真さんです。僕のはとこです」

と琥太が代わりに答えてしまった。

「親戚かよ……いや、でもはとこは確か結こ……」

顧問が結婚、と口にしようとするのを、

「こら！」

と琥太が遮った。その後顧問から頬を伸ばされてしまつて、いだだだだ。という琥太の呑気な声が入った。

「えっと、柚眞さんだっけ？ こいつの頬マジでぐにぐにで気持ちいいからオススメだよ。ま、今日はゆっくり応援してつてね。じゃ！」

そう言う顧問は私も既に知ってはいる——実際にやりはしない——情報を口にして立ち去つていった。ご機嫌に鼻歌まで歌いながら。私が呆気に取られていると、

「うん。じゃあいつまでもここに居るのも何だし、うちの控スペースに行こつか」

という琥太の声かけを受け、先導されることになった。行く道すがら、どうしてあの顧問はあんなにご機嫌だったのかを訪ねたが、

「……気にしない方が良いことも、あると思うんだ」

というちよつとした呆れというか、ため息と乾いた笑いの混じつた微妙な返

答に、私はそれ以上のことを口にしなかった。しなくても、私もその言葉については同意する所だった。

私を先導する琥太はいつものようににこにここと笑っていた。笑っていたが、出会い頭はともかく、今の琥太はもう浮き足だった所もなく、大人し気、というか、いつも以上に鈍重な気配を感じさせた。動き自体はきびきびしている様子なのだけれども、昨日までの琥太とは何かが違う。そんな違和感のようなものを私は感じた。

そうこうしている内に土俵からやや離れた、琥太の高校名が張り紙されたスペース。そこには既に一人、中年の男性が腰掛けていて、近づく琥太に気付くと軽く手招きをしてきたのが私にも見えた。

「よお。やっぱ盤石なんじゃねえの。琥太……て、お、おい。お前……そこにいるのはまさか……お前！」

琥太とハイタッチを交わした直後に私に気付いたその男はいきなり狼狽し始め、仕舞いには叫ぶような声をしていた。

「……今日は、赤飯だなあ……」

しみじみと、またもさっきの顧問と同じ言葉を口に出していた。相撲をしていると、ただで女っ気がないのは十分に察することができただけでも、まさかここまでとは、という思いもして、私は面食らう様な感じを覚えた。

「いい加減にしてよね、あんちゃん。そういうんじゃないから」

さっきの顧問と比べると大分開けっぴろげに否定すると琥太は他の高校と比較しても狭いスペースの一角にドカリと座りペットボトルに口をつけた。

「いやいやー。女っ気ゼロのお前がいきなり国技館に女の子をつてもう今から槍降って来るぜ。電車止まって俺帰れなくなっちゃうぞどうすんだよ。オイ豪快になつたもんだよなあー」

酒でも呑んでるのかと思えてくるような饒舌さであんちゃんと呼ばれた男はコップをくいっつ、とあたりながら私を見ていた。

「ほら。柚真。歩くセクハラじじいの近くに居ちゃダメ。こっちに来て座っててよ、ね」

琥太は手招きしながらこちらに私を呼ぶ。

「おいじじいとは何だじじいとは。俺お前とそんな違わねえだろうがよ！」

と男が睨みつける。私はその言葉に少しだけ驚いていた。

「ほらそんな法螺吹くから柚眞が驚いてる。二十五弱も違ってたら大分違うでしよ。じじい」

『四十くらい？』

私がそう返事すると、

「ん？ あんた耳が悪いんか？」

と思ひ切り口にして尋ねてきた。私の耳が本当に悪かったらその質問も聞き取れやしないだろうにと思ふ反面、結構年がいった人を相手にするとこのパターンは意外と多い。四十程度と判明しておいて何なのだが、五十過ぎだと思つた私は、どうしてもそういう基準で考えてしまった。

『耳は聞こえますがしゃべれません』

と、さつき琥太に先導されている間に出しておいたメモ紙に書き付けていた文を見せる。

「ほお」

とだけ答えたこの男は琥太の方を向いて、

「まあ本当に耳が聞こえねえんだっただらここから根ほり葉ほり聞いてやりてえところなんだがよ。まあようはあっちの方はどうなんだってところから手始めにッ！」

流石に琥太から軽く叩かれる。

「ごめんね。柚眞。この人デリカシーっていうものを遺伝子的に持ってないから」「何言ってるんだよ琥太ア。俺はお前のアソコが小指の先サイズだった時から痛え！」

思い切り耳を引つ張る琥太に対して、

「なんだよなんだよ。お前今日は妙に暴力的じゃねえかよ。俺はコーチ様だぞ？わかってんのかよ。え、全くよお……」

いきなり自分の権威を傘に着始めるが、

「紹介遅れたね。この人一応コーチの斉藤大吉さん。あんちゃんって呼んでる。一応紹介するけどこちら百合神柚眞さん。言っとくけど一回会ったことあるからね。まさか忘れたとか言わないよねまあ忘れてても良いけど忘れるような人だし柚眞は別にこの人と仲良くする必要ないからね」

と数段冷たい紹介に打ち消される。……というか私もこの人と会ったことがある記憶一切ないが。

「は？ いつだよ。てか一応ってなんだよ」

「六歳の時」

「随分まあ昔の話……ああ！」

それだけで思い出したのか大吉さんは手を打ち鳴らして納得した様子だった。

「百合神ついたらアレだな。確か親方の……姉さん家の」

「そうそう」

「その娘さんかあ。うわあ……つかもうあれから十一年経ってんだし俺も気付くはずねえよ。でかくなつたなあ。そうそう。ぜんっぜん口利かねえ女の子だなどか思ってたんだよな〜こりやまたべっぴんになつてまあ。この男はやめとけよ？ 俺の方がいいぜ！ 俺にしちやいなよ！」

最後の方はスルーするとして、私も何となく思い出してきた。そうだ。昔のあの秘祭の日。宮ノ訪神社の相撲大会の日にたくさん居た大人の中に、この人もいたのだろう。具体的に思い出せるはずもないが、向こうは記憶に残っていたら

い。私の特徴を思えば、それは致し方ないだろうが。

『そういえばケビンと貫太は？』

うるせえわこの妻子持ちが。と毒づいている琥太に私がメモ帳に書いた文字で尋ねると、

「あ、ケビンは次の取り組みだよ。だから土俵傍に……あ、そこ。そこにいるね。貫太だけど、元氣と健太に捕まって向こうの控えスペースに拉致られてったよ。直に戻ってくるでしょ」

とのことだった。

「貫太ってあの中坊。知り合いか？」

と大吉さんが尋ねてくる。琥太ははあ、と露骨に肩を落とす。私が手話で答える。

『弟です。お世話になっています』

手話を通じない大吉さんが琥太に目を向ける。

「百合神っていう名字の時点で気付こうよ。弟だよ。あと、弟がお世話になっています、だそうです」

その通訳を受け、

「うるせえバカ。……ゲフン。丁寧にもです。かわいい弟さんをお持ちで」

「絶対思つてない」

「うるせえバカデブハゲ。……おほん。いやあ彼にこんな美人なお姉さんがいるなんて。今日からもっと優しく接しますね」

「ハゲって……」

程度から言えばどんぐりの……という言葉がお似合いな陳腐極まりないやり取りを繰り返す九分狩り坊主の琥太とあんさんは土俵の方に目を向ける。タイミング的には、呼び出しを受けたケビンが丁度相手と立ち会いをしているところだった。

その取り組みは一瞬にして終わる。体を右に左にと引っ張り回し最後は横を向いた相手を押し出して、ケビンは勝利を収めた。

「お。マジで袖真来てんじゃん。正直来ないと思つてたわ俺」

控えスペースで意外そうな顔をしてケビンが言うのを聞いて琥太が、
「ねー。来てくれて良かったなあ。ゆっくりしてつてね」

と呑気に、へらへらとして言うものだから、

『ここはお前の部屋か』

と一喝してみたりもしていた。えへへ。と笑う琥太には、緊張感が感じられなかった。拍子抜けするような心地がして、私は裏切られたような気持ちになっていた。私は心のどこかで、早く二人が負けてしまつて、さくつと帰れたら楽なのに。そう思っていた。

——ただ今より、四回戦を始めます——

そんなウグイス嬢のアナウンスを横目ならぬ横耳という感じで聞き流していた。でも、

「……………」

琥太は、違っていた。すつく、と速度もなく立ち上がると目を閉じ、私の横を無言で通り過ぎて階段を一段下り、そこでじつ、と佇む。

大きい図体だけでも目に障る時があるというのに、まさかのお尻が目の前にでん、と存在する状態になり、私は流石に邪魔だと思ひ琥太をどかそうとした。しかし、

「おっと。今はやめとけ」

と肩をあんさんに軽く叩かれて制された。何事かわからないで琥太を見直している、私はぎよつとした。琥太は、いつもと変わらない。服を着ていないということはあるけれど、だからこそ伝わる事柄があった。服ではなく、体自体が大きいこと。いつもは、丸まるとした雰囲気の、見た目通りの背中が、今は違うのだ。今日、国技館で初めて見たまわし姿は、変わることなんてあり得ないはずなのに、今の琥太は明確に違う。でも、何が違うのかをうまく言葉にして捉えることができず、私は気持ち悪さまで覚え、鞆の中から取り出そうとしていた。ペットボトルを取り落としてしまった。そのペットボトルは琥太の足下へ転がり、止まる。これ幸い、と私は思った。でも、

「……………」

琥太は微動だにしない。まるで足下の物には歯牙にもかけず。という言い方がピタリと当てはまるような、恐怖が背中越しに伝わってくる。

ペットボトルを拾いに行くこともできず、そして琥太に拾わせることもできない。沈黙が流れていると、不意に口を開いた。

「柚眞。ごめんけど僕は拾えない。拾いに来るのは大丈夫だよ」

琥太、だった。そう言うとそのままあいつは無言で数段階階段をまた降りる。

「……………」

私が何も言えないままペットボトルを拾うと、それに目をくれることもなく、
「じゃあ、行ってきます」

そう言って土俵へと向かっていった。おう、行ってらっしゃい。あんさんだけが、呟いた。

私は、この雰囲気、空気を、知っている。そう思った。正しくは、思い出した。

思い出した場面は、二つ。一つ目は、父の剣道の仕合だ。父は名前が呼ばれる頃になると、こんな風に集中を高めだす。私や貫太が幼くて、喧しくとも、母はたしなめたり、または怒ったりするものの、父は何も言わなかった。何も言う必要がなかったのかも知れない。琥太は私が転がしたペットボトルが見えていたが、父には見えなかっただろうし、元々の雰囲気からして、だ。私たち姉弟がいてもいなくても、関係なく集中していた。そして時間が来ると、行ってくるよ、

とだけ言い残して静かに立ち去っていく。父の仕合前の、いつもの風景。決まりきったやり口。そう、それは最早所作と言い換えても良いくらいの光景。貫太は呑気にがんばってー！ 何て叫んだりして。私は父の応援用のおもちやの太鼓を鳴らしたりして。そして母は、行つてらっしゃい。そう呟くと、後はもう父の応援をしなかった。仕合を見ることさえしなかった。理由を尋ねても、お父さんのことを信じているからですよ。と毎回答えるが、私はそれが嘘だと思えてならない。かと言いつつ、本当が何なのかも、見当すらつかない。

二つ目。昔の、話。曾祖父が死んで、その葬式で、曾祖父が骨になる、というその時の琥太の目。そして琥太の周囲に漂っていた空気。私が忘れたい。早く忘れたいと思っていたはずのあの空気。それが背中越しにさっき伝わったのを、私は思い出した。

「泣くもんか。……泣くもんか」

そう呟いていて、それでいて涙を目に一杯に溜めていたような、そんな一人の男子に過ぎない光景に、あの日誰しもがその異常さに気付いていた。二十歳になる前に横綱になった琥太の祖父も、私の祖母も、人付き合いが嫌いであまり人前

に顔を頻繁には出さない祖父も、赤の他人同然で、私との繋がりが全くわからな
いような遠い親戚も、そして目が見えないはずの父も、まだ幼かった弟さえも。
あの時の琥太の異常さに気付いていた。

「こたにい、こわいよ」

と貫太が父に泣きつくくと、その頭をなでてあげながら、大丈夫だよ。そう言っ
ていた。その顔は笑っていた。貫太を安心させる、優しい笑み、では断じてなか
った。

「そう、か……やっぱり……そう、なんだね」

小声で呟く声は、私の耳には間違ひなく届いていて、そして覚えている。まる
で探し求めていた仇に会えたかのような、おぞましくさえある笑い顔で、私は
父も怖かった。怖くて目を逸らした先にいた琥太の祖父の顔まで、父と同じ顔で
笑っているのを見てしまった私は、

「あら、珍しいこともあるもんだ」

祖母の和服の袖にしがみついていた。無言で、何も言えず、ただしが
みついていた。

あの、異様なまでの場の空気、オーラ、とでも言うようなものが本当にあるのか、私は中学、高校と進学していく中で、常々ある訳無いと否定し続けていた。でも、それは多分、忘れていた。それだけだったのだろう。

琥太は、一瞬で勝ってしまった。私はその一番を、全く見ていなかった。相手が、琥太よりも二周りくらい大きいのを見て、勝てるんだろうか、と思ったたら、相撲を取らずに相手が土俵を降りていって。不戦勝だろうか。そんな風に思ってしまったくらいには、一瞬だった。

一体、何だというのだろう。戻ってきた琥太からは、もうさつきまでの、何かに取り憑かれたかのような恐怖感を感じることもない。にこにここと。へらへらと。「勝ったよ。柚真」

そんな報告を受けても。何の実感も湧かない。生きた心地がしない？ 少し違う気がして、でも、このフワフワとした心地の悪さは、私の心を支配して離さなかった。

一体、何だというのだろう。たった一瞬。長くて十秒程度で相撲は終わると聞く。その一瞬の為だけに、あんなにまで琥太はなれるというのか。一体、何なん

だ。そう思っていると琥太は席を立つ。

「どこ行くんだ？」

というあんさんの問いかけに、

「厠だよ厠。先生への報告ついでに、ね」

琥太はゆつくりとまた階段を降りていく。

「あんた。さっきの琥太の相撲、見てなかったろ？」

というあんさんの問いかけに、私は無言で頷く。

「今まで琥太の相撲見たこと無いのか？ 親戚なのに」

その問いかけにも頷くと、あんさんは頭を掻きながら、

「まあ、初めてあんなんやられたら、怖くもなるわなあ。うんうん」

そんな風に勝手に納得していた。でも、その意味するところは、十分わかる。

「眞琥さんが死んでから、かな」

あんさんが、語り出す。あんさんも親方——琥太の祖父——と親交があり、曾祖父の葬式に出席していた。つまり、私が思い出してしまったあの光景を見ていた。親方や私の父がおぞましく笑っていたことも、私以上に覚えていた。

「眞琥さんの目はやべえ。あの目に睨まれたらもう。シヨンベンちびるとかそんなチャチなレベルじゃねえもんな」

やや下品な本音ではあったが、確かに、曾祖父の一喝は、本当に凄まじかったと聞く。誰もが曾祖父のことを慕っていた、というより、畏怖するような部分もあったという。とてつもないリーダーシップも然ることながら、人の心を見透かすような、いつの間にか心を掴まれて、惹かれてしまうような。そんな不思議としか言いようのない力を、曾祖父は持っていた。

「でも親方はそれを持っていない。んで、親方は三つ子の一番下だったな。他の二人も、持っていない」

『その内の一人が私の祖母です』

「ああ、そうだったな」

私のメモに目をやって、思い出したように相槌を打つ。

「血筋つつうか、まあ遺伝はやっぱしないんだなあ、って親方は頻りに言うんだけどさ。遺伝してたんだよな。ほら、あのおっかない盲目の……」

そこまで言ってから、あ、しまった。という顔をする。

『父はそんなにおっかないですか？』

苦笑しながらメモを見せると、あー、オホン、というわざとらしい咳払いをしてから、

「今のは聞かなかったことにしといてくれな。だってあのひ、……柚眞さんのお父様は目がお見えにならないというのに人の心を見透かすようなことを仰られますもんね」

『わざとらしいですね』というメモを見せながら、私も同じことを思っていた。なるほど。父のそういう態度というか、雰囲気は曾祖父譲りのものだった、という訳か。でも、そこが琥太とどう繋がるのだろうか。父の子供は、私と、貫太だ。

「ほっといてください。んで、琥太があの日見せたあの目なただけどな……」
あんさんが言葉を続けようとした時に、

「あの日っていつの話ー？」

と琥太が戻ってきた。間が悪い奴だ。構わず話を続けたい、と思ったが、あんさんに私のアイコンタクトは通じず、

「さあて、何のことでしょうなー？」

と言葉を濁してうやむやにしてしまった。そして、また次の取り組みを告げるアノウンス。するとまた、

「じゃあ、ごめんね」

と言って琥太はまた私の居るところから一段下がった所に仁王立ちをして息を整える。背中越しに伝わる感じが、また、あの日のように、私を取り囲んでいて、

「行ってきます」

その一言が発せられて、また私は返事ができなかった。

一時の為だけの準備が、これほどなのだと思い知ると私は、それだけでどつと疲れるものを感じた。次の仕合は流石に見逃すことはない。琥太は三年生を相手に、またも一蹴する形で勝ちを決めた。その後の所作にも乱れはない。名を呼ばれ、勝ち名乗りの後の手の動きも、どうやら他の人よりもしつかりと時間をかけて行われているらしいことに私も気付くようになっていた。

顧問への報告、付け人と言わらしい一年生への指示、それらをしてきばきとこなしながら自分の行動を淀みなく行っている琥太を見てあんさんが、

「琥太の強さは基礎の強さよ」

そう呟いていた。私が振り向くと、そこにはいつの間にもやってきていたのだろうか。貫太の姿まであった。

「一応琥太も必殺技持つてるんだよ。必殺技っていうか、得意技」

「あ。俺知ってる。櫓投げでしょ櫓投げ」

「……………」

私が無言で貫太を睨みつけると、

「ていうかマジに姉ちゃんが来るとか思わなかった」

「めっちゃお前姉ちゃんに睨まれてんじゃん、怖え怖え。俺までとぼっちりとかマジ勘弁してくれよ。がっはっは」

「あっはっは！」

二人して何がおかしいのか大笑いを始めるので私はそれを無視してまた土俵の方を向く。

「まあ冗談は置いといて、だ。柚真さんや。その得意技を一切使わずここまで来てるのは、それも自分より大きい連中をばったばったなぎ倒しているのも、やっ

ぱり琥太が強いことの証だよなあとおいたん思うわけですわ。ねえ、貫太」

「いや、ねえ、とかマジでキモい」

「んだとコラア。人が折角優しく話しかけてやってんのによお！」

「あ！ やめて！ 暴力反対！ 姉ちゃん助けて！ マジで暴力反対ー！」

何をしているというのか。くだらない連中を差し置いて、取り組みは進んでいく。

伝家の宝刀——らしい。詳細は知らない——の櫓投げという技を使わずとも、琥太は勝ち進む。ケビンもケビンで、得意技である掛け投げを駆使して勝ち進んでいく。

元気と、そして健太。今は琥太とケビンしか来ないが、かつては私たちの家に一緒に来ていた幼なじみも勝ち残っていく。気付けば、幼なじみ四人がそのままベスト四に残つての準決勝になりそうな様子だった。

「やっぱ強えな。この四人はダントツだ」

とあんさんが言うのと、

「中学、高校って今までずっと四人がベスト四だったんだよね。あんさん」

と貫太が尋ねる。その問いに首を縦に振り、

「何てったってあいづらが幼稚園の頃から教えてたんだからな。あいづらは俺が育てたようなもんだぜ。こうなるのも当然、当然！」

と得意満面で答えるのを、どこまで本気にすれば良いのかはわかりかねたが、毎年ダントツと言われ続ける四人のことは、やっぱりすごいと思えたし、驚いた。

結局、元気が対戦相手を土俵下まで乱暴に突き落とした——相手も相手でもたごつい人だったのでそうならざるを得なかった部分もあるだろうが——相撲を最後にベスト四が出揃い、そこで小休憩に入る旨のアナウンスが鳴った。

「さあて。便所行ってくつか」

というあんさんに、

「あ、待って俺も行く」

貫太もついて行ってしまふ。スペースにいるのは、私とケビンの二人だけ。琥太はどこに行ったのだろうか。というかそもそも、今更ではあるが琥太とケビン以外の生徒はどうしてこのスペースに立ち寄らないのだろうか。そう思ってケビンに話しかけると、

「ああ。俺らは二人しかここまで残ってない弱小校だしな。だからスペースは手狭だしオニ崎センセも大会執行の手伝いであんま部員に付けないし、あとは俺らの付き人やってる一年が二人ずつで計四人いるけどそいつらもここには座れないっていうルールがあるんだよ。ちなみに琥太は便所に行ってるだけだから話あるんなら行ったらいいさ。降りて左。すぐわかるから」

と集中のために使っていたのであろうヘッドホンを外し、答えてくれた。

オニ崎センセ、正しくは寄崎(キサキ)千鶴子先生らしいが、き、という音を鬼と宛ててオニ崎と陰で呼んでいるらしい。顧問の先生も、弱小校で、なおかつ女性では男ばかりの生徒、教師陣とのやり取りにも何かと気を使うことが多く不便や苦勞も多いらしい。私は一先ずケビンに感謝を伝え、ケビンがヘッドホンをまた装着したのを見てから、階段を降りていった。

準決勝まであと十分もないくらいだろうか。トイレへと向かう直線は、相撲のテレビ中継で見かけるような、花道の先だった。

花道、といってもごった返す人の波のせいで花なんていう言葉通りの印象などまるでない、そんな道を歩いていくと、丁度男子トイレのドアを開け、出てき

た琥太に出会うことができた。

「あら、ナイスタイミング」

そう言うのと琥太は私の横まで歩いてきた。いつものノリでトコトコと走り来るような感じではなく、落ち着いた感じで、ゆったりと、悠然とした感じで歩いてきた。

「柚眞もお手洗い？」

そう尋ねられて、首を横に振って返す。そっか。琥太が言葉だけ返して戻っていく。その腕を掴んで、琥太が顔をこちらに向ける。服を着ていない琥太から、少しだけ油っぽいにおいが鼻についた。

『普通にケビンのところまで戻るの？』

という問いかけに琥太は、

「いや。下手すると決勝で当たる相手だし、今はあんまり顔を合わせたくないから別のところに行くよ。……一緒に来る？」

まさか一緒に付いて行きたい、などと私が言うはずがないだろう。琥太の笑みにはそんな雰囲気を感じられた。だから、私が無言のまま——手話による返事も

せずに、という意味で——首を縦に振ったのを琥太は、

「うん。だよね。……うん？」

と二度見までして驚いていた。その様はあまりに予想通り過ぎて、

「痛い。だつて驚いちちゃつて……。だつてまさか僕と一緒に行くなんて言うと思わなかったから……。痛い痛い」

筆談器がない分、紅葉の跡を残してやろうとしてしまうのだった。

★付箋文★

国技館の二階に上がるのは初めてのこと、なるほどこういう感じになつていたのか、などと私は妙な感心をしてしまつていた。階段を上りきった先には屋上スペースもあったが、

「教員たちの喫煙スペースってことだね」

選手達は立ち入り禁止だった。まあ、入れた所で煙たくてかなわない。まっぴらごめんだ。そのまま角を曲がり行くと、一息つけそうなベンチがあつて、何故かそこには誰もおらず、ゆつたりとした時間が流れているかのようだった。

「最初は選手とか色々いたけどさ、流石に勝ち残ってないからね」

琥太が先にボスンと音を立てて座り、横をぼんぼん叩いて私に座れと促す。やっぱりそう。にこにここと。へらへらと。私は琥太が叩いたスペースより遠いところに腰を下ろす。

「えー。遠くない？」

と琥太は困惑か抗議かわからない声を上げるが、

『別にこれでも会話には困らない』

と私は一蹴した。ここまで来る間にも、琥太と一緒に歩くところを見られては、ひそひそ話をされていたのだ。

「彼女連れかよ」

という小声がわざとらしく私に聞こえるように放たれていたことも、こいつはまるで気付いていないかのようなのだ。勘違いされては、困る。

「そっかー。あ、僕今少し汗くさいしね。しょうがないね」

という私が気にしていたところとは趣の違う所に琥太は着地点を見出ししていた。

『まさか本当にここまでアンタが強いとは思ってなかった』

話は私から切り出した。そうでしょう？ と琥太からは大したことない、という風な感じで帰ってきた。

『もっと序盤でスパツとあっさり負けるもんだと思ってた』

弱いと思われるのは結構男は嫌なもんではないのだろうか。貫太然り、武道をやっている男はそうだと思っていたのに、

「そうだよねー。僕は強そうには見えないもんねー」

なんて、呑気に笑って琥太は答える。にこにこことへらへらが、いつだってくつついた顔をしている。

『ねえ。アンタって曾じいちゃんやんが死んでからやっぱ何か変わったんでしょ』

そう聞くと、拘るねえ。と苦笑される。別に何も変わりはないさ。人の本質は変わらない、よ。琥太はおもむろに立ち上がると右足を高く上げ、右手で抱えると、

「Y字開脚！」

と一発芸を唐突に披露してきた。

『それがお前の本質だつていうなら思いつきりバカにしてやる』

冷めた目でそう返すと、

「すべったか。ちえ。……でも昔から柚眞は優しいね。バカにしてやるって言ってくれるだけでも、大分優しいと思う」

琥太は、恐らく一発芸と言うよりもストレッチだったのだろう。逆の手足でも同じY字開脚をすると、手持ち無沙汰に、またベンチに座り直した。

「強い方が勝つ、のか。勝った方が強い、のか」

琥太がぼつり、呟いた。聞いた瞬間は、意味が分からなかった。

「柚眞は、どっちだと思う？」

二つの言葉が頭の中で、ただリフレインしていた。

私は答えられなかった。琥太は私が何を聞かれたのかわからないと思ったのだろう。

「ほら、強い方が勝つのか、勝った方が強いのかって。どっちだと思う？」

質問を繰り返した。でも、私には答えられる気がしなかった。当然だと思った。

だって私はそういう舞台で生きている訳ではないのだから。

そして同時に思った。どうして答えられないのか、と。私は、私も、勝負の世界で戦っていたのではないのか！

なのに何故。そう私が思っていると、

「ひいじいじはね、明らかに勝った方が強い、の人だった」

琥太は昔を思い出すような面もちで、少しだけ上を向いて語り始めた。

「ひいじいじは、テニスで勝つために何だっしてした」

瀧中眞琥、死んで五年強経つ今でも空前絶後の最強テニスプレーヤーと名高い人。私から見れば、パワーバカというか何というか、琥太以上の大きさ、ごつさを持っていて、ジジバカと言われるくらい私たちのことを可愛がってくれて、でも、やっぱり怖かった人。今、琥太が話しているのは、きっと私が知らない曾祖父のこと。

「単純なパワーだけじゃない。あの人は何だってできた。ドロップ、ロブ、そんな小技から、心理学まで駆使してとにかく相手に恐怖を植え付けて、何もできなくさせる。自分よりも強い相手を倒すために、できることは何だっしてした。っ

てさ。言ってたよ」

『自分よりも強い相手……』

「そう。その筆頭はやっぱ悠樹さんだったそうだけど、そういう人を相手にしていると本当に怖かった、って言ってた」

『怖い？』

「そう。怖い」

琥太が呟いて、今度は下を向く。

「親方も小さい時から聞いてた話だったそうだけど、中学を卒業して入門して、周りが高校を卒業する頃には三役になろうとして……っていう時になってもひいじいじの言葉が本当の意味でわかることはなくて。どうしようもなかった、って言ってたな」

そう言うときまた琥太は私の方を向く。私は三役の意味がわからなかったのだからそれを尋ねる。すると琥太は申し訳なさそうに笑って、

「ああ……えへへ。ごめんごめん。小結とか関脇、だから番付的にはナンバー三とか四くらい。テレビだと五時半くらいに出てくるくらいの方達……って言え

ばわかるかな？」

何となくわかったが、それがどれだけ強い人たちなのかはわからない。でも、重要なのはそこではない。私は琥太が続きを話すのを待った。

「だから親方は、そりゃあもう必死に、ひたつすらにがむしやらに相撲を取ってたらしい。強い方が勝つのか、勝った方が強いのか。そもそも、強いって、何だ？　って。ない頭を使おうにも使えないで、延々土俵で暴れ回って。……相当、苦勞したって言ってた」

琥太の言葉に、私はただただ黙って聞いているだけだった。別に退屈だと思っていた訳じゃない。私の知らない曾祖父と、その息子の歩んできた道程には確かに惹かれるものがある。

何せ分野は違うがどちらも空前絶後と言われる程の大スターなのだから。

「それでも親方が自分なりに答えを見つけたのは成人した後。つまり横綱になって一年経つくらいになってからだってさ」

『そう、だったんだ』

祖父がテレビに映っていると祖母や両親からよく親方の話は耳に入れられた。

勉強に関しては相当出来が悪く素行についても喧嘩っ早さが祟りよく曾祖父が学校等に呼び出されていたとか何とか。そんな人だったから、だろう。答えが見つかるとまでに延々と時間が過ぎてしまったのも、領けるように思った。

『けど、おばあちゃんが言うには、横綱になつてからあの人、曾じいちゃんとは全く違う威厳を持つようになった、って』

「うん。だつて親方が見つけた答えは、ひいじいじとは全く違う答えだったから」
琥太は私の言葉に頷くとそれだけを言つて、立ち上がる。

「親方は今でもひいじいじの言っていることはわからないんだよ。だから、違う所に行き着いた」

そろそろ、時間だろうか。時計をみる。

「でもね、僕はわかるんだよ」

琥太を見る、そこで私の気持ちだが、思考が、……頭の回転が止まる。僕は、わかる。それがひいじいじ、曾祖父のことだということも、すぐにわかる。でも、それ以上に、琥太の目が、訴える。また、あの時の目。人間ではない、いや、そんな訳がないけれど、ないはず、なのに。

「僕はひいじいじの言う強さもわかるし、親方の言う強さだってわかる。小さい頃から聞かされてきたから。教えられたから。だからわかる。結局は、強い方が勝つことも、勝った方が強いってことも、どちらも同じで、どちらも怖い、ってこと」

背中を向け、大きく伸びをする。何かの強い束縛から解放されたような感覚で、私は逆に体が弛緩し、大きく息をついてしまっていた。そのまま振り返る琥太の目は、いつもの目に戻っていて、安心するのと同時に、不安になった。あの目は、いつだって私の記憶の中、奇妙で、怖ろしい場面の中に、付いてくる。その目ではない目で、いつもの琥太が続けて呟いた。

「そして、逃げないってこと」

『逃げないって、どこから』

私が聞くと琥太は私の傍に戻ってきて手を差し出す。戻ろうか、そろそろだし。琥太がそう言って、私はその手を、取らなかつた。

「僕は昇まで含めた四人だけじゃなくて、今まで戦ってきた全ての相手が、年上、年下、体の大小を問わず、怖かつたよ。その恐怖は、いつだって付いて回るんだ

よ」

琥太は私が無視した手を自然に戻してまた歩き出す。そして思い出したように言葉続ける。

「ああそうそう。……ひいじいじが逝ってしまいう直前、僕に話をしたんだ。お前は僕を受け継ぐ器だ。その極致に辿り着け。ってね」

階段を下りながら、人がまばらになった国技館の中を歩く。

『極致、なんて難しい言葉を十歳に向けるなんてね』

と私が言うと、あははっ。と琥太は笑って、

「話し終わった後すぐにお袋の電子辞書借りて意味を調べたよ。ひいじいじらしい最後のお言葉だった」

『結局それってどういう意味なの？』

単純にその答えが知りたくて私は尋ねたが、

「さあ。それは結局どこなんだろうかねえ。……わかんないや。えへへ」と、笑ってごまかすようなことを言うのだから、世話がない。

でも、琥太がわからないのは、当然のことで、親方が横綱になって一年経つま

でわからなかったことが、頭の良い琥太は伝聞でも理解できただけであって、でも実際に行き着いた訳でもなんでもない。むしろ、それが正解だったと私が気付くの中には、少しだけ時間がかかった。

ただとにかくここまで来てしまったのだ。琥太の両親は琥太に相撲をさせるのを反対している親だ。そんな親の元でも、V十一。小学一年から続く十一年連続全国制覇まで、後もう二勝。そこまで来た。

——準決勝を始めます。アナウンスの声が耳を打つ。琥太が無言で私を置いて歩き出す。私は、花道の手すりを手に持っていたペンで打つ。その音に振り返った琥太に、伝える。

『優勝、してよ』

それは、呟くような手話で、余りに弱々しいと自分でも思えた。伝えられた琥太は、一度目を瞑ると、あの目を見せる。父を思い出す、記憶にはもう残っていないけれど、曾祖父もきつとしたであらうあの目で、顔は笑っていた。獰猛とも言える顔は本当に凄まじい気概を放っていて、

「……僕は負けない、よ」

それだけの言葉にも、私は気圧されてしまう始末で、行つてらっしゃい。いつも気丈に、それだけを告げる母のように、私はなれなかった。

準決勝はケビン対元気の取組が先に行われる。二人が土俵に上り、周囲が静寂に包まれる。そのまま蹲踞の姿勢、そして仕切りに入る。

「見た目は外人同士。高校にもグローバル何チャラの波がよつて奴かねえ」

あんさんがわざとらしくぼやく言葉に貫太がちよつとした相槌を返す。実際に一人は本物の外人であるが。

元気の父親はブラジル人で、見た目的には確かにそう。外国人に見えなくもない。肌は赤黒く髪も琥太と同じく九分刈りの坊主だから目立たないものの癖のあるやや明るめの色をしている。体格もまたゴツイ。百九十にもなる身長と、幼なじみ五人の中では一番体重も重い。数段高く、離れた場所にいる私から見ても威圧感のあるその風貌に、私も今度ばかりは怖いと思った。

はつきよい！

審判の両腕が力強く引かれるのと同時に二人はぶつかり合う。ガチン、という音の後ケビンの淡い金髪が上に浮き上がる。そしてそのままケビンは土俵の下

に突き落とされ、転げ落ちてしまった。勝負あり！ の一声のすぐ後、元気の勝ち名乗りと、押し出しでの勝利を告げるアナウンス。それを聞いてケビンはこちらに戻ってくることなく花道を歩いて私たちの視野から消えた。

「うん。惜しかったなあありやあ」

あんさんの唸り声とつぶやきに、

「えー。瞬殺だったじゃんあれー」

という貫太の返事。それはもつともだと思ったが、

「いんや。当たった後にケビンも引かずに堪えて器用に足を絡めてたんだよ。あれ巧く引つかかれば切り返しでばっさり切り捨てられたかもしれないのになあ。元気の反応が滅茶苦茶良かった。そのまま力任せに一気に決めきったんだよな

あ。いやいや。あれは下手すると決まっていた可能性もあるからなあ……惜しかった。ギリギリの攻防だったよなあ」

いたく感動した様子で解説を述べるあんさんを後目に、ケビンはどこに行ったのかを手話で尋ねる。

「ああケビン兄ちゃんはトイレだよ。負けたら絶対トイレに駆け込んで泣くん

だよ。あんさん」

貫太はそうあんさんに尋ねる。空気読みのケビンは泣くことさえも、そうやって人目をはばかってやるんだな、と私は思った。

そうこうしている内に今度は琥太と健太の二人が土俵に上がる。元気側は非常に広いスペースを陣取っている。団体では既に全国一を決めていて、個人戦でもかなりの選手が全国まで残っていた訳で、そして決勝進出を決めた元気に続けとばかりに健太の応援に熱が入っている。

琥太の様子を見ると、いつも通り、だ。その様子、動きは自然で、今までの組と何ら差が見られなかった。

「あ、柚真ちゃん。これは別に緊張して見る必要ねえよ。どうせ健太じゃ琥太には勝てねえからさ」

あんさんは冷たくそう言うと、琥太達の高校の名前が入ったクリアファイルでぱたぱた扇ぎ始める余裕を見せつけていた。私はその意を汲めないでいると、「健太の野郎ムキムキだから勘違いされっけどな、あんなんじや琥太のぶちかまし止められんだろっていうな。運動神経だの小手先の技だのでここまで残っ

てるけど、言ってもう五人の中じゃ最弱じゃ最弱！」

辛辣なコメントに多少面食らっていると、また更にコメントが続く。そして審判の両腕が引かれる。

「そもそもあのガキヤア」

ここで二人がぶつかり合う。

「中学で突然モテたいとかホザきやがってよ」

琥太が健太を追いつめる。

「ダイエットとかしやがって。お陰で体ができやしねえ」

健太が必死に堪えている。

「センスだけで相撲やってるのが丸わかり過ぎて動き読まれ——」

健太が琥太を強引に投げにかかり、それがすっぽ抜けた。

「たら即死亡。クソだなありやあ。育成失敗って奴かね親方も」

がら空きの背中をどん、と一突き。琥太は難なく勝利を手にした。が、

「弟子じゃねえからって甘いんだよなったく。俺だったらあいつをあんなんにはぜってえしねえ」

あんさんのグチグチした辛辣コメントは終わらない。

「そもそも健太のクソガキアあんなブツサイクな猿面でどうモテるんだった。身の程を知れてんだ身の程を！ クソ！ クソ！ くそつたれが！」

あんさんは口が悪い、ということがもの凄く印象に残る。まるで琥太が完勝したことを喜べない様子でいるように思えて、あまり私としては快く思えなかった。

決勝は琥太と、元気。

「これで三年連続。マジすげえよなあ。あの二人って。マジすげえ」

貫太が興奮気味に身を乗り出して言う。

「幼稚園の頃からあいつら二人は大相撲すんだよなあ。幼稚園からずっと、だわ。何か持つてるもんでもあんのかねえ」

延々繰り返されてきた対決を前に、互いの高校の応援も熱を帯びていくのを感じる。

「団体戦じゃあ琥太は元気に一杯食わされたからな」

あんさんが緊張感を持った声で拳を握りしめて言った。私はそんなことは初

耳で、貫太の方を見る。

「ああ、姉ちゃん聞いてないっけ？ 琥太兄の高校と元氣兄の高校は県大の準決勝で当たってさ、まあ先鋒次鋒中將と三タテ食らってもう負けは決まってたんだけど、大將戦で琥太兄負けちゃったんだよ。だから琥太兄の高校は全国に行けてない」

貫太が本人たちから聞いたのか、既に持っている情報を話して、そうこうしている内に二人は仕切り線に向かい合って立つ。ケ빈は戻らない。そのまま取組は始まる。

はつきよい！

その声が響くと同時に、一瞬。椿か何かだろうか。赤い花びらが舞ったような気がした。

「……………」

何も考えられずに惚けて見ている私の横で、

「うわ……………」

という貫太の声でした。

土俵上、琥太の額が割れている。

「……………」

私は何も言えず、考えられず、長い息を吐いていた。

琥太の右目にまで流れてきた血のせいで、その目を開けられなくなる。それに乗じて、元気は琥太を一気に攻める。そのまま土俵際まで、一気に追い込まれる。けれど、琥太はじつくりとこらえていた。そのまま、二人は動かない。じり、じりと力の拮抗と、荒れた息づかいが聞こえる。拍手と、歓声。二人や、互いの高校とは無関係の人達まで、

「いけえ！」「もう一押し！」「こらえろ！」「がんばれえー！」

力強い声をあげているのがとにかく強く私に迫る。

もうあれから十年以上経っている。福岡で見た、琥太の相撲。あの時も、大人達の声は、喧しかった。いつもそうだ。土俵の周りには、異世界が広がっている。

「あいつら二人は喧嘩四つ。それでまた盛り上がるんだよ」

とあんさんは言い出した。私が視線をあんさんに向けてると、あんさんは続ける。「ざっくり説明すると、右腕を相手の左腕の下に通して組むのが右四つ。反対に

左腕を相手の右腕の下に通して組むのが左四つ。右四つは琥太の形で、左四つが元気の形。どっちの組み手が完成するかでこの勝負、決まるぜ。見てな」

そしてすぐに私たちは土俵に目を戻す。すると既に互いのまわしにお互いが手をかけきっていた。琥太の右腕は元気の左腕の、上を通ってまわしへと延びている。……つまり、

「こりや元気の形、だわな。まっじいぞ。これ」

あんさんの眩きが聞こえるのと同時に、喧しかった歓声が、更に一回り大きくなって私の耳に入ってくるようになった。

「元気さんいけー！」

「そのままおしきれー！」

「決めろー！」「決めてください！」

その様々な声の集まりが、私の耳を叩いてくる。私は、まるで自分の手にすがりつくかのように組んでは、もう目を開けていることすらできなくなってしまう。

それから、どれくらいの間が経ったのだろう。どちらが勝ったも負けたもな

いまま、気付けばいつの間にか歓声は止み、そして拍手が鳴っている。私はその音の変化に恐る恐る目を開ける。そこに広がっていた光景は、

(何も、変わっていない……?)

土俵際、二人の体勢はあの時と全く、と言つて良いほどに動きがなかった。そして、

「もつれたな。これは、あるかもな。水入りも」

あんさんが呟いたその刹那だ。また、歓声が鳴り響く。

元気が琥太にまた圧をかけ、琥太が半歩、後ろに下がってしまう。土俵の向こう側、元気の陣営のイケイケムードと、琥太の陣営の、あーっ、というため息や悲鳴に似た声が混じり合う。そして琥太が後ろに傾くと、元気も体が浮き上がっていくのが私の目に映る。

「これは……!」

というあんさんの声が、建物中の唸り声に似た歓声にかき消される直前に私の耳に届いた。二人は揃つて土俵下へと転げ落ちる。私の目には全く同時に地面についたように見えた。私にはこの勝負の結果がどうなったのか全くわからな

くて、妙な鼓動だけを強く感じるばかりで気持ち悪かった。

審判の腕は、琥太の方に上がった。でもそれを受けて会場中が、拍手と歓声と、そして主に元気側の方からはブーイングの怒声が響く中、別の審判らしい人や教員だろうか。沢山の男の人が土俵上に上がる。

「物言いでしょこれ」

という貫太の言葉に、

「まあ妥当だろありや」

とあんさんが言った。

「あんな強引に引き抜いた櫓投げじゃ勝てんよ。つか俺から見れば元気の勝ちに見えたし」

あんさんはやっぱり辛口に続ける。

『琥太は怪我をしているのに』

私が貫太に対して手話を使って話すと、

「あんだって？ オイ、ねえちゃんはなんつってんだ？ 貫太」

あんさんの方が強く反応した。

「え。ああうん。琥太兄怪我してるのにつて」

貫太があんさんに通訳をする。

「ふん。怪我也もクソもあつかよ。関係ねえ。相撲に引き分けなんざねーんだよ。どうせ止血の小休止したら取り直しだよ取り直し。このままケリつくまで何度だってやるのが相撲つてもんだ」

腕組みをしてやや吐き捨てるみたいにあんさんは私に言った。

「……………」

私は無言だった。何も返さなかった。……嘘だ。返せなかった。何を言えばいいのか、皆目見当なんてつきやしない。

——只今の取組の結果について説明致します

土俵中央。何かのお偉いさんのような風体の男がマイク片手に話し出す。

「瀧中選手に軍配上がりでしたが、ビデオ判定の結果、瀧中選手の胴体と菊神選手の左足の着地が同時であると判断し——」

ここで館内から拍手と指笛とが大合奏を始めていた。結論を最後まで聞かないのがデフォルトという環境に私は少し戸惑いを覚えつつ、続きに耳を集中さ

せる。

「瀧中選手の止血の為に二分間インターバルを置いた後、取り直しと致します」
再び館内が、叫び出す。

琥太はすぐに例の付き人が用意したイスに座り、そこでテキパキと応急処置の指示出しをしている。その動きに淀みはなく、オニ崎先生との会話もしっかりとこなしている。

「ま、だろうな。そうじゃなきゃ逆に納得いかねえよ」

あんさんは特別何もリアクションをする必要もない、といった感じで言葉を発しているが、その言葉は私の背後を流れていく。

私は、自分の額に貼られた止血用テープを押さえながら付き人に汗を拭いてもらい、そしてそんな中であるの目、あの瞳と共にまた集中を高めている様子のあいつにばかり気持ちがかかっていった。

何か、を伝えたい。そんな風に思っていた。怪我を押してでも闘いの場へ向かうあいつの傍に駆けつけて寄り添いたい、いやそれが無理でも、何か、何でも良いから。伝えたい。

あの時言えなかった「行つてらっしゃい」でも、あの時弱々しくしか言えなかった「優勝して」でも、その言い直しであつても構わない。

この喧噪の中、私が叫べたら、良かったのに。この階段を駆け下りて、あいつに喋りかけることができれば良かったのに。そう思つてしまった。

もう、何年振りなんだろう。そう思えたのは、何年振りなのか。思い出せないくらい昔なのに、それを一瞬にして、思い起こさせられて。私は琥太の事をばかり見てしまつていた。

急に歓声が沸き起こる。どうやら時間一杯を告げる合図があつたらしかった。琥太は深呼吸を一つすると、こちらには目もくれず段を上る。まるで私の事なんてこれっぽっちも気にしていないような態度で、私の感情や鼓動の気持ち悪さなんか、何も知らないまんまで、女人禁制の戦場へと、上つていくのだ。

「まるで琥太ともう会えないんじゃないか、みたいな必死の表情してるんだけど大丈夫か？ 別に琥太は死にやしねえから安心しなよ？ な」

あんさんは半分茶化すように、もう半分は本気で私に対して声をかけてきた。何時の間に私の顔を覗き見れる程近い位置に来ていたのだろう。油断ならない

なれなれしきだと思う。そのまま私は右手を顔の前で払うポーズをする。ないわー、くらしいの意味合いだ。理解できなかったのか、あんさんはきよとんとしていた。でも、特に貫太を使って解説するようなこともしなかった。

「やっぱり柚真ちゃんも女やね。あの顔は惚れた男に対してするもんばい。琥太も隅に置けん男になったばいな〜」

そんな風にニヤニヤ下品に笑いながら言うあんさんを私は軽く睨みつけて黙らせておく。

別に私は、そんなに琥太のことを心配している訳ではない。そうだ。私は、目を開けることができなくなるほどの出血をしておきながら闘うことをやめないでいる琥太達の精神が理解できないで、引いているだけだ。そうに決まっている。自分に、言い聞かせた。

「決勝の、取り直し。……だよな？ 今の仕切りは」

そんな風に言っただけで私たちが座っているスペースに上がり込んでくるのは、泣きはらした目をしたケビンだった。私は、

「……………」

何も言えずにケビンのスペースを空けるとあんさんとの距離を離すために立ち上がっていた。まさか顔が赤くなっていたりすることはないだろうけれど、ケビンはやっぱりそういう男だから、何も態度に示すようなことはしなかった。ひっくり返せばつまり結論が私には伝わらないということではあるが、話題の中心もケビンが戻ってきたことで、

「おかえり。よく泣けたかい？ 泣き虫ケビたん」

「うるせえわオッサン」

「お疲れさまでした。ケビン兄さん」

「おう。あんがと。どこぞのオッサンと比べて貫太はやっぱ人間としての出来が違うな」

というやり取りと小突き合いに移っていた。

「状況は館内放送とかで大体わかってるけど、まさか取り直しとはな。やっぱりあの二人はやるな」

というケビンの呟きと同時に、

——はっきよい！

また審判の両腕が引つ張られ、勢いよく琥太と元気が巨大な鉄砲玉のように飛び出していく。そして二人はまたしても額から激しくぶつかり合い鈍い音が響く。そしてそれと同時にまた歓声とも悲鳴ともつかない声が聞こえる。琥太の額から、また血が滴る。

「すげえぶちかまし」

と貫太が思ったことをそのまま呟き、

「バカだ」「バカだな」

ケビンとあんさんが土俵上を眺めて呟いて、私が紅葉を作りに行く。思わず手が出てしまう感じで、私は二人をどついていた。

「痛え！　なんだよ柚真！」　「俺まで叩かれんのかよ柚真ちゃん！　俺ら褒めてんのに！」

そんなの知るか、という感じで振る舞いつつも、私も一体全体何故に手が出たのか、自分でも理解できなかった。二人は目を見合わせて、そして二人揃って私の顔をのぞき込んで来る。

私は二人の顔を押し退けるようにして土俵上の取組を見ようとす。琥太と

元気は、さっきの再現でもするかのようにがっちり組まれ、微動だにしない状態になっていた。弛緩などない、力と力のぶつかり合った結果の均衡と緊張が、数段離れた距離にいるのに伝わってくる。私はいつの間にか両の手を組んでいて、そしてその手に、無意識に力がこもっていく。

「……………」

長い緊張、そして私は息が止まっていることに気付いて咄嗟に深呼吸をする。いつの間にか私は祈っていた。土俵の上、荒れた息づかいの琥太を見て、どうか無事に帰ってきますように、などと祈っていた。

勝つか負けるかという結果よりもまず先に、ちゃんと帰ってきて、と祈っている私は、もう土俵の様子を見てはいられなかった。私の頭に、午前中の資料動画が流れていて、それがノイズであることに気づいていながら、無視できないでいる。

「そんなに不安かい？ 柚真ちゃんよお」

あんさんが私の様子を見て話しかけてくる。私は今の私自身が確かに浮き足立つ、というか確かに異常な反応をしている自覚もあった。けど、そんな風に指

摘を受けて、少しだけ恥ずかしい気持ちもした。あんなにバカにして嫌っていた相撲を見て、こんな風になってしまふなんて。

「あーそうだそうだ思い出した。わかった！」

ケビンはややテンション高めにならうと、

「柚眞のさっきの顔どっかで見たなって思ったらアレだ。悠さんの剣道の仕合
見てる時の寫さんの顔だ！」

と私に指摘した。あースツキリした。マジ瓜二つだわと満足げに一人ごちるケ
ビンに私は、

『どこがよ。お母さんそんな顔してる？ ていうか私そんな顔してないし』

と素早く手を動かして反論すると、

「そんな顔してるって聞く割にそんな顔してないってのも中々支離滅裂じゃん
かよ」

「おお。柚眞ちゃん中々に慌てておりますぞ」

二人がまたテンション高く言葉を乗せてくる。貫太は我関せずで熱戦に没頭
している。

「いやあ。あのおばさま若いし何かこうぼやんとしてらっしやるけど、こうしてみるとなるほど確かに親子なんだなあ」

しみじみ呟いたあんさんを私は無視して土俵に視線を戻す。

二人の相撲はまだ動きを見せていない。またも左四つという元気の形で、じりじりと押している様子ではあるが、琥太もこらえて反撃の機を窺っている状態だろうか。

「水入りって何分だったっけ？」

貫太が視線を離さないまま尋ねる。

「二分が目安だな。ちなみにそろそろだ」

あんさんが呟いたその瞬間、場内がどよめく。動いたのだ。元気の持ち前のパワーが発揮され、ついに琥太の足が土俵の少しだけ出っ張った部分、

「徳俵かい。マズいね」

そこにかかってしまう。場内の空気は変化する。耳よりも先に肌で感じるその中で、私は立ち上がっていて、

「！」

何か呼びかけるような、言葉にもならない何かを、何某かの音にして、そのあまりの不格好さ、おかしさに周囲の目は集まって、私は赤面していた。でもその時琥太の目が、一瞬だけ私に合った気がして。

「僕は負けない、よ」

そう聞こえた気がして。

元気の体が、琥太よりも更に大きな大きな体が、鮮やかに宙を舞った。

何が起こったのかを、場内の誰もが理解できていないようだった。静まりきった館内に、何か厳かな空気が入り込んで、そのまま国技館中を固めてしまったような、そんな気持ちが出て。場内には、相撲を取り終えた直後の二人の荒れた呼吸の音だけが、耳に伝わって、刹那。

館内を震わせる大絶叫と拍手の嵐が木霊した。

「……………」

ケビンは何も言わずに拍手をしていて、その顔は、幼馴染の健闘を労うというよりも、この拍手を自分が受けられないことの悔しさのようなものを、堪えているような感じだった。

「そこで、呼び戻す、かよ……」

拍手もできない程に放心した様子であんさんは驚きの声を漏らしていた。

「呼び戻すって」

貫太が私の聞きたいことを代わりに質問するとケビンが答えた。

「琥太の伝家の宝刀第二太刀、つてとこかな。呼び戻すっていう技。そういう技があんの。別名は仏壇返しっていうんだけど、そうそう決まらない大技だからあんちゃん興奮してるな」

ケビンがオーバリアクション気味に感動していたあんさんの態度に苦笑すると、

「そりやするだろうよ。あれは見事だったろ」

そう言っって手を叩きガハハ、と一笑する。

「楽しそう、だね」

四分以上に渡る激闘を終えた琥太がにこやかに私たちの元へ戻ってきて声をかけてくる。その様子はやっぱりいつも通りの琥太で。にこにここと、そしてへらへらがひつついた顔で、よっこいしょ。そう言っつて腰を下ろす。

「……………」

長い息一つ、吐く。

『お疲れさま』

琥太の前に回り込んでから、しゃがんで声をかける。

「うん。……流石に、本当に疲れちゃったよ。あはは」

少しばかり苦しそうに笑いながら琥太は言った。

『それと』

私はここで手話を区切った。琥太も、無言で私のことを見ていた。

『おかえり、なさい』

それを見て琥太は、顔を静かにほころばせて、

「うん。ただいま」

そう返してくれた。私の頭の中に、父と、母のかつてのやり取りが浮かんで、

何故だか私はほっとした。

表彰式もつつがなく終了し、琥太、元気、ケビン、健太の四人がそれぞれに表彰を受け、簡単な雑誌の取材などに答え、そろそろ帰ろうか、そんな時だった。すみません、ちよつとよろしいですか？ そんな声をかけてきたのは、夕方のワイドショー番組のリポーター達だった。

決勝の激戦を映していて、アポも何もない中恐縮であるが取材したい、という申し出に、結構慣れっこな部分があるのだろう。琥太もケビンも短時間でよければ、とすぐに了承した。私たちはその様子をカメラマンの背中越しに見ることになった。

質問は、既に調べがついていたであろう琥太達四人組の関係性から始まり、そして琥太のV十一へと続いていく。

その返答はというと、正直に言うテレビ用、というか何というか、非常に単純で、ありきたりな回答しか皆しないのが私としても気になっていた。そこについては、やはり慣れっこ、の部分だろうか、と私は思っていた。

でも、テレビ側はそう思わなかったらしく、どうにかその態度を突き崩してや

ろう、という態度を明らかにさせていった。

質問をする男性の声に聞き覚えがあるな、と思っていると、その声の主は夕方のワイドショーの名物司会者で、関西系の軽妙な話のノリが受けて全国区になった人で私も知っている人物だった。

その人が質問を現地のリポーターから引き継いだ瞬間から、質問の趣が変わったのだ。例えば稽古ばかりやけど遊びたいとか思わんの？ とか、そしてその次には、彼女とかおらんの？ という定番のノリ、男子高校生に向けた質問としては、そして視聴者の中高年に対してはお誂え向きなんだろうか。その下卑たノリに私は嫌悪感を覚えたが、

「僕たち皆偶然彼女の名前が同じなんですよ。ケイコ、って言うんですよ」

琥太は軽妙に合わせていた。そしてその次の質問はこう。じゃあケイコちゃんこの番組見てるから、カメラの向こうにいるケイコちゃんにメッセージを三、二、一、キュー！

琥太以外の全員が琥太を睨みつけたのを私は見ていたし、琥太もその質問、というよりも無茶振りに困惑の表情を浮かべていたが、

「僕たち明後日の夕方には帰るからね〜！」

と、どうにか体裁を整えた発言をしていた。そこで私の肩をトントン、とあんさんが叩いて、

「一応言っちゃるけどな、あいつが言うケイコってのはな、相撲の『稽古』と『ケイコ』ちゃん、を掛けとるだけだからな。あいつらに彼女とかおらんぞ」

親切に、というかありがた迷惑な解説してくれた。それくらいのは、私もすぐにわかったのだが。恐らくカメラの向こうのアナウンサーは、わからなかったのだろうなと思ひ、呆れてしまった。

「ああなるほど！ そういうことか！ ビックリした！ 彼女居るんだすげえって思ってた。俺」

貫太のように。というか、貫太のように素直に気付いてくれたりも、こういうタイプのアナウンサーだと、しないのだろうな。何が立派、というのかもよくわからないもんだ、そう思うと益々呆れる。

その後もどうにか琥太はアナウンサーの質問をいなし続け、最後の挨拶まで繋ぎきった。四人揃って頭を下げ、ありがとうございました、と互いに言うのと、

周囲のスタッフ達が作業を始める。

「おいお前何だよケイコちゃんつてよ！ お前バカだろパーカ」

元気が琥太に対して手刀を浴びせながらつつこんでいくと、

「アレくらのノリでしゃべる方が何かと捗るんだよアーホ。負けた奴は大人しく黙るときや事はスムーズつてな」

琥太も負けじと言い返す。すると今度はケビンが、

「しかしお前の返しつてアレだよな。年寄り臭いつて言うか、渋柿じゃねーか。干されきつて甘い奴じゃねーぜ？ 若いガキが無駄に老練されたこと言うの、逆にダセーしよ」

とコメントすると、

「やーい渋柿野郎ー」

健太も合わせて茶化してくる。

「うっせーわアホンだら。カメラの前でだけ妙に良い子ぶってんじゃねーよ二人とも、いや三人ともな」

「んだとこの出しゃばりが！」

「おうおう負けといて随分調子づいてんじやんかサンバの一つも踊れねー癖によお」

「言いやがったな後で覚えとけよ」

「しっかり覚えといてやるよそのクソつまんねー捨て台詞共々な！」

琥太と元気がそんなやり取りをしている所を、何故かさつきまでとは違う別の小型カメラを使って無言で映し続けている人がいる。私は妙だと思った。

私も昔テレビの取材を受けたことがあるが、確かその時にはあんなことをされた記憶はない。

今四人を映しているカメラは、何のために、何を映しているのだろう。本当にこの取材は、終わっているのか？ スタッフ達を見渡しても、作業に忙しく動き回る者と、様子をじっと見ている者とが混在していて、聞き出すことを私は躊躇してしまった。

「つかお前彼女がケイコってそれ良いのんか？ え。良いのんか？」
ケビンがそんな風に琥太をせっつく。

「良いのんか、って何が？」

琥太が言うとかケビンはにやにや笑いだし、

「琥太の本当の彼女の名前を言ってるやらんとそこは！ ケイコとか嘘ついたらいかんって」

そう言いつけると、

「いやいやいや！ お前それは今だけは言っちゃならんことだろうがよそれ」

琥太はケビンの頬を鷲掴みにしてガクガクと揺らし始める。

「え？ マジマジ？ 琥太彼女できた？ 紹介せん俺に！」

健太がその輪の中に入り、

「お前に彼女とか信じられん。嘘やろ。今なら傷は浅いぞ？ さあ言えよ琥太」
元気が今度は琥太の頬を鷲掴みにする。

「うるせーよお前！ 僕の彼女はケイコだってさっきから言ってるだろうがよ」

「いやあ。いかん。そりゃいかんばい琥太。お前そんなだから継続してんだろ」

「お前はもう！ こういう時にまでそういうことを言う！」

「渋柿みたいなことばっか言うからだろ。点数稼ぎみたいなコメントばかりしやがってよお。あーあ。こんなんじや春とかマジ遠いし。あー鼻白む鼻白むー」

ケビンの言葉と元気、健太の絡みを前に琥太も我慢の限界を迎えたか、

「そんなに言うなら、ケビンはケビンでエナ問題は解決した？ 健太も人の色恋話が羨ましいならもっとケイコちゃんにのめり込まなきゃでしょ」

そんな風に笑顔で、でも目が笑っていないのが露骨にわかる顔をして言った。健太は言っている意味がよくわからなかったのである。ぽかんとした顔をしていた。問題はケビンの方で、それなりにカチンと来た顔をしているのが伝わってくる。俗に言う売り言葉に買い言葉というものだったのだろうが、エナ問題、というのが地雷だったことは何となく察しがつく。

「へえ。そういうこと言う。お前そういうこと言うんだ。へえ。お前最低だなあ。え？」

ケビンが琥太のまわしを殴りながら言うと、

「ああ。先に言ったのはお前だからな。覚悟くらいできてたよな？ 勿論。え？」

琥太はケビンの髪を掴み、互いに笑顔ではありながら、その実完全ならみ合いを始めていた。私はそれが一種のじゃれ合いなのをわかっている。小学生の頃から、ずっと見てきた間柄だ。多少乱暴に見えてもお互いのことをわかっている。

幼稚園児の頃から皆を見ていたあんさんも、貫太だってわかるだろう。知っている人ならわかること。でも、わからない人の方がずっと多い。

「おっと。やつと高校生らしくなったやん」

どこから鳴っているのかはわからないが、スタジオの中から喋っているであろう私のいけ好かない風の軽い声が楽しそうに言う。

「でも流石にカメラの前で喧嘩なんかおっ始められたらまずいからそこは止めさせてもらいまーす」

知らない人、わからない人から見ればあれは喧嘩に見える。あのガタイだ。荒々しく見えるのは、言うまでもなかった。

二人だけではない、四人ともが、今すぐにでも卒倒しそうな顔をしているのが見て取れた。サア、つと血の気の引いた顔をして、顔に緊張からか震えが起きている。でも、四人とも瞬間に何が起こったか、どうなってしまっているのか、何をされたのかを、全て悟ったのだろう。体は直立不動で、背筋が伸びきっていた。

「ふいー。スッキリしたぜえーい……って、何だ？ どした？ え？」

いつの間にか消えていたあんさんが戻ってきて事の次第を掴みかねていると、四人ともまた並び直す。

「お見苦しいところをお見せしました。すみませんでした！」

口火を切ったのはやっぱり琥太だった。四人が揃って頭を下げた。

それは、多分でしかないが、精一杯の行いだ。それを、

「何やねん四人揃って渋柿なんやないかい！ ぶっひゃひゃ！」

大人達は、——スタジオから漏れる声も、ここにいる連中も——一笑に付して終わりにした。

そして当然だが、それで終わりにしない連中も、いる。

「明後日のつもりだったんだけど、さ」

琥太が少しだけ苦しげな、にこにこことへらへらを同居させて、頭をぽりぽりやりながら私に言ったのは夕食を食べ終わった後のことで、

「親方から呼び出し、食らっちゃまった」

さっきの琥太の言葉をケビンが引き継いだ。

「本当は今日トンボ帰りかなって思ってたけど」

琥太がそう言った後、

「何か明日の午後が良いって言っていてさ、親方」

またケビンが引き継いで言った。

二人は貫太が後ろでこつそりと話を聞いている中、荷造りをしようとして、既にまとまっている鞆を手持ち無沙汰にいじりながら私に今後のことを説明していた。

「お二人ともお疲れでしょう。明日くらいはゆつくりできるように、荷物はこちらでまとめておきましたから。間違いがないかどうかだけ、確かめておいてください」

母が父の指示でやったことだろうか。それとも、自分でやったのか。

昔の、大時代的な、とでも言えればいいだろうか。両親の様子はまるで時代劇を見ているみたいで、それは全盲の父と、同じく昔気質な母が揃いも揃って動きや

すいからという理由で普段着にしている和服も問題なのだが、それ以上に、母は父の二歩後ろを常に歩くのだ。物理的ではない。目が見えない父のために、実際は横や斜め前を歩いている。……これは、精神的な話だ。精神的に母はいつだって父に凌駕されていると思っていた。別に暴力や暴言の類があるというのではない。母は、いつだって自分のために動かない。父の言うことに、何でも、はい。はい。と言って生きていくように私には見えている。

「寫さんは、本当によく見えているよね」

琥太が鞆から手を離し、私の方を見て呟いた。

「寫さんの目が、よく見えているから、この家はうまく回っているんだろうなつて、今ふっと思った」

私は無言で、琥太は言葉を続ける。

「僕らの荷物を何の間違いもなくまとめきつてたよ。下着の類まで入れ違いも何もなく。どんだけ見てたんだろう。下着までだよ？ あははっ」

「なあ。どんだけ俺らのこと、見てたんだって話だよ。なあ」

ケビンも同調して、その様子は微笑ましいくらいまであつて。私はこの二人が

国技館の土俵の上で見せていたあの気を、怖さを、本当に今日見ていたものだと
いうことが信じられない気持ちで一杯になっていた。それくらいに二人は穏や
かだった。

私は、何も言えなかった。大事なことを、何も伝えられないのが、私だと思っ
て、それはとても似つかわしいと、声も出せず自嘲した。

「姉ちゃん。大変だよ。これ」

次の日の午後、琥太達が帰ってそろそろ二人の乗り込んだ新幹線が博多に着
くだろうその時に貫太が見せた「Twitter」の画面を見ると、

「……………」

そこに写るのは親方に殴り飛ばされている琥太の写真で、『あり得ない。車内
でいきなり殴りつけてた。マジあり得なくね?』という発言と共に貼られたその
画像は、貫太が見せた時点の数字でも何十万というリツイート数だった。

あの渋谷騒動は、確かに、明確に、騒動だと今更ながら感じた。琥太を殴った
祖父、親方は個人では「Twitter」をしていないが、部屋が公式アカウントを持って
いる。あの番組を放送するテレビ局は、誰がどう見ても騙し討ちと感じるであろ

う取材体制を非難された。あの私の好かないアナウンサーも、その言動を非難され、どうでも良いことに不倫がバレた。詰まるところ、その全てが炎上した。テレビのワイドショーが、またそれに拍車をかけていく。貫太が呟いた。Twitterにはなく、物理的に私の目の前で。

「琥太兄達は後援会の人達に毎日頭下げ続けてるんだってさ。やつぱり琥太兄達の態度を責める人達も後援会に多いって言うし、……でもあれさ、やつぱ俺おかしいと思う。あんなの、卑怯だろ」

貫太が言う言葉はもつともで、私もあれはないと思う。取材体制もそうだし、何よりも最後に大笑いしてあげつらった事が。

そして当然、琥太達の態度が責めに値する大問題であったことも理解している。彼らが暮らすのは品格や品性を特に問われる世界なのだから。私はいつの間にか禁止令を破ってピアノの鍵盤を打つ。ほんの数日程度しか禁止令を守った日はなかったのに、何ヶ月か、いや何年か振りに鍵盤に触れたような心持ちがする。『ただいま』心の中で呟いてみる。私の心は晴れることはない。ただ、何か、をしたかった。母のような広い目も、父のような深い目も持てず、貫太のよ

うにその心を寄せて憤慨することもできないけれど、私も何かを、と思った。

後ろ手にピアノの蓋をゆっくりと閉め、反対の手で携帯をいじる。その液晶にはもしものために、と登録してある瀧中琥太の名前が映っていて、そしてその三つ下。孫を殴った張本人、瀧中勇邁。親方の名前がある。

私は一つ長めに息を吐き目を軽く瞑る。そして一つ小さな決心をしてその名前に指を触れた。

——連載第四回(最終回)『美しい月のノクターン』へ続く

歌集

三十一字の少女幻想

七夜月 尚

【あたらしいはる】

越してきて 最初に見たのは 電線で 君の指だけ コンパスにして
ろまんすを ろまんすとして 味わえし 妹らのカバン 髪かざりキラ
刺青を ほんのちよっぴり 入れてるの 聖人ぶってる あのコにタルト
学友の 良からぬ噂 惑わされ くちづけを待つ 噴水の陰

【あついなつ】

彷徨いて 薔薇園の縁 腰掛ける 夢か現か 誰も居ぬ庭

君が眼の 余りの寒さに 戦きて 熟れること無い 檸檬の実

眠そうな ピラニアの群れ 眺めつつ 水槽のふち しばし玉座に

毒のむの 薬をのむの 同じこと のんでも死ぬし のまずとも死す

【なんにもないあき】

滅び行く 王国の夢 閉じ込めし 宝物庫の鍵 湖底に沈めて

遠き日に 星の声のみ 木霊する 忘れ去られし 遊具を撫でる

無花果の 薫る紅茶を 愉しみつ 風の泣き声 強まる夜更け

詠むほどの ころがないワ 困ったワ 曖昧迷子 来世はリルケ

【おわりのふゆ】

君が手の 氷菓眺むる 冬の午后 ミント味する 首筋の息

霜月の 夜に灰汁とる 君が背に ふんわりふわり 幸が降りつむ

「綺麗だね」 友と言ひ合う 夕暮れに ツリーの星も 微笑みかける

テレビでは 雪がいっぱい 降る予報 マトモな人が 闊歩する街

【くりかえしのいつかのきせつ】

手紙のみ 呉れしあの子の 面影を ただ一輪の 花に託して

薄青い 想い出ばかり 甦る 学舎の窓辺に 寄りかかる友

小説

消費される愛、俗的な愛、神聖な愛——In rhythm II

光枝 初郎

君を愛している。もちろん、君を憎んでいる。

愛の溢れる愛の溢れない愛の溢れる愛は溢れない溢れない愛、愛。愛の溢れる人などいない。やはり君は憎めない。

究極の外部、〈語りかける〉外部、恋愛、俗。不意打ち、不意に、心ならず、落ちてしまうこと——恋。

不可解な状況の噴出、文字通りの「不可解さ」つまり想像の範疇を超えた事態が次々と起こり、その渦の中に巻き込まれそうになること。理解がおいつかなく

なって、やがて思考停止の欲望がバラ卷かれるのだが、とりあえず「観察」してみること。この世界に「まずは留まる」ために。カオスマーズ、社会。

幸せ太り、幸せを追わないように求める、くモ富メル、肥える、肥満体、サイボーグ、プリン体、肯定、旨味。

世界は狂った。さあ、今から飛び込むのだ！！

おそらく「好き」は今にあって大切な人に言い続けなければならぬのだ、というのも恋はなかなか愛に実らないから。愛、真の愛、それはいまだかつて実現された試しはなく、いや個々には偶然として為されてもいるのだが、私たちにかけつきよくのところ未だ到来せざるものとして、真の愛を私たちは本当に見ているのである。くだらないほど囁かれてきた虚言の愛、安っぽい愛、それらが反転すること。

ているていらていれ、まれびと、レーヴィット、言の葉の戯れ。言は知ではない。知から抜け出して噴出して終いには溢れ出るような言葉の数々が必要だ！リズム、リズムに合わせて歌を歌って血肉の隅々を貫通させ音の流れに沿って自己をまとめ上げてしまえ！ ふ、ふ、ふゆ、ひ、ひらひる、ひれ、ひろいちきゆう——そら、あめ、おと、くも、にじ、ちり、つぶ、ゆき、かみ、てん、うえ、した、まち、まつ、ひと。二文字から三文字へ、三文字から四文字へ。ここには一つのシステムだって決まりだってない、あるのは自由という動きだけ。動くことが私たちを生存させる、動きだけが私たちを私自身から解放する。夢のような音楽、虹のようなリズムと光。

言葉の重みというものの、発話する時の口唇の運動と風速と唾液、書く時のボールペンや鉛筆による印字。全き物質性。この私の手からすり抜けていくという形容がびったりかもしれない。言葉よ！ お前は何処にいるのだ——何処からともなく。深く昏い闇の中から、まるで世界が啓示を受けたかのように形へかたちを伴った物質の粒々が発出され、そうあの重みをもって私たちの眼前に立ち現

われるのだ。

流氷

たといその二字だけでも私は南極の氷河、寒々しい氷の連なりと海の激しい流れを想像する、本物の気温さえ伴って。言葉の重み、手からすり抜ける、そのわずかな瞬間の、人差し指にかかる、確かさ——（ソレは私を刺激する、私はソレに反応する……）。

愛、とか、神聖さ、クラリテイ、とかなんだか言って、取り繕って、けど何にもならない、安っぽいレストランで出されるハンバーグ定食のお決まり程度に添えられた小さな野菜のように扱われては消去されていく。作る、捨てる、作る、捨てる、ひらすら繰り返す。疑似愛。つくられたあい。加工食品です、そちらのボディは一晚二万五千円になります如何でしょうか……。どんなものでも積み上げれば価値あるものになるなんて嘘。まっぴらの嘘。まるでやるせない、

はしたない、それすらおもしろくない。愛、愛、今日も生産される愛、疑似愛、それに縋ることしかできない我々、無力、絶望、ニヒル、そしてすさまじき下劣。

紫の鉛のかたまり。幾つもの小さな孔が空いている。そこからぬめったなにかが飛び出す、鈍色にてらされた蛇の鱗、しなやかな肢体、くねらせるそれは一つの完成されたおもちゃの動きのようで見惚れてしまった、遂に鉛のかたまりから完全に姿を引き剥がして現れるのは新しいメデューサ。狂気の、そして微笑のメデューサ。

ねえ何が悲しい、何が憎い？ 我々の新しいメデューサはあたえられた空間を海のように自在に使い、その水面に浸ってゆらゆらと、ふわふわと浮いてはたゆたうのです。瞳孔なきメデューサ。あちらの、重たい世界の方では、すべての動きは黒い欲望の集積に根をもっている、そのことがメデューサには分かっている。メデューサは高度に磨き上げられた空虚な遊びのなかに戯れることもできるし、こうしてこっちの世界で憂いをおびて静かな水面上をたゆたうこともできる。

新しい我々のメデューサは、あつちからこつちへ、人々の表情を奪つてはここに返す、我々はそれを武器にすることが出来る。メデューサよ！ 貴方がいなければ我々は詩の一篇だつて読めないし、スウィフトの小説だつて一行たりとも正しく理解できなかつた。

メデューサの笑つた顔はどこか哀しげだ。彼女が重たい世界で空虚な戯れから手を離すとき、幾つもの人の表情を奪つてこちらの世界に帰つてくるとき、彼女の表情は世界を二つ抱えているぶん哀しい。我々の新しいメデューサ。

真実が無い！ とたしよ大仰に騒ぎ立てる貴方の口許は官能的で好きだ。真実が無い！ どれほど衝撃的なことだろうか。ひとつも真実が無い。全ては黒く塗りたてられたただの舞台道具で、本物の山も川も都市もネオンもディスコ・ルームも貿易ビルセンターも浮ついた恋人たちのサンタクロースもあつたためしがないのだ。貴方の喜びも、憂いも、三度目の恋人から抜き取つた性ない性欲も、絶望も、戯れでさえも。真実が無い！ 或いはぼつかりと地盤を失くした空っぽだけが存在している！ なんて心もとない、心寒い、まさに寒い、温度も光

も湿度も無い。おお！　これが本当の姿なのか。おお、これが本当の世界の在り方なのか！　真実が無い！　これっぽっちだって、あの日貴方が丘の上で交わした大切な契でさえも、嘘だったというのか。

貴方は私の事好き？——うん、とつても好きだ——嘘よ、今のは嘘。——なんでそんなこと。僕は本気で君の事好きだ。——例えばどんなところが？——たとえば……。君のその大きな瞳。髪の毛。カールしたつやのよい髪の毛。唇。ほんのり紅い唇。そろつたまつ毛。——他には？——しなやかな肢体。柔らかい乳房。すべすべしたお腹。暖かいあそこ。お尻。足の裏。それから、自由なところ。自由なのに、意志が強いところ。意志が強くて、なんでも自分で決められるところ。つまらない僕を、決めてくれたこと。感謝。愛。愛が溢れているところ。それと、ちよつと恋愛にだらしないところ。——それから？——まだたくさんあるけど、聞かない？——ねえ貴方、貴方は本当に私の事好きみたいね。——もちろんさ、ぞっこんさ。——方が愛すたびに、私も貴方の事を愛すわ。貴方が愛す以上に、私は貴方の事を愛しているわ。——最高の人だな。——私もあなたに見

つけられたという気がするの。こんなに幸せなことって他になかったわ。ただ一つの小さいボートを漕いできて、貴方は私を見つけてくれたの。——僕もそんな気がしている。一人で漕ぐボートの中、君に呼び止められて、水に沈むこともなく、こうやってまだ現に航海しつづけている……。

愛の配布——配分。俗的でだらしな愛を配布する、それは〈天使〉の行為、好意。「恋愛の掟百カ条」を網羅的に記述し配布せよ——くだらない愛が革命を起こすなどと誰が期待できようか。愛とは呼べない愛ならいつの時代にもあった。定義などと高尚なものからはうんと遠く離れた所ですでに世界の営みは行われていたのだ、これからもずっと。口にされる度に泡となって消えた、一つの願いは跡形もなく空になる。また誰かが愛を育む、くだらなくてしよっぱくて怠惰な……。そこにこそ神聖さが宿るのだ。これは逆説だ、転換だ、ずらしによる脱構築だ。何も、変わらない、ただ君の中だけでいつも大切なものと大切にしなければならぬものが躍動し、生という義務を遂行しつづける、それは神聖なのだ。

直線を描こうカーヴを描こう、一本の鉛筆を自由に走らせ黒い線は軌跡をのこす——鉛筆の先に光が宿る。氷上を舞う戦士。彼はステップを踏み、難しいステップを、そしてしなやかな螺旋を彼の身体を軸にして描いた——なんと美しいんだろう！ 自由で美しい世界は丸と螺旋からできているのだ。螺旋、狂おしいほどしなやかでエロティックで私は心酔してしまう。円周率は世界の暗号だ。ああ、あのアイススケーターはきつと恋をしている。

She is LIE. Her existence is a fiction. Her eyes are blue and we don't know what she sees or wants to see. Her lies attract many people to be crazy and mess up them. Her non-existence doesn't have any ponts in which we usually lay down. Thus she lay in [ex]istence. SHI-RA-I san.

フロリダからアテネへ。アテネからメルボルンへ。メルボルンからサンパウロへ。夜間飛行。サンパウロから成田へ。東京から福岡へ。朝。コーヒー。街の佇まい。白い吐息。寝ている恋人の顔。睫毛。辞書を抱えた外国人。ペーパー

バック。ジャック・デリダの『絵葉書』。出発と汽笛。光。

ゆめのなかをむすうのほしがかけまわっていた、流星群が在ったのだ、蜘蛛が天井の空に糸の網をはるように、星の輝きは列をなしてきらめいていた、夏の夜。幻影的。幻覚的。幻覚的夏、記憶、夢と空。何かを失った。失ったことを思い出す、本質的なことを。みんな自分のことを忘れてしまっていた。貴方は違う。自分の根をもっている、アメリカのフロリダからスペインのマドリードまで、強烈で残酷な旅を経験した、いくつもの地を歩いた、人々を見た、死を見た、星を見た、夜を超えた——神のことを祈った。祈りのとき、いつだって貴方は悲しい気持ちになった。なぜなら人類が救われることなどないからだ。人類は救われないう、それでも生き延びることくらいはできるのだった。それが現代の出した最終的答えだ。だから僕と貴方は、世界をえがく詩人になった。それくらいのことをしよう、心に願って。そのとき神は貴方に恋をした、神と僕と貴方との三角関係がはじまっていた。

光がまだ生まれる前の瞬きのなかを視覚が捉えていた——無音。何本かの灰色の線が蜘蛛の糸のように走っている。視界が揺れる、さざ波のように……。画面の端のほうから、じわりと射すような温かみがゆつくり広がる。さざ波の一粒を認識できるように、集中は高まり構成のひとつひとつを繊細に描写する。やがて包容力に彩られたブナの木のような緑が囁くだろう……。ピクチュクピクチュク、そこに〈私〉は小鳥の啄みの音すら増して聞き取る。産まれる！視界Ⅱ画面が大きく揺れ、一気に橙色と赤の混じった生命の力のリズムが支配する。揺れは収まらない。ドク、ドク、一定の間隔を刻んでいるかの如くだ。やがて真ん中の方からこの目ではうまく捉えきれない瞬光が現れ、灰色の線は犯され、生命の色も消え、一つの光が視界の全てを支配する……。誕生したのだ。

彼らは火のついたロウソクを持っている。太くて、十分に時間持ちもしそうな一本のロウソクに、火はゆらゆらと揺れている。紅い火だ。〈巡回する使徒〉の役目はなんだろうか。彼らは愛の囁きを呪文に変えているのだ。世界中の愛の囁きの言葉を、古きラテン語で書かれた書物を解き明かして秘教的な文言を作す

る……。〈巡回する使徒〉たちは教会の廻りをまわっている。何周も何周も、誰の呼びごとも命令もなく。教会の屋根は高く三角錐の形をしている。〈巡回する使徒〉たちは集中している。彼らの目の様態からでは心理状況を把握することはできない。白い袈裟、胸の前まで持ちあげられた金の盆。教会の周辺では、マルク村の豚小屋の豚全部が狼たちに食われて死んだ。また、リーヌ河の畔で姉妹が心中自殺をしていたという。世界がなぜ廻っているのか、そもそも本当に廻っているのか、一向に分からない。誰も分からない。しかし世界のはずれのこの教会において、愛の囁きを秘教の呪文に変えてつぶやかれる〈儀式〉だけは終わらない。〈儀式〉は続く。何しろ世界がはじまって以来それらは行われ続けているのだ。誰もこの教会を知らない。誰も〈巡回する使徒〉たちの存在を知らない。それで四十六億年も地球が続いているなんて、間違っても知られてはならないのだから。

ここまでできた。またここまでできた。いつもだ。その繰り返しだ。悪い気はしない。いつも君が居た気がした。僕は多分君と一緒にいる運命なのだ、おそらく。

悪い気はしない。何も解決していない。まだ何も始まっていない。でも準備は整った、やつとそう言えるんだ。僕は愛に賭ける。そこから始める。そこから全てをはじめめる。徒労に終わったっていい。途中で死んだっていい。愛からしか始まらない。始まることができない。どれだけ馬鹿にされようと……君のことだけは傷つけない。ようやくはじめられるんだ。愛は終わりではない、はじまりの歌だ。何だってオツケーさ……。朝日が射すだろう。僕たちはコーヒーを飲むだろう。世界にはおはようと言うだろう。今度は世界がおはようと言いつ返しださるう。

(了)

評論

暴力論 連載第三回

大震災に関して私が思うこと

光枝 初郎

ジュディ・バドニッツの短編集『元気で大きいアメリカの赤ちゃん』の話の中で、ある一国の市民に世界の終わりの時が来たと報じられるシーンがある。

見たこともないくらい美しい、よく晴れた日だった。空は雲ひとつなく、抜けるような青で、かすかに吹くやわらかなそよ風に、誰もが見えない手にふんわり持ちあげられているような気分になった。くたびれきったゴミ収集人たちやテレビの天気予報士でさえ、空気のかぐわしさに足を止めて、うっとり空を

仰いだ。⁶

世界が終わるといふ一日はよく晴れた日だった……。このような描写はよく見られるものでもあるが、東日本大震災が起こった日に私が体験したのはこれとよく似た光景に他ならない。というのは、大震災が起こった直前直後を全く知らなかったからである。

その日、私は大学のゼミ生と一緒に福岡の山奥の合宿場所からの帰り途中であった。実に天気の良い日だった。一行の帰りを引率する途中で、先生は合宿場所の近くにおいておいしいうどん屋があると行って、僕たちの昼ご飯をおごってくれた。福岡ではごぼう天うどんというのが名物で、ごぼうを一本まるまるあげた天ぷらが幾つもの上に乗ったうどんを私は仲間と一緒に美味しくすすっていた。

電車、地下鉄と乗り換えて、前日みなどと一緒に徹夜していたものだから眠気が

⁶ ジュディ・バドニッツ「備え」『元気で大きいアメリカの赤ちゃん』（岸本佐知子訳、文藝春秋、2015）、pp. 373。

ひどく、家についたらずっと寝ていた。だから、私が震災を知ったのはその日の夜のことである。テレビをつけたら、どのチャンネルもあの有事をヒステリックに伝えていた、というあの事態だ。

もちろんその報道で衝撃を受け、岡山にある実家にも電話をしたし（何の影響もなかったが）、それなりにショックだった。連日テレビを見ていた。それでも、私にとっては、岩手や福島、東京であれだけ悲惨なことが起こっていたあの時、かたや福岡でまぶしい陽光を浴びつつのんびりゼミ仲間と一緒にうどんをすすった光景があったという方がよりショックキングであった。

大震災に関して私が思うことは、だから、震災関連の書籍で溢れかえっている言説空間とはちよつと異質なものである。それは、平たくいえばナシヨナリズムの問題である。

つまり、あの出来事が起こっていた時、東日本（東京、福島）と西日本（福岡、岡山）では全く違った光景が同時に繰り広げられていた。津波が日本を襲った時私はのんびりうどんを馳走になっていたのである。しかし、全ての報道機関は全国民に対して、そのショックキングさと衝撃を伝えていた。

こういう言い方をして誤解を招くかもしれないことを予め伝えておく。あの時私は、福島や東京で苦難を受けている人を「同じ人々」だとは捉えられなかったのだ。なぜなら、福島にいる人は「福島にいる人」であり、かたや私は「福岡にいた人」であって、それ以上でもそれ以下でもないから。しかし、報道機関はそこに「日本の領土」という共通の括りを設定して、同一「国民」という概念を使用する。そのようにして「日本人」というイメージは喚起され（つづけ）るのである。私はこの時、ナシヨナリテイ（ネーション）というものの威力というか、効果の程をリアルに肌を感じた。そのように強く意識した出来事はそれが初めてであった。

通常、私たちは、自分の身近でない範囲の人々のことを考えていない。現に私は、福島に居住をおいている人々のことなんて、微塵も想定していなかった。東北地方に旅行したいな、とか、仙台にグルメツアーに行きたいな、とかそれくらいに関心が在っただけである。

あの日の夜、全ての報道機関が危機を同時に伝えていたとき、私の意識は「日本人」の概念が有する適用領域からほんの少しだけ離れていた。私にはむしろ、

福岡で生活する人々がいて、東京で生活する人々がいて、そして岩手や福島で生活をする人々がいて、という風に地理的に捉える方が正確なのではないか、と思えた。しかし、「日本人」という抽象的な概念は、その固有の地理性を忘却させ、巨大な物語（歴史）と共にそれらの人々を一挙にまとめあげる。

例えば、あなたがこの文章読んでいるとき、何処でもいい、例えば北海道の釧路でラーメンをすすっている人に、「あなたと私は一緒だよ!」、と呼びかけるその根拠は何であろうか？ 或いは、オランダのハーグでフットボールを嗜んでいる人に、「あなたと私は同じ（人間だよ）!」と伝えるその根拠は？ そして、考えたら意外に深いこの謎を、例えばナシヨナリテイという概念は隠ぺいしてしまう。そのようなことを私は学んだ。

ミクロにもマクロにも働くナシヨナリズムの身近な体験を話したところで、先程触れた歴史の体験というテーマについても最後に話しておきたい。私の歴史体験である。

ある時を境に私の歴史に対する意識は変わった。小学生の私にとって、歴史と

いうものは単に参考書に書かれてある知識の総称だった。塾のテキストに書かれてある「千歯こきの効果は実に飛躍的だった」というのはイメージこそすれど、覚えてしまえばそれでおしまいという類のものだった。日本の歴史上の事件はどこかおとぎ話めいたものとして当時の私は捉えていたのである。

中学一年だったか二年だったか、学校の帰り道で、私は自転車を漕いでいた。横断歩道を渡って曲がる所で信号待ちになり、そこであることに気が付いた。そこにずっと建っていたはずの古風な民家が跡形もなく消え、更地になっていたのである。

ただそれだけのことであったのだが、その時の私には不思議な感覚だった。その帰り道はずっと昔から使っていたもので、その民家も幼少のころからずっと存在していた。それが突然消えたのである。そうして、土だけの地になった場所を見たとき、この土地は、様々な過去を抱えているのだ、という風に気付いた。最近まで建っていた民家の土地という過去だけではない。江戸時代に、民衆の住む地としてここには粗末な宿が建っていたのかもしれないし、もっともつと遡って、たとえば源平合戦のとき、源氏に追いやられた平家の兵士たちが岡山ま

で後退してこの土地で血を流しながら死んでいったのかもしれない。そういう可能性に気づいたとき、私の意識は百八十度変わった。この土地だけでない。現在は、パソコン教室の入ったビルやアスファルトで塗られた郵便局の駐車場しか見えなくても、過去には各々の時点で全く違った風景を成していたのだ、ということに気付いた。様々な過去があった上で現在の形がある、それが歴史なのかもしれない！ 源平合戦の妄想が当時の私にはピタリときた。この土地でもしかしたら歴史上重要な人物同士が剣と槍で戦っていたのかもしれない、そんな土地を僕は目の前にしているのだ……。

歴史は地層である。様々な過去を保持しながら、現在は一つの表面という形をのぞかせている。しかしその奥の堆積の構成が、「日本の物語」として語り直され、ときに大きな役目を果たしたりすることに気づくまでにはもう少し年月を必要とした。ともかく、教科書上の知識でしかなかった私の歴史認識は、ある時を境目にして、空間に時間（歴史）という次元が絡んでいるという発見で様変わりした。とても個人的な体験だが、物事を考えていく上でこの思い出に何回も立ち返っている。

(一丁)

小説

前夜祭

小野寺那仁

ひとみが彼を誕生日だからと言ってオフィスビル、できたばかりのアジアセンタービルの最上階にあるフレンチのレストランに連れ出したのは、それが彼女にとって最後の出勤日でもあったからで、いかばかりかの詩的な情緒に捉われたものではなかった。彼女のオフィスはそこから五階下にあった。風の強い日は揺れることもあり、居心地が良いとはお世辞にも言えなかった。彼の、つまり林の勤めている会社は、そこから徒歩で数分のやはり完成して間もないセントラルエステートという螺旋階段で有名ないかつい建物の中にあった。彼は地方出身者であり垢抜けていなかった。理科系で口下手だった。何を尋ねてもあまり興味が無いとしか言わず、いわゆる仕事の虫のような男であった。仕事に関して尋ねると守秘義務があるとか、国家機密に関する事だからと逃げ腰だった。し

つこくひとみが尋ねると君に語ったところで仕方ないだろうとバカにしたような通り一篇の返事しかなかった。何故だか国家機密と彼が言うと言憑性が高まって過去の男友達が言うのとはぜんぜん意味合いが違うようにひとみは感じる。商売柄ますます聞きたくなるのだが、それは本当にヤバイことになりそうかもしれないと自分を抑えるのに苦労することが何度かあった。ただ、最近は違う、彼に魅かれたわけではなく、自分や同僚たちのしている仕事が無感に感じられてきて、十年間で随分と自分をすり減らしてきたのだと思わざるを得なかった。元はといえればひとみも冴えない女だった。ひとみは擦り切れたストッキングのほころびを上司から指摘されて顔から火の出るような思いをしたこともあったし、ノーメイクを咎められたこともあった。いずれもRという男、彼女の上司、ちやうど父親と兄の間くらい歳の年齢の、外見はありふれた男だったが、彼はずうずうしくも彼女の心の中に入り込んできた。そのうちには、仕事やプライベートのさまざまな手ほどきを受けてひとみはかなりの成長を遂げたのであった。おりしも、数年続く、株価の成長にうまく乗ったという感じでもあり、ひとみの出来高給は入社の際には考えられない高給に昇りつつあった。だがようやく、と

いった感じでもあった。すでにRもひとみも相当に痛めつけられていたのである。噂ではRの借金は十億とも二十億とも言われていた。妻子とは絶縁し、家を売り、それでもどこからか金を調達してきて、自社の株を買い漁った。いや買い支えたと言った方がいいのかもしれない。そうしてとうとう、自社株は約十分の一まで落ちたその日に、彼は衝動的にセントラルエステートの螺旋階段から身を乗り出して数十メートルの吹き抜けをまさに落下しようとしていたのである。幸い、その時にひとみや他の同僚たちがRにしがみついたために彼は自らの意志を砕かれてへなへなとその場にへたりこんだ。体中の汗が噴出していた。血のようにひとみには見えた。彼女も恐ろしさを感じた。それはまだわずか二年前のことに過ぎない。ところが神はRを見捨てなかったようだ。早くもその日の休憩時間を過ぎて午後にはさしかかる頃になると僅かばかり株価は持ち直してそれからするすると上昇を開始し始めたのであった。まさに奇跡のようにも思えた。それから数日の間に上昇を継続して彼は助かったのであった。ただ醜態を晒した彼は休養を余儀なくされ会社からは一時的だが姿を消した。いうまでもないことだが彼の手法は法に触れるのでまっとうな方法で自社株を購入していたわけ

ではないし、会社の危機を救うためにそうしていたわけでもない。まして投機家としても一社員としても、たとえ役員であったとしても誹られるはすれ褒められた行為ではなかった。ただ生命を掛けるという点で何かしらの恐怖感を全社に知らしめて彼は伝説的なカリスマに祭りあげられることにはなった。醜態は醜態であるが、真似ができないという意味かも知れない。役員たちも彼を処分するのは憚られたのであった。それに自社株を買っているというのは噂に過ぎず、ならん痕跡をとどめることはなかったのである。その日を境にひとみの業務は一変した。もはや外で営業することはなくなってしまったのだから。

眼の前の林は紹介で知り合ってから何度かこうして逢っているのだが、片時もパソコンから目を離さない。彼は仕事をしてもいいかと尋ねてきた。ひとみは少し面食らったが、年下のまあまあの顔立ちの林に甘くうなづいてしまった。初対面の初日を除いて。さすがに初対面では彼もそんなことはしなかったが、翌日からは平日だったこともあり会社帰りに待ち合わせしてふたりとも仕事をしながら食事をする日が続いていた。断ったら終わってしまうような気がしてセントラルエステートには似つかわしくない昔の喫茶店のような隅で何度か日替わり

の夜の定食を共にした。ひとみとて残業が残っていた、携帯のメールとスマートフォンので二台を充電しながら使用すれば何とか事足りる用事がほとんどだったのでオフィスに戻る必要はなかった。次第に彼に同調していくのかいつしか自分も仕事に熱中するようになった。いったい私たちはどうしてここで働く羽目になったのだろうか？ よくわからないけど、まあいいかという感じだった。彼に夢を尋ねると夢は海外勤務だと言った。あたしもそれは気に入った。世界遺産めぐりなどしてみたかった。古代の遺跡の隣りで仕事をするのも悪くはない。仲介をしたひとみの会社の後輩が説明したところの変な人と言うのがもつとも当たっているのかもしれない。変な人も都合の良くなる時もあるのだ。もうどういふ人物であるかはもうわからなくてもよくなっているのかもしれない。ひとみはとにかくオフィスにいられなくなっていたのだ。その理由は様々だが、彼を紹介してくれた後輩でさえもひとみとすれ違っても無視するようになっていた。ひとみは会社で表彰されてからというもの、孤立無援になってしまった。表彰されたといっても大方、毎日ひたすらに謝っているだけなのであったが。謝って顧客の解約を防いだけである。ひとりだけは別の理由から疎遠になりつ

かという危惧はもちろんあった。投資家たちの不安に満ちた苦情が相次いだ。彼は東京電力を推奨していたわけではないが日経平均株価が下がれば軒並み下がっていたのだった。それに関してはわからないと言うほかなかった。ひたすら謝罪するしかなかったのだが、私は何のために誰を代表して彼らに謝罪しているのだろうかという思いがひとみの胸に去来して枕を濡らす夜が何度もあった。いったい何を代表しているのだろうか？ この証券会社？ いやそうではないだろう。日本政府？ いやそうでもないだろう？ ではマーケット？ 資本主義？ そうかもしれない。グローバル資本主義の代表として謝っているのか！ そうかもしれない。なぜなら世界中の証券会社の私のような窓口担当者が私と同じようにアジアの片隅の電力会社の大暴落によって損失を被った人々に謝罪しているのだろうか。それによって不条理にも職を自ら失う人々もいるに違いなかった。そうはいうもののひとみは今回のRの危機管理に対しては非常に腹立たしく思った。彼に救援を乞いたいわけでもない。彼を心配しているわけでもない。当初の頃はそうであったが、日が経つにつれて下げは一時的なものであったから、銘柄によってはそれほどでもなかったから、もちろん不安に満ち

てはいたけれども。課長がマーケットの荒波を避けてどこかへ行ってしまったのは敵前逃亡に等しく、許されることではなかった。支店長からも何度か消息を尋ねられたが、見つかりませんとしか言いようがなかった。だがこのぼんくらの支店長は知らないのだろうか、管理部長に相談すると社内の社長の直接指揮する内部監査チームはRの居所を突き止めてコンタクトを取っているということであった。それは当然だろうとひとみは胸をなでおろした。Rが個人的にいなくなっても会社にはさほど影響はないけれども、Rが何をしでかすかは計り知れなかったからである。管理部長もややぼんくらであって、何かあったら私に言ってくれとだけひとみに告げたが、その日のうちに名前も言わない内部監査チームの誰かからひとみに連絡があった。守秘義務が君にはあると言ったうえで、われわれはRをコントロールできるようになったから安心して日々の業務に専念してくれ、君の活躍はわれわれは十分に評価している、近くRも復帰するのでしばらくは部長は不在であるが何かあったらこちらから指示する、Rとコンタクトできたらこちらに報告するようにと言ってきた。ひとみは言葉に詰まった。内部監査チームは、私とRとの肉体関係までも把握しているのだろうかという気

持ちになったが、それは過去のこと、ないと言い切ればいいんだらうと開き直った。まさかRが監査チームに吹聴することもないだろう。

それからまた週が巡って出勤した月曜日、今日こそはと思つてRに電話を掛けた。はたして彼はすぐに電話に出た。いろいろあつて彼には別段何の感情もなかったが、少しも心配していなかったかと言えばウソになる。彼が電話に出たことで安堵した。しかし、彼は思いがけない言葉を吐いたのだった。

「側頭部が、ね。ズキズキと痛むんだよ。吐き気がおさまらない」

「それは大変ですね。それで電話になかなか出られなかったんですか？ 安心しましたけど私もう限界なんですよ。疲れ切りました」それにはRは答えない。

「キミ、あの時だな、あの瞬間にだよ。思い出してごらん。キミは私の側頭部をハイヒールのカカトで蹴り飛ばしただろう？ 憶えてないか？」

「そんなことしませんよ。誤解です」ひとみは笑いながらも彼の言葉が気になつて電話を片手にデスクに身体を寄せて片脚を伸ばしてハイヒールを脱いでみた。するとカカトは確かに形状が変わっている。けれどもまさかそうですねと言うわけにもいかず、たいしたこととは思えないからあくまでシラを切ること

にした。

「まあ、それはともかく俺は一生一代の大勝負に出ているから会社に行くか行かないかなどという細かな事には拘泥しないでくれ。会社の奴らだって信用できないんだよ。まあ内部監査チームは信用するしかないけどね。信用しなかったらまったく根底から崩れてしまうから。それに彼らもマル秘資料も俺に差し出してきているから一応信用しているよ。あ、今、どこにいる？ 窓口？ それなら、受付に行ってくれないか？ 盗聴器が仕掛けてあるかもしれないしキミの隣の奴が訊いているかもしれないから。いいか！ あらゆる奴を信用するな！ 情報を売るとは思わないが、情報を漏えいする可能性は十分にある。それから同業他社に通じている奴もいるからな。内部監査の調べたところではキミ以外は何等か外部とのコネクションがあるんだぜ。まったく驚いたよ。あいつら一日中、こんな仕事をしていたのかと。まあ一円にもならないんだけど、それは重要なことかもしれないよ」

「はあはあ、いま移動します。でも受付の白井さんにはどう言ったらいいの。そんな急に替わられて言ったって」

「それぐらい考えろよ。じゃあ白井のところまで行ったら俺に替わってくれ。少し早いけど昼食を共にするから駅まで来いって言ってやるから」

「それ本当なんですか？」

「本当のわけがないじゃないか」

「ああ、俺は今、ROEの公式を使ってポートフォリオを組み合わせているからあんまりくだらないこと言うんじゃないよ。とにかく受付まで行ってくれたら、面白いことを訊かせてやるから。すぐに移動すること！」

「顧客から電話が掛かってきたらどうするんですか？ 苦情がかなり多いんです。ほとんどは苦情です、まあ繋ぎ止めはしましたけどね。おかげで表彰されましたよ」

「そんなの謝るだけならキミがやる必要はないじゃないか？ そんな業務誰にでもできるだろう、管理部長にでもまかせとけ」怒鳴るようにRは言う。

「ああ、そうなんですか。表彰されたんですよ。会社から」

「それはご苦労様。だがなあ。そんなの気にしてたらこんな商売やってられるか？ 儲かって感謝されたことなんてあるかよ。儲かったら当たり前だって思

うのが客じゃないか！」

「……」

「まあ、東京電力株には俺でも同情するけどね。俺は辞めたことになったから君の普段の業務は俺には関係ない。キミは課長になったんだから好きにしたらいいだろう」

「どうしてそんなことになっているんですか？」

「それは仕事をしやすくするためさ。あと退職金が少ないけど出るからね。あ、後任は情報漏えいを避けるために不在だから。だからお前は課長なんだよ。誰の指図も受けなくてもいい。あたしが課長なんですよねって管理に言っただけ。誰の困った顔して頷くから、はっは。ああ、痛い」痛いというのは激痛がどうやらRの脳奥にサーベルを突き落としたらしい。ひとみはRの言ってることは支離滅裂で理解が困難だと思いつつも、それでも常人よりはなんとなくの範疇を超えて細い糸筋を掴んでRの指示するがままに行動することにした。ともかくも行動が大切なことは営業職である以上は理不尽であっても全うしなければならぬまい。

携帯電話を握りしめたまま地上階まで降りると受付の社員の白井の横顔が見えた。彼女は去年入社したまだ新人であったが、TVに出てくる歌手グループの末端の組織にいたこともあってプロポーションがよく、華々しい顔立ちであった。

「今日の予定は？」

「え、なんですか？」

「なんですかって？ だから今日は誰か重要な人物でも来るの？ 財務省とか税務署とか」

「ああ、来ないです、強いていえばユーロ証券の武者小路氏くらいでしょうか？」

「え、まあなんて失礼な言い方なんです！ 大物じゃないの？ TVでよく見る大物アナリストなのよ！ ちよつと何時なの？」

「十一時ですね」

「あと少しじゃないの！ 誰に逢おうとしているの？」

「そんなのダメですよ。先輩何を考えてるの？ 守秘義務違反ですよ」

「あたし、今日から課長になったのよ」

「そんなこと言われても急に。冗談はよしてください！」

もちろん、ひとみだって白井葉子の入社年次で大物アナリストの名前を知っていたわけではないのだが。

そのとき、Rのキンキンと甲高い声が携帯のデジタル化した無機質な音のように耳に飛び込んできてあわてて携帯を顔から遠ざけた。

「おーい、その話もらったぞ！ 武者小路と緊急対談だ！ 誰に逢うかなんて問題じゃない。今では俺は社内の神になりつつあるんだから、誰にも遠慮することはない。俺に替われ、俺だおれだ」そんなことを言われても二週間やそこらで神とは大げさな。何か秘策でも思いついたのだろうか？ 株価は確かに下げ止まって若干の上昇傾向を見せていたがそのまま上がって行くとはどうてい思えなかった。それとも何か確信でも掴んだのだろうか？

「それって無茶です！」聞こえたのか、白井がこの場に及んでオヤジギャグで反応した。

「面識があるんですか？」ひとみが尋ねる。

「向こうは知らないんだろうけど、俺は知ってる。TVでよく見ているからな」

「彼はいいと言うのでしょうか？」

「ネタになりそうなら、OKと言うんじゃないのかね」

「でもあの人が、有能とは言えないでしょうか？」

「だからいいんじゃないか」よくわからない返答。

女子ふたりは顔を見合わせて沈黙した。ふたりの脳裏に難事業という言葉が浮かんだ。

「あたし、イヤです。そんな有名な人にいきなり対談を申し込んでも無理だと思う」白井は泣き出しそうになっていた。「とにかくさ、あんたコンビニでも行ってさ、とりあえずお弁当でも買ってきてよ。その間にR課長を説得するからさ」

「そもそも吉沢先輩はなんのためにここにきたのですか？ 受付できるのですか？」

「まあ失礼ね！ あたしだって二十代前半は受付経験あります！ もちろんあなたにコンビニ弁当を買ってもらうためよ、カルボナーラでいいわ」

「なにかにつけ融通のきかない、せち辛い世の中になったものだなあ。おい白井くん、君の真面目さは評価できるし、所属部に報告してもいい、秘書課にも抜擢

してあげてもいい。ただし君は臨時ボーナスのチャンスを自ら失いつつあるってことをお忘れなく」そう言われてしばらくためらっていたが、ようやく白井はその場を離れてこそこそとコンビニに向かい始めた。

「で、課長、もう大丈夫と思いますが、何の話でしたっけ、手短にお願いますよ」なんとか武者小路が来るまでに話を終わらせて部署に戻ろうとひとみは考えていた。まさか、武者小路との対談を本気で考えているとは思わないし、それはわたしがすべき仕事ではないし、ここは白井にやらせてもいいことだった。そう彼女の美貌なら武者小路も笑顔で応答してくれるかもしれない。彼女は無責任にそう考えた。

「実はな、俺、最近あいつが下がり続けていただろう。それでももうどうしようもなくなっちまってな」

「知ってます。だってあの日あんなことをしたのはあれが下がり続けていたからですよ」あれ、というのはある会社の株であった。公にはできないが自社株だった。噂では誰もが囁いていたがそれは本当だったようだ。Rの含み損は二十億とも三十億とも言われたがそれはRの顧客知人を含めての金額であって、仕

手をしているわけではないので一社の損失でもなかった。しかし決定的なことは絶対に潰れないだろうと言われていたB社の倒産である。倒産してしまつてはどうしようもない。持つていてもただの紙切れである。B社での失敗はかなりの手手でありRは自宅マンションを売却し会社を見かけではあつたが退職して退職金を貰う羽目になつた。だからもう課長でもなんでもない、という内容をひとみに告げた。そして全財産を失つたRは妻とも別れた。子供は妻が引き取つた。要は全てを失つたのであつた。それでも会社はRを見捨てなかつたのでRは頼るところは会社しかないという。そう言われても噂とは微妙に異なつていて真実はどこにあるのかわからない。

「で、これは冗談と思つても構わないのだが、君のマンションに同居させてもらえないだろうか。もう毎日マンガ喫茶で寝泊まりするのに疲れてしまつてね」

「それは冗談としか思えないんですけど」

「じゃあ私が復活したら、どうだ？」

「どうなんでしょうね」それはありえないだろう！ 確かに彼を愛していたこ

ともあったかもしれない。ただなんというかやつぱり合わなかったというのが本音だった。むろん年齢的なこともあるのだけれども、彼はあまりに不安定だ。ひとみは不安定な生活に疲れてきたのだから。

そして、その旨を告げた。彼は憔悴した声を挙げた。

「今回のチャレンジに対してのモチベーションにしたかったんだけどな」

「若いですねR課長。いえ株に対するリベンジならわたしは応援するにやぶさかではないですよ」心にもないことをひとみは言った。けれどもRは彼女の心変わりをまったく気にもとめない、気が付かない、彼は信じきっている、断られてもまだ信じている。それはマーケットに毒された人間特有の鈍感さであり都合の良さだった。そうして彼を裏切る多数の腹心を生み出すことになるのだ。

「いやあ、まあなんとなくはわかるがね、なんとなくは、女と言うのはそういうもんだよ」

またしても意味不明な言葉だった。その的外れな言葉はひとみが見限るには十分過ぎたのである。

「成功してマンションを買い戻せば奥さんも戻ってくるんじゃないんですか？」

「それもなんだかなあ」

「すいません。あたし課長の言われることよくわかるんです。ただ最近不安定な生活に疲れてきて。やっぱりお金だけがすべてじゃないと思うようになってきたんですよ」

「俺だってそりゃそうだよ」

「いえ、だからですね、本当に安定しようと思っただけで同僚から彼を紹介してもらったんです。エンジニアです。先日逢ったんですけど、一緒にいて悪くない感じですよ。楽なんですよ。資本主義には無関心ですし」

「資本主義の恩恵を思い切り受けてるくせにな」

「はい、電機メーカーの開発です」

「いやそれ以上は言うな。インサイダーになる」課長は観念したようだった。そのとき会話が途切れた。沈黙が続いた。それで白井が叫んでいるのがわかった。コンビニから戻ってきたのだ。

「では、お話はそういうことだったんですね」気を取り直してひとみは課長に訊きたでした。

「ああ、そういうことだ。それ以外の話は誰にもできない。ああ、武者小路のことなんだけど、あれはもういいよ。急にどうでもよくなつた。まああいつのことだから嗅ぎ付けるだろうからね。こっちから言わなくても。それにわが社に来るなんてすでに嗅ぎ付けたか、誰かが呼び寄せたんだから俺の出る幕でもない。今回のプロジェクトは俺が発案したんだけど既に全社的な取り組みになつてるから、もうだいたい俺の仕事は終わっているのさ。あとは俺のアイデアを会社がどこまで認めてくれるかにかかっているんだが……」

「どんなアイデアなんですか？」ひとみは話を合わせていただけであつた。目の眩んでいるRはちつとも見抜けない。

「ああ、そのうち文書にしてメールするよ、まあざっくりしたものなんだけど。キミ数式なんて興味ないだろう。だから大雑把に説明するよ。ただ電話で顧客が問い合わせてきてら投資信託をとにかく薦めるんだ。そのパッケージがすべてだ。中身の説明は乞われたらしなければならぬが、パンフレットだけ渡しておけばいい。余分なことは言わなくてもいいし、まず確実に儲かるだろうから自信を持って販売すればいい。まあ一般の顧客はね、その投資信託だけで十分だと思

うよ。もちろんキミが繋ぎ止めてくれた顧客にも解約してもらって新しいこいつを買う必要はあるね、悪いけれども私たちは手数料を稼ぐのが目的なんだからね。まあ会社を辞めている私には関係ないが一応キミの今後の方向性は示しておかないとね、あんまり無責任だから」

だがそういう話でこれまでに何度苦汁を味わわされたかとそのたびごとの場面をひとみは思い出して、この人相変らずなんだと思わずにはいられなかった。やはりもう会社は辞めようとひとみは思った。その何か嫌なものでも踏み潰したような違和感はどうにも気持ちが悪く、耐え難かった。いつの間にかひとみはR課長との通話を遮っていた。遠くでこちらを見ている白井の無垢な微笑みが疎ましく思えた。

それから数人が白井の周囲に現われたようだ。彼らが武者小路とその御一行なのだろう。背の高い男を中心にして談笑しているのが見えた。彼らに見つからないようにひとみは足早に遠ざかる。ひとみは彼が恋しくなった。彼がどういう人物であれ、おそらくはRのような男よりはマシな気もした。

数カ月が過ぎた。それからRとは接触していたが仕事の話しかなかった。

Rのよこしたメールは開封せずにそのままだ。彼とはうまくいっている。私たちは結婚前夜なのだろう。Rは汚名を返上して何の肩書かはわからないが会社にも社長とともに現れるようになった。さらに驚いたのはRが武者小路のインタビューに応じている番組がウィークデーの十時半からとはいえTVに流れたことだった。この世界は儲かる方法が見つかれば一夜でスターにのし上がることは可能であった。今度ばかりはRにも気まぐれな女神が微笑みかけているのかも知れなかった。けれどもすでにひとみには無関係な世界になりつつあった。頑なだった彼があたしと逢うと微笑んでくれるようになった。それだけでもひとみには幸福の訪れのような気がしてならないのだった。

(了)

連載小説

書かれなかつた寓話

第五回

日居月諸

食堂の一隅に席を取った上総はパイプ椅子に坐りこんだまま、机の上に乗せた昼食に手を付けることなく、話声のこだまが行き交う天井をぼんやりと眺めていた。免許合宿に来ている人びとの間では一通りグループが作り終えられ、初めの頃は各々がバラバラな席取りをするから落ち着かなかつた食堂の風景が、今となつては皆が皆同じところに陣取るおかげで、ようやく馴染みのあるものとなりつつある。上総の座っている窓際も、彼女と、彼女が待っているもう一人の女によつて、食堂の風景を作り出す一部となつていた。

教習所に来てまもなく一週間が経とうとしている。自動車の運転という、ただ

でさえ新しい技能を身につけようとするだけでも骨が折れるだろうに、よりによって山形という縁もゆかりもない土地に行くなんて、どういう考えをしているのだか、と自分でも眉間にしわを寄せながら苦りきるように、それでいてそうした自分の姿を嘲るように思っていたが、振りかえってみるとこれといった記憶が浮かんでこないほど、あつという間に時間が流れ去って行った。無論その間には苦労やら懊悩やら、ほんの少しの充実やらを感じていただろうが、それを思い出そうとすると手触りのあるものとして跳ね返ってこない。

何もかも定着しない。運転の心得も、人びとの顔も、この土地の風景も。新しいことに出くわすたび、それらを自らの体の内に取り込もうと努力してはみるのだが、どこかで食い違いを起こしてしまい、噛み合わせようと苦心するうちに、別の新しいことと取り替わる。そして、忘れていることが増えていく。

趣味が高じるあまりあちこちに旅行にいくおかげで他所の土地に移ることは慣れているつもりだったが、こんな風に長くもなく短くもない期間を過ごすのは初めてだった。仕事や学業で地元を離れることがあっても、それなりに長い期間を過ごすのだから形はどうあれそこで作られる自分の輪郭というものは掘

めてくる。旅行なら、輪郭がまるで整わないまま浮かび続けている自分だから自分でないのだからかわからない、粒子のようなものとともに過ごしているだけでいい。

だが、ここでは勝手が違う。ここでは運転の心得という、これからの自らの行く末を支えるものを掴まなければいけない。一方で、この山形という土地は、これから先、生きていく上でたまに気に掛けることにはなるうが、気に掛ける程度で普段は忘れたまま、ここに訪れる前と認識の上では何一つ変わらない遠い土地であり続けるかもしれない。これからの未来を支えるために自分の肉体に染みつかせるべき知識を、記憶が根付きづらい土地にいながら手に入れなければならない。この矛盾とどう折り合いをつけるべきなのだろうか。

運転の心得と、土地の記憶。それらを一挙に手に入れるのを願うこと自体あさましいのであって、世間の人々だって同じような体験に見舞われながらも、どちらかを切り捨てながらどちらかを手に入れたはずだろう。頭ではそういう説得を受け入れることができた。が、体がこの矛盾を受け付けられない。新しい事と出くわすたび、人びとの顔にせよ車から見える風景にせよ、いずれ自らの記憶からは消え失せるのだろうと頭の片隅で拒んでしまう。そして、周りと折り合いもつけ

られないくせに何かを手に入れるなんて凶々しい、と咎める声が聞こえてきて、ハンドルなりシフトレバーなりを握る手が鈍ってしまふ。何もかもが自分の元から離れていき、孤立していくのを感じ、あげく周りとの距離感まで失われていつて、自分の輪郭までつかめなくなっていく。

「お待たせしました」

食堂のざわめきの中からでもくつきりと輪郭を伝えてくる高い声が聞こえた。向かいの席に紗江が座る。彼女の視線が、まともに受け答えをできないでいた上総の周りを動き、

「お疲れのようですね」

と言ってくる。薄い化粧にもかかわらずくつきりと縁どられた眼が、こちらの顔をゆらぐことなく見据えてくるので、上総はすこしたじろいだ。苦笑しつつ視線を外すと、向こうが昼食に手も付けずに座っているのが見え、次いで、こちらの手元に置かれた昼食もまた店員から受け取った時と変わりない姿で机に乗っているのに気付かされた。

「二週間で何もかも詰め込むのは大変ですからね」

いやあ、と氣遣いを受け取るのだから何だかわからない返答をしてから箸を持つと、それに合わせて向こうの手も動き始めた。

「上総さんは、きつと何もかも自分の内側に取り込まないと氣が済まないタイプなんでしょね」

「そう、ですかね」口に含んだ揚げ物を噛み終えてから答える。

「普段話している様子からも伝わってきますよ。あちこちに目配りが効いていて、その分、見落としがないかどうか気にしだすと止まらなくなる」

悪戯っぽく笑うので苦笑で応えたが、内心は普段から氣にしていることを言いつてられて当惑していた。とはいえ、こうしたやり取りはこれが初めてではない。紗江は上総よりも年下だったが、あらゆる物事に対する觀察が鋭く、しかもそれを言語化するのに長けていたので驚かされてばかりいる。教員と生徒として教習に臨む時も、あるいはそうした役割から解放されてお互いが一人の女として向かい合う時も、上総は年の差が埋まるどころか、時には相手が年上なのではないかと思わされるほどに紗江の利発さを目の当たりにしてきた。

「本の話をする時もそうなんですよ。作中の舞台になった土地柄だったり、時代

背景だったり、他の作者との関連だつたりを気にしますよね？」

「のめりこみだすと何もかも知らないのと、逆にわからないんじゃないか、と思つてしまふんですよ。そこまで深い読みができるわけじゃないですから……」

「そういう読み方こそ深い読みですよ。自分の意見が大事だとよく言われますけど、一人きりで出す意見なんて、弱い土台の上に成り立っているものですから」
「でも、弱い土台の上で戦っている人のほうが懂れますね。自分はそうじゃないから」

「まあ、確かに」

食事をしている間も目を離さずに耳を傾けていて、相手の声が途切れると口の中を整えてから話をつなげる。こちらが自らの卑下を交えつつ反駁しても、それを否定するのではなく、卑下したくなる気持ちを理解しながらその奥にある向上の意志まで汲み取るように、深い息をともなつて笑う。

「上総さんは本を読むために生まれてきたような人ですね」

「ええっ」不意の言葉に、思いがけずむせ返りそうになる。

「だってそうじゃないですか。ふつう本を読んでいると称している人は大抵自

分のために読むだけで、いろんな本を読んでも深入りはしないんです。つまり、面白い話には興味があっても、それを作っている現場には興味がないんですね。そういう人って、たまたま出会ったのが本というだけで、映画でも音楽でもアニメでも、なんでもよかったんだと思いますよ」

やや棘のある言葉だったが、上総にとつても心当たりがないではなかった。これまで本が好きと称する人たちと交流してはきたが、自分のように一人の著者にのめりこんで読書をする人間は極めて少ない。だからといって、自分との違いを盾に糾弾しようなどと言うつもりは毛頭なかったが。

「もちろん、それも一つの本とのかかわり方ではありますけれど。ただ、本を書いている人こそあらゆる表現方法がある中で、経緯はどうあれ本を書くという道を選ばざるを得なかったわけです。そういう制限、あるいはある種の貧しさの中で生きて来た人たちに対して、貧しさでもって応えるというのは、正しい態度ですよ」

時には両手を広げて何かをふくりますような身振りをして、時には両手を合わせて何かを包むような身振りをして、そうした仕草に加え、しっかりと句切れ

を作って一つ一つの単語を相手に伝えようとする口調にもよどみはない。自分のやるべきことを遂げると、また食事に戻って折り目正しく箸をつけ始める。相手の反応を求めず、自分の意見に自信を持っているそうした態度に偽りは何一つうかがえない。上総はその明快さをありがたく思ったが、一方で劣等感も抱いていた。

はじめは年上だとか、都会出身だとか、あたかもこちらが優位にいるかのごとく思い込みながら向こうの卒のなさど比して焦燥感を抱いていたが、そうした先入観をふるい落したとしても、一個の人間として紗江には劣っていると、上総は痛感せざるを得なかった。無論、これまでも同じような体験は味わってきたが、そういう時優れている他人は大抵、上総に対して興味を抱いてくれなかった。それゆえ、自分とは違う世界の住人として線引きをしつつ、無意識裡に生ぬるい安堵にひたりつつ劣等感をなだめすかしていた。

「でも、そういう人って運転に苦手意識を持ってしまふんですよね」

紗江が同情を込めた口調で言う。しかし、上総としてはすぐに苦笑で応えることはできなかつた。今面と向かっているのは、これまで見上げながらその背中を

追いかけていた人々と違って、思いやりを交えつつ相手の素性をくまなく明らかにして、弱点であろうと労りをもって救い上げるから慰撫されるような印象さえ与え、本人がそうとは気付いていない内に周囲との上下関係を確定させてしまふ、珍しいタイプの人間だ。

「教習所の職員としてはこういうのはまずいんですが、交通ルールやら視界に映るものやらを一々踏まえながら運転するのはとても大変なんです。ドライバーはみんな癖として何か一つ見落としているものを抱えながらハンドルを握っていて、運に支えられながら一見安全に道を走っているのが現状なんですよ。そうしないと走れませんから」

毒のこもった言葉遣いではあった。しかし、運転をしたことがない人間にとっても理解のできる話ではあったから、特別ひっかかることはない。

「ハンドルを握ると性格が変わる人っていますよね。あれなんかは、自分が強い人間だと思っている例です。つまり、ありもしない豊かさを土台にしながら運転している」先程までの話とつながりを持たせられたことに満足するように紗江は一呼吸置いた。「そこへ行くと自分の貧しさを自覚しながら運転している人つ

て、教員としては非常に好ましい生徒なんですよ」

言い終わって首をやや傾げると、肩のところまで切りそろえられた髪がゆつくりとなびいて頬や脛を散り散りに覆うようになり、それとともに微笑みが見られる。一連の動作はあたかも何かを懐に容れながらやさしく抱き寄せる様子を思わせた。首をかく振って元の行儀のよい姿勢に戻ったことであつさりと崩れてしまった一瞬は、どこかで見覚えのある情景と似ていたのでしばらく上総の頭に残り続けた。

「ですから、上総さんはそのままでもいいんです。運転なんてこの二週間だけですべてが決まるわけでもないんだから。一年、二年と時間をかけて慣れていけばいいし、今ここで何もかも汲み取ろうとする必要はないんですよ。二週間と引き換えに、自分の美点を犠牲にするなんて、つまらない話でしょう？」

説得力のある話をここまで展開されてしまつては、首を横に振るわけにはいかない。ただ、いまだ納得しきれない部分も残つていたので、上総は控えめに、そうですね、とゆるく笑いながら応えた。それでも向こうとしては手ごたえを感じなかつたのか、目線を外し間をおいてからまた向き直つて、

「明日、路上教習で一緒になるんですよ」と明かした。「私の好きな風景が見えるところまで、ご案内いたしますよ。絶対、上総さんのお気に召すはずだから」次の準備がありますのでこれで、と断りながら立ちあがった紗江はいつの間にか昼食を食べ終えており、それに対して上総は半分も手を付けていなかった。入った時はすでに満員だった食堂も人がまばらになり、たけなわを惜しむように急いた口調でしゃべる声が響くだけで、時計を見るとあと十分ほどで休憩が終わるところだった。

その日の残りは食堂でのやり取りを頭の片隅に置きながら過ごしたが、かといって妨げになるわけでもなく、かえってスムーズに教習をこなしていくことができた。第一、紗江が食堂で見せたあのポーズ、首をかしげながら髪をなびかせるポーズはどこかで見覚えがあるのだけど、どこをさぐってみても思い出せない、というくだらない煩悶をたまに頭で蘇らせるだけだったのだから、それが運転の支障になるはずもない。だからといって根本的な問題はとりのぞかれたわけではないものの、人間というものは直近の悩みに目を奪われる時、遠くにあ

るそれ以上に大きな悩みは忘れてしまうものらしい。

紗江が見せたポーズについて行き当たるものといえば、たとえば音楽CDのジャケット、あるいは映画やドラマのスローモーションで演出されたシーン、それでなければ小説を読んで思い浮かんだ情景、といった具合に作り物が大半を占めた。後々スマートフォンで検索できる限りの実際の映像なり画像なりと照合してみたが、これだと納得できるものには出会えなかった。とはいえ、その過程で紗江のとったポーズもまた、作りこまれた映像や画像と遜色ないほど印象深くこちらの頭に食い込んでくるものだとわかり、それと同時に、それらの映像や画像と同じように紗江の態度もまた彼女なりの演出だったのではないか、と思えてきてしまう。

振りかえってみれば、紗江の話しぶりは全くよどみがなかった。こちらがほとんど応答しなかったこともあるだろうけれど、ひとつひとつの言葉が迷いなく発され、その上それらが確かな論理によって関連付けられて、無駄な言葉など一つもないように構成されていく。たとえば、貧しさと豊かさのくだりなど、初めからこう話す、と決めていなければ簡単には展開できない話だろう。そうした難

題を、相手の話をしっかりと聴くという制約さえつけられながら成し遂げてしまふ。

おそらくあの人は、先天的にそうした才能を身につけているのだろう、と上総は思った。他の教官などと比べてみれば明らかだ。若い教官にせよ、年配の教官にせよ、男にせよ女にせよ、律義に振る舞うことを心掛けている人間にせよ、あえてラフな態度で生徒の心を開かせようと心がけている人間にせよ、誰もがふとした瞬間に、ゆるみというべきか、ほつれというべきか、ともかく自身が思い描いている自己像とかけ離れた姿を表すことがある。そうした姿に接するたび、上総はその嘆息するような息遣いにアテられて、ただでさえ普段から気を張りながら教習に臨んでいるのに余計焦りに駆られてしまうのだが、紗江はそうした様子を見せることがなかった。だからこそ教習中、彼女が隣にいてくれることは数少ない安らぎの時間となるのだけれど、一方で教習が終わって一息つくると、その徹底ぶりに驚嘆してしまふのだ。

人間というものは何かしらの演技をしながら他人と接しなければならず、仮面のかぶり方が上手いにせよ下手にせよ仮面は仮面なのだからいつかは剥がれ

てしまつて素顔がのぞくのが相場なのに、紗江は違ふ。あたかも仮面のように見えるものが素顔のような、あるいは仮面をつけている内にそれが素顔にさえなつてしまつたような、そんな偏執とも言えそうな自己演出を貫徹させようとする姿勢がうかがえて仕方ない。

自然に出来上がった構築性、そんなこなれない言葉を思い浮かべながら、上総は頭に浮かんだ紗江の微笑みをくり返し見つめ続けていた。けれど、その構築性が崩れることは本当にはないのだろうか、と思いつつ。

翌日のニコマ目、いかにもこの時を待ち望んでいたといわんばかりの紗江の笑みにいざなわれながら、上総は路上教習に向かう車に乗り込んだ。発車前にこなすべきあれこれを確認している間、

「上総さんは、鷹山公はご存知ですか？」と紗江がシートベルトを締めながら訊ねてくる。「わが県最大にして唯一とも言える名君、上杉鷹山です。ここ置賜地方は古くは伊達家の所領でしたが、豊臣秀吉との折り合いの悪さ、あるいはお家騒動などで領主がころころと変わり、最終的に上杉景勝に所領が移りました。そ

の後上杉は関ヶ原の戦いで西軍についたため減封、以後福島の一分を含めた三十万石の土地が米沢藩と定められました。上杉はもともと会津を本領としており、徳川家康や毛利輝元にも次ぐ大武将でしたので、彼にとつて置賜は手狭過ぎたでしょう。そんな零落を象徴するように彼の跡を継いだ藩主たちは無嗣、病弱、遊蕩などなど一家の存亡にかかわる瑕を備えていました。そんな中で米沢藩は財政難および悪政によつて腐敗していき、取り潰しの危機に見舞われます。そこで家督を継いだのが、他所からの養子である上杉治憲、のちの上杉鷹山というわけです。今日はそんな鷹山が作った置賜という土地を、もっと深く知っていたかどうかと思います。それでは参りましょう」

まるでバスガイドが旅路の案内を始めるように滔々とした、それでいて若干の自虐を含んだ口調で彼女は話す。その自虐の部分は他の教員も等しく有している口調で、話題が御国の恥を暴露せざるをえないようなところにさしかかった時、彼らは常に突き放すような、それでいて、突き放すことでしか恥を直視できない己の未熟さを自嘲するようなはにかんだ微笑みを見せる。紗江もまた同じような微笑みを見せ、東から南へと移り変わろうとする太陽の光を浴びなが

ら、発進し始めた車が向かう方を見据えていた。

教習所は対岸に最上川を望む敷地に建てられており、護岸工事の行き届いた河川敷沿いを走れば散歩にいそしむ老人や、子供を幾人かつれて水遊びに興じる母親たちを見下ろすことができる。

「鷹山が藩主になった頃、藩士と民の心は完全に離れていました。先ほど述べた通り元々上杉は大武将であったため家臣が多く、減封された中で彼らに俸禄を払おうとすれば自ずと藩の財政を圧迫せざるを得ません。当時は反乱を恐れた幕府の政策に基づいて簡単には家臣を切り捨てることができないうようになっていたため、自ずと割を食うのは民のほうです。鷹山はそんな中で自らの生活を切り詰め、奥女中なども減らしつつ、一方で福祉政策を拡充し殖産を推進していききました。もちろん、家臣たちは反対し七家騒動と呼ばれる反乱を起こすのですが、結局すべて処分され、代わりに政策を有利に推し進めるための側近が重役に就き、結果的には鷹山を利することとなります。禍転じて福となす、というものですね」

川沿いに国道を走っていくと、左手に鬱蒼とした森林が見えてきた。中には公

園が設えられているそうで、春には桜が敷地中を埋め尽くすように咲くのだと紗江は言った。左手に森林が見えなくなり遠くの山がのぞくところになると、その方角の奥まったところには鷹山が湯治に通った宿が今も残っていると知らせてくれた。

「赤湯温泉は上杉家代々の湯治場で、幕府が出来た頃は色街として栄えていた、藩の墮落の象徴ともいうべき場所でした。鷹山が藩主となった頃、赤湯がもたらす収益は財政の要となっており、一方でそうした繁栄は癒着によって成り立っているところも大きかったです。鷹山は公娼制度を廃止し、藩政が潔白であるとアピールしていきます」

そこから車は町中を抜け北へと曲がり、四方には田畑と点在する家々くらいしか望めないバイパスを走らされる。交通量が少ない上に信号もほとんどない一本道であるため、おかまいなしに飛ばしてくる軽トラックにあおられつつもあくまで制限速度を守りながら、時々見えてくる青果店やら閉店したまま放置されているアミューズメント施設と思しき建物やら湖やらを後ろに流していく。すると、先の方に夏なのにあたかも雪の積もったような、白く光る山肌が見えて

きた。

「あれはビニールハウスです。農家の人は毎年山に登って取り換えて、サクランボをはじめとした農産物を育てるのですよ」

南に面した山肌はちょうど湖を見下ろしており、たとえ日光に熱されても下から吹き上げる涼しい風によって冷やされ、適温が保たれるのだという。

「鷹山はほとんど手つかずだった土地の開墾や河川の治水を自ら率先して行なう人でした。郷村をたびたび訪れては褒賞を授けたり、家臣たちにも労働を推奨させたことで米沢藩の農業は飛躍に成長し、藩の財政を建て直すまでに発展を遂げたのです。ここは鷹山公と、多くの農民が協力して打ち立てた、とても大事な土地なんですよ」

街道と合流してからもしばらく真っ直ぐ走りつづけ、ようやく右折するよう言われたかと思うと、すぐに山道が見えてきた。細く曲がりくねる道を、対向車に注意しつつ登っていく間、運転手側の窓には果樹園や動物の横断を警告する看板が映っていく。そうした人気を表すものたちが次第になくなっていき、両側を緑の木々が埋め尽くすようになると、道はさらに細くなっていった。

「鷹山は隠居してからも後見として藩政にたずさわり、飢饉や洪水などを最小限に食い止め、あるいは後進を育てるための藩校を建立するなどして、終生米沢藩に尽くしつづけました。明治初頭に山形を訪れたイギリス人旅行作家のイザベラ・バードは、置賜地方を『エデンの園』、あるいは『アジアのアルカディア』と評しています。その豊かな土地のすべてはその土地を耕す人々に属し、民は圧政から解き放たれている。勤勉、安楽に満ちた魅惑的な、どこを見渡しても美しい農村である、と」

視界がやや開けてきたかと思うと、左手に駐車場が設けられていた。休憩と称して車を止め、案内されるままに階段を上ると、やがて小さな展望台に行き着く。エアコンの効いた車内から夏の日差しが燦々と照り付ける屋内に出たにもかかわらず、それまでの押し詰められるような閉塞感とは打って変わって開け放たれた場所に足を踏み入れたことで、心なしか涼しげな風が吹き付けてくるような気がした。まもなく頂点に達しようとする太陽をまぶしく思いながら、上総は手をかざしてひさしをつくりパノラマを望む。

初めは陽光にくらまれて真っ白な霧にかすんでいるのかと見まがった眺めが、

足元の方からじわりと輪郭を現しはじめ、先程横を通り過ぎた湖が青空を反射している様子が見えてきた。その青がふたたび視界を染める中でうつすらと萌黄色が覗き、その萌黄が濃くなって緑になるとその緑もまた区切れを作り始め、水田の姿を呈していく。東にはその緑を濃くした深緑が広がって公園の区画を示し、その周りを囲むように家々が並び、さらに視界を広げていくとまた水田の緑が広がり、その奥には青みを帯びた山脈がそれらを包むように連なり——そのように展開されている盆地の風景を視点を移しながら眺め終えた上総は、空を仰ぎ見た。晴れ渡った青空の中で太陽は白く輝き、ゆらめきながら背の方へ伸びていく飛行機雲だけが唯一人為的なものとして存在している。

「いかがでしょうか？」と紗江が声を掛けてくる。「上総さんにはちゃんとこの土地の歴史なり全容なりをお知らせすべきだと思つて、案内してみたのですが」その顔はまた軽く傾き、髪がなびくことはなかったとはいえ微笑みは確かに表れている。

確かに申し分はなかった。自然と人が一体になった町を教えるために歴史をひもときつつ、そもそもなぜ人が自然を必要としたか、なぜ自然が人と調和する

ようになったか、そうした背景を丹念に教えてくれた末に、こうした風景に行き着かせてくれるガイドに文句のつけようはない。

けれど、あまりに行き届きすぎていた。紗江が教えてくれる置賜は、あまりに美しさを強調するばかりで、何かが足りない気がする。もう一步踏み込んでいえば、それは紗江自身の在り様とも通じ合っていた。

「とても、素晴らしい町ですね、ここは」切れ切れに声を出しながら、心に抱え続けてきた煩悶をどうにか言語化しようと頭を回転させる。「けれど、本当にそれだけなんですか？」

そう言うと、紗江の目はそれまでよりも大きく開き、微笑みとともに和らいでいた口は心持ち固く結ばれていった。と、言いますと、と訊ねかえされたために焦りはじめた心を押しとどめつつ、誤解のないような言葉を選んでいく。

「石牟礼道子や中上健次のような土地に根差した小説を読むのが好きということは紗江さんにも知っていただけだった通りなんです、私は時々、そうした趣味が所詮は余所者だから楽しめる趣味じゃないのかな、と思えてしまうんです。石牟礼なら水俣の海に育まれた少女時代の記憶、中上なら幾代にも渡って受け継が

れる土地の物語、そういう綺麗な情景ばかりを思い浮かべるから、私は彼らの書く物を楽しめる。

もちろん、彼らが書く物は綺麗なことばかりではありません。水俣病に苦しむ患者、そうした患者を嗤う健常者や役人、汚れた血筋に苦しむ子孫たち、恨みや妬みによつて争いあう人々、近代化によつて壊されていく土地の風景、失われていく記憶……ただ、それも紙によつて書かれているものだから読むことができます。だからそうしたものを読むたびにこう思つてしまふんです。自分が実際にこうした土地に住んでいたら、この物語を楽しむことなんてできるだろうか、と」

即興で論理をつなぐのは難しく、その上誰にも面と向かつて話したことでもないため、話し終えた後上総は息切れの時に味わうのにも似た圧迫感を頭に感じ、ふたたび空を仰いでしまふ。それからおそろる横を覗き見ると、相手は未だ言葉を待っているように瞬きもせずこちらを見つめているので、上総は自分が前々から抱えていたことを独りよがり話してしまふと気付いた。

「ですから、この置賜という土地の美しさを見せていただいたことは、とても嬉

しいし、もつとこの土地を知らなければいけないとも思っています。ただ、本当にそれだけなのか、とも思ってしまうんです。私みたいな一時的にこの土地にやってくるに帰ってしまう人間には見えない薄暗い世界がどこかにあるんじゃないか、と思ってしまうんです」

補足をつけても紗江の様子はやわらぎを見せない。先程までは差し込んでくる陽光によって顔の部位の一つ一つがかすんでいたはずが、今は縁どられた眼の大きさが目を見開いている事でよく伝わり、風によって髪が吹き上げられ露わになった額にも頬にも鼻にも驚くほど皺が認められないといった具合に一つ一つの部位が改めてその姿を表し、むしろこわばりを強めていくように感じられた。緊張がピークに達し、はじめに向こうが目線を外したので、上総も耐えきれず何か言わなければと思ひ始めた頃、

「たしかに、もつともな御考えだと思えます。」とようやく口が開かれた。「物事には両面ありますからね、美しく憧れになるような部分もあれば、しがらみになりさまたげになる部分もある。旅行と称してあちこちを渡り歩くことが簡単になった世の中で、一週間や二週間滞在した程度で土地の特性を知った気分にな

った輩もいるくらいですから、悪い部分はいくら強調しても足りません」

尖った言葉遣いではあったが、ゆっくりと言葉が放たれる口調からはためらいもうかがえた。

「考えてみれば上総さんくらいの人なら、そうしたペテンにはひっかかるわけがないですよ。大変失礼な振る舞いをして、申し訳ありません」そう言って頭を下げてからふたたび現れた顔には、申し訳なさというより、決心がついたといわんばかりの固まった表情がうかがえた。「上総さんには、あらためて一切合財をお話しいたしましょう」

そう言って顔のこわばりをすこし緩め、パノラマの広がる前方を指さしながら話しはじめた。

「ここから南の方へ行きますと米沢市があります。今は山形大学の工学部キャンパスがあるところとして知られています。元は寺町で今も多くのお寺が残っている他、教会や上杉謙信を祀った神社など宗教が盛んな場所でもあります。今はすっかり地方都市らしいこじんまりとした、けれども建物はしっかりと立ち並んでいる風景が出来上がっているのですが、そんな中一区画だけ開け放たれ

た土地が今も残っているんです。そこには昔、遊郭がありました」

遊郭、という抵抗のあるはずの言葉を発しても、その表情が変わることはない。聞いている上総が面食らってしまっただけに、尚更その動じなさは際立つ。

「鷹山が公娼を廃止したことはお伝えした通りですが、かといってそう簡単に女衞たちが諦めるはずもなく、彼らはあちこちに移り住んで同心や岡っ引きの目をかいくぐりつつ、時には賄賂を送ったりしながら、売春宿を営み続けていました。中には故郷にもどることもできず仕方なしに遊女を続けざるを得なかった人々もいたでしょう。その一つが先程申し上げました福田という土地で、明治になってからは遊郭が建てられません。けれど、大正になって大火が起き焼失、その後も小さな風俗店はいくつか営まれたようですが、今は営業を終えた旅館やビルが跡を残すだけとなっています」

話を聞きながら、上総は頭の中で小説の一場面を思い出していた。一文字一文字を違えずに思い出せるほど記憶していたわけではないが、その小説を改めて読むたびに印象深い場面として頭の中に塗り重ねつづけた場面——熊本の天草という土地において、女たちは生まれた土地を出てゆき海を渡るのが習いだっ

た。判人とよばれる遊女の保証人となる男たちが海の向こうからやってきて、器量のよい娘たち、特に土地において「魂の足りない」と呼ばれた、言ってみれば頭の足りない娘たちを引き連れていく。いかに頭が足りなかりうと生まれ落ちた土地と切りはなされる痛みに耐えられない娘は泣きながら他所の小母さんの家へとかけこむが、かといつてどうすることもできない。代わりに、小母さんはこう言つて聞かせる。売られていった先での年期というものだけは決して聞き逃すな、年期が来るまでに判人に売り飛ばされないうちに自分で自分の身を立てる術を考えておけ、体を売るでもいい、自分で自分の借金を返すようになればいつかここに戻つてくることができらう、ぼんやりとして判人の手に掛かればその時はお前は人間でなくなる、金を稼げない体にされて犬とつがいになって人と犬の合いの子を産まされてその合いの子も見せ物にされて食い物にされて二度とここには帰つてこれないだろう……石牟礼道子の『苦海浄土』に描かれたそんな娘たちと、大火に焼かれた町を後にして他所へと移る女たちを上総は頭の中で重ねた。

その間に、紗江はパノラマに背を向けて北の方を指さす。

「明治末年に、ここから北へと向かつて県庁のある山形市にほど近い小さな町で温泉が発掘されました。他所の人間にとつては山形駅へと向かう途中に立ち寄つて足を休めるくらいのものでしかなかつた土地が、それによつてささやかな観光地として栄えることとなります。折しも山形の遊郭の方でも大火が起きていましたので、北からも南からも働き口を求めた女たちや、幹旋で一儲けしようとする男たちが集まることとなり、それなりに大きな遊郭がある町として昭和の中ごろまで知られていました。今も、規模は縮小しておりますが、在りし日の名残がうかがえる建物があちこちにたたずんでいます。私はそこで遊女を祖先に持つ女として生まれました」

こともなげに言い放ちながら、改めて日光の降りそそいでくる方を振り返り、彼女は一言一言を丁寧につないでいく。その顔がまた和らいでいって、輪郭をほぐし白い光の中にならずでいく。

「つまりここは、私にとつては血が繋がつておらずとも、出自においてはさらに遠い祖先とも呼べる女たちが暮らしていた土地なんですよ」

〈次号に続く〉

書評

ヘルタ・ミュラー『心獣』レビュー

光枝初郎

ヘルタ・ミュラーの邦訳は現時点で四つ。処女作の短編集『澱み』（原作一九八四年）、代表作『狙われたキツネ』（一九九二年）、そして三番目の本作が一九九四年で、邦訳の最新作として『息のブランコ』（二〇〇九年）がある。ただ、邦訳が出た順番としては『心獣』が最新作である（邦訳二〇一四年）。ヘルタ・ミュラーは、ルーマニア出身のドイツ語作家である。彼女の地元はもともとドイツのシュヴァーベン地方の人々に入植を受けたのであるが、やはりそういつた複雑な歴史の経緯が彼女の作品には大きく影響している。私的には、チェコの地に生まれながらドイツ語で書かねばならなかったフランツ・カフカを想起せずにはいられない。

そこで、『心獣』の内容であるが、ミュラーのそれまでの『澱み』『狙われたキツネ』の完成度からしても本作は圧倒的に進化している。短編集の『澱み』で、彼女の独特の暗さとニヒルさとを併せ持つ、重厚で繊細な文体が提示されたか

と思えば、長編『狙われたキツネ』はその文体の完成度をそのまま長編レヴェルまで引き延ばしたかのような作りになっている。そして『心獣』では、文章はどちらかという短文の重ねでリズムよくおさまり、代わって複雑な構造になっている物語の要素が強く出ている。

主な登場人物は、女性の「私」とエトガル、クルト、ゲオルクという三人の男性、及びその周辺の人々である。舞台は独裁恐怖政治に自分たちの生活を脅かされるルーマニア地方。反体制派をしよつびく軍人が街中をうろろしているような状況だ。「私」たちの仲間であったローラという女性が、あるとき自殺するに至るまでが話の四分の一まで語られ、その後ローラの死を不審に思った「私」とエトガル、クルト、ゲオルクの四人が起点となって物語が進行する。この、「エトガル、クルト、ゲオルク」という三人は一貫してまとまって表記される。しかもずっと反復的に、である。読み手に強い印象を与えるようになっていく。「エトガル、クルト、ゲオルクの四角部屋と三人の実家は更に三度搜索された。」「私はエトガル、クルト、ゲオルクと一緒に前から川辺に来ていた。」「エトガル、ゲオルク、そしてクルトにはもうカミソリがなかったのだ。」「このリフレイ

ンの表現はこれのみならず、本作において他に様々な場面で使われている。

エトガル、クルト、ゲオルクの三人の男性それぞれにも別個の結末が与えられるのだが、それにしても彼らと親友である「私」というこの表記もまた曲者である。エトガル、クルト、ゲオルクや他の登場人物は必ず「彼」とか「彼女」とかの三人称代名詞で置き換えられることはないのに、この女性である「私」という一人称代名詞だけが不気味にミュラーの文章の中に漂っている……。まるで、書き手としての「私」（ヘルタ・ミュラーの分身？）と、物語を進行させる人物としての「私」が分裂しているようなのだ。

私は、『心獣』を読んでいて、ある一つのこと気がついた。この物語に出てくる人や、物、あるいは風景などは、それぞれ一度も密接に交わることがないまま、完全に孤絶しているようなのだ。人物どうしが会話していても、たとえばすれ違ったり、まったく意図とは別の答えが返ってきたり、また親密な者どうしの間でも、そこかしこに「どうにもならない距離の埋まらなさ、空虚さ」のようなものが行間を狂おしく支配している。ひとつも会話はかみ合うことなく、寂しく不穏な物語だけがひとりどんだんだ進行していく。何ひとつ伝達することはなく、

風景も人物もそれぞれがそっぽを向いて、重なり合うこともなしにただ併存しているような状態。私はこれを「ねじれ法」と呼びたいと思う。おそらくヘルタ・ミュラーは意識的にか無意識的にか、「ねじれ法」を使うことによって、人々のあいだの——人々と風景のあいだでさえも——まったく届くことのない伝達や交流のその儚さ、虚しさのようなものを極めて独創的に描いているのだ。

『心獣』のなかで出てくる、村の監視組織のピジエレ大尉という存在もまたとてもよく描かれている。ピジエレ大尉はことあるごとに、「私」とエトガル、クルト、ゲオルクとの間の文通を嗅ぎまわっては検閲して無効化したり、「私」らが反体制的な詩を書いたことを問い詰めて「私」に裸になるように命じたりといった悪役ぶりを発揮するのだが、その筆致がとてもよい。ユーモラスな性格も持つが冷徹に軍の仕事をやっているのけ、最後にはあっけなく死んでしまう。ピジエレ大尉の「悪」についてもこの作品を語る上で外せないテーマとなるだろう。

とにかく意欲的な小説である。このような小説がいまや日本語でもたくさん読めるようになった翻訳・出版業界には感謝すべきところがある、とつくづく思う。

(了)

特集エッセイ

「食」

ピザまん

あんな

一度だけ親のお金を盗んだことがある。

小学校一、二年生の時だったと思う。寒かろうが雪が降ろうが外で狂ったように遊びま

くっていたのだが、その日は特別寒くて鼻水垂らしながら足をぶるぶるさせてなおも遊んでいたのを覚えている。小学生の頃を思い出すとなぜあんなにも寒さや暑さに強かったのだらうと思う。今よりもっと暑さも寒さもマシだったのかもしれないけど、それを差し引いても真冬にジャンパーも着ないでマフラーもせずへらへら走り回っていたのだから冷

えが最大の敵となった三十代の今、信じられない装備である。でもよく考えたら授業が終わると暖房の前に張り付いて冷えた手を通風口に当てすぎて火傷したり、毎年足の指先全部しもやけになつたりしてたからきつと普通に寒かつたんだろが今の小学生みたいな立派なダウンとかそんな誰も着てなかつたと思うし、一年通して半袖半ズボンの子とかクラスにいて平気な顔してたからたぶん寒さを感じてる神経がまだ未発達だつたんでしょね。話が逸れました。

それでその日もなりふり構わず遊んでいたわけなんだが、ふと、これはまじでいくら風の子でもわりと寒いな、と思ったのか遊ぶのもやめてベンチに座り込んでしまったのだ。

一度座ってしまったと人間というのは一気に冷えるんだろ。友達と二人震えながらベンチに座っているうち、あることが脳裏を彗星のごとく駆け抜けていった。それが、ピザまんである。「ピザまん、食べよう」と私が言う友達に「どうやって？」みたいなことを言つたと思う。当然お金なんか持っていないのだし、お腹が空いたら家に帰るしか選択肢はないはずだった。「ちょっと待って」と言い残し颯爽と私は友達を残し走り去つた。今から思い出すとただピザまんを食べたい、という未知の衝動に駆り立てられるあまり、肉体を精神が追い越しナチュラルハイの状態になっていたのだらう。共働きの両親が帰ってくるまでには時間があつたので家には誰もいなか

った。首から下げた鍵でドアを開け中に入り、母の買い物用の財布が引き出しに入っているのを確認すると手にとつてから中を見た。なんかお金の種類とかまだよくわかんなかった。ので紙の方なら間違いないだろう、と考えたのかピザまん買うだけなのに五千円札を引っ掴んでポケットに入れた。その時のことは鮮明に覚えている。大変なことを今やってしまつてゐるんだ！と自分に酔いながらも、心臓が飛び出るほど緊張していて、警察に捕まったら学校に行けないな、などと考えたりもしていた。小学生にとつては凶悪犯罪を犯している、という感覚だったのだ。

ベンチに戻ると友達はお前正気か？みたいな目で座っていた。私は任せとけ、みたいな

感じで友達を残したままヤマザキへ駆け込んだ。「ピザまんふたつ」と言つた自分の声やけに大人びて聞こえた。予想外のお釣りの量に若干慌てながらもなんとかピザまんを購入し友達の元へ戻ると、こいつまじか、みたいな目で友達が座っていた。芯から冷えきつた体に熱々のピザまんが摂取されていく。とにかく今まで食べたどの食べ物よりも美味しく、感動で震えた。二人して無言で食べたのを覚えてゐる。それから親の見えていないところでお釣りをささつと財布に戻すと完全犯罪は成功した。大人になつてから、実は一度だけ金盗んでピザまん買ったんだよね、と母に言うのと、へえ、と一言言われた。歳とつたので今は餡まんが好きです。

(了)

好き嫌い

新嶋樹

多くの方に「自分もそうだった」と思ってもらえるかもしれないと思い、あえてこう書き始めるのだけれど、食べ物好き嫌いが多い子どもだった。

班でくつつけた机の段差、菓品のおいのする給食室、エプロンに落ちたカレーのしみ、ひとりだけ位置の違うエプロンのポケット、配膳中にとつぜん始まる男子の喧嘩、汁に一個しか入っていない団子、よれよれになって口元の見えるマスク、黒糖パンへの興奮、ゼリー集め、机の下の攻防、瓶牛乳の蓋回収、しよつちゆう途切れる校内放送、先生のリクエストしたクラシック、余りもの争奪ジャンケン大会、食缶の中にまぜられた牛乳入りの残飯、片づけられず残された食器、床に落ちているパン屑、机の脚にこびりついた米粒、喧嘩が去って誰もいなくなった教室、こんな給食時間の一場面に確かに存在していたと思われる、食べる前

のかれ、食べているかれ、食べ終わらないかれ。かれにとって給食がきちんと終わることはなく、その日の給食時間の中止は次の日の給食時間の始まりでもあった。クラスメイトは遊びに出て教室にはいない。かれはトレーを暗い給食室に運び、おざなりに歯を磨くと、雑巾を持って掃除場所へ向かっていく。かれはすでに三日後に迫ったキウイフルーツの日がおそろしくてたまらない。それでも給食ごときで学校を休むというのはとても考えられるものではなかった。

もやしというあだ名がついたのは小学校一年生のかれである。子どもがつけたのではなく、周りの親がつけたのを子どもが真似した。「あの子は細すぎてまるでもやしっ子ね」他の言葉はすっかり忘れてしまったというのに、そういう大人の言葉はきちんと思い出せる。そのときのクラスメイトが口々に発していた「もやし！」という言葉は、単に反射的なものだったのかもしれないし、侮蔑的なニュアンスがすでにこめられていたのかもしれない。けれどもかれはずっと後になって粘っこく考えるようには考えなかった。人の言葉や表情に対して判断が遅れ、その場で何かを思うということがない子どもで、拳を振りあげたところで自分よりも発育のよい相手に勝てないのは分かっていたようだけれど、「勝

てないからやめる」と意識していたわけでもない。そのようなある種の鈍さに身体中をたっぷりと浸しこんでおきながら、「人よりも食べられないものが多い」というある種の鋭さも有している。かれの幼少期は、ボケきっていたかと思えば急にハッキリする記憶の中で、鈍さや鋭さの形作るまだら模様に染められている。食べられないのはかれだけの話ではないはずだった。たとえば「もやしっ子」は一定数いたようにも思うけれど、かれは徹頭徹尾、他の「もやしっ子」を見ていない。幼少期を思い出すときにあらわれてくるのは決まってかれの輪郭ばかりで、他人はかれに関わる存在としてしか見えてこず、見える量も少ない。

食が細く喘息持ちでアトピー肌の子どもがちゃんときくなくなってくれるのかという心配をしたかれの両親や親戚が、かれにしてくれたことはたくさんあったのだろうが、あまり思い出せないのもそういうことだろう。けれどかれが残すことに関して両親が寛容だったのはおぼえていて、寛容であったことがかれをぎりぎり食べる方へつなぎとめていたようにも思われる。両親は子どもが食事を残すことにどう思うだろうか。子どもは野菜を食べない。キュウリは歯ごたえが苦手で、噛み痕だけを残して皿に投げられている。ピーマンは箸で

奥によけられている。シイタケはゴムのようでもるで噛みきれず、無理に飲みこもうとするとたちまち咳きこんで吐き出してしまふ。

かれは食べているとき、とにかくよく吐いた。どこでも吐いた。背を丸め、前髪が皿につくぐらいに顔を落とし、濁音を発して吐き出した後には、よだれが尾を引いた。米粒のかたまりやキャベツの繊維、ホウレンソウ、肉の脂など、かれが飲みこみきれずに口の中に溜めてしまった食べ物が唾液にまみれてひとつの玉を作っているのを両親はどういう思いで見つめていただろうか。周りの子どもたちの反応は分かりやすく、しよっちゅうものを吐き出すかれと同じ班の子どもたちの机の距離は、いつも少しばかり空けられているのだった。ハンカチやティッシュをうまく使える子どもではなく、制服の襟でよだれをぬぐっているのに襟に白い汚れがかたまりついてしまふ。そういう子どもに対して周りがレツテルをつけたとおかしくはないように思われる。かれは昼休みの遊びに誘われなかったし、そもそも行けなかった。掃除のために机を後ろにさげた教室で、前と後ろの無人の机に挟まれながら、先生が赤ペンを走らせる音を聞きつつ、おう吐物がまだ載っているトレーを前にして過ごす時間は長かった。

キウイフルーツというたびきりおそろしい食べ物があった。どうしてこの世にこんなすさまじい食感の果物が生まれたのだろうとかれは大人になるまでずっと思っていた。見た目からして食べ物だとは思えなかった。中心に白い巨大な目玉があり、それを取り囲んで無数の黒い小さな目玉がある。鮮やかで力強そうな緑色の果肉。皮はびっしりと毛で覆われている。「百個の目玉」と名づけて周囲に恐怖を伝えると、みなおもしろがって「おい、今日『百個の目玉』やぞ。ニイジマが食えるか賭けよう」とクラスで話題になるほどだった。小学校で苦手なものを残すというのは基本的には許されることなく、ルールがそうならすぐに黙ってしまうかледだった。うまい子は苦手なものがあるとそれが好きな子に事前に交渉しておき、斑のメンバーにも先生に告げ口されないように根回しをした上で食わずにすませることができたようだが、そんなうまい手を使えるとは思ってもみず、キウイフルーツはいつも目の前から去らなかつた。

一年生のとき、初めて見たそれをおずおずと口に運び、硬直し、たちまちペツと吐き出すと、先生は「これは教育だ」と考えたのだろうか、泣きじゃくるかれをキウイフルーツの前に二時間縛りつけた。昼休みが終わり、掃除が終わり、体

育館の全校集会があり、ランドセルを背負って子どもたちが下校していった後、スプーンで小さく一かけらだけ搦いとられたキウイフルーツが、泣いているかれの前に置かれている。先生が前に立ち、「きつと食べられるようになります」と言った。その日一日、口中に広がる痺れが取れず、親が驚くくらい時間をかけて歯を磨いたけれど、次の日もまだ舌でその痺れの残像を探し当てて涙が出そうになった。四年生になって、掃除のときに周りの子どもがかれの机を倒すと、中からたくさんのキウイフルーツが転がり出た。「おい、ニイジマがキウイフルーツ、残しとるぞ！」とひとりが叫ぶと、そばにいた先生がかれの前にやってきて、「これは本当なの？」と言った。かれはどういうことなのか分からず、またどんな反応を取ればいいのかも分からずにかたまっていた。かれは確かにその日キウイフルーツを食べずに机の中にした。けれどもそんなに何日分も溜めこんでいたわけではなく、ランドセルに入れて持って帰るようにしていた。「今日はキウイ食べてるすがたを見なかったから、変だと思った」と先生は言った。周りの子どもが「先生、ニイジマくんはいつつもキウイ食べてませんよ」と言った。その子も「犯人」のひとりだったのか、結局分からない。「食べ物の好

き嫌いはいけませんよ、ニイジマくん」先生が気づかなかったのか、気づいていてそういうことを言ったのか、今となってはどうでもいいけれど、四年生のかれにはキウイフルーツにまつわるかなしい記憶として脳に刻みこまれるのに十分な経験だった。当時の先生の言葉はその後何度も何度も反芻され、そのたび、キウイフルーツの舌を痺れさせる味のようにかれを痺れさせ、「食」と聞くとすぐ目の前に浮かぶようになった。

その子供には、実際、食事が苦痛だった。体内へ、色、香、味のある塊団かたまりを入れると、何か身が穢けがれるような気がした。空気のような喰べものは無いかと思う。腹が減ると饑うえは充分感じるのだが、うっかり喰べる気はしなかった。

（岡本かの子「鮎」、同『老妓抄』新潮文庫所収、五七頁）

何度読んでも今初めて読んだように鮮やかで、ゆつくりとものを食べ、味わうように、一文字一文字を丁寧に追いたくなる作品がある。岡本かの子の「鮎」は

そんな作品の一つだ。

かの子の作品には食事をする場面が多く出てくる。どじよう汁やアンディーヴ（チコリー）など、あまり小説で取り上げられたことのないように思われるものが、箸やフォークにつかまれ、口に運ばれ、咀嚼され、飲みこまれるまでの過程がないがしろにされることなく丁寧に描かれている。読みながら口の中に旨味が広がってくるような描き方で、食べ物や、食べるという営みへの作者の愛情を感じるようだ。

「鮎」には、食事が苦痛でまともに食べられるのは炒り玉子と浅草海苔くらいという子どもが出てくる。潔癖なところがあつたからか、家の人にはおかしな子供と言われ、父親にも「ぼうずはどうして生きているのかい」と言われるほどである。引用箇所はこう続く。

床の間の冷たく透き通った水晶の置きものに、舌を当てたり、頬をつけたりした。餓えぬいて、頭の中が澄み切ったまま、だんだん、気が遠くなって行く。

〔中略〕子どもはこのままのめり倒れて死んでも関わかまわないときえ思う。(同、五七頁)

この感じはよく分かる。幼少期の記憶の中のかれにも似たようなことはあった。かれは公文式の鞆を投げ出して、フローリングの床の上に横になっている。父親は夜遅くまで仕事でいない。母親はパートからもう戻ってもいい時間なのに戻らない。妹は水泳教室に出かけている。外では夕陽が沈みこんで、灯りのついでいない部屋は徐々に薄暗さを増していく。かれはレースカーテンの奥で人の家が濃いシルエツトになるのを見ながら、もうずいぶん長い時間ひとりであるような気がした。飢えがきざしてくるのが感じられたけれど、立ち上がる気はなく、冷たい床にほつぺたをつけ、目を開けてしずかに寝ていた。十歩のところ
に菓子を入れた棚があり、母親はいつも菓子を切らすことがなかった。口癖のよう
に「食べたくなったらここから取っていいからね」と言ってくれたのだが、「うん」
とうなずいたかれが棚から菓子を取ることほめたになく、「いっしょに食

べない？」と言われて、やっと煎餅やポテトチップスを一枚、二枚かじるくらいだった。かれは腹が減っているのは分かったけれど食べたいとは思わなかった。死ぬことはさすがに考えられなかったが、ずっとこのままでしょう、という気分で、暗さの増していく部屋の床の上で、起きたまま熟睡しているようなすがたをやめなかった。夏でも冬でもかわらない床の冷たさがしみていた。

父親と母親とが一室で言い争っていた末、母親は子供のところへ来て、しみじみとした調子でいった。

「ねえ、おまえがあんまり痩せて行くもんだから学校の先生と学務委員たちの間で、あれは家庭で衛生の注意が足りないからだという話が持上ったのだよ。それを聞いて来てお父つあんは、ああいう性分だもんだから、私に意地くね悪く当りなさるんだよ」

そこで母親は、畳の上へ手をつけて、子供に向ってこっくりと、頭を下げた。「どうか頼むから、もつと、喰べるものを喰べて、肥ふとっておくれ、そうしてく

れないと、あたしは、朝晩、いたたまれない気がするから」

子供は自分の畸形きけいな性質から、いずれは犯すであろうと予感した罪悪を、犯したような気がした。(同、五九一六〇頁)

なんて切ないくだりだろう。食べられないことは罪なんだろうか。親が頭をさげて子どもに懇願するすがたを見て、幼い子どもが何も思わずにいられるだろうか。この後、この子どもは「平気を装って家のものと同じ食事」をする。しかしすぐに吐いてしまう。兄と姉はいやな顔をする。

食べ物が好き嫌が多いことは罪なんだろうか。「好き嫌いを直す」とか「治す」という言い方をするけれど、好き嫌いは悪いもの、治さなければならぬ病気の類なんだろうか。好き嫌いは甘えの可能性があるからなくしていった方がよい、という意見もあるだろう。ことさら否定するつもりはないが、甘えだったとして、甘えも単純なものではないだろう。

放課後、居残って課題をしていたかれの耳に、先生とクラスメイトの会話が飛

びこんでくる。

「先生、今度の学級会の議題ですけど、『ニイジマくんはどうして給食を食べられないのか』っていうのはどうですか？」

「なんでその議題にしたいと思ったの？」

「だって、いっつも残すじゃないですか。よく吐くし。よくないと思います」

「そうやね……」

学級会の議題にはならず済んだが、これも「食」に関するかなしい記憶の一つである。

繰り返しになってしまいが、かれの親は、かれにとって見れば寛容だった。与えられた食事を残してもほとんど叱らず、「お菓子あるよ」とポテトチップスの袋をちらつかせる。大人になってから小学校教員の道を選んだかれは「家で自分の子どもが菓子ばかり食べて困る」という保護者の訴えを繰り返し聞くことになったが、そういう親の方が多いんじゃないだろうか。食べようとしないう子どもを持った親の選んだ「寛容さ」の後ろには、おそらく隠されてきた思いがあつて、それを子どもはきちんと受け止めてこなかったとしても、尖った被害者意識

に苛まれてきたかれを、ぎりぎりのところで生かしてきたのではないかと思うことがある。

岡本かの子の「鮎」では、母親が直接握った鮎を子どもに食べさせる場面がある。あれほど食べられなかった子どもが鮎を食べる。この場面は何度読んでも感動する。

母親は、腕捲りして、薔薇いろの掌を差出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。それからその手を言葉と共に調子づけて擦りながら云った。

「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵える人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ。判ったかい。判ったら、そこで——」

母親は、鉢の中で炊きさました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんこん噎せ

た。それから母親はその鉢を傍に寄せて、中からいくらかの飯の分量を掴み出して、両手で小さく長方形に握った。(同、六一―六二頁)

読みながら、親子と一緒に噎せてしまいそうになる。あつたかい母さんの掌の色が見える。

「ほら、鮭だよ、おすしだよ。手々で、じかに掴んで喰べても好いのだよ」
子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられるようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交ったあじわいが丁度舌一ぱいに乗った具合——それをひとつ喰べてしまふと体を母に抛りつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身うちに湧いた。

子供はおいしいと云うのが、きまり悪いので、ただ、にいと笑って、母の顔を見上げた。(同、六二頁)

まだまだ続くのだけれど、これ以上引用するのはよそう。こんなに美味しそうな、人肌の鮭が描かれているのを見たことがない。子どもは母親の手で握られた鮭を食べることができたのだ。それが香りや味、その場のさわやかな空気まで伝わってくるように描かれている。

かれには「母親の鮭」にかわるようなドラマティックな体験は思い出せない。ただ五年生になって急に食べられるものが増えたのをおぼえている。ある日、給食に出たカレーライスを食べきって、かれは生まれてはじめて「おかわり」をしようと思った。時間内に食べきってしまった。しかもまだ食べられそうな気がする。黙っていいようか。いや、ちよつと入れるくらいいいだろう。食べられたことを知ってもらいたいという気持ちもあった。手がふるえ、立つときに椅子が不自然に鳴った。かれが皿を持って立ち上がると、クラスメイトがこちらを見た。先生が、「どうした？」と聞いた。「あ、おかわり……」とかれは言った。その瞬間、わっとクラスから拍手が湧いた。みんなが「すごい！」と言う中、カレーの食缶に向かった。興奮して、おかわりしたカレーの味はあまりおぼえていない。

かれは肥った。小学校を卒業するころには「もやし」と呼ばれた頃の面影はまったくなく、アルバムを見ても、顔が丸みを帯びて血色もいい。中学一年生になってソフトテニス部に入ったかれは、球拾いをあんまりサボることに腹を立てた先輩に、体操服ごしに腹の肉をつままれて、「お前、もうちよつとシェイプアップした方がいいな」と言われた。かれはそのとき嬉しかった。「なに笑ってんだ」と先輩がすごんでも、「すいません」と言いながら笑っていた。まるで人間がかわったように食べられるものが増えていくことは喜びだった。野菜をおいしいと感じるようになった。キュウリやトマトなどのサラダがないと食べた気がしなくなった。ミニトマトの、ひんやりとした弾力のある実を舌の上で転がし、歯を立てて、ゆつくりとつぶしていくときに口の中にあふれ出てくるものが、憎い味ではなくなつた。焼いたシイタケのふわりと浮かぶ香りが好きになつた。親に言われなくても菓子を食べるようになり、「最近減りが早い」とつぶやかせるようになった。ラツキョウウが食べられるようになったとき、周りにある食べ物で苦手だとハッキリ思えるものはキウイフルーツだけになつた。

キウイフルーツだけは二十歳を過ぎても食べられなかった。幼少期の経験な

だから自分はキウイフルーツを絶対に食べられない人間だとかれは思いこんでいたけれど、本当はもう食べられるんじゃないかという気もうつすらしていた。大学のサークルで飲み会に出かけたとき、デザートで出てきたケーキにキウイフルーツが入っていた。断面にキウイの緑色がのぞいており、それを見つけた瞬間、「お願い、近づけないで！においだけでも無理だよ！」と叫んだ。かれがいかにもキウイを食べられなくなったかというエピソードを紹介するとみんな笑ったが、同じように笑いを浮かべながら聞いていた後輩のひとりが、ぽつりと、「先輩、大げさに言いますけど、ほんとはもう食べられるんじゃないですか？」と言ったのだった。「いや、無理！無理だって」と強く遠ざけたけれども、たぶんもう食べられるだろう、食べようとしただけだという気持ちには、後輩の言葉によってますます強くなった。大人になると食べられるものが増えるのは、子どもの頃は味覚が鋭敏だったのが、年を取るにつれて鈍感になってくるからだ、ビールの苦みが味わえるようになるのも鈍感だから刺激の強いものを美味しいと感じるようになるからだとか、味覚にも単純接触効果があつて食べる回数が多くなればなるほど慣れて好きになるんだとか、そのときは好き嫌いをテーマ

にして、本当かどうかよく分からない色んな理屈について話した。

大人になってあれほど嫌いだったものが食べられるようになっていくのは、ひとつひとつ失っていくことだという気がしている。駅で売っていたキウイ百分のジュースを、当時の彼女に分けてもらって飲んだ二十三歳のある日、自分のなかの「キウイ嫌いのかれ」が死んでいくのが分かった。彼女はかれのキウイ嫌いを知っていたから、「どう？」と聞いてきた。「うん」と言ってもう一口飲んだ。「飲めるね……」舌にキウイの刺激は残らなかつた。十分もすれば完全に消えていたけれど、「やっぱりまだ残る」と彼女には言った。

今、こうして書いている目の前に、描き出された「かれ」がいて、ある面ではまだつながりながらも、ほとんど遠くにいるような気分である。ねじ曲げられていく頼りない記憶の中に生きている「かれ」は、奥で「まあそういうこともあったんだよ、たぶん」という顔をして、冷たい文字の並んだ床に横になっている。あたりは暗く、とても静かで、冷蔵庫のふるえる音や、外の鳥の鳴き声まで聞き取れるので、耳がよくなったような気がしている。そのとき鍵が回され、靴を脱ぎ散らかす音がする。パートに出かけていた母親は水泳教室に行っていた妹を

連れて帰って来た。「こんな暗いところで何しとん」と母親が言う。「うん」とうなずき、かれは床からほつぺたを剥がして起き上がる。「お腹減ったでしょ。すぐご飯作るからね。カーテンしめて」という言葉に、「うん」とかれはもう一度うなずく。まあたぶんそういうこともあったのだということ、岡本かの子の「鯨」を読むようなときに、ゆっくり思い出している。

【了】

それがオムレツである理由

みおみね

井上ひさし著の『握手』という作品を読んだことのある方は多いと思う。私は中学生の頃にこの作品に触れた。触れたと言っても、学校の教科書で扱われていた作品ということで、教科書に取り上げられていたごく一部分のみを読んだに過ぎないのだが。

私は、この作品に他の教科書作品とは違った印象を抱いている。あるいは因縁、とも言えるかもしれない。それは良い印象とは言い難いし、だからといって決して悪い印象ではない。その理由は、実は文章の内容に起因しているわけではなく、あくまで個人的なものによる。

『握手』の中で最も印象的と思われる場面がある。上野公園に古くから

ある西洋料理店（これはほぼ間違いなく精養軒のことである。）で、ルロイ修道士と呼ばれる老人と、彼が園長を務めていた児童養護施設にかつて入っていた「わたし」が久々に再会し、向かい合って食事をするシーンだ。ここで二人は養護施設時代の昔話に興じる。今読み返すと、この昔話というものが、なかなか味の深いもののように思える。優しさと強さを兼ね備えていながらも、戦時中、外国人であったがために兵隊たちからは社会的弱者として扱われていたルロイ修道士。彼の達観と信念。この物語のテーマは、なかなか一つに絞ることが難しい。強いて言うならば、修道士彼自身である。それ以上に追求する必要は、少なくとも今ここではない。

私がこの作品に対して抱いている因縁というのは、いたって単純なものだ。『握手』は私が中学校の国語の授業で習った作品だった。当然定期試験でも扱われた。自慢になってしまいが、私は当時、国語という教科に関しては絶対的な自信を持っていた。要するに、「作者の気持ちを考える」のが得意だったのだ。私には、基本的に読解で解けないという問題はなかった。はずだったのだが。

そんな私が全く解答に困った問題が、ある時の学校の定期試験で出題された。その時の出典が、つまり『握手』だったというわけだ。

左の文章を読んで頂きたい。

「おいしいですね、このオムレツは。」

ルロイ修道士も右の親指を立てた。わたしは、はてなと心の中で首をかしげた。おいしいと言うわりには、ルロイ修道士に食欲がない。ラグビーのボールを押しつぶしたようななかつこうのプレーン・オムレツは、空気を入れればそのままグラウンドに持ち出せそうである。ルロイ修道士はナイフとフォークを動かしているだけで、オムレツをちつとも口へ運んではないのだ。(『握手』より引用)

その時の設問は『ラグビーのボールを押しつぶしたようなオムレツ』という比喩表現は、オムレツのどのような状態を意味しているか」というものだった。勿論、見てわかるように、本文中に解答の根拠はない。作問者

は「自分で考える」と言いたかつたのだらうが、私は結局、この問題には答えることができなかった。ちなみに模範解答は「オムレツのふつくらしさで美味しそうな状態」というものだった。しかし私は、その解答を知らされても、どうにも納得がいかなかった。というのも、当時の私には、いわゆる食のステレオタイプが欠如していたらしかったのだ。

食には一定のステレオタイプがある。勿論、食に限った話ではないが、こと食に関する面では特にその気が強いように思われる。食は文化を代表する要素、であるからだろう。食を知るということは、文化を知るということだ。そうやって言えばなかなか聞こえはいい。しかし、ステレオタイプという言葉が多くの場合でマイナスイメージを伴って使われるように、食に関する認識を固定化すると、当然どこかで不都合が生じてしまうこともある。

私が先ほどの国語の問題にやられてしまったことについて、少し言い訳をしたい。それは突き詰めると「オムレツ」という概念の話になる。難しくはない。イメージの問題だ。私にとつてのオムレツ観を形成したのは、

私の祖母だった。

まだ私が小学生の頃だった話だ。私が祖母の家に遊びに行くと、祖母はいつも手作り料理を振る舞ってくれた。祖母の得意料理の一つにオムレツがあった。私は「オムレツ」と呼ばれて出された料理を何の疑問も持たずに「うまいうまい」と思いながら食べていたものだったが、今思い返すとそこにはちよつとした違和感があった。いや、実を言えば当時の段階から子供心ながら「何か変だな」と思うところはあったのだが、それはほとんど気にならない程度のものであった。むしろ、あの国語の問題にぶち当らなければ、いくら年月を過ごそうとも、私は祖母のオムレツに何ら懐疑を示すことはなかったと思う。

祖母のオムレツは、まず四角い。そしてしょっぱくて、少し焦げ目がついている。一口サイズで、白いご飯によく合う。パンとはきつと、相性が悪い。そう、はつきり言ってそれは、オムレツというよりむしろ卵焼きに近かった。祖母は料理としては卵焼きを作っておきながら、私にそれを「オムレツ」と言って食べさせていたのだ。

祖母は一言で言えばハイカラな人間だ。現代志向で、和洋の選択を迫られるとだいたいの場合、洋に流れていく。そういった性格が彼女の卵焼きをオムレツに変えてしまったのかもしれない。けれども、原因というものあまり重要ではない。祖母にとつてのオムレツは、その孫である私にとつてのオムレツでもあった。ラグビーのボール？ はてな。もちろん、私がステレオタイプ系のオムレツを全く知らなかったわけではない。しかし、そのステレオタイプばかりがオムレツの姿でないと思っていたのが、それまでの私の考え方だった。けれど、その考えは少しばかり世間のオムレツからははみ出してしまっていたようだった。試験の解答用紙のバツが、それを物語っていた。

今更私は試験の作問者に文句を言うつもりはないし、ましてやオムレツを「ラグビーのボール」と形容した『握手』の主人公に訝しい目を向けるつもりもない。ただ、得てして食べ物というのは、偏見の産物である。中華料理店で注文するラーメンと、都心の激戦区で提供されるラーメンは、決して同じようには形容できない。小学校の林間学校の最中に皆で作る力

レーと、インド人が経営している店で食べるカレーは、それをカレーと一括りにしてもいいのかと思うくらいに、全く別の料理である。食に対して一つの見方しかできなければ、私たちは文化を見誤る恐れがある。

食とはつまり、偏見の共存なのではないか。「オムレツはオムレツだからオムレツなんだ。ラーメンはラーメンだからラーメンなんだ。カレーはカレーだからカレーなんだ」——なるほど、食べ物の名前は味覚に先立つくらいに、実は私たちに存在の主張をしているのかもしれない。

私は祖母の卵焼きのような料理を未だにオムレツだと思っている。作り手がオムレツと言っているのだから、オムレツ以外の何物でもない。ステレオタイプからはみ出したこういった認識は、もちろん世間で受け入れられなくても自然だと思う。何と言っても、ただ私が勝手にそう思っているだけなのだから。

けれども、ステレオタイプがぶつかり合って均衡している場面も存在する。全く違った食を、同じ程度の割合で、同じ言葉で言い表している地域や社会がある。それは文化の対立なのか、共存なのか、どういう見方をす

ればいいかなどということに、私は答えを出すつもりはない。文化は伸長と淘汰を繰り返していく。その流れに食も巻き込まれていき、それ以上でもそれ以下でもない。

ただ、仮に「ラグビーのボール」のようなオムレツが美味しいオムレツのステレオタイプであるとしても、国語的な思考力がオムレツにそういったステレオタイプを求めていたとしても、私は祖母のオムレツをオムレツとして食べていた。それだけは紛れもない事実だった。

なぜならば、今ここで私がそう言っているからだ。

食べ物の名前を決める理由に、これ以上のものが必要であるだろうか。

(了)

『薔薇と兎と西部劇と』

アキ

「兎追ひし彼の山。小鮒釣りし彼の川」

御存知だろうか。非常に誤解が多いのが残念だが、童謡『ふるさと』の「兎追ひし彼の山」は発表当時「追ひし」ではなく「美味し」であった。「美味し」と主張すると、ネット上の人々は「ふげら^ㄇ」などと人を嘲笑して、「追ひし」だと言い張るのだが、本当は「美味し」なのである。追って捕まえたら、どうするのか。もちろん、食べるのである。可哀想？ 逃がしてあげる？ そんな馬鹿な。キャッチアンドリリースって、魚釣りじゃあるまいし。

かつて日本でも兎が食糧として扱われていた時代があった。そもそも、兎を一羽二羽と数えるのも、鶏と同様に扱っていたためであり、終戦後こそ激減したものの、食用兎は国内でも現代人の想像以上に多かつたのである。しかし、人はいつしか可愛さ余りか、兎を食べなくなつた。「ふるさと」の歌詞もいつからか「美味し」から「追ひし」に変えられてしまった。愛する対象をその歯で噛み、食すことにこそ、本当の価値があるというのに。

日本ではほとんど見られなくなったものの、兎を食用とする習慣は、欧州には現存している。兎を高級食材として用いるフランスなどはもちろんだが、私が推薦したいのはスペインの伝統料理でもあるパエリアである。今でこそ魚類を用いるイメージの強いパエリアだが、その発祥の地である、バレンシア地方では元来のパエリアは兎の肉を用いたものだったのだ。

そんなわけで、先日、とあるスペイン料理店で、鶏と兎のパエリアを食べてみた。サフランによって黄色く色付けされた米（サフランは予めアルミホイルなどで包み、オーブンなどで一分程焼いておく）と色が出やすくなるそうだ。そのフワツとした一見柔らかそうな米には、芯が残してある。

肝心の兎肉は、一見、鶏肉との見分けがほとんど付かない。しかし、一度口にしてみると明確に違いが分かる。兎肉の食感は鶏肉に似ているが、その違いは臭いにある。あの可愛らしい外見からは想像し難い、獣の臭み。この臭みも野生のものと飼育されたものでは異なる。野生のものは臭みが強く、飼育されたものはより蛋白で癖が強くない。もちろん、この「飼育」とは「食用」兎の飼育である。日本ではほとんど見なくなつたが、欧州においては食用兎も飼育されているのである。

私にはこんな情景が思い浮かぶ。すると庭木の頂上に登つた鶏が、けたたましい声で鳴く朝。その鳴き声で一家の亭主が目を醒まして、眠たそうに片目をこすりながら庭に出る。陽光を背にした鶏が眩しく、忌々しい。亭主は家畜小屋に向かい、兎を一匹捕まえる。そして、容赦無く叩き殺して、その毛を筆取る。次は鶏の首を切り落とす算段を付けねばならない。そう、世界は残酷なのだ。「追ひし」と言い張る人々は自分たちがそんな世界に住んでいるとは想像することもできないのかもしれない。

ところでこれを読んでいる方はゴア・ヴァービンスキー監督の『ローン・

レンジャー』を御覧になっただろうか。あの作品にはなんとも恐ろしい兎が出てくる。主人公たちが夜食に兎の丸焼きを食べるシーンがあるのだが、その際、腹を空かせた何匹もの兎が登場する。放り投げられた兎肉に兎たちが一斉に跳び付き、凄まじい声で鳴き喚きながら同類の肉を奪い合い、喰らう。兎の肉は兎が食べても美味しいのである。『ローン・レンジャー』といえ、女の名を呼びながら男が走り抜く、あの汽車のシークエンスも最高だ。あの作品を鑑賞できること自体、特に西部劇好きの人間ならば、それ以上の幸福はない。

脈絡のない文章になってしまった。話を冒頭に戻そう。「兎美味し彼の山」だが、もちろん、出鱈目だ。そもそもこの散文自体が、まやかしてみたいなものだ。読者諸賢が意地悪い叙述に釣られぬことを。祈りを込めて。キャッチアンドリリース。

(了)

京都にて

光枝初郎

暑い、熱い、仄かに微温い、ひととひととのあいだがらが作りだす温度を有した空気が、（周り）が、たゆたう、流れるように、ゆらり、ゆらり、と、この街中を移動する——此処は四条。大通りからすこし離れた細い路地裏で、私は、一本の缶ビールと、枝豆を、持って、石段のうえに座っている。見えるのは天井の月。空がひろいのだ。たてものがひくいのだな、だから空に手が届きそうなのだ、と思う。人は流れる。建物はだいたい閉まっている。空いているのは飲み屋くらいさ。昏い、暗い、仄かに灯る明りが、ひととひととのあいだをつたう、示される、確認する。何処から、何処へ——。世界の端から端へ。「そこは世界の中心を通らないのですよ。う？」「中継地点などはない。全てが端だ。世界とは端の集まりである」。私も、きつと。服ごと、白のワイシャツごと、何処へでも流れる／流るる

(その覚悟はできている)。移送Ⅱ旅の途中。四年も前の記憶。微温くなつたビールの液体が私の喉をとおつていく、どうるるるるるん、胃のなかへ。気分が、火照る、ついで私は過去の女性の姿を引用しようとする……着物をきた女の後姿、うなじの線？ 枝豆つてこんなにおいしい、表面がぷりっとしてゐる、唾液が集まる、から飲み込む。ビールで流す。ねえ、私はだれ。誰でもない、人称がいまはく奪されている。人称を逃れた世界で、この身体ごと幸せだ。闇夜。ここはこうふくなまちだ。都市の外に繋がっているのはよいこと……どこへでも行ける。夢にならないように、ゆめいにならないように、為らなかつたらそれまでさ、今は旅。もう少し行こう、もう少し歩こう、待っている、誰かが、君の為に、君の為と言ってくれる誰かの為に、貴方も、私も、外へ、向かおう——銀の月まで。

(了)

お砂糖はいくつ？

七夜月尚

なんの模様も無い、初雪のように真っ白なティーカップを三客、丁寧に食卓に並べる。

庭が正面に臨める台所に近い席に母、朝の連続テレビ小説がよく見える、母の正面の席に祖母。

二人に挟まれ、ちよこんと、愛情を独り占めせんと、巻き毛をふりふり愛想を振りまいている幼子は、あれは、私だ。

父は既に出勤していて、弟はまだ、母の胎内から出ていない。

幸福というものに形があるとしたら、あの日々の光景をそのまま切り取って、あなた方に差し出す準備がある。

我が家の女三人だけでゆっくりと摂る朝食は、メニューがきっちり決まっていた。

まずトースト。歩いて半時間ほどの洋菓子店で購入する山型の五枚切。祖母はもっちりとした食感がなにしろ嫌いだった。

噛めばさっくりと、そしてほろ苦さが残るくらいまでトースターでカリカリに焼き上げる。もちろん、焼く前には、バタをたっぷり塗る。

バタ入れは私が生まれる前の年に食道癌で亡くなった祖父がとりわけ大事にしていた品で、分厚い硝子の本体には飾り彫りが施され、木で出来た蓋がついている。

トーストには更に苺ジャムを塗ることもあれば、そのまま食べることもあった。

次に野菜サラダ。サラダというほどの大したものではない。スーパで念入りに選んできた胡瓜とトマト。良く洗って荒塩をたっぷり振り、板摺りした胡瓜を細く斜め切りにする。トマトは湯剥きして種をとり、クシ切りに。

たったこれだけの野菜に、いつも同じ玉ねぎと醤油のドレッシングをかけたもの。

お次は、玉子。これは、祖母の気まぐれで、ゆで卵になることもあれば、目玉焼きになることもあった。あまり料理をしない祖母であったが玉子料理は得意だった。

何しろ「たまごやきの君へ」という書き出しで始まる戦地の祖父からの恋文を後生大事に持っていた人である。

祖母の作る目玉焼きはとても美しい様子をしていた。薄いオレンジがかった桃色の黄身部分をフォークでつつけば、プツツという瑞々しい音と共にトロリと卵液が流れ出る半熟仕様。

そして、なんと言っても主役は紅茶なのだった。

しゅんしゅん音をたてて湧いたかんかんの熱湯を、茶葉を多い目に入れたポットに注ぐ。

たいていは百貨店のお買い得品の LIPTON レストラン缶。ブラックファストブレンド。気が向けば頂き物のアップルティ。

濃く淹れた琥珀色の液体を、それぞれの茶碗に注ぎ分け、私は祖母に尋ねる。

「お砂糖はいくつ？」

「ふたつ半」

と祖母は答える。

そこで私は、ぼつてりとした、黄土色とチョコレート色で塗り分けられたシュガーポットに、息を止めてシュガー Spoon を入れる。砂糖をこぼすと必ず父に非道く叱られるので。たっぷり甘い紅茶が祖母のお好みだった。茶碗に銀色のティー Spoon を入れて十回ほどかき混ぜ、砂糖が完全に溶けてからミルクを注ぎ、さらに混ぜる。

こぼしてしまわないように注意深く、手渡す。

滑らかな紅茶を愛おしむように、

「ありがとう」

と祖母は受け取る。

祖母の右手の小指はいびつに曲がっている。手のひら側にくの字に。

神戸大空襲の後遺症だ。

親友と手をつないでB二九の絨毯爆撃のなか走り、白い光が目の前ではじめて、気が付くと親友は全身血まみれで即死しており、自分は腕と腹をやられたものの、側溝にはまって助かったのだ、と祖母は小声で教えてくれたことがある。完璧だ。完璧な朝食。

黄金色のトースト、やさしい色のミルクティ、青臭い胡瓜の白い、嫌いで嫌いで仕方なかったのに毎朝供されるトマト。

そして、目玉焼き。

食堂はずっと在るのだと確信し、朝食はずっと供され続けるのだと確信していた。

連続テレビ小説のあとの気怠いラジオ放送もNHK・FMと決まっていた。BGMもメニユウもメンバーも固定された、呪われたといっても過言ではない時間。

その中で退屈し、倦み疲れながらも、こどものままでいられた時間。

今となってはもう再現が叶わない景色。

祖母は存命だし、施設に行けば会える。

しかし彼女の脳に、孫娘と過ごした朝食の風景はもう遺されていないのだ。

家族はばらばらに住居を構え、食堂だった部屋は母の寝室になった。

私のことを若くして亡くなった従妹だと信じ込んでいる祖母。

お洒落で活発だった祖母と腕を組んで散歩に行き、喫茶店でケーキを食べることも、もうないだろう。

それでも、こっそりと保温水筒に作ってきた濃い紅茶を紙コップに注ぎ、

「お砂糖はいくつ？」

と尋ねれば

「ふたつ半」

と答えが返ってくる。

了

あとがきにかえて

ある漫画がある。

舞台は、地方の海沿いの女子校。高校3年のふたりの女子高生の一年が乾いた筆致で描かれている。

ある本に、その作品が百合と紹介されていた。ふたりは互いを好きになる。そして、キスをする。

自分はその作品を百合と思ったことはなかった。

ふたりは同性を好きになる。

それはおとなになるとき経験するものが同性であった、というかざらない必然とおもう。

手の届かないとおもっていたものに手が届き、あこがれていたものも自分と変わらない存在とわかり、そして互いの人生をあるいていく。

変わらない日常のなかでたいせつなものを見つける。性別は関係ない、とおもう。

百合や薔薇とはなにか。

恋や性の視線だろうか。かわいさ、女性らしさ、男らしさを引き立たせるものだろうか。

生きづらさのなかで生まれたものだろうか。

どれもがたいたいとおもう。そして、まちがいないとおもう。

百合や薔薇はたいせつなひとのたいせつな部分を加速させる。

それは、たいせつなものへの視線も描くだろう。

あなたにとって、大切なひとは誰ですか。

とーい

(『Li-tweet』2015年春号予告ページより)

Li-tweet 2015 年春号

発行日 平成 27 年 4 月 7 日

編集長 とーい

編集部員 うさぎ
P さん
Rain 坊

表紙デザイン
あんな

発行者 twitter 文芸部

ツイッターオフィシャルアカウント

<https://twitter.com/twibun>

ホームページ

<http://twibun.jimdo.com/>

本誌はホームページに掲載している『Li-tweet 2015 年春号』をプリント用、電子書籍端末用に編集した物です。記事の無断転載を禁じます。

©twitter bungeibu 2015

twitter literary club